
TRUE DAWN

三九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE DAWN

【Nコード】

N4755J

【作者名】

三九

【あらすじ】

水の国の少女ナナエは、盗み目的で領主の屋敷に忍び込む。しかしそこで、ある厄介な事件に首を突っ込んでしまい……

プロローグ

side N

昔むかし、この世界がまだ生まれる前に、大いなる空から、いくつかの精霊様が現れました。

精霊様たちは、空に漂う無数の欠片を集めて、この世界を創りました。

この世界の基を創ったのは、幾千の精霊を束ねる精霊の王。

母なる大地を生んだ地精霊。

大いなる海を生んだ水精霊。

悠久の風を生んだ風精霊。

文明の炎を生んだ火精霊。

その他数多の精霊たちが、命あるものを生み出しました。

偉大なる母、精霊王が創りだした、豊かな世界。

その世界を悪しきものから守り浄化するため、この世界から分離して、遙か天空に浮かぶ美しい月。

精霊様たちは、この世界に溶け込み、この世界の一部となって、我々を見守っています。

そして、この世界を創造した偉大なる力は、選ばれし人間に受け継がれました。

この世界を見守る精霊様たちと、精霊様の力を授かった人間。彼らがいる限り、この世界はずっと平穏が続くでしょう。

「だから、怖いものなんて何もないのよ」

優しい微笑みを湛えた女性が、ゆっくりと語って聞かせた物語は、教会で布教している精霊神祖の教えを要約したものだ。

子どもたちが聞いても理解できるようにと、天地の理を噛み砕いて説明している。

深い黒の修道服に身を包んだ女性は、母性溢れる優しい笑みを子どもたちに向けた。

しかし彼女の周りに集まった子供たちは、その頬を濡らしている。次々と溢れる涙を拭うこともせず、子供たちは彼女にしがみ付いて顔を上げた。

「でも、先生、このおうち、なくなっちゃうって」

「この前来た怖い人が、言ってたよ」

ぐすぐすとしゃくり上げながら言う子どもたちを、彼女は精一杯腕を広げて抱き締めた。

「大丈夫よ。きっと水精霊様が守ってくださるわ。だから大丈夫…」

だが一番年長の子供は、決意を秘めた目で女性から離れる。

「精霊様なんて、待ってても助けしてくれない。オレがなんとかするよ」

その子供は暖かい家の中から、外へと飛び出した。

赤く、赤く、視界を染め上げて、それは踊る。

どこを見ても、どこに行っても、それは自分を放さない。

炎だ。赤い赤い炎。

熱い。熱い。

どうしてこんなことになってしまったのか。

どうしてこんな目に遭わなければいけないのか。

四方を炎に囲まれた少年に、解るはずがない。

褐色の肌は炎を反射して赤々と輝く。

白銀の髪は、炎の揺らぎを映して燃えているようだ。

黄金の瞳が、真紅の炎を見つめている。

もう少し。

もう少しで望むものが手に入ったはずなのに。

そのために、たった一人で街へ行つたのに。

何もかもおしまいだ。

すべては、裁きの炎に焼き尽くされる。

目の前に迫る炎。

その向こうに、大切なあの人がいるはずなのに。

伸ばした手は届かない。

流した涙は炎に焼けた。

彼を迎えたのは、彼が愛したあの人ではなく……

大声で罵声を浴びせられ、容赦なく殴り付けられた。
彼は抵抗もしなかった。

すべて悪いのは、自分。

罪人である自分は、罰せられて当然なのだから。

どうすれば許されますか？

どうすれば償えますか？

何を失えば、消えた命の代わりになりますか？

少年の懺悔の言葉を聞く者はなく、その身に与えられたのは、罰。

少年の眼前に炎が迫る。

少年の最後の涙は炎に溶けて、少年が最後に見た景色は、辺り一面に広がる赤。

瞳が焼け落ちる匂いを感じながら、彼は暗闇を手に入れた。

プロローグ

side V

母は強い人だった。

そんな母が好きだった。

母を独り占めしたいと思った。

それが悪いことだなんて、考えもしなかった。

どうしてこんなことになってしまったのか。

その子は解っていなかった。

自分はただ、母の隣に居ただけなのに。

母は咳き込みながら、子供の手を引いて走っていた。
立ちこめる黒煙と舞い上がる炎で、何も見えない。

母子はついに炎に囲まれてしまった。

進むことも、戻ることもできない。

こんな山奥に、誰も助けには来ないだろう。

あの炎の向こうに、愛する家族がいる。

それなのに、炎が阻む。

助けを求めて手を伸ばすこともできない。

せめて、この子だけでも。

母は必死に土を掘った。

両手の爪が剥がれて、すべての指が血に塗れても。

我が子を炎から守るため。

子供の上に覆いかぶさり、自らが盾になるために。

浅い穴の中から、その子は母を見上げていた。

病弱だった母。

他の誰より、自分が母を守らなくてはいけなかったのに。

自分を抱き締める母の身体は、燃えるように熱かった。

母の顔が、涙で滲む。

その子は大声で泣き叫んだ。

母との別れに嘆きの咆哮を。

何度も、何度も。

やがて炎が消える頃、その子は静かに瞳を閉じた。

悲しみはすべて、眠りの向こうに置き去りにして。

次に目覚めたときには、悲しみのない世界であるようにと。

小さな子供は、すべてを忘れて眠りに落ちた。

水の剣士——宵月夜の事件——

簡単な仕事のはずだった。

いつも通り屋敷に忍び込み、金目の物をいただいて逃げてくるだけの、よくある儲け話。

夜も更けて人通りの少ないこの路地には、人の姿はナナエ以外にいない。

そう、『人』の姿は。

（どうなってんだよっ）

ナナエは声に出さずに、心の中で舌打ちをした。ぞわぞわと影が蠢く街路樹の下で。

ナナエはここ、水の国の街で育った。

歳はまだ十六だが、中々の剣の使い手で、懸賞金のかかった指定危険獣……所謂モンスターを倒して金を稼ぐ、ハンターをしている。

そのハンターがなぜ屋敷に忍び込もうとしているのか？

ナナエには、どうしても金が必要だったのだ。

実を言うと、懸賞金のかけられたモンスターなど、早々見付かるものではない。

そのほとんどを、国の討伐隊が狩ってしまうからだ。

それでも討伐隊の取りこぼしや、群れから離れて街を襲うモンス

ターがいるため、ナナエのような個人のハンターは重宝されている。

指定危険獣を狩ることができなくなったときや、急に金が入り用になったときなどに、ナナエはこうして、盗賊紛いのことをしている。

今までにも、盗んだ金で生活したことは少なからずあった。

やってはいけないことだと解ってはいたが、今回だけ今回だけと言いつて、何度も盗みを働いた。

盗みをすることに對しての罪悪感はない。

それよりも、恩人との約束を破ってしまったということの方が、ナナエにとっては重罪のように思えた。

黒いものが視界を横切った。

ナナエは思考の海に沈みかけていたところを、ぶんぶんと頭を振って現実に意識を戻す。

今回も、盗み自体は楽な仕事だと思っていた、のだが……

いつも通りに隠れて屋敷の中を窺っていると、薄汚れた白衣を着た一人の男が、屋敷に入っていた。

来客の予定はなかったはずだ。しかも、こんな真夜中に。

今回は失敗かと思ったその矢先、月明かりに照らされた影が、ぐにやりと曲がったのだ。ナナエが隠れていた、街路樹の影が。

（なんだっ！？）

声が出そうになるのを慌てて抑え、ナナエはその光景を凝視した。

その間にも影は街路樹から切り離され、ひとりでに動きだし、徐々に立体的になってゆく。

それは見る見るうちに姿を変え、ヒトの姿を真似て作られた、不恰好な人形のような姿に変貌した。

だがそれだけではない。

ナナエの周りにあるすべての街路樹の影から、同じような異形のモンスターが生まれてきたのだ。

そのすべてが、手の先が鎌のように鋭く変貌している。

影のモンスターは、ナナエには目もくれずに屋敷の方へと移動を開始した。

いったいどうなっているのかとナナエが街路樹の陰から飛び出したのと、影のモンスターがテラスに続く大きな窓を割ってリビングに侵入したのは、ほぼ同時だった。

ガシャンと硝子の割れるけたたましい音が、夜の静寂に響く。

屋敷の中からは、家人の悲鳴が聞こえてきた。

（おいおいおい！ 何なんだよいったい！）

ナナエは咄嗟に腰に佩いた剣を抜き、影を追って屋敷へと駆け出した。

「とにかく、中の人を助けねえと！」

盗みがどうのなどといってられない。今は人命が優先である。

ナナエは勢いよく割れた窓から中に入った。

窓を通り抜けざまに、一番後ろにいた影を切る。

ガツッ！ と、何か堅いものに当たったような手応えがした。まるで木に剣を叩きつけたような感触だ。

（なんだこいつ！）

ナナエは影のモンスターが硬いと解ると、すぐに剣を引っ込めた。

どれ程頑丈な皮膚でできているのか知らないが、剣が効かないならば無理に戦っても意味がない。

ナナエの剣は、名刀と呼ぶには若干拙い。

女の細腕でも振るえる細身の剣だけあって、力任せに斬ろうとすると、折れてしまう。

屋敷の中の人を、できるだけ避難させることの方が重要だ。

ナナエはすぐに思考を切り替え、影のモンスターから離れて部屋の中にいる人間を捜した。

しかし、床には既に大量の血が流れており、生存者がいることは絶望的に思えた。

影がようやくナナエの存在に気付き、向きを変えて迫ってくる。

その瞬間に、ナナエは見た。

影たちの向こうに倒れている男の姿を。

ナナエはその顔を知っていた。

この屋敷の主にして、この町の領主のものだ。
とんだ修羅場に首を突っ込んでしまったと、ナナエが後悔し始めたそのときだ。

「きゃあああああ！」

知らない女の悲鳴が、耳から脳天に駆け抜けていく。

超音波のような甲高い声に眉間を寄せ、ナナエは声のした方向に目を走らせる。

廊下へと繋がる扉が開いて、そこに女中の服を着た若い娘が立っていた。

そのメイドは床に倒れている主の姿を見つけたのか、真っ青な顔で何事か叫んでいた。

混乱しているのか、足が竦んでしまったのか、その場から逃げようとしないうとしない。

影のモンスターが彼女を標的とするのは必至だ。

「逃げろ馬鹿野郎！」

ナナエの叫び声でメイドはようやく我に返り、悲鳴を上げて走っていった。

それを追い掛ける影の足を止めようと、ナナエは挑発するように剣を振り回す。

この全身真っ黒な影のモンスターに目が付いているのか、付いていても見えているのかどうか疑問だったが、影のモンスターは標的をナナエに変更して一斉に襲い掛かってきた。

ナナエの得物は小振りな剣が一振りのみ。

これだけでこの影のモンスターの相手をしていては、

「こっちが先にやられちゃうかもな！」

しかし、まだ屋敷内に残っているであろう使用人たちを、見捨てる訳にはいかない。

ナナエは部屋の中央にある大きなテーブルに飛び乗り、更に高く跳躍して影のモンスターを飛び越えた。

そのまま先程メイドが開けた扉から廊下に出る。

影の動きが然程素早くないのが幸いした。

訓練をしていない普通の人間にとっては脅威だが、ナナエにとっては遅すぎる。

このまま、影たちを足止めしながら、屋敷の人間を避難させることができればそれでいい。

モンスター退治は正規の討伐隊にやらせればいいし、盗みはまた明日にでも違う屋敷に入ればいい。

ナナエは廊下に出てすぐに、屋敷の使用人たちに聞こえるように声を張り上げた。

「みんな逃げろ！ 殺されちゃうぞ！」

ナナエの声を聞き付けたのか、モンスターが暴れる音を聞いたのか、すぐに人が集まってきた。

屋敷の警備兵らしき格好をした男たちだ。

その中に、先程のメイドが交じっていた。

「おい何してんだ早く逃げ……」

「あいつですっ！」

ナナエが言い終わる前に、メイドがナナエを指差して叫んだ。

「あいつが旦那様を殺したんですっ」

「へ？ ええええええええ！？」

あまりにも突然の言葉に、ナナエも思わず足を止めた。

「なんてことだ！」

「貴様よくも！」

警備兵たちがざわめきながらも武器を構える。

ナナエは何故そんな解釈になるのか訳が分からず、狼狽して首と両手を横に振った。

「ちょ、ちがっ！ 何言ってるんだお前！」

「何が違うものか！ その剣は何だ！」

「これはモンスターを……」

そのとき、ナナエの話を遮り、扉が吹き飛んで廊下の壁に激突した。

やたら景気の良い音をたてて、扉が粉碎される。

分厚い樫の扉が破壊される様を見ると、このモンスターは中々力

があるようだ。

ナナエを含む全員が、音に驚いてそちらを見る。
部屋の中から、影のモンスターが一斉に飛び出してくるところだった。

「何だあれはっ！」

「あいつの使い魔では！？」

「何でそうなるっ！」

警備兵とメイドとナナエと、三者三様に叫びながら、モンスターの襲撃を避けた。

ナナエが身を引く目の前を、黒い枝のような腕が横切る。

メイドは他の使用人たちと一緒に、ようやく避難を始めたようだ。

狭い廊下は、大量の影が溢れて一気に乱戦となった。

木のように堅いモンスター相手では、ナナエも警備兵も役者不足だ。

徐々に追い込まれ、ナナエは隙を見て手近な部屋に滑り込んだ。

一度部屋に隠れて態勢を立て直すためだ。

影の隙間を縫って巧く警備兵たちの目を盗んだようで、誰もナナエが廊下から消えたことには気付かなかった。

ナナエが入ったその部屋は、皓皓とランプの明かりが照らしていたリビングや廊下と違い、蝋燭の灯り一つなく、真っ暗だった。

ふうと詰めていた息を吐き出すと、部屋の奥で何かが動くような気配がした。

「誰だ!」

幾分潜めた声で誰何すると、その誰かは力なく答えた。

「……敵じゃねーよ。一応、な」

とりあえず襲ってくる気配はないことを確認し、ナナエは声の主に近付いていく。

そこにいたのは、見慣れない無精髭の男だった。屋敷の使用人ではないようだ。

よれた白衣に安っぽい服。そして漂う、濃厚な血の匂い。顔色が青白いのは、月明かりの所為だけではないだろう。腹の辺りを押さえて蹲っている。

その男の薄汚れた白衣を見て、先程屋敷に入っていた人物なのだとなナエは思い至った。

「……あんた、怪我してんのか」

「見りゃ解るだろ……それより、ちと頼まれてくれないか」

男が取り出したのは、小さな筒状の金属だった。

先端と側面に小さな穴が開いていて、まるで笛のようだ。

「何だこれ」

ナナエが訝しげに首を傾げると、男は荒い息を吐きながら言った。

「犬笛みたいなもん、だな。思いつきり吹いてくれ……今の俺じゃ、息が続かないんだ」

その男は苦しそうに眉根を寄せる。

ナナエはその犬笛を受け取って、しげしげと眺めた。

暗い部屋の中で、窓から差し込む月明かりを反射して、鈍く光っているように見える。

「これを吹くと、愛犬が助けに来てくれるとでも？」

「そうだよ……いいから吹け」

ナナエは小さく肩をすくめて笛を口に当てた。

すうと息を吸って強く笛に流し込む。

犬笛の音は人間の耳には聞こえない。

その笛が正しく鳴っているかどうか、ナナエには判らなかった。

言われるままに数回繰り返して吹くが、彼の愛犬がやって来る気配はない。

ちゃんと吹けているのだろうか。

それとも壊れているのでは？

そんな疑念が頭を過り、ナナエは笛から口を離して男に顔を向け

た。

「これ、壊れてんじゃねえの？ なんも来ないじゃん」

「……………」

しかしナナエの声に男は答えなかった。

いや、もう答える気力も尽きていたのか、彼は苦悶の表情を浮かべて浅く呼吸を繰り返すだけだ。

そんなに傷が酷いのかと、ナナエは断りもせずに白衣を捲った。

自分で応急処置はしたようだが、深いところまで斬られているのか、止血のために巻いた布は、既に赤く染まっている。

このまま放っておけば、確実に死んでしまうだろう。

彼を背負ってでも安全な場所に連れて行こうかと思案したとき、ふと窓から差し込んでいた月明かりが翳った。

何事かと顔を上げたナナエの目に、窓の外で羽を広げる大きな鳥の姿が飛び込んできた。

しかしそれもほんの一瞬で、鳥は窓を突き破って部屋の中に文字通り飛び込んでくる。

かなり大きな音をたててガラスが割れ、ナナエは飛び散った破片から咄嗟に怪我をしている男を庇った。

鋭利な破片がむき出しの腕や脚に小さな傷を作るが、そんなことがどうでもよくなるくらいに、ナナエは目の前に現れた得体の知れ

ない巨鳥に見入っていた。

なぜかその身にぼろ布を巻いたような服を纏っていたが、猛禽類を思わせる褐色の羽根に覆われた身体はしなやかで、翼の先端の白銀の風切羽が月光を反射している。

人間よりも一回りは大きなその鳥は、いきなりナナエごと男の身体を足で掴み、入ってきたときと同じように窓から飛び出した。

窓が割れた音を聞き付けた警備兵が部屋に入ってきたのは、その直後だった。

警備兵がナナエの許に駆け付けるよりも早く、巨鳥はナナエと怪我をした男を連れて空高く舞い上がった。

「えっ、待っ、うわあああ何だこれ！」

足元に広がる街並みがどんどん小さくなっていく。

ナナエは慌てて逃げようとするが、がっちりと身体を掴まれており、外そうとしてもびくともしない。

それにたとえ外れても、この高さから落ちたらひとたまりもないだろう。

人が豆粒に見えるような高さまでくると、流石にナナエも逃げ出すことを諦めて口を閉ざした。

顔に当たる夜風が冷たい。

どこに連れていかれるのかも心配だったが、男の容体も心配だった。

早く適切な処置ができるところに連れていかないと、本当に死んでしまうかもしれない。

やがて数分もしないうちに、眼下に広がる街並みが見慣れないものになってきた。

どうやら違う街まで飛んできたらしい。

すると鳥は街のはずれの方にある、一軒の家の前に降り立った。

ようやく地に足を着けることのできたナナエは、ほっと胸を撫で下ろす。

とにかく、今日は散々だった。

文句の一つも言ってやろうと、鳥に目を向けたときだ。

大きな鳥が突然ぶるぶると震えだし、甲高い声で鳴いて蹲った。驚いたようにナナエが見守る中で、その鳥は急激に小さくなり、全身の羽毛も抜け落ちて人の姿へと変貌していく。

それはほんの数瞬のうちに、完全な人間の姿になった。

ナナエが呆然と見ていると、鳥だった人は近くに倒れていた怪我の男を抱き上げて、家の中へと入っていく。

途中でふと足を止めて、鳥人間はナナエを振り返った。

「何してんだ。早く来い」

言われて、ナナエはぽかと口を開けた。

巻き込まれただけの自分は、この場に放っておかれるか、運が悪ければ始末されることもあるかと思っていたのだが。

しかし、鳥人間にはナナエに対する殺気は微塵もない。

だがそれよりも何よりも一番驚いたのは、

（喋った！）

ということである。

いくら鳥人間とはいえ、今は人間の姿をしているのだから喋ってもおかしくはないのだが、如何せん先程までの巨鳥の姿が強烈すぎて、目の前の青年が人の言葉を喋れるなどとは考えもしなかったのだ。

ナナエは慌てて鳥人間の後を追いつけた。

あまりのことに頭が混乱して、この場から逃げるという選択肢がすっぽ抜けてしまったのだった。

水の剣士——ヤブ医者にご用心——

家の中に入ると、薬品の匂いが鼻についた。

街の施療院のような匂いが、なんとも落ち着かない。

鳥人間は男をベッドに寝かせると、慣れた足取りで棚から薬品を取り出し、湯や包帯を持ってきた。

しかし、手つきはあまり慣れていないように見える。

薬の瓶を手にとったのはいいが、ラベルをなぞったり形を確かめるだけで、中身を出そうとはしない。

それどころか、灯りを点けようとしもないのだ。

ナナエは呆れたように両手を腰に当てて彼を見下ろした。

「何してんのさあんた。灯りくらい点けたら？」

しかし鳥人間は灯りを点けには行かなかった。

すいと机を指差して、

「蠟燭ならそこだ」

と言ったきり、また薬瓶の選別作業に集中してしまう。

仕方なくナナエが手探りで蠟燭とマッチを探し出し、火を点ける。暗い部屋の中に、薄くオレンジの光が満ちた。

ナナエはそこで初めて、鳥人間が目を覆うように、顔に黒い布を巻き付けていることに気付いた。

「あんた、目、見えねえのか」

「そうだよ。解ったら手伝え。それと、ひとつ言っておくがな」

そう言って彼は、見えないはずの目をナナエに向ける。

一瞬、本当に見られているような気がして、ナナエの心臓が跳ね上がった。

「あんたじゃなくて、ロディウスだ」

自分の胸を指し、鳥人間……ロディウスは言い放った。

言うだけ言って満足したのか、ロディウスはナナエから目を離す。やっと思つけた消毒液を綿に染み込ませ、男の衣服を剥ぎ取って傷口の周囲を拭った。

「いっ……ででっ……」

かなり染みたのか、男が呻いて目を覚ました。

その手つきがあまりにも危なっかしくて、ナナエは慌ててロディウスから消毒液を奪い取る。

「貸せよオレがやるから」

ロディウスはおとなしくナナエに葉を渡して、邪魔にならないように立ち上がり端によけた。

その間に男は状況を把握したのか、力なく笑いながらロディウスに手を振る。

「……よう、遅かったな」

「遅くない。間に合っただろうが」

幾分むすつとしながらロディウスが言う。

男は次いでナナエに顔を向け、若干かすれた声で言った。

「お前さんもすまないね……大分世話になっちまったようだ……あてて」

「お前さんじゃなくてナナエだよ。」

それより、近所に医者はある？　これ、応急処置じゃ間に合わねえぜ？」

言いながらも手は休めず、傷から少し離れた位置できつめに包帯を巻いて止血する。

血は止まりつつあるが、傷自体が大きくて、縫合しないといけな
いだろう。

内臓まで斬れていないのが救いだ。

そこまでやられていたら、死んでいたかもしれない。

「大丈夫さ……俺はガレット。医者だ、一応な」

「ヤブだがな」

「ヤブじゃなくて闇だ。闇医者！　いてて……」

ロディウスが笑いながら言った言葉に、ガレットはムキになって
反論する。

だが傷に響いたようで、すぐにその声はしぼんで消えた。

ナナエは二人のやり取りを聞いて、半眼で苦笑いしてみせた。
闇医者でもヤブ医者でも構わないが、医療の知識があるのなら早々に自分の傷をどうにかしたらどうだ。

止血まで済むと、ナナエにはその後の処置をどうすればいいのか、まったく知識がないのだ。

こんな大怪我したことないし、育ての親であった父は、ナナエが怪我をしても「舐めときゃ治る」の一言で片付けていたからだ。

（先生のところに行ってから、怪我なんてしたことなかったしなあ）
困ったように頭を掻いて余った包帯を置くと、横になっていたガレットが起き上がりうとしていた。

「無茶すんなって」

「寝てたんじゃ、自由に手が使えないからな。ロディウス、右の棚から鞆取ってくれ」

ナナエが横から支えてようやくガレットは起き上がった。
ベッドに座って自ら傷の具合を確かめている。

ロディウスが持ってきた鞆を受け取ると、ガレットは中から注射器と薬の瓶を取り出した。

手際よく薬瓶の中身を注射器に移し、自分で患部に針を刺す。

「うへえ……」

ナナエは心底嫌そうな顔でそれを見ている。

施療院など行ったことないナナエにとっては、注射やら手術やらといった行為は理解できない代物なのだ。

なぜ、痛いところを治すのに、針を刺したり刃物で切ったりと、更に痛いことをしなければならぬのか。

そこが理解できない。

人間は、理解できないものに嫌悪感や恐怖感を覚えるものだ。
だが、この場合は有体に言っただけの医者嫌いである。

「あー、ナナエだったか？ お前さん、なんだったあの屋敷にいたんだ？」

局部麻酔を打って自分で傷の縫合をしながら、ガレットは口を開いた。

ナナエはなるべくガレットの手元に目を向けないようにしていたのだが、問い掛けにうっかり視線を戻してしまい、縫合部を直視して顔をしかめた。

「……なんだったっていいだろ。それよりあんたこそ、なんであの屋敷にいたんだよ」

領主の屋敷に上がり込めるような御貴族様には見えないね、と皮肉混じりに言うナナエに、ガレットは気を悪くした様子もなく笑った。

「俺が貴族に見えるんだったら、お前さんの目の検査をしなきゃな

らんとこだ。

俺はあの街の領主とはちよつとした知り合いでな、月見酒でも誘いに行ったところ、あの騒ぎだ」

運が悪かったねえ。と、からから笑いながら言うところを見る限り、大して気にしていないのだろう。

いっそ襲撃があることを予想していたかのような口ぶりだ。

ナナエは今になって、この男はただの医者ではないのでは……と、わずかに猜疑心を抱き始めた。

……もつと早く気付いても良さそうなものだが。

恐らく、酒を飲みに行ったというのも嘘だ。

何か別の用があつて、領主の館を訪れたのだろう。

何の用だったのかは知らないが。

ナナエが黙っていると、ガレットは早々に処置を終えて再び横になった。

「悪いが、俺は休ませてもらうよ。何分貧血が酷くてね、お前さんは、今日は泊まっていくかい？」

ガレットの言葉に、ナナエはぎよつとして目を見開いた。

「んなっ、やだよそんなん。オレ帰る」

慌てて立ち去ろうとするナナエを引き止めるように、ロディウスがナナエの肩を掴んだ。

「その成りで帰るのか？」

ロディウスを睨み付けているナナエの腹の辺りを指差し、ガレッ

トが言った。

その指の先を目で追うと、その場所にはべったりと血が付いていたのだった。

おそらく、ロディウスに運ばれてきたときにガレットに密着していたからだろう。

今まで気付かなかったが、夜とはいえこれは目立つ。

血の匂いもするし、市中警備の役人にでも見つかったら、厄介なことになるのは間違いない。

しかも、あの屋敷の連中には、領主殺しの犯人だと勘違いされているし。

うつ、と言葉に詰まったナナエを見て、ガレットはニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「洗い場なら、廊下の突き当たりだぞ」

「あんたの服貸してくれば済む話じゃん」

ナナエは不貞腐れたように口を尖らせるが、ガレットは悪びれた風もなくニヤケ顔を貼りつけたままだ。

「やだよ。俺、自分のもん他人に貸すの嫌いだから」

「じゃあ、そっちのあんた」

「ロディウス、だ。嫌だ」

わざわざ訂正してから首を振られてしまった。

納得できないといった様子で、しばらく肩を震わせながら二人を交互に睨んでいたナナエだが、結局は泊まっていくことにしたらしい。

洗剤使いきってやる、とさりげなく復讐を誓って、ナナエは乱暴に部屋を出ていった。

「ナナエに何をさせるつもりなんだ？」

「ちよいと手伝ってもらっただけさ。内緒でな」

ナナエがいなくなってから、ロディウスとガレットは小声で話し始めた。

顔の上半分が布で覆われているため、ロディウスの表情は判らないが、口元にはわずかに不快感が表れている。

「関係ない人間を巻き込むなんて……」

「関係なくはないさ。言うなれば、これはこの世界に住むすべての者に関わる問題だ」

ガレットは至極真面目な顔つきで語る。

この世界に住むすべての人間、否、すべての命に関わるかもしれない問題なのだ、彼らが追っているものは。

だがロディウスは、やりきれない気持ちで息を吐いた。

「まだ、確証はないんだろう？」

それなのに、あんな子供を利用するなんて……」

「見えないのに判るのか。だが、一人じゃ何もできないガキでもないだろ」

咎めるようなロディウスの言葉にも、ガレットは口調を変えなかった。

片手で枕の位置を調節しながら、目だけロディウスに向ける。

「あの子、まあまあ腕は立つようだしな。お前さん一人だと、街でトラブルがあつたとき対処が難しいだろ」

「そんなことは……」

「蛮族だと騒がれては面倒だって話だよ」

ガレットの言葉を否定しようとしたロディウスだったが、最後の台詞を否定することはできなかった。

そのまましばらく沈黙が続く。

それを打ち破ったのは、ロディウスの小さな溜め息だった。

「……利用できるものは、何でも利用するんだな」

「勿論、お前のこともな」

「……嫌なとこだけ、ダークにそっくりだよ……」

そう呟いてから、ロディウスは黙って水差しと痛み止めの薬をサイドテーブルに置き、使い終わった手術用具や血の付いた服をまとめてゴミ箱に放り投げ、薬瓶は元の位置に戻した。

ついでに、部屋の奥に隠してあった酒と煙草をこっそり持ち出した。

ご丁寧にもマッチまで回収している。

「あつ、おい何して……」

「怪我人には必要ないだろう。さっさと寝ろ」

ベッドから手を伸ばすガレットを無視して、ナナエが点けた蝋燭を吹き消し、ロディウスは酒と煙草を持ったまま部屋から出ていった。

一人残されたガレットは、苦虫を噛み潰したような顔で頭を掻き、ズボンのポケットに入れっぱなしだった煙草を取り出して口にくわえる。

そこではたと気が付いた。

「火、ねえじゃん……」

白衣のポケットに入っていたマッチは、ロディウスに持ち去られていた。

服に付いた血を洗い流し、ついでに無断で風呂を借りてから、ナナエは重大なことに気が付いた。

「そう言えば、着替えねえなんだった……」

自分の家ならいざ知らず、他人の家にタオル一枚でいるというのは、如何なものだろうか。

湯船に浸かったままでどうしようかと考えていると、ひたひたと足音が近付いてきた。

驚いて顔を上げた瞬間、ドアが開いてロディウスが顔を出した。

「うわああああ勝手に開けるな馬鹿！」

ざばっしやあっ

「うわああああいきなり何すんだ馬鹿！」

頭からお湯をかけられ、ロディウスは慌ててドアを閉めた。

ぜえはあと肩で息をしながら、顔が真っ赤になったナナエは、必死に身体を縮こまらせて隠れようとしている。

それもそのはず、普段の言葉遣いからよく男に間違われるのだが、ナナエはれっきとしたオンナノコなのだ。

「信じらんねー！ フツーいきなり開けるか？ ノックくらいしろこのスケベ！」

「見えてないんだから気にすることないだろ。あーあ、びしょびしょだよ……」

大声で怒鳴るナナエとは対照的に、ロディウスは落ち着いた様子でタオルを探して濡れた髪を拭く。

確かに、相手は目が見えていないのだから気にすることはないのかもしれないが、ようは気持ちの問題である。

いかに男っぽいナナエでも、風呂を覗かれるのは我慢ならないのだ。

流石にロディウスも、今回は自分が悪いと思ったのだろう。素直に謝った。

「すまん。いくら子供とはいえ、いきなり入ったのは悪かった」

ナナエが女の子であることには驚いていないようで、その口調は至極落ち着いている。

ナナエは、ある可能性に気付いて口を開いた。

「ひょっとして、あんた最初からオレが女だって気付いてた？」

「ああ」

淀みなく答えたロディウスは、さっさと風呂場から出ていった。

ナナエは益々顔を赤くして、

「確信犯かよ！ お前なんかサイテーだちくしょー！」

懇親の力で手桶を床に叩きつけた。

結局、その夜はロディウスが脱衣所に置いていつてくれたシャツを借りて寝たのだが、寝室にベッドが一つしかなく、そこでも一悶着あった。

普段はこの部屋でガレットが寝ているのだが、この日彼は診察室のベッドを使っていたので、必然的にナナエがこの部屋を借りることになった。

しかしロディウスも普段使っていた診察室のベッドをガレットに貸してしまっていたので、寝る場所がなかったのだ。

他の部屋は医学書やら標本やらがぎっしり詰まっていて、とてもではないが心地よく眠れる環境ではない。

最悪、廊下で寝ることも致し方ないと思っていたナナエだが、ロディウスが部屋を譲ってくれたので、暖かいベッドで眠ることができた。

標本室で寝ずにすんだことには感謝するが、これで風呂を覗いたことが帳消しになるわけではない。ないと言ったらない。

いくら相手が盲目だとはいえ、乙女の入浴中に勝手に侵入するのは大犯罪、なのである。

朝日が差し込む部屋の中で、すっぱり毛布をかぶってぶつぶつと呟いていると、またしてもいきなりドアが開いた。

「いつまで寝てんだ？ 朝飯できてるぞ」

驚いて跳ね起きたナナエには目もくれず――目が見えないのだから

ら当たり前だが――ロディウスは用件だけ言う、さっさと出ていった。

彼も昨夜の一件で学習したらしい。

ナナエが文句を口にして枕を投げつける前に、寝室の扉は閉じられた。

しかも扉の下には、きれいに畳まれたナナエの服が置いてある。

ナナエはどうしようかと迷ったが、とりあえず手にした枕だけは、怒りの矛先が向かうはずだった青年の立っていた場所に投げつけてやった。

ひとまず着替えて身仕度を整えてから廊下に出ると、こんがり焼けたパンの匂いが漂ってきた。

匂いのする方に行ってみると、キッチンにトーストとサラダが用意してあった。

「おはよう。ちゃんと眠れたか？」

ナナエの気配に気付いたのか、コップにミルクを注いでロディウスが振り返る。

「お、おう……つか、それ、あんたが作ったのか？」

ナナエはテーブルの上の朝食を指差して言うから、相手が盲目だったことを思い出した。

しかしロディウスはナナエの言いたいことを的確に読み取ったらしく、「ああ」と頷いてコップをテーブルに置いた。

その動きは、とても目が見えていないとは思えない程滑らかだ。

「すげーなあ、あんた。目、見えてないんだろ？」

ナナエは思ったことをそのまま口にして椅子に座った。

ロディウスもナナエの向かい側に腰掛ける。

「べつに、ただ切って焼いて並べただけさ。家の中のものなら、どこに何があるのか大体覚えてるしな」

そう言っただけで彼は「いただきます」と両手を併せた。

ナナエも両手を胸の前で組んで、いつもより大分短く食事の前のお祈りをした。

何時如何なる時でも、食物を口にできることには感謝しなければならないと、恩師に口うるさく言われているのだ。

そうしてからコップを手に取り、ミルクを一口含む。うん、美味しい。

「いやでもすげーよ。オレだったらぜってえできねーもん」

「そうか？ 慣れれば誰だってできるだろ」

「えー？ でもお前」

「ちょっと待った」

トーストに嚙り付きながら言ったナナエの眼前に、ロディウスが
びっと人差し指を立てる。

一つ瞬きをしてから、ナナエは口を閉じてトーストを咀嚼し飲み
込む。

それを見計らったように、ロディウスは言葉を続けた。

「何度も言うけど、お前じゃなくてロディウス、だ」

念を押して訂正してくるロディウスを、ナナエはぽかんと見つめ
ていたが、数回瞬きしてから不思議そうに首を傾げた。

「お前、なんでそんなに名前にこだわるわけ？」

「だからロディウスだって。これは親に貰った大事な名前だから。
sonだけ」

何度訂正しても直そうとしないナナエに少し腹が立ったのか、ロ
ディウスはムツとした様子で言って食事を再開した。

何でそんなことにこだわるんだろう、この人は。

ナナエの顔にははつきりとそう書いてあったが、ロディウスには
知る術がない。

相手が盲目だと、顔に出てもばれないからラッキーだよなあ、と、
そんなことを思ってしまう。

ナナエは食事を再開しながら、「ロディウスねえ……」と呟いた。

「……変な名前」

「本気で怒るぞ！」

「うわわゴメン、冗談だって！」

ナナエの呟きを聞き咎め、いきなり身を乗り出してきたロディウスに、ナナエは慌てて謝った。

「ところで、少し頼みたいことがあるんだが」

それからは黙々と朝食を食べ終え、皿を洗いながら唐突にロディウスはそう切り出した。

ぼんやりと皿を洗うロディウスの手つきを眺めていたナナエは、彼の言葉をつい聞き逃してしまった。

「へ？ 何？」

「だから、頼みたいことがあるんだけど。耳、ちゃんと聞こえてるか？」

「うっせーな！ ちょっとぼーっとしてただけだよ！
で？ 頼みたいことって？」

洗い終わった皿を片付けて布巾で手を拭きながら、ロディウスはナナエの正面の椅子に座った。

呼吸一つ分の間を空けてロディウスは話し始める。

「ガレットの手伝いの他に、フリーで運び屋をしてるんだが、あるものをヴェヌスの領主に届けるように頼まれててな。領主の屋敷まで道案内を頼みたいんだが……」

「なんだそんなことか。いいぜ。ヴェヌスだったら帰り道だし」

最初は断ろうかと思っていたナナエだが、依頼の内容がただの道案内と聞いて気が変わった。

ヴェヌスは、ナナエの住んでいる街なのだ。

一度家に帰って、ちゃんと休もうと思っていたし、何より次の『仕事』の下調べも……おっと、これは内緒だ。

ロディウスはナナエが快く引き受けてくれたことに安堵したのか、口の端を上向けて小さく笑みを浮かべた。

名前の件で怒ってから、ずっと不機嫌だったのだ。

むっつりと黙り込んだロディウスは、はっきり言って恐い。

ナナエは、もうぜったいにロディウスの名前をからかったりしないと固く心に誓ったのだった。

簡単に荷物をまとめると、二人はすぐに出発した。

怪我人のガレットを一人残して行くのも心配だったが、昼から看護師の女性がアルバイトに来るのだと聞いて納得した。

臨時雇いとはいえ、素人二人が残るよりもずっと安心できる。

「じゃあなヤブ医者のおっさん！ 養生しろよー！」

と、家を出るときに挨拶したら、「ヤブでもおっさんでもねえ！」と奥の部屋から返事が聞こえたので、怒鳴るだけの体力は戻ってきただろう。

ナナエとロディウスは並んで歩きだした。

目が見えないロディウスを気遣って、ナナエが「手を引こうか」と言うと、ロディウスは笑って断った。

一度歩いた街なら、一人でも歩けると言うのだ。

ヴェヌスの街は然程遠くはないが、この街から歩くと丸一日以上かかってしまう。

飛んで行けば早いのにと考えて、ナナエは昨夜からずっと疑問に思っていたことを、ロディウスに尋ねてみた。

「そう言えばさ、ロディウスって何なわけ？」

「……意味わかんねえぞ」

ナナエの大雑把すぎる質問では他に答えようがなく、ロディウスは呆れたように肩をすくめた。

「だからさあ、最初鳥だったじゃん。なんで変身できんの？」

ナナエはロディウスを見上げて両手を広げてみせた。

鳥がはばたく様子を再現したかったのかもしれないが、盲目のロディウスには無意味だ。

ロディウスはわずかに表情を硬くして、声の音量を抑えて言った。

「あんまり大声で話すなよ。人間に聞かれたら厄介だ」

そう話す声も硬い。

答えを聴くまでもなく、ナナエはその理由に思い至った。

この目の前の男は、人間ではないのだ。

人間によく似た姿をしながら、その身に獣の血を宿すと言われている種族、獣人。

言い伝えによれば、獣人は無知で野蛮な生き物で、性格は極めて
獰猛。

獣に姿を変えて人間を喰い殺す、悪魔のような種族だとされている。

ロディウスからは、そのようなイメージはまったく湧かないが、
褐色の肌や、時折髪の間隙から覗く大きく尖った耳は、本で読む獣
人の特徴に一致している。

「あ……獣人、だったのか。イメージとぜんぜん違ったから、わか
らなかった」

ナナエもロディウスに倣って声を抑えて呟いた。

「どうせ、無知で野蛮な生き物だとか思ってたんだろ」

皮肉雑じりに言ったロディウスの言葉に、ナナエは何も言えなく
なってしまった。

まさに今、そう考えていたからだ。

なんて勝手なんだろうと思った。

人間はなんて勝手な生き物なのだろう。

この青年には、野蛮なんて言葉はまったく似合わないではないか。いったい、何を以て獣人が無知で野蛮だなどと判断したのか。

しかし、自分も今の今までその勝手な解釈を真実だと思い込んでいたのだから、文句を言える立場ではない。

「……ごめん」

ナナエは居たたまれなくなって俯いた。

人間にはかつて、獣人を迫害していた時期があった。獣人を、モンスターと同質だとみなしていたのだ。

今では、獣人の迫害は表面上は行われていないことになっている。獣人そのものの数が減り、人前に姿を見せなくなったからである。彼らは今、絶滅危惧種として保護対象になっているのだ。

だが、人間が獣人を嫌う風潮はなくなっていない。長年の軋轢は、そう簡単になくならないものだ。

急に落ち込んでしまったナナエに気付き、ロディウスは努めて明るい口調で言った。

「なんでナナエが落ち込んでんだよ。

獣人がこーやって人間社会に解け込んでるなんて、すげえレアなんだぜ。今のうちに、サインしてやろうか？」

「……なんだよサインて」

「いやあ、人間に交じって暮らす獣人なんて珍しいからさ、そのうち新聞社が嗅ぎつけて取材に来るかもしれないだろ？ そしたら一躍有名人だろうが」

「あるわけねえだろ、そんなこと」

おどけたように言うロディウスを見て、ナナエは思わず吹き出した。

それからは、二人で他愛ない話をしながら歩いた。
日が真上に来る頃には、すっかり打ち解けていた。

気付けばもうそろそろ昼食の時間である。

街道で見つけた小さな大衆食堂に入ると、そこでは昨夜の事件の話で盛り上がっていた。

ポトの街の領主が殺されたそうじゃないか。
犯人はまだ捕まっていないらしいぞ。

そんな話があちこちのテーブルから聞こえてくる。
それを聞いたナナエはぎくりと肩を強ばらせた。

あの屋敷の使用人たちは、ナナエを犯人だと勘違いしている。
いつ手配書が配布されるか、はたまた役人が追い掛けてくるか。

ナナエはここで初めて、心の中に不安を感じた。
そんなナナエの心情を見透かしたように、ロディウスはナナエの肩を叩いて囁く。

「心配すんな。ナナエが捕まることはねえよ」

どういふことかと訊く前に、ロディウスは一番奥のテーブルに席を取った。

周囲を気にしながらもナナエが席に着いた音を聞いて、ロディウスは品書きを開いた。

「テキトーに選んでくれよ。字、読めないからさ」「あ、うん」

品書きを受け取って、とりあえずランチセットを二つ頼む。

注文を取りに来た女性が店の奥に消えてから、先程の話をロディウスに確認した。

「なあ、オレが捕まらないってどういふことだよ？」

他の客に聞き咎められるのを恐れてか、ナナエはかなり声のトーンを落として囁くように言った。

「普通にしろって。びくびくしてると、余計に怪しいだろ」

ロディウスは若干声を小さくしているものの、その口調は噂話でもしているかのように軽い。

ロディウスに言われて、ナナエもなるべく何でもない様を装うようにした。

少々ぎこちなくはあったが。

「来る途中に鳥たちから聴いた。まだ手配書は出回っていない。

ま、追っ手が来たとしても、その前にヴェヌスの領主に会えばいいのさ」

そう言ってロディウスは、足元に置いた麻の袋を軽く持ち上げて見せた。

それはヴェヌスの領主に届けると言っていた荷物だ。

荷物と一緒に、事件の真相が書かれた手紙が入っていると言う。

ナナエは一安心したようにほっと息を吐いたが、すぐに怪訝そうな顔つきになってロディウスを見つめた。

事件の真相と言うが、ロディウスはガレット救出のため後から来たのだから、何が起きていたのかなど知っているはずがない。

そもそも、目が見えないのだから字も書けないのではないか。

当事者であるガレットが書いたのかもしれないが、彼は酒の誘いに行っただけだなどと言っていたはずだ。

それが本当ならば、彼も真相など知っているはずがない。

彼らはやはり、今回の事件に深く関わっているのだろう。

ナナエは益々声をひそめてロディウスに言った。

「ロディウス、おめー本当はこの事件、真犯人が誰だか知ってんだろ？」

「お待たせしましたー。ランチセット二人前でございまーす」

「お、美味そうな匂い。ほら、食おうぜナナエ」

タイミングが良いのか悪いのか、見計らったようにウェイトレスがランチセットのトレイを運んできた。

ロディウスはさっさと食べ始めてしまい、結局ナナエの話ははぐ

らかされてしまったのだった。

二人は食べ終わると早々に店を出て、ヴェヌスへと歩みを進めた。

ヴェヌスはここ、ユーティスの街から南北に伸びる旧街道の先にある。

実質、ロディウスとナナエは隣町に住んでいたことになるのだが、西側に新街道ができ、そこに新しくポトの街が造られたため、旧街道はほとんど使われなくなっている。

ポトは山を切り拓いて建造されており、交通の便が良くなったこともあって、わずか数年のうちに発達した。

今では王都に行くのにも、ポトを経由して新街道を通るのが一般的になっている。

そのため今、旧街道を歩いているのは、ナナエとロディウスの二人だけだ。

山と森とを迂回してぐねぐねと曲がる旧街道には、寄り添うように小さな村があったのだが、今では大抵の村民がポトへと引越してしまったため、空き家だけが取り残された状態になっている。

旧街道に入る前に屋台で買ったサンドイッチを食べながら空を見上げれば、山の陰に赤い光を残して太陽が沈もうとしていた。

東の空は早くも夜の色に染まりつつある。

山を迂回して造られたこの旧街道は、ひたすらに長い。

ポトを経由して新街道から馬車に乗れば、あの太陽が沈む頃には

ヴェヌスの街に着いていただろうが、事件現場である街を通りたくはない。

役人に見つかる恐れもあった。

夜通し歩けばヴェヌスに入れるが、宿も店も閉まっている時間だろう。

ナナエの家はヴェヌスの端の海に面した場所にあるため、そこそ着くまでに夜が明けてしまう可能性が高い。

ヴェヌスの街は、水の国の中でも王都に次ぐ広さを誇る、大都市なのだ。

ロディウスがナナエを抱えて飛んで行くという案も出たが、夜とはいえヴェヌス程の大きな街だと、市中警備の数も多い。

姿を見られては厄介だということで、敢えなく却下された。

結局、今夜はその辺の空き家を借りて休むことになった。

空き家とは言っても、ポトの街ができたのは二十年も前のことで、この村の家々もそれだけの年数放置されており、屋根や壁が崩れているものも多い。

まだ家の形を保っているものを見つけた頃には、空は黒一色に変わっていた。

ロディウスが家から持ってきたランプに火を点ける。

ロディウスはランプを必要としていないので、ナナエのために持ってきたのだろう。

ナナエは家の中で眠れそうな場所を探した。

しかしどの部屋も埃が積もっていて、このままでは眠れそうにな

い。

ベッドも壊れていたし、そもそも一つしかなかったので、ナナエは入り口に近い部屋で寝ることにした。

おそらく、リビングとして使われていた部屋だろう。

寝るのに丁度良さそうなソファがあった。

当然埃まみれだったが、綺麗にはらってから使えばいい。

外の井戸はまだ使えそうだったが、流石に風呂は無理だ。

一日歩き通しで、汗や土埃で汚れた身体を洗いたかったのだが、今日のところは我慢。

井戸から汲んできた水で顔を洗えるだけでもよしとしよう。

ナナエは水を絞ったタオルで顔や手足を拭いた。

ロディウスにも勧めたが、彼はなぜかそれを断った。

「顔くらい洗えば？ 結構汚れてんじゃない」

「ああ、いいって別に」

「よくねえよ。つーか、そっちが良くてもオレが気にするっつーの」

そう言ってナナエが荷物から出したタオルをロディウスに投げると、目が見えないはずの彼は、空中でそれをキャッチした。

「だからいいって……外で水浴びしてくるから。ナナエも一緒にするか？」

「ばっ……！　するわけねえだろこの馬鹿！」

ニヤニヤ笑いながら言ったロディウスに、ナナエは顔を赤くして怒鳴り返した。

ロディウスは笑みを浮かべたまま家の外に出て、ドアのところで一度振り返る。

「覗いちゃあよ」

「覗かねえよ！」

ナナエが投げた濡れタオルは、寸前で閉じられたドアに当たって虚しく床に落ちた。

ナナエがソファの上に寝転がっていると、数分もしないうちにロディウスが戻ってきた。

湿っぽくなった長い銀の髪が、背中に張り付いている。

襟の広い上着は脱いでいるのに、目を覆うように巻いてある黒い布はきっちり巻き直してある。

寝るときくらい取ればいいのに、と思いながら、ナナエはロディウスを見上げていた。

薄明るいランプの光に照らされるロディウスの髪を見て、ついなんとなく胸元に落ちた自分の髪を一房摘んで見比べる。

ナナエの髪は明るい茶の色をしていて、以前共に暮らした子供たち、ミルクチョコレートの色だと言われたことがある。

今ではろくに手入れもしていなかったこともあり、毛先はばさば

さ、枝毛も増えた。

ところが奴の髪といったらどうだ。

到底手入れなどしているようにには見えないのに、艶のある長い銀糸は世の女性が羨むに違いない。

ナナエはなんだか悔しくなってきた、ちえ、と小さく舌打ちをした。

耳が良いロディウスにはしっかりと聞こえていたが、特に何も言わずに部屋の隅に腰を下ろした。

「明日も早いんだから、あんまり夜更かしするんじゃないぞ」
「わかってるよ」

ロディウスに言われて、ナナエはむすっと口を尖らせた。
子供扱いされているようで、なんとなく腹が立ったからだ。

「おやすみっ」

「……ああ、おやすみ」

隙間風が頬を撫でるのを感じながら、ナナエは目を閉じた。

こうやって誰かにおやすみやおはようを言うのも、随分久しぶりな気がする。

皆で暮らした『月の家』を出て以来だろうか。

昔の夢を見そうだなと思いながら、ナナエの意識は眠りの水底へと落ちていった。

「……やっぱり反対だ。ナナエとは、ヴェヌスで別れた方がいい」

ぼつりと呟いたのは、ロディウスだ。

誰に言うでもなく呟き、暗闇の中で髪を掻き上げる。

ガレットはナナエを、ロディウスの護衛を兼ねた囚にしようとしたのだが、ロディウスは納得していない。

危険を承知で、一人で片付けるつもりだった。

このときまでは。

水の剣士――月の家へようこそ――

この日も朝から快晴で、ナナエとロディウスは昼を少し過ぎた頃にヴェヌスの街に入った。

王都と並ぶ大都市だけあって、街は活気に満ちている。

ここでもポトの領主が殺された事件の噂は広がっていたが、やはりまだ手配書は出回っていないらしく、ナナエを追ってくる役人もいなかった。

「ついてねーよなあ、領主が視察に出て留守なんて」

ナナエは領主の屋敷から離れた通りを歩きながら、溜め息を吐いた。

二人が領主の屋敷を訪れたとき、領主であるサイマスⅡヴェヌスは、妻を連れて市内の視察に出ていたのだ。

今夜帰ることにはなっているのだが、突然の訪問者であるロディウスには会ってくれないかもしれない。

「仕方ないですわ。明日一番に謁見できるように、私からお願いしておきますから」

ナナエの隣で、肩で切りそろえた黒い髪の少女が、涼やかな声で言う。

彼女はエナⅡヴェヌス。

この街の領主の娘だ。

エナはナナエと仲が良く、門の前で困っているナナエを見つけて家から出てきたのだ。

そしてさも当然のように、ナナエたちと並んで歩きだした。

「それには感謝してるが、いいのか？ 領主の娘がこんなところろついてて」

困惑したように言うのはロディウスだ。

彼はエナがついてきたときから、なるべく治安が悪そうな裏道を選んで歩いているのだが、清楚な成りをしたこの少女は、意外と肝が据わっているようである。

「ご心配には及びませんわ。ヴェヌスは安全な街ですもの。それに、いざとなったらナナエちゃんが守ってくれますもの」

あっけらかんと言つてのけたエナに、ロディウスはひよいと肩をすくませた。

言っても無駄だと悟ったのか、裏道を行くのをやめて表通りに出る。

途端に屋台や食堂から美味しそうな香りが漂ってきて、まだ昼食を食べていなかったことを思い出した。

「あー、腹減ったな。なんか食わね？」

それはナナエも同じだったらしく、ぐうと空腹を主張する胃を押さえて、周囲の屋台に目を向けた。

「まあ、お二人とも昼食は済んでませんか？」

「そーなのませんの。エナはどうする？」

「では、少しだけご一緒させてくださいな」

二人の少女は、ロディウスの意見も聞かずに屋台へと走りだした。ロディウスも腹が減っていたのは事実だから反対はしないが、置いて行くのは勘弁してくれと思う。

確かに目が見えなくてもそんなに不自由していないし、初めて来た街でも、音や風を読んでまっすぐ歩くことはできる。

だが、こう人が多いと離れたナナエたちを捜すのは一苦労だ。

それに、人間が大勢いる中に一人で取り残されるのは、あまり良い思いはしない。

人間に追い掛けられた、あのときのことを思い出しそうで……

「ほら、ロディウスのぶん。ここの屋台、安くて美味いんだぜ」

ナナエたちを追う足が止まりかけたところで、ナナエの声が戻ってきた。

手にはほかほかと湯気の立つ肉まんを持っている。

その一つをロディウスに差し出して、ナナエは楽しそうに笑った。

ロディウスは突然現実に意識を戻されて、ぼんやりとナナエの言葉聞いていた。

差し出された肉まんも受け取れないでいる。

「なんだよ、食わねえの？」

ナナエが不思議そうに首を傾げた。

ロディウスは慌てて首を振る。

ナナエは笑顔でロディウスの手を引き、その手のひらに紙に包まれた肉まんを乗せた。

少し熱いくらいの温度が、手のひらに伝わる。

「……………」

ロディウスは肉まんを持ったまま、しばらく動かなかった。

「どした？ 腹でも痛いのか？」

ナナエが怪訝そうにロディウスの顔を覗き込むと、ロディウスはようやくゆるゆると首を振り、

「……これは、食い物なのか？」

未知のものに対する警戒心を露にして、ナナエに尋ねた。

「え？ ロディウス、肉まん食ったことねーの？」

思いもよらぬロディウスの言葉に、ナナエは驚いて飛び上がった。
エナも戻ってきたのは、丁度そのときだった。

「ナナエちゃん？ どうしました？」

「聞いてくれよエナ！ こいつ肉まん食ったことねえって言うんだぜ？」

エナまでも、さも意外といった様子でロディウスを見上げた。

「まあ、こういったところでお買い物するのは初めてなのですか？」

「そーゆーエナだってこないだ知ったばっかじゃん」

「仕方ないじゃありませんか。私は、あまりお外に出していただけなかったんですもの」

からかうように言ったナナエの言葉を聞いて、エナは少しだけ恥ずかしそうに頬を染めて抗議した。

「ま、とりあえずあっちで食おうぜ。ここじゃ人多すぎるだろ」

ナナエはエナの抗議を軽くいなして、ロディウスの手を取り歩きだした。

エナもナナエと並んで歩きながら、時折何かナナエと話して笑い声を上げている。

ロディウスはナナエに手を引かれながら、ぼんやりと手の中の肉まんが少しずつ冷めていくのを感じていた。

表通りに設置されている噴水前のベンチに腰掛けて、ナナエは肉まんを頬張った。

少し冷めてしまったが、このくらいが丁度いい。
熱々に噛り付くのも良いが、あんまり熱いと口の中を火傷してしまう。

「ロディウス様は、どちらから参られましたの？」

丁寧にハンカチを膝の上に広げて、食べ方だけはナナエを真似て頬張りながら、エナはロディウスに尋ねた。

ロディウスのことを、自分と同じように、軽々しく街に出られないような身分の者だとも思ったのだろうか。

肉まんを食べたことがない、見たことも聞いたこともないと言うロディウスに、興味津々の様子だ。

「ユーティスに住んでいる。こういった人ごみの中は苦手だね、あまり街中には行かないんだ」

肉まんの包み紙を上手く剥がすことができずにいると、横からナエが手を出してきて包みを開けてくれた。

それを一口齧る。

口の中に、肉汁の旨味が広がった。

「美味い……へえ、こんなものがあるなら、もっと街に顔を出しとけば良かったな」

ロディウスは口許を綻ばせて肉まんに齧り付いた。かなり気に入ったようでご満悦だ。

ナナエとエナは、そんなロディウスを見て楽しそうに笑った。

あつと言う間に食べ終わると、ロディウスは包み紙を丸めて、少し離れた場所にあるゴミ箱に放った。

包み紙は綺麗な放物線を描き、ゴミ箱の縁に当たって上に跳ね上がる。

最後はそのまま重力に任せてゴミ箱の中に落ちた。それを見ていたナナエとエナは、思わず拍手する。

「すっげー。よく目も見えてないのに入ったなあ」

出会ってから何度目かになるナナエの賞賛を聞いて、ロディウスは苦笑した。

「さっきここに来るときに脚が当たったから、大体の位置と距離は覚えてたんでね。」

あとは、投げるものの重さとか考えて投げれば、誰でもできるさ」

ロディウスは大したことではないと言うが、簡単にできることではない。

ナナエはこの青年を、少し見くびっていたようである。

すげー奴ではなく、めっちゃすげー奴、だ。

「随分慣れてらっしゃるようですが、そのお目は生まれつき……？」

エナが興味深そうに尋ねる。

ナナエでも遠慮して訊かなかったことなのだが、この娘も案外物怖じしないタイプのようなのだ。

「いや、昔ちよいと事故でね。もう十年以上前かな」

ロディウスは布を巻いた目許に触れて言った。

口許には笑みが浮かんでいたが、どこことなく物悲しそうだ。

「まあ、私ったら不躰なことを……申し訳ありません」

エナが慌てて謝罪するが、ロディウスは笑いながら気にしていない

いと言った。

「ほんとかよ？」

ナナエも遠慮がちにロディウスの顔を覗き込む。

ロディウスは、静かに微笑むだけだった。

この目が、もう一度見えるようになればいいと思ったこともある。だが、細かい作業は難しいが、生活に支障はないし、人間よりも耳や鼻が良いのでそれらが充分に目の代わりを務めている。

ただ……

「大切なヒトの顔が見れないのが、残念だなあと思うだけだよ」

ロディウスはそう言って立ち上がり、ぐっと背伸びをした。

「さて、明日まで暇だし、どうすっかな」

宿をとるにしても早い時間だし、また人ごみの中に戻るのも気が引ける。

どうしたものかと思案していると、エナがぽんと手を打った。

「ナナエちゃん、もうすぐおやつの時間ですわね」

「そうだけど……何？ まだ食うの？」

唐突に切り出したエナの腹の辺りを見て、ナナエは顔をしかめた。こんなに細いのに、食ったもんはどこに消えているんだろう。

ナナエの視線に気付くと、エナは恥ずかしそうにお腹を隠した。

「違います！ 子供たちに、おやつを買って行って差し上げようか
と思いますの」

エナは言うが早いのか、ナナエの手を引いて立ち上がらせた。

「ロディウス様も一緒に参りましょう？」

エナはロディウスにも声をかけて、その手を取り歩きだした。

ロディウスは困惑していたが、もっと驚いたのはナナエだ。

「な、なんでロディウスも連れてくんだよ！」

「大勢で行った方が楽しいじゃありませんか。きっと子供たちも喜
びますわ」

「そうかもしれないけどお……」

エナはナナエとロディウスを連れてどんどん進んでゆく。

この少女は、おとなしそうな外見や言葉遣いに反して、かなり行
動力があるらしい。

困惑するナナエの声を聞きながら、ロディウスはおとなしくエナ
に手を引かれるまま歩いていった。

あの後ナナエたちは、郊外にある小さな教会の前に来ていた。

結局エナはナナエの反論を無視して、籠いっぱいのフルーツを買

ってから、二人を連れてきたのだ。

教会の中に入ると、シスターが一人で講堂の掃除をしているところだった。

修道女は訪問者に気付いて顔を上げると、掃除の手を止めて近付いてきた。

「ごきげんよう、シスター」

エナがスカートの裾を摘んで挨拶する。

修道女は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「まあ、こんにちはエナさん。ナナエも来てくれたのね」

「こ、こんにちは、先生」

ナナエは照れ臭そうにお辞儀をした。

「シスター、これ、少ないですが子供たちにとおもいました」

エナが籠に入ったフルーツを差し出す。

修道女は申し訳なさそうに頭を下げると、しっかりと籠を受け取った。

「いつもありがとう。皆きつと喜ぶわ。

……あら、こちらの方は？」

彼女はロディウスに気が付いて彼を見た。
身長が低いから、下から見上げるようだ。

「ロディウス様ですわ。ナナエちゃんのお友だちなんですよ」
「違っ……！ 道案内を頼まれただけだ！」

間髪を入れずにエナが答えるが、ナナエは慌てて否定した。

道案内？ と修道女は不思議そうに呟く。

「この教会へ？」

「あ、いや、この街の領主に用があつたんだが留守だそうで。そうしたらこの二人にここまで引っ張ってこられた」

「オレは引っ張ってねえよ！ エナだろ！」

齒をむき出しにして反論するナナエだが、他の三人は本気にしていない。

ナナエがいちいち突っかかってくるのは、単なる照れ隠しだとロディウスにも解ってきた。

「さあさ、皆さん奥へどうぞ。そろそろお茶にしようかと思つていたところなのよ」

修道女はそう言つてにつこり微笑むと、三人を講堂の奥へ案内した。

マリーと名乗つた修道女について行くと、教会の裏庭に案内された。

渡り廊下の先に、宿舎のようなものがあり、その周りで小さな子

供たちが遊んでいる。

宿舎には、月の家と書いてあった。

そこは教会が経営している孤児院なのだ。

ナナエも十歳のときに引き取られて、五年程ここで暮らした。

ナナエが月の家を出たときよりも、修繕の跡が多くなったように見える。

ナナエが懐かしそうに目を細めていると、子供たちが駆け寄ってきた。

「あー！ ナナちゃんだ！」

「エナお姉ちゃん、またお菓子持ってきてくれたの？」

「せんせー、このお兄ちゃんだれー？」

一斉に寄ってきた子供たちに囲まれて、ロディウスは困惑したように一歩後退りする。

だが子供たちは遠慮なくロディウスの周囲に集まり、興味津々といった様子で彼を見上げた。

マリーとエナは持ってきたフルーツでお菓子を作るために、家中へ行ってしまった。

残されたナナエとロディウスは、必然的に子供たちの相手をする事になったのだった。

「ナナエかくごー！」

「ふっ、甘いわ！」

ナナエは棒切れを剣に見立てて男の子たちを相手にチャンバラごっこだ。

一方ロディウスはというと、花冠を掛けられたり、おままごとの旦那さま役に任命されたりと、女の子たちに大人気である。

そんなことをしているうちに、マリーとエナがアップルパイを焼いてきた。

子供たちは一斉におやつを貰いにマリーたちのところへ群がる。しかし食べる前に手を洗いなさいとマリーに叱られ、今度は皆で井戸の前に並んだ。

やっと解放されて木陰に座り込んだロディウスの前に、ナナエが近寄ってきた。

「ロディウスって案外、子供の相手すんの上手いんだな」

「まあなー……昔は弟たちの面倒みてたし。
しかしあれだな。ナナエはまるっきりお姉さんじゃなくてお兄さんだな」

「どーゆー意味だよ」

「そのまんまの意味だよ」

笑いながら言ったら、ナナエに頭を小突かれた。
然程力が込められていなかったのは、自覚があったからかもしれない。

「ナナエ、ロディウスさんも、おやつにしましょう」

「はい。ほら、行こうぜ」

マリーに呼ばれると、ナナエはロディウスの手を引いて歩きだした。

ロディウスもすぐに立ち上がり、並んで歩く。

きちんと手を洗ってから、アップルパイを受け取った。

全員に分けたため、一切れがとても小さくなってしまっていたが、子供たちはそれでも満足そうだ。

その後もしばらくの間、子供たちと遊んでいたのだが、ふと気付けば辺りは夕焼け色に染まっていた。

あまり遅くなるといけないから、とナナエはエナを家まで送っていくことにした。

「じゃあ、エナを送ってくるよ。」

ロディウスは明日の朝、領主の屋敷まで連れてってやつから」

月の家の前で手を振るナナエに、ロディウスは笑顔で首を振った。

「いや、道はだいたい解ったから、一人で行ける」

道案内ご苦労さん、と言って、ロディウスはナナエの頭を軽く撫でた。

ナナエはきよとした顔でロディウスを見上げる。

一拍の間を置いて、驚いたようにナナエが口を開いた。

「えっ、じゃあこれでお別れ？」

「ああ。何だ？ 寂しいのか？」

からかうような口調のロディウスに、ナナエはわずかに顔を赤くして声をあげた。

「なっ、誰が！ お前の顔見なくてせいせいするね！」

一方的に言い放ち、外で待っていたエナの許へと駆けてゆく。
どうしたのかと振り返るエナの背を押して、ナナエは足早に歩き去っていった。

ナナエの足音が遠ざかってから、ロディウスも月の家を去ろうとした。

しかし、その足が月の家の外に出ることはなかった。

「おにいちゃん、泊まってって」

「帰っちゃやー！」

子供たちが、ロディウスの脚にしがみ付いている。
宿を探しに行こうとしていたのだが、子供たちにどうしてもせがまれて、仕方なくここに泊まることになった。

夕飯は、子供たちが皆で作るのだと言う。

ロディウスが手伝おうとすると、ゲストだからおとなしく待っていろと追い出されてしまった。

途端にやることなくってしまったロディウスが食堂でぼんや

りしていると、マリーがやってきて隣に座った。

「ロディウスさん、ちょっとお話相手になってくれるかしら？」

「え？ ああ、構わないが」

マリーは笑みを絶やさずに話を始める。

「あなた、お目が見えないんですってね。身の回りのこととか、大変でしょう？」

「いや、慣れてるから特には」

「そうなの？ いくら慣れたと言っても、私たち人間には、目が見えないのは大変なことだわ」

マリーは一度言葉を切って、まっすぐにロディウスを見つめて言った。

「あなた、獣人さんね？」

「……ああ」

マリーの言葉に、ロディウスはあまり驚いた様子もなく頷いた。先程彼女が「私たち人間には」と言ったことから、既に自分が獣人であることに気付いているのだと解ったからだ。

マリーはロディウスが獣人とだ気付いていても、態度を変えることなく話し続けた。

「人間の街で暮らしているの？」

「ああ、もう四年くらいになる」

「そう、素敵ね。そんな風に、種族の違いなんて気にせずに、人間も獣人も、共に歩いていけるなんて」

「実際は、そうはいかないだろうな」

ロディウスは苦笑して肩をすくめた。

人間の街で生活しているとはいえ、ロディウスは滅多に街中には行かない。

ロディウスが獣人だと判ると、街の人間は皆怯えて近寄ってこなくなるからだ。

マリーやナナエ、ガレットのように、獣人に対等に話し掛けてくる人間は少ない。

「残念だけど、そうね。お互いが理解し合えるには、もう少し時間が必要だわね」

マリーはそう言って言葉を切った。

少しの間沈黙が落ち、キッチンで一所懸命に料理をする子供たちの声だけが、賑やかに聞こえてくる。

「……ねえ、ロディウスさん。ナナエとは、どこで知り合ったのかしら？」

やがてマリーは再び口を開いた。

その声には、先ほどまでとは違い、やや硬い響きが混じっている。

「……ユーティスの街だが」

嘘は言っていない。

出会ったのはポトの街だが、お互い知り合ったのはユーティスに入ってからだ。

「そう……」

マリーは安堵したようにほっと息を吐いた。

「ナナエはね、十歳のときにここに来たの。」

十五になったとき、もう自立するんだと言ってこの家から出ていったんだけど、今でも時々仕送りをしてくれるのよ」

マリーはまるで我が子のことを話すように、誇らしそうに言う。

しかし、すぐに表情を曇らせて、テーブルの上で組んだ指に視線を落とした。

「今ね、正直、経営が厳しいの。それでナナエは、前よりも沢山仕送りをしてくれるようになったんだけど、何か無茶なことをしてるんじゃないかって、心配なのよ」

小さく溜め息を吐いてから、マリーは顔を上げてロディウスを見た。

「ごめんなさいね、初対面の方にこんな話をして。でも良かったわ。先日の事件に関わっているんじゃないかと心配してたの」

「なぜ、その話を？」

「あなたなら何か知っているんじゃないかと思ったのだけど、気のせいだったかしらね」

マリーはそう言って微笑むが、話をしている間じつとロディウスの方を見て、様子を探っているようだった。

この分だと、先程のロディウスの言葉も真実ではないと気付いているだろう。中々侮れない婦人だ。

「それにしても、ナナエ、遅いわねえ……夕食はここで食べていくって言ってたのに……」

マリーは窓の外を見て頬に軽く手を当てた。

夕焼けに赤く染まっていた空は、既に群青よりも深い夜の色になっている。

東の森の上には、丸くなりかけた月が昇っていた。

「ご飯できたよー」

「ナナちゃんは？」

子供たちが料理の載った皿を食堂に運んできた。

しかしナナエはまだ帰ってこない。

何かあったのかと、子供たちが心配して騒ぎ始めたときだ。

突然、大きな音と共に入り口の扉が開かれた。
はっとして皆が顔を向けると、そこにはナナエが送っていったはずのエナが立っていた。

全力で走ってきたのだろう。激しく胸を上下させて肩で息をしている。

「エナさん？　どうしたのですか？」

マリーが慌ててエナを支える。

エナは今にも泣きだしそうな顔でマリーに縋り付いた。

「か、影が、影がモンスターになって、襲われてますの！　ナナエちゃんが！　ああ、私どうすれば……！」

マリーはエナを落ち着かせようと、優しく抱き締めた。
いったいどうしたのかとドアの近くに集まった子供たちが、外を見て悲鳴を上げる。

「きゃあ、せんせえっ！」

「何か来るよ！」

月明かりの中で蠢く無数の黒い塊。

歪な人型をしたそれは、エナを追うように孤児院へと迫ってきた。
子供たちの口から、再度悲鳴が上がる。

エナがマリーにしがみ付き、マリーはエナや子供たちを守るように抱き寄せる。

黒い影が、月の家の入り口に手を掛けた。

その瞬間、同時にロディウスが子供たちの頭上を飛び越えてきた。勢いはそのままに、影のモンスターを家の外へと蹴り飛ばす。

影はドアの端を握り潰して、庭へ転がった。

ロディウスは先頭にいた影が立ち上がる前に、獣人特有の鋭い爪の一撃で、影を切り裂いた。

「ロディウスさん！」

最初に我に返ったのはマリーだった。

驚いて立ち竦む子供たちを庇うように前に出る。

「家の中へ！」

叫びながらロディウスは、二体目の影に飛び掛かった。

横薙ぎの一撃で、その影は胴と脚とに切り裂かれた。

「窓を塞げ！ こいつらは影だ！ 完全な闇の中では存在できない
！」

影のモンスターは、より大きな陰の中に入るか、光の差さない闇の中では、融けて消えてしまうのだ。

光が差すところにこそ、影は生まれるのだから。

夜の闇から守ってくれるはずの光が、モンスターを活性化させる素になってしまうのだ。

すぐにロディウスの言葉を理解したマリーは、子供たちに窓を塞ぐように指示を出す。

子供たちは家中の窓を閉めて回った。

閉めた窓の上に板を当てて、月明かりが入るのを防ぐ。

板が足りないところは、黒い服をカーテン代わりに使った。

全部の窓を塞ぎ終わる頃には、敷地内に現れた影のモンスターは、ロディウスがすべて片付けていた。

近くに敵の気配がないことを確認してから、ロディウスは家の中に戻る。

「皆無事か？」

「ええ、こちらは大丈夫よ」

「ロディウスにーちゃんすげー」

「ナナちゃんより強い？」

暗闇の中、お互いの声を頼りに名を呼び合って無事確かめる。

ロディウスは食堂の隅に置いてあった、自分の荷物を取ってきて

マリーに言った。

「このまま朝まで隠れている。奴らは夜しか現れない」

「あれは、何なの？ あなたは、何を知っているのですか？」

マリーとて混乱しているのだろう。

しかし、子供たちの前で自分が取り乱してはいけなないと、決してそれを表には出さなかった。

「あれは新種のモンスターで、月明かりが作る陰から生まれる。今のところそれしか判っていない」

ロディウスの言葉に、エナや子供たちが不安そうな表情を浮かべ、お互いに身を寄せ合った。

「ナナエちゃん！ ナナエちゃんを助けに行かないと！」

エナが青ざめた顔で言う。

子供たちもナナエが心配なようで、中には泣き出す子供もいた。

「大丈夫だ。任せとけ」

ロディウスは泣いている子供を励ますように、優しく頭を撫でてやる。

暗闇に目が慣れてきたのか、隣にいた十二歳くらいの男の子が、ロディウスの腕を取った。

「俺も行く！」

その子供の声には聞き覚えがあった。
ナナエと剣の稽古をしていた子供だ。
名前は確か、マックスといったか。

「だめだ。ここで待ってろ」

「やだ！ 俺も行く！」

俺、毎日剣の稽古してるんだぜ。足手まといにはならないから！」

マックスは食い下がるが、ロディウスは首を縦には振らなかった。

「それなら、尚更連れて行けないな」

「な、なんで？」

納得できないマックスの前に膝を付き、ロディウスは彼の肩に手を置いた。

「もしまたここが襲われたら、誰が皆を守るんだ？
この中で一番強いのはマックスなんだろう？」

「あ……」

言われて、マックスは振り返った。

暗闇の中に、ぼんやりと皆の顔が見える。

そこにいるのは、マックスよりも小さな子供と、女ばかり。

そうだ、俺は、みんなのお兄ちゃんなんだ。

「……わかった。ここに残るよ。その代わり、ナナエのこと、頼んだからな」

口調だけは一丁前に、マックスは大きく頷いてロディウスの肩を叩いた。

「ああ、任せとけ」

ロディウスも力強く頷き返し、マックスの肩を叩く。

その言葉を聴いて、ようやくマックスはロディウスから離れた。

ロディウスが月の家を出る直前、マリーは胸の前で指を組み、水の国の守護精霊に祈りを捧げる。

「どうか、精霊の加護があらんことを……」

その声を背後に聞きながら、ロディウスは月の光が降り注ぐ家の外へと飛び出していった。

水の剣士——影の襲撃——

まったく、世の中どうなっているのか。

ナナエはほんの少し恨んだ。

何を恨めば良いのか判らなかったので、とりあえず一番最近のトラブルに関係ある奴にぶつけることにした。

「マジ……っ最悪……！ それもこれもみんな、ロディウスのせいだっ！」

エナを家まで送り届ける途中、商店街に並んだ街路樹の枝がざわめいた。ような気がした。

つい最近、似たような光景を目にしたことがあるナナエは、思わず足を止めて周囲の様子を窺った。

夕闇から夜の暗闇へと移行するこの時間、商店街からは徐々に人の数が減ってきている。

しかし、大都市の街中だけあって、それでも辺りを出歩いている人は大勢いる。

もし、またこの前のようなモンスターが現れたら……

ナナエは無意識のうちに、腰の剣に手を掛けた。

「ナナエちゃん？ どうしたんですの？」

数歩前を歩いていたエナが、立ち止まったナナエに気付いて戻ってくる。

しかしナナエはエナの問いには答えずに、街路樹の陰に視線を落とした。

あのとときも、月が出ていた。

満月になる前の、太ったレモンのような形をした月が、背の高い木の上に顔を出す。

商店街には街灯が点いていて、夜でも明るい。

月の光が映し出す陰は、より強い街灯の灯りが作る陰に吞まれてしまう。

一瞬揺らめいたように見えた影は、すぐに元の形に戻って動かなくなった。

「ナナエちゃん？」

再度エナに声を掛けられて、ナナエはようやく剣から手を離れた。

「ん、なんでもない」

気のせいだったみたいだと続けようとして、けたたましく吠える犬の鳴き声にかき消された。

何事かとそちらを振り向くと、街灯の光が届かない場所、店の裏側で犬が吠え続けている。

肉屋の主人が飼う犬をおとなしくさせようと、店の裏手に回った。

「ぎゃあっ！」

しかし犬は吠えるのを止めず、逆に主人の大声が辺りに響いた。商店街を歩いていた人々も、何があったのかと集まってくる。

と、ジャラジャラと鎖を引きずりながら、店の裏から犬が走ってきた。

鎖を繋いである杭が抜けたのだろう。

その犬の背後に寄り添うように、いや、寧ろ犬から生えてきたように、一回り大きな黒い犬が並走して、店の犬に噛み付いた。

店の犬は走ってきた勢いを殺せず前のめりに転がって、野次馬たちの輪の中心で停まった。

先程噛み付かれた箇所が、ぱっくりと裂けていて石畳に血が流れる。

ナナエたちの目の前で絶命した犬の陰から、大きな黒い影の犬がのそりと立ち上がった。

その口からは、鮮血が滴っている。

街灯の灯りの届かない場所には、月の光から生まれた陰がある。犬の陰から生まれたモンスターは、周囲の人間たちを見渡して、にやりと笑った。

「きゃああああ！」

誰かの悲鳴を皮切りに、商店街はパニックに陥った。

犬のような姿をした影のモンスターは、軽々と人々の頭上を跳び越して、前脚の一撃で街灯を叩き割った。

降り注ぐ硝子の破片から逃げるように、野次馬たちは右往左往しながら、てんでばらばらの方向に走っていく。

そんな中で、冷静に状況判断できたのはナナエだけだったろう。

影の犬はまだ人を襲ってはいない。

ひたすら街灯を壊して回っている。

街灯が消えれば、その分月明かりが目立つ。

ナナエが見ている目の前で、街路樹の影が動きだした。

（狙いはこれか！）

ナナエは呆然と立ち竦むエナを揺さぶり、周囲の騒ぎに負けないくらい大声を出した。

「エナ！ 月の家に戻れ！ オレはあのモンスターを何とかする！」

「で、でもっ……」

「いいから行け！ 走れっ！」

ナナエはエナの背中を押して、自分は商店街の方へと駆け出した。

たたらを踏んでエナが振り返ったときには、ナナエの姿は人ごみの中に消えていた。

「止まりやがれその犬ところ……みたいなやつ！」

ナナエは逃げ惑う人を掻き分けながら影の犬を追う。

こうも人が多くては、剣を振るうこともできやしない。

商店街の外へ逃げた人たちも多く、多少のスペースならば確保できだろうが、影の犬は足が速くて捕まえることすらできないのだ。なんとか人気のないところまで誘い出したかった。

しかし影の犬はナナエに構うことなく、次々と街灯を壊してゆく。その度に暗闇が広がり、仄かな月明かりの下で新たな影が生まれる。

警備兵は何をしているのか。

早く来て市民の避難を手伝え税金泥棒。

思わずそんなことを考えながら、人ごみの間をすり抜けるように影を追う。

見失わないようにするだけで精一杯だ。

影の犬が商店街の街灯を三分の一ほど壊した頃には、街路樹の影も立ち上がり歩き始めていた。

ナナエは見かねて声を張り上げる。

「新手が来るぞ！ 近くの建物に逃げ込め！」

しかしパニックを起こしている人々には、ナナエの声も届かない。それでも声を掛け続けながら、ナナエは襲い掛かってきた影の木の腕を、抜き放った剣で受け止めた。

「マジ……っ最悪……！　それもこれもみんな、ロディウスのせいだっ！」

力任せに押し潰そうとする影に耐えながら、ナナエは吐き捨てるように呟いた。

影の犬は相変わらず街灯を壊し続けているが、知能が低いのか、でたらめに破壊しているだけで効率はすこぶる悪い。

そのお陰で街路樹から生まれた影の数はまだ少ない。しかしそれも時間の問題だろう。

ナナエの表情に焦りの色が浮かんた。そのとき。

商店街の向こうから、角灯を持った集団が走ってくるのが見えた。街の警備兵だ。

「な、なんだこのモンスターは！　こんなの見たことないぞ！」

「そんなことより、住民の避難が先だ！　馬鹿もん！」

動揺しつつも、警備兵たちはすぐさま人々の避難誘導を始めた。これで行く、まともに動ける。

ナナエは切り結んでいた影の木を、思い切り押し返して距離を取った。

まずは厄介な影の犬を始末しようと、向きを変えて走りだそうとしたときだ。

「きみ、危ないから逃げなさい！」

生真面目そうな顔の警備兵に肩を掴まれた。

「オレは平気だ！ 離せよ、邪魔！」

警備兵を振り解こうとするのだが、なかなか放してくれない。

「何を言っているんだ！ さあ、逃げなさい！」

「しつこいな……って、うわわ、危ねえ！」

警備兵たちが現れたことで興奮したのか、影の犬が街灯から標的を変えて飛び掛かってきた。

ナナエは咄嗟に警備兵を突き飛ばして影の攻撃を避ける。
警備兵も無事のようだ。

「くそっ、何だこいつらは！」

警備兵が街中で扱うために支給されている、ショートソードを抜きながら呟いた。

歩兵用に短めに造られた刃が、月明かりを反射して銀色に輝く。

影の犬は、着地するなり強引に向きを変えて警備兵を襲う。

彼はぎりぎりのところで、牙の攻撃を防いだ。

影の黒い牙と剣が、がっきりと噛み合った。

その瞬間を狙って、ナナエが横から剣を突き出す。

しかし影の犬は寸前で警備兵の剣を放し、身を屈めて地に落ちることでナナエの一撃を躲した。

更に、身体が地面にぶつかる瞬間、素早く体勢を立て直して力強く地を蹴る。

その牙が狙うのは、先程の一撃で前に踏み出したナナエの脚。

瞬時に影の狙いに気付いたナナエだが、体重をかけて踏み込んだ脚は、思うように素早く動かせない。

影の犬が迫り――ナナエの脳裏に、噛み千切られた犬の姿が蘇った――大きく開かれた口から鋭利な牙が覗く。

喰われる！

思わず顔から血の気が引く。

間近で影の吐息を感じた、刹那。

空気を切り裂く音と共に、何かが飛来した。

それは影の犬の心臓に当たる部分に深く突き刺さり、影を貫いた。その一瞬で影は沈黙し、慣性に任せて前につんのめる。

牙が標的に触れることはなく、崩れた体勢を戻すこともできない。影の犬は勢いよく投げたボールのようにごろごろと転がり、魚屋の看板にぶつかって、やっと動かなくなった。

ナナエは突っ込んできた影を避けようとして、バランスを崩して前のめりに転んだ。丁度倒れた顔の横に、先程犬を貫いたものが刺さっていた。

それは、羽根だ。

猛禽類を思わせる、褐色の大きな羽根。

ナナエは不敵な笑みを浮かべて立ち上がり、羽根が飛んできた方向に目を向けた。

彼がそこにいると確信して口を開く。

「……おせーんだよ、馬鹿」

「助けてもらったら、まずはお礼だろ馬鹿」

鳥の姿から人型へと戻ったロディウスが、向かい側の店の屋根に降り立った。

屋根から飛び降り、ナナエの前に着地したロディウスは、瞬時に状況を理解したようだ。

入り乱れる人々の悲鳴や警備兵の号令を聞き分け、ナナエに的確に指示を出す。

「よく聴け。あれは月明かりでできた、命あるものの陰から生まれる。」

月明かりを打ち消す程の光で照らすか、月明かりも届かない完全な闇を作れば、これ以上影が増えることはない」

「な、なんでそんな詳しいのさ！」

警備兵たちでさえ知らなかった情報を、何故ロディウスが知っているのか。

色々と問いただしたいところだが、今はそれどころではない。

「あとで説明する。とにかく灯りだ。松明でも何でもいい、用意させろ。」

既にいる影は倒すか……いや、もっと大きな別の陰に入れることができるば……」

ロディウスの言葉に、ナナエがはっと顔を上げる。

「物陰の中なら、影は消えるのか！」

「ああ、だが陰になるような大きなものがないと……」

「大丈夫だ！ 考えがある。手え貸せ！」

ナナエの声には自信が溢れていた。

ロディウスは躊躇することなく、ナナエの言葉に頷く。

知り合って日は浅いが、お互いに相手の実力は見抜いている。信頼できる相手だと、言い切れる自信があった。

「おらおらおら、こっちだぜバケモン！」

ナナエはあの後すぐに、近くでぽかんと二人を見ていた警備兵を捕まえて、ありったけの灯りを用意して月明かりの陰を消すように伝えた。

徐々に灯りが集まり、商店街は昼間のように明るくなった。

月明かりが届かなくなったことで力も弱まったのか、影の木たちの動きが鈍くなったように感じる。

ナナエは影たちを挑発するように叫びながら、ある場所に誘導するようにわざと追い詰められていった。

影の数は然程多くないとはいえ、ナナエ一人ではすべての影を相手にできない。

取りこぼした影たちは、ロディウスが始末してくれる手筈になっていた。

ナナエは影たちを引き連れたまま、表通りの噴水広場へ向かう。商店街入り口のすぐ近くにあるその広場は、昼間三人で肉まんを食べたところだ。

十体以上の影を引き付けながら、ナナエは広場の入り口にたどり着いた。

その間に、ロディウスは離れて行動している影を捕まえ、その場で退治していった。

街路樹から生まれた影は、素となった木と同じ硬度をしている。普通の人間ならば切り倒すだけでも時間がかかるだろうが、ロディウスは己の爪のみで次々と影を切り裂いていった。

獣人の筋力は、人間の数倍はある。

腕を一振りするだけで、鎌状になった影の腕がへし折れ、鋭い爪で引き裂けば、影の胴体は真つ二つになる。

無駄な動きは一切なく、舞うように影を切り裂くロディウスの姿を見て、商店街のざわめきは、徐々に警備兵の感嘆の声に変わっていった。

あつという間に三体の影を沈黙させ、ロディウスはナナエの援護に向かう。

その後ろを、数人の警備兵が追い掛けた。

ただ松明を持って立っているだけで、民間人であるナナエとロディウスに助けてもらったとあつては、役人の面目丸潰れである。

ロディウスたちが広場に着いたとき、ナナエは影から距離をとって噴水の前に立っていた。

「ナナエ、こっちは終わったぞ！」

「おっしや、次はオレの番だな！」

ナナエが剣を鞘に収める。

敵を前に武器を手放すとは何事かと、役人たちが声を上げようとするが、その声は驚愕の叫びに取って代わられることとなる。

ナナエが右手を振り上げた、そのとき。

噴水の流れがぴたりと止まり、水が一つの水流になった。

噴き上げられた飛沫の一粒すらも、意思を持ったように水流のうねりに飛び込んだ。

水流は蛇のような動きで、広場の端にある砂場の砂を喰らった。そして広場一帯を取り巻くように地面の上を滑走する。

大量の砂を含んで泥となった濁流は、突如立ち上がりドームのよう
に広場を覆った。

濁流の屋根が広場を多い尽くすと、月明かりは完全に遮断されて暗闇に閉ざされた。

その中で、影の木はドームの陰に吞まれ、大地に沈むように消えてゆく。

最後まで足掻いていた影も、攻撃の手はナナエに触れることなく虚空へ消えた。

暗闇に閉ざされたこの場所で、その光景をはっきりと目にした者はいない。

影の気配が解けるように消えたのを感じたロディウスだけが、ナエの勝利を知りヒュウと口笛を吹く。

どんな仕掛けを使ったのかは分からないが、周囲に漂う水と泥の匂いは、ナナエが何かしたからだと思ったのだ。

「へえ、やるじゃないかナナエ」

「とーっぜん！」

ナナエは得意げな笑みを浮かべてガッツポーズを決める。誰にも見えないが。

「んで、もう大丈夫なわけ？　また出てきたりしねえだろうな？」

ナナエが尋ねると、ロディウスはもう大丈夫だと頷いた。

一度消えた影が再生することはない。

月明かりから陰が伸び、再びそこから生まれることはあるが、今や商店街にはありったけの灯りが灯され、月明かりが届くことはない。

ひとまずは、これで一段落といったところか。

それを聴いて、ナナエはドーム状にしていた水を元に戻した。
取り込んだ土砂を吐き出させ、水は再び噴水に返す。

少しばかり水に泥やゴミが混じっているかもしれないが、そこは
気付かないふりをする。

水と戯れるようなナナエの姿を、警備兵たちが驚愕の表情で見
ていた。

あの後、ナナエとロディウスは後始末を警備兵たちに頼んで月
の家に戻った。

無事に帰ってきたナナエの姿を見て、エナや子供たちが泣きな
がらナナエに抱きついた。

マリーは優しくナナエの髪を撫で、ロディウスの手を取り何度も
礼を言った。

騒ぎを聞き付けた領主の近衛兵がエナを迎えに来たので、エナは
屋敷へと戻ることになったが、ナナエとロディウスは子供たちに
せがまれて月の家に泊まることになった。

翌朝、澄んだ空気が秋の訪れを感じさせる中、まだ子供たちが
起きだしてくる前に、月の家の門を叩く音がした。

マリーが外に出ると、市内警備の制服を着た男が立っていた。

男は領主の使いだと言った。

「ここに、ナナエ様とロディウス様がいらっしゃると聞いたので
すが」

「ええ、二人なら中ですが……」

マリーが途惑いながらも答えると、彼は軍隊式の敬礼を言った。

「ロード・サイマスより勅命を預かって参りました。ナナエ、ロデウス両名を、ぜひ屋敷に招待したいとのことですよ」

獣の兄弟——水との繋がり——

ヴェヌスの街の領主、サイマスは人当たりの良い人物だ。

若い頃は王都で騎士団に所属していたという話だが、腕の怪我をきっかけに騎士団を引退し、故郷であるヴェヌスで先代の領主に仕えた。

その折、領主の娘に一目惚れされて結婚したのだ。

元騎士ということもあってか、軍事方面に秀でており、尚且つ政治経済にも明るい。

元々は漁業で栄えた街なのだが、サイマスの案で豊かな自然と海岸を整備したことで、ヴェヌスは観光名所としても有名になった。

新街道が開通したこともあり、年間の観光客数も飛躍的に伸びた。そのお陰でヴェヌスは王都に次ぐ大都市に発展したのだ。

その領主の屋敷は、旧街道に沿った高級住宅地の、更に奥にある。旧街道は街から一步外に出ると寂れているが、街の中では古くから造られている施設や古式住宅が立ち並び、未だ賑わいは衰えていない。

旧街道から新街道に行くにつれて、真新しい建物が多くなり、観光客相手の店が増えてくる。

昨日は旧街道から新街道へと繋がるこの道を通ってきたのだが、今は馬車に揺られながらその道を逆走している。

商店街もこの道の中程にあるのだが、朝も早いこの時間からでも賑わっているはずの場所は、昨夜の影の襲撃で壊れた、街灯や店の残骸が散らばっていた。

既に復旧作業は始まっているようで、後始末に来た警備兵や、修

繕業者の姿が見える。

あの後すぐに、ナナエとロディウスは領主の屋敷へと連れてこられた。

元より領主に会うのが目的だったため、断る理由もなかった。用意された馬車で、領主の屋敷へと向かう。

徒歩では時間のかかった道のりも、馬車で行けば数分で着いてしまふ。

屋敷に着くと、応接室に通された。

品の良いメイドが煎れてくれたお茶を飲みながら、待つことしばし。

後ろに控えていた老執事が扉を開けて、領主であるサイマスが姿を現した。

ナナエとロディウスが立ち上がると、サイマスは「楽にしてくれ」と言って、テーブルを挟んで向かい側に腰掛けた。

すかさずメイドが新しいお茶を用意する。

サイマスは来年で還暦を迎える歳だが、若い頃に鍛えた身体は衰えを感じさせない。

騎士だった頃に怪我を負ったという右腕だけが、自分の意思で動かせずに、力なく肩から垂れ下がっている。

「この度は、モンスターから街を守っていただき、誠に感謝している」

サイマスはそう言って首を垂れた。

ナナエは照れたように指先で頬を掻き、領主の前であることを思い出して姿勢を正した。

「あ、それで……エナは大丈夫ですか？

昨日は、なんかばたばたしてるうちに別れちゃったから……」

ナナエが申し訳なさそうに口を開く。

エナを危険な目にあわせてしまったことを悔いているようだ。

「ああ、どこも怪我をしていないし、心配ない。

少し疲れたようで、寝坊はしているようだがね」

その言葉を聴いて、ナナエは良かったと呟きほっと息を吐いた。

「さて、朝から呼び出してすまないが、昨日の件でどうしても確認しておきたいことがあってね」

それまで穏やかに話をしていたサイマスが、急に真剣な表情になる。

それを見て、ナナエは口許に運んだティーカップをテーブルに戻した。

「昨夜、市内警備を任せていた者から聞いたのだが、ナナエくんには水を操る力があるそうだね？」

正面からサイマスに見据えられ、ナナエは少し躊躇った後に頷いた。

「その力は、いつから？」

「さ、さあ……小さいときから普通に使えたから……」

いったいなぜ、こんなことを訊くのだろうか。

あまりに真剣なサイマスの様子を不思議に思いつつも、ナナエは正直に答えた。

「ナナエくん、ご両親の名は？」

「え……つと……」

サイマスの問いに、ナナエは言葉を詰まらせた。

ナナエは、捨て子だったのだ。

赤ん坊の頃に拾ってくれた父は、盗賊だった。

ナナエは父と二人で、ヴェヌスから離れた小さな街で暮らしていた。

そのとき、父はまだ子供だったナナエに、盗賊の技術を教え込んだ。

鍵開けの方法や、効率良く物を盗む方法、盗品を捌く闇ルートも。

一通り教えると、父はナナエに盗みを手伝わせるようになった。

口答えは許されない。

父に逆らおうものなら、すぐにでも鉄拳が飛んでくるのだ。

誰がお前を育ててやったと思ってるんだ。

父はいつもそう言ってナナエを殴った。

いつかこの男の下から逃げ出してやろうと、父が出掛けるときは剣の稽古に励んだ。

水を操る力のことは、父には黙っていた。

言っても信じなかっただろうし、異端の能力があると知られたら、何をされるか解らないからだ。

盗みを働いては違う街に移り住み、役人の手から逃げるように生活していたある日、ナナエは父に連れられてどこかの屋敷に忍び込んだ。

そのとき、忘れ物を部屋に取りに来た屋敷の子供に見つかって、駆け付けた警備兵に捕まったのだ。

ナナエも少年院に送られそうになったが、偶然その屋敷にいたマリーに助けられた。

「この子は私の娘です!」

そう言われて、庇われたナナエ自身も驚いたのを覚えている。

「精霊様に仕えるようになってから、初めて嘘をついちゃったわ」

そう言って笑ったマリーに連れられて、ナナエは月の家の家族になったのだ。

今、このことを話せば捕まってしまうのではないか。

先生にも迷惑がかかるのではないか。

そう考えると、ナナエは正直に答えられなかった。

辛うじて、「オレ、捨て子だったんです」とだけ言った。

隣で、ロディウスがやや驚いたように顔をこちらに向けたのが解った。

サイマスは黙って頷きながらナナエの答えを聴き、その後も何かを呟きながら何度も頷いた。

そして何かを確認するようにナナエをじっと見つめ、やがて確信を得たのか、ナナエを見つめたまま口を開いた。

「ナナエくん、きみのその力についてだが、この水の国の王も、同じ力を使えるのを知っているかな？」

突然そう言われて、ナナエは思い返してみる。

しかし、今までそんな話は聞いたことがなかった。

そういえばマリーに、王家は水の精霊の加護を受けていると教えてもらったことはあるが、そのことを言っているのだろうか？

「いや、知りません。王家には水精霊の加護があるとしたか……」

「そうか……」

サイマスはそこで一度言葉を切り、少々冷めてしまったお茶を口に運んだ。

緊張しているのか、乾いた口をぬるい茶で潤す。

この力に何か良くないこともあるのかと、ナナエは固唾を呑んでサイマスの話に耳を傾けた。

「よく聴きなさい。」

この世界が、精霊によって創られたことは知っているね？」

「それくらいは……」

「この世界は、精霊により創造された。人間も然り。」

そして、精霊の力を受け継いだ者が存在する。精霊に愛されし者、と呼ばれる人のことだ」

ナナエは黙ってサイマスの話を聴いていた。隣ではロディウスも、じっと耳を傾けている。

「それぞれの国に守護精霊がいて、その力を授かったのが、精霊に愛されし者。

精霊の力を自在に操り、大地、炎、風、そして水の流れさえも意のままにすると言う」

ナナエは自分の手のひらに視線を落とした。

今まで知らずに自分が使ってきた力は、水精霊の力だったのかと、長年の疑問が解けた気がした。

しかし、その話をするために、わざわざ呼び出した訳ではないだろう。

サイマスは再び口を開いた。

「この水の国にも、精霊に愛されし者が生まれる。だが水精霊の力を授かるのは、この国の王族だけなのだよ」

サイマスが告げた事実には、ナナエは息を呑んだ。

サイマスはつまり、ナナエが王族の血を引いているのではないかと、言っているのだ。

否、サイマスは既に確信しているようだった。

その目はじっとナナエを見つめている。

話の内容に頭がついていかなかったのか、ナナエは驚きのあま

り目を見開いたまま動けなくなってしまった。

サイマスは口を閉ざし、ナナエの言葉を待っているようだ。

「え……何言ってるんですか……？　だってオレ、そんなんじゃない……」

混乱した頭でなんとか絞り出した言葉は、およそ現実を受け入れようとするものではなかった。

だが、サイマスは首を振る。

「きみは捨て子だったのだろう？　本当の両親は判っていない。」

「だ、だったら、オレの両親が王族じゃないって可能性だって……」

力なく反論するナナエだが、サイマスの目を見ると言葉の先が紡げなくなってしまう。

名君と名高い領主は、ナナエが王族であると信じて疑っていない。

サイマスは執事に言って、国の近代史をまとめた本を持ってこさせた。

国の政や大きな事件などを書物にするように定められたのは、数百年も昔のことだったという。

それらを後世に遺すことで、この世界そのものの発展を願ったのだろう。

以来、各国で必ず年に一度は本を発行している。

サイマスが開いた本には、十五年前のとある事件が書かれていた。

水の国の后が娘を連れて別荘に行った折に、何者かに王女が誘拐されたというものだった。

当時一歳だった王女の行方は未だ知れず、犯人も捕まっていない。犯人からの要求もなく、何の目的があって犯行に及んだのかも解らない。

すべてが謎のまま、迷宮入りしてしまった事件だった。

「少なくとも、数年は搜索を続けていたが、結局は見つからずに打ち切りになったそうだ」

サイマスの説明を聞きながら、ナナエは本に釘付けになっていた。

王女が生きていれば、十六になるはずだ。

偶然にもナナエと同じ年である。

だが、それだけで納得しろと言われても、無理な相談だ。

ナナエは何度もその記事を読み返し、ややあって顔を上げた。

「なんで、この話を……？」

「私は、きみに王都に行ってもらいたい。

血縁関係を確かめるだけでもいい。国王様に、会ってもらえないか」

ナナエはしばらく黙っていたが、疲れたような溜め息を吐いて言った。

「一度、家に帰っていいですか？ 少し一人で考えたいんで……」

サイマスはナナエを家まで送らせようとしたが、ナナエはそれを断った。

そして部屋から出るときに、今まで口を挟まずに隣に座っていたロディウスに目を向け、「じゃあな」と小さく呟く。

ロディウスが返事をする代わりに片手を挙げるのを見届けてから、部屋の扉を閉じた。

応接室の中に残されたロディウスとサイマスは、部屋の周囲の人払いをしてから、昨夜の事件とポトの街のことについて話を始めた。ロディウスが荷物の中から、国王宛ての書状を取り出す。

領主を通して、国王に届ける手筈になっていたのだが、ユーティスの領主は先日から所用で留守にしていた。

そのため、隣街の領主であるサイマスに届けることにしたのだ。サイマスは書状を受け取り、しばし考えてからロディウスにあることを依頼をした。

ナナエは一人で歩いていた。

領主の屋敷から家までは遠い。

歩く間にも、先程の話について考えていた。

自分が王族だって？ 馬鹿げたことを。

いや、王族かもしれない、だ。まだ決まった訳じゃない。

そもそも、根拠は水を操る力があるということだけではないか。

それだけで、誘拐されたお姫様だと決め付けられても困る。

第一、この精霊の力だって、必ず王族だけが受け継ぐということも疑わしい。

たまたま今まで精霊に愛されし者が王族の出だっただけで、今回は一般人のナナエが選ばれたのかもしれない。

だが、もし本当にお姫様だったとしたら、これからはお城で暮らさなければいけないのだろうか？

いや、でも王族の血縁者だったとしても、姫ではなくて、誰か他の人の隠し子とかかもしれない。

王様の従兄弟の子、とか。

そうだとしても、もし王族であると立証されてしまえば、今の暮らしはできなくなるかもしれない。

……さてよ、したらもう盗みもしなくていいかも？

いやいや、しかし自分にそんな大層な血が流れているなんて思えないし、何より王様とは似ても似つかない……まあ、見たことないから判らないけど。

そんなことを考えながら歩いているうちに、すっかり日は高くなっていた。

真上から降り注ぐ日差しに汗が浮かぶ。

もう夏が終わって秋になるとはいえ、天気の良い日は結構暑い。

ナナエは露店でフルーツジュースを買って飲んだ。

予想以上に甘くて、余計に喉が渴きそうだ。

家まではもう少し距離がある。

ナナエは再び考え込みながら歩いていった。

ぼんやり考えながら歩くと、足が遅くなる。

ナナエが家に着いた頃には、太陽は西に傾き始め、昼食には遅いが夕食には早すぎる、中途半端な時間になっていた。

ありあわせのもので簡単な食事を作り、一人でもそそと食べる。

もし王都に行って、月の家の皆に二度と会えなくなったらどうしよう。

エナと会えなくなったらどうしよう。

ロディウスは……べつにいいか。

あ、そう言えばロディウスの目的は領主に会うことだったわけ。
じゃあ、目的達成したからもう帰るのかな。

てゆうか、道案内のお礼とかってないわけ？

まあ、あんまり金持ってなさそうだから期待はしてないけど……

「失敗したなあ……ちゃんとロディウスからふんだくって帰ってくれば良かった」

「誰からふんだくるって？」

ふぐっ！

突然窓から声がして、ナナエはパンを喉に詰まらせそうになった。

「ぐっ、げほっ！

……え、ロディウス？　なんでここに？」

ナナエが驚くのも無理はない。

朝、領主の屋敷で別れたはずのロディウスが、窓の外に立っているのだ。

ナナエは慌ててドアを開けて外に出た。

「おまつ、何しに来たんだよ！」

「いやなに、帰るときに随分へこんでたみたいだから、ちょっと様子見に」

「見えねえだろが」

「言葉のあやだ」

ひとしきり言い合ってから、ナナエは思わず吹き出した。
こんな馬鹿げたやり取りをしていると、なんだか可笑しくなってくる。

「はははっ、あー、なんだかなあ……そういや、なんでオレんち知ってんだよ？」

目に浮かんだ笑い涙を手で拭い、ナナエはふと疑問に思ったことを訊いてみた。

「ん？ 人に訊いたんだよ。どうしてもナナエに会いたくて、ないきなり何を言い出すのかこの男は。」

勘違いしそうになる台詞を聴いて、ナナエは顔に血が昇ってくるのを感じた。

「えっ、なっ、ななな、何……っ」

ナナエが狼狽えている間にも、ロディウスはさりげなくナナエに近寄り、その肩に手を置いた。

「ナナエ……」

ぐっと顔が近くなり、ロディウスが唇を開く。

ナナエが顔を背けることもできずに、相手を凝視したまま固まっていると、不意にロディウスは勢い良く頭を下げた。

「頼む！ もう一回道案内してくれ！」

「……………は？」

目を点にして間拔けな声を出してから、ようやくナナエはロディウスの言っている言葉を理解した。

理解して、途端にふつふつと怒りが沸き上がってくる。

（ヲトメの心を弄びやがって……！）

本人にはそのつもりはまったくなかったのだが、あの言い方では勘違いもしようというものだ。

誤解を招くような言い方をしたロディウスを、怒りに任せて張り倒そうとしたのだが、近所の道行くおばさま方の視線が痛くてできなかった。

プロポーズかしらそれとも痴話喧嘩かしらと、勝手な想像でひそひそ盛り上がらないでほしい。

ナナエは居たたまれなくなって、ロディウスの手を引いて家の中に逃げ込んだ。

「いきなりどうしたんだ？」

「うっさい！ そりゃこっちの台詞だ！ 変なこと言い出しやがってこの馬鹿うすらハゲ！」

「禿げてねえよ！」

肩で息をしながらまくしたてるナナエの言葉に、ロディウスは思わず自分の頭に手をやった。

大丈夫、禿げてない……いや、そんな夫婦漫才をしに来た訳ではなくて。

「いや、実は領主に運び屋の仕事を頼まれてさ。水王に届ける荷物を預かったのはいいけど、城の場所がいまいち分からないんだ」

ナナエはようやく冷めてきた頬を撫でながらロディウスを半眼で睨む。

「お前、ろくに道もしらないのに、よく運び屋なんかやってるよな」

それを言われてしまうと何も言い返せない。

ロディウスは引きつった笑みを浮かべて、ナナエに両手を合わせた。

「なあ頼むよ。城の近くまででいいからさ」

「でも王都は……」

呟いて、口ごもる。

そこはまさに今、ナナエが行くべきか行かざるべきか悩んでいる

場所ではないか。

ナナエが俯いて黙り込んでしまうと、部屋の中を静寂が支配する。静けさを打ち破るように、ロディウスが一つ咳払いした。

「……あの月の家ってさ、今、経営が厳しいんだって？」

急に違う話をされて、ナナエはのろのろと顔を上げた。

「……何？　なんで知ってんだよ」

「昨日マリーから聴いた。それで、ナナエが仕送りしてるんだってな」

ナナエは何が言いたいのかわ解らずに、黙ってロディウスの言葉の続きを待った。

ロディウスは見えないはずの目をナナエに向けて、はっきりと言った。

「ポトの街で会ったとき。あのとき、金を盗みに来てたんだろう」

訊ねるでもなく、推察するでもなく、確信を持ってそう言われて、ナナエは立ち尽くしたまま動けなくなってしまった。

「……な、んで……」

知ってるんだ。そう言おうとして、言葉が出てこなかった。

通報されるのだろうか。

それも怖かったが、何より、マリーに知られるのが恐かった。

月の家の家族になったあの日に、もう盗みはしないと約束したのに。

固まってしまったナナエの前に、ロディウスは腕組みして話を続けた。

「ナナエがあの子のことを思ってやったんだってことは解る。けどな、そんなことしてて、いつか捕まったら皆が悲しむだろう？」

「それ、は……そう、だけど……」

言い返すことも、肯定することもできず、ナナエは曖昧な返事だけ呟いて俯いた。

ロディウスは決して責め立てるような口調では言わなかったが、ナナエにはそれが逆に怖かった。

あの父のように、正面から怒鳴って殴られる方が、気が楽だ。こうやって静かに叱られると、胸が締め付けられる。

すっかり落ち込んでしまった様子のナナエに、ロディウスは苦笑して呟いた。

「ま、人のことは言えないんだがな」

「え……それって……」

どういうことかと訊く前に、ロディウスがナナエの肩を軽く叩いた。

「よく考えてみる。これでもしナナエが王族だと判ったら、王家は

今までナナエを保護してくれた月の家に、礼をしなきゃいけない」

「へ？ そりゃ、そうかも……ってまさか」

ナナエはロディウスが言わんとしていることに気付き、あんどりと口を開けた。

かなり間抜けな顔だったろうが、幸いそれを目にした者は誰もいない。

「ロディウス……お前って案外ずる賢いのな」

呆れたような声のナナエに、ロディウスは唇の端を吊り上げて笑ってみせた。

「何言ってるんだ。泥棒やって捕まるよりずっといいだろ」

「……そりゃそうだな。」

でも、城で暮らせとか言われたらどうすんだよ。オレ嫌だぜ、今更お姫様らしくなんて」

ナナエは城での生活を想像して顔をしかめた。

サイマスの前ではああ言ったが、本当は王都になど行きたくない。

「そんなときは……」

そんなナナエの頭を少し乱暴に撫でながら、ロディウスは言う。

「何処へだって連れ出してやるよ。なんたって、運び屋だからな」

「道案内が必要だけどな」

からかうように言ったナナエの一言で、ロディウスはがっくりと項垂れた。

それは言うなよ……と小さく呟く。

今朝からまとわり付いていた心の中の霧が、すっと晴れていくのをナナエは感じた。

王に会おう。

それは自分のためでも、水王のためでもない。
月の家の皆のためだ。

「いいねその案、乗ってやる。行こうぜ王都へ！」

ナナエはロディウスに向かって、力強く頷いた。

獣の兄弟——あの山越えていざ王都——

ヴェヌスと王都の間には、水の国を南北に分かつポト山がそびえ立っていて、昔はその山を迂回する旧街道しか道がなかった。

しかし今は山の中腹を切り拓いて造られたポトの街を通る新街道があるため、王都に行くまでの時間が大幅に短縮された。

そのため王都へ行くには、新街道を行くのが一番早いのだが、それでも馬車で三〇四日はかかる。

ポトの街では新街道のポト山入り口と、他数カ所に関所を設けて、そこに馬車を停泊させ客を乗せる乗合馬車を運営していて、そこから馬車に乗るのが一般的だ。

ポトの街までは山に登らなければならないため、一頭引きの馬車では馬に負担がかかる。

そこで、街までは二頭引きの馬車を使うことになっている。

が、一頭引きの馬車と違って、二頭引きの馬車は乗車賃が高い。

そのため、歩いて山を越える者も少なくはない。

人の足で山を登るのは大変だが、整備された道を歩いていくため、半日もあればポトの街に着く。

高地にあるポトの街は涼しく、住みやすい気候であり、年々引越してくる住民の数は増えてきている。

そのため、今でも少しずつ山を拓いて領地を広げているのだ。

山を削って街を造るには、どうしてもそこに住まう動物やモンスターたちを追い出す必要があるのだが、今までポトがモンスターに襲われたという話は聞かない。

実はポトの街では、モンスターを寄せ付けないように、肉食獣が嫌う音を発する機械を、街の随所に設置してあるのだ。

文明の都、火の国から仕入れたもので、効果は折り紙付きだ。それが馬車にも仕掛けてあるため、安全に山を越すことができるのだ。

乗合馬車の料金が割高なのは、その機械を使っていることもあるだろう。

ナナエとロディウスも、この新街道を使うことにした。

ヴェヌスの領主サイマスによって、ポトの領主殺害事件の正式な調査が始まることになったのだ。

つまり、サイマスが裏で手を回し、ナナエが犯人であるという誤解を解くよう手配してくれたのだ。

ロディウスが持ってきた情報を基に、例のモンスター調査隊を編成しているのだと、ロディウスから聞いた。

これで安心して、ポトを突っ切る新街道を使うことができるというものだ。

しかし彼らは今、ポトの山を地道に歩いている。

路銀の節約のためである。

ロディウスがヴェヌスまでの道案内の礼にとナナエに渡した金は、ほとんど旅の準備資金となった。

王都までの道案内は、宿、食事代はロディウスの全額負担で、王都に着いたら礼金を渡すという条件で引き受けた。

馬車に乗りたと言ったナナエの意見は、「ナナエに渡す礼金がなくなる」というロディウスの一言で却下された。

そして二人は晴れ渡った空の下、山登りをする羽目になったのだ。

ポト山に入ってすぐは、ピクニック感覚で歩いていたのだが、山を登って行くにつれて、次第に口数は少なくなり、ついには一言も喋らずに黙々と歩き始めた。

山道は、思った以上にきつい。

少しでも傾斜をゆるくするために、街道はぐねぐねとカーブしており、まっすぐ突っ切った方が早いのではないかと思われた。

が、一度それを実践して諦めた。

整備されていない山道は、もったきつかった。

息一つ乱さず登っていくロディウスの後ろ姿に、肩で息をするナエが落ちていた枝を投げつけて少しだけ口論になり、やはり素直に街道を歩こうという意見に落ち着いたのだ。

初秋の日差しは意外と強い。

炎天下で歩き続けると、日射病や熱中症になってしまう。

休憩を挟みながら歩くこと三時間、やや西に傾いた日が蔭り、涼しい風が吹き始めた。

後ろから追い抜いていく馬車を見ながら、ナナエは額の汗を拭う。

「少し、涼しくなってきたな」

呟いて振り返れば、遠くにヴェヌスの街並みと海が見える。

海の方の空はまだ晴れていたが、ナナエの頭上では高速で雲が流れていく。

山の上の方から、滑り落ちるように涼しい風が吹いてきて、ロディウスはそこから雨の匂いを嗅ぎとった。

「まずいな。雨が来るぞ」

「マジで？」

ロディウスの言葉に山の頂を見上げると、確かに灰色の雲が広がっている。

ナナエは疲れた溜め息を吐いて、「だから馬車で行こうって言ったのにー」と呟いた。

「今更文句言うなよ。雨宿りできるところを探すぞ」

そう言って歩きだしたロディウスの後ろを、ナナエは仕方なくついていった。

歩き始めてすぐに薄く霧がかかり、やがてそれはまとわりつくような霧雨になった。

もっと上の方では、本格的な雨が降っているだろう。

この街道には、ポトに着くまで店も民家もなく、雨宿りするには山中の木陰に入るしかなさそうだ。

運良く街道を外れてすぐのところに大きな木を発見し、二人でその木の下に駆け込んだ直後に、大粒の雨が降りだした。

枝葉を広げた木は、雨を凌ぐのに充分な大きさをしている。

湿っぽくなった服を乾かすことはできないが、幸いこれは通り雨のようだからすぐに止むだろう。

「そういえば、この山って、昔でっかい火事があったんだってさ」

雨音を聞きながら、ふと思いついたようにナナエが言った。

ロディウスはナナエから顔を背けて頷いた。

「ああ、知ってる」

「へ？　なんでロディウスが知ってんだよ。これ、十年以上前の話だぜ？」

ロディウスが街で暮らし始めたのって、最近なんだろう？　とナナエが首を傾げる。

ロディウスは遠くを見るように、わずかに顔を上げて言った。

「四年前まで、この山に住んでたんだ」

予想通りすぐに雨は止み、雲の切れ間から太陽の光が差ししている。もしかしたら虹でも出ているのかもしれないが、立ち止まって空を見上げるような気分ではなかった。

ナナエは斜め後ろからロディウスの顔を見上げて黙々と歩いている。

この水の国に、獣人が住んでいたとは思ってもいなかった。

ロディウスは外国から来たものと思い込んでいた。

だが四年前までここに住んでいたということは、当然十数年前の山火事も知っているだろう。

ヴェヌスで、ロディウスは十年以上前に事故で視力を失ったと言っていた。

ひょっとしたら、その山火事が原因かもしれない。

いや、恐らくその通りだ。

山火事の話をしてから、いつもより口数が減っている。

いくら昔のことだろうと、思い出したいものではないだろう。

ロディウスの正確な年齢は知らないが、見たところ二十代前半と
いったところか。

だとすれば、山火事が起きたのは彼が十歳前後の頃になる。

そんな子供が突然の火事で視力を失うなど、どれ程の恐怖と絶望
を味わっただろう。

知らなかったこととはいえ、会話の題材としては最悪のものを選
んでしまったようだ。

ナナエは、そんな自分自身に苛立ちを覚えた。

「なーんでナナエが落ち込んでんだよ」

振り向きもしないでロディウスが言った。

なんだか、ついこの前も同じようなことを言われた気がする。

「だって、オレのせいで思い出したくないこと思い出させちゃった
みたいだし……」

申し訳なさそうに言うナナエの声を聞いて、ロディウスはナナエ
に顔を向けて微笑んだ。

「意外と優しいんだな」

「意外ってなんだよ！」

これでも一応、褒めたつもりなのだが。

だが褒め言葉になっていないことは確かで、ナナエはむっとして
彼の背を軽く叩いた。

「なんで怒るんだよ。褒めたのに」

「褒めてねーじゃん」

ナナエは小走りになってロディウスを追い抜いた。
彼のより大分前に立って振り向く。

「早くしねーと、夜になっちまうぞ」

それだけ言うと、ナナエは再び前を向いて走りだした。

ポトの街から客を乗せた馬車が下ってくるのを見て、「馬車乗
りてー！」と叫んでいる。

少しずつ遠ざかっていくナナエの足音を追い掛けて、ロディウス
も歩みを速めた。

二人がポトの街に着いたのは、雨で足止めをくったこともあり、
西の空が赤く染まる頃だった。

「あー、耳痛え……」

「大丈夫かよ？」

ロディウスは耳を塞いで、宿屋のベッドに突っ伏したまま呻いた。

ポトの街に入ってからというもの、ずっとこの調子だ。

例の、モンスターが嫌う音を発生させる装置のせいである。

人間の耳だと、キーンという甲高い音がわずかに聞こえる程度な

のだが、獣人であるロディウスの耳には、相当大的な雑音として聞こえているらしい。

そんなに嫌な音という訳ではないのだが、ずっと大音量の音を聞き続けていれば、体調も悪くなるうというものだ。

「まだ平気だけど……この街には長居したくねえな……」

か細い声でロディウスが言う。

こんなに頼りないロディウスは初めて見る。

……まあ、まだ出会ってから一週間も経っていないのだが。

ナナエは、珍しいものが見れたと内心喜んでいたが、あんまりロディウスが辛そうなので、ちょっとだけ可哀想に思った。一寸だけ。

「オレ隣の部屋にいるから、なんかあったら呼べよ……って、それ以前にそんなんで今日眠れるのか？」

騒音の中でぐっすり眠れというのも無理な相談だが、だからと言って今から次の街を目指しても、街に着く前に日が暮れる。

山の中で野宿するのは危険だし、何より先程の雨で濡れてしまつて、野宿できる場所などないだろう。

「あー、頑張れば。なんとか」

「寝るのに頑張るってどうよ」

少しでも音を遮ろうとしているのか、カーテンを閉めて頭から毛布を被り、両手でしっかり耳を塞ぎながらロディウスは言う。

ベッドの隣の椅子に座ったままロディウスを見下ろして、ナナエは困ったように溜め息を吐いた。

「ちょっと待ってろ、耳栓借りてくるから」

他所の街から来た客にも、装置の音が気になって眠れなくなる者がいる。

そんな客のために、宿屋では無料で耳栓を配布しているのだ。

カウンターに行けば、すぐに用意してくれるだろう。

ナナエは立ち上がり部屋を出ていった。

一階の酒場兼食堂に行くと、なにやら人だかりができ、ざわざわと騒がしかった。

しかしそれは酔っ払い同士の陽気な喧騒ではなく、どちらかというとか何かが起きて野次馬が集まっている感じである。

どうやらその中心にいるのは、この宿屋の若女将のようだ。

耳栓どころではないらしい。

若女将はしきりに、娘が帰ってこないと繰り返していた。

所々聞き取った話を統合すると、若女将の娘と数人の子供がでかけたまま帰ってこないらしい。

もう日が暮れて辺りは暗くなっている。

遅い時間という訳ではないが、子供だけで出歩いて良い時間ではない。

しかも、つい先日領主の屋敷がモンスターに襲撃されたばかりで、皆いつも以上に不安なのだろう。

あの影のモンスターには、この機械の音も効かなかったのだ。

今日、街の役所から発表された情報では、犯人は新種のモンスターで、現在その生態について調査中とのことだった。

これでは街の中でも安心できないだろう。

ナナエはとりあえず、手近な野次馬を捕まえて詳しい状況を訊いてみた。

「なあ、子供が帰ってこないんだって？」

「あ？ おお、なんでも、若女将の娘と、近所の子供が山に薬草を摘みに行ったまま帰ってこないんだと。今、旦那たちが捜しに行ってるんだが……」

「まだ見つかってないんだよ。心配だねえ」

野次馬たちは他人事のように――実際他人事なのだが――言いながら、青ざめた若女将を取り巻いている。

若女将の隣に立っているのは母親だろうか。

よく似た面差しの老婦人が、慰めるように若女将の肩をさすっている。

やはり耳栓どころではない。

さてどうしようかと考え込んだとき、宿屋の入り口が開いて主人と思しき男が駆け込んできた。

また雨が降ってきたのか、宿屋の主人と一緒に搜索から戻ってき

た男たちの服は濡れている。

「だめだ、関所の役人さんも、戻ってきたところは見てないそうだし」
「そんな……」

「役所に搜索は依頼したのか？」

「無駄だよ。こないだの事件で人手が足りないから、そんなことまで手は回らないとき」

取り乱す若女将とそれを宥める人と、口々に言い合う男たちの声で、周囲は益々騒がしくなった。

「……どうしたんだ？」

騒ぎが聞こえたのか、それとも耳栓が待ちきれなかったのか、二階からロディウスが下りてきた。

「ああ、なんか子供たちが山で行方不明なんだって。なあ、なんとかできないかな？」

「ああ？」

月の家の子供たちを思い出したのか、ナナエは助けを求めるようにロディウスの服の裾を引っ張って訴える。

初めは気乗りしない様子で頭を掻いていたロディウスだが、仕方ない、と呟き野次馬を押し退けて、宿屋の主人に声を掛けた。

「いなくなった子供の人数と名前を教えてくださいませんか？」

「な、なんだいあんたは？」

「子供たちを捜してきてやるよ。山の中にはちよいと詳しいんでね」
主人は突然出てきたロディウスを不信に思ったのだろう。

しかし若女将は主人を押し退け、藁にも縋る思いで矢継ぎ早に言った。

「三人よ！ ミーシャとレミとエリックの三人！ ミーシャはうちの子なの！」

「おい、こんな素性の知れない奴に……」

「あの子を連れてきてくれるなら、誰だっていいわ！」

金切り声で叫ぶ若女将に面食らった主人は、思わず後退りする。
それだけ子供が心配なのだろうが、周囲の野次馬たちまで思わず耳を塞ぐ程の大声を出されては、堪ったものではない。

見れば近くにいたロディウスも、手を耳に当てている。

「分かった、そんだけ聞けば充分だ。じゃあ、ちよいと捜しに行ってくるわ」

「だが、お客さんを危険な目に合わせるわけにやいかないよ」

横から会話に加わったのは、若女将の父親だ。
とうに隠居してもいくらいの歳なのだが、若者顔負けの快活さで宿屋を手伝っている。

娘婿である主人よりも、ずっとしっかりしていると街では評判である。

「大丈夫さ、こちららプロの運び屋だ。必ず子供三人、無事にお届けしますよ」

ロディウスはそう言うのとナナエに声を掛け、颯爽と宿屋を出ていった。

ナナエも急いでその後を追う。

残された人々は胡散臭そうに見ていたが、二人を追いつけようとする者はいなかった。

皆、山のモンスターが恐いのだ。

一歩外に出ると、山の中特有の澄んだ空気と、街の中特有の様々な匂いが混じって不思議な匂いがする。

特に今は夕食時を過ぎた頃なので、あちこちの家から美味しそうな残り香が漂っていた。

まだ、晩御飯食べてないや。腹減ったな。

ついそんなことを考えながら、ナナエはロディウスを追いつけた。

関所までの道は、街に入ってから宿屋までの道を逆に歩くだけだが、日が沈んでしまうと雰囲気も変わり、ともすれば道を間違えそうになる。

しかしロディウスは、まるで勝手知ったる場所のようにすすいと前に進んでいくものだから、ナナエは驚かずにはいられない。

目、見えてんじゃねえのかコイツ。

今までにも何度か思ったことを、再度頭の中で繰り返す。

いや、寧ろ見えていないからこそ、見た目の雰囲気は惑わされずに済んでいるのだろうか。

だとしても、たった一度通った道を完璧に覚えてしまうなんて、恐れ入る。

ナナエには真似できない芸当だ。

幾度目かの曲がり角を右に折れたところで、関所に着いた。関所の管理人が、どこに行くのかと尋ねてくる。

「子供が山から帰ってこないんで、捜しに行くんだよ」

「灯りも持たずにか？ やめとけ、あんたらまで遭難したらどうすんだ」

言われて初めて気付いたのだが、慌てて宿から出てきたせいで、ランプはおろか、雨を凌ぐ撥水布も準備していない。

しかし獣人であるロディウスには、そもそも必要ないのだろう。適当に誤魔化して、関所を通り抜けた。

目の前には黒々と山のシルエットが佇んでいる。

夜の山は、巨大な影にしか見えない。

月が出ていなくて良かったと思う。

もしこの山の影がああなモンスターに変貌したらと思うと、考えるだけでぞっとする。

「行くぞナナエ。離れるなよ」

山を見上げていたナナエの手を、ロディウスが掴んだ。

ヴェヌスのときとは逆で、今度はロディウスがナナエの手を引く。
なんとなく照れ臭いのだが、ナナエ一人では無事に山を降りられる自信はない。

繋いだ手を離さないように寄り添ったまま、二人は山へと入っていった。

「……………」

「……………」

ざくざくと草を踏みしめる音と、ぱらぱらと雨が葉を叩く音だけが響く。

じつと雨を凌いでいるのだろう、野生動物の鳴き声すら聞こえてこなかった。

二人は無言で歩いていた。

山に入っただけに、ナナエが大声で子供たちを呼ぼうとしたのだが、ロディウスによって止められたのだ。

そんなことしなくても捜せると言っただけ。

どう喉を使えばそんな声が出せるのか解らないが、ロディウスはまるで鳥の鳴き声のような音を口から発した。

すると周囲から動物の鳴き声や唸り声が聞こえてきて、すぐに静かになった。

「近くにはいないみたいだ。もうちょっと奥まで行ってみるか」

ロディウスはそう言って、ナナエの手を引いて歩きだした。

「ちょ、何今の？ 何語？ その前に人語？」

訳が分からない様子でナナエが首を傾げる。

頭上には大きな『？』マークが二つ三つ浮かんでいそうだ。

「獣人は動物の言葉が話せるんだよ。まあ厳密には『言葉』じゃないんだが……聞きたいか？」

「……いい。難しい話になりそうだから」

早々に理解することを諦めたナナエは、ぷるぷると首を振った。とりあえず、ロディウスは動物と喋れるということだけ解っていれば問題ない。

それから二人は、しばらく歩いては山の動物に訊ねるということを繰り返した。

そして四回目の呼び掛けに、初めて違う返事が聞こえた。

少し離れたところから、狼の遠吠えのような声が聞こえたのだ。するとそれまで平静だったロディウスが、弾かれたように顔を上げて、声のした方を向いた。

暗くて見え辛かったが、その顔は何かに驚いているようだった。

「どした？ 子供、見つかったのか？」

「あ？ ああ、いや、でもまさか……」

はつきりしないロディウスの言葉に、ナナエは表情を曇らせた。子供たちに、何かあったのだろうか。そう思ったのだ。

しかしそうではないらしい。

ロディウスはナナエの手を引いて再び歩き始めた。

若干早足だと感じるのは、ナナエの気のせいではない。

今までは目的地がはつきりしないまま探るように歩いていたのだが、今は目指す場所を発見したように、しっかりした足取りで歩いている。

ナナエは転ばないように、足元に注意するだけで精一杯だった。しばし歩き続けると、わずかに視界が開けた。

木々がまばらに生えているその場所には、小さな沼があった。

何度も躓き転びそうになりながら、ロディウスについてきたナナエは彼が足を止めたので、ようやく一息つくことができた。

「はあ……ここにいるのか？」

随分街から遠ざかってしまっている。

子供の足ではここまで来るのは難しいのではないかと思えたが、山に慣れている子供たちの方が、ナナエよりはよほど上手く山を登れるらしい。

ロディウスは確実にナナエ以外の人間の匂いを嗅ぎとっていた。

本降りになった雨と風でかすかにしか嗅ぎとれないが、子供たちは確かにここにいる。

ロディウスは再度、鳥の鳴き声のような声で呼び掛けた。

返事は、予想以上に近くから聞こえた。

『……にい、来た！　ここ！』

しかし聞こえたのは先程の狼の声ではなく、ヒトの声だった。

それも壁一枚隔てた先から喋っているように、やたらくぐもって聞こえる。

「な、何だ？　子供の声……じゃないよな？」

声の出所を探して、ナナエは周囲を見回した。

たった今返事をした声は、幼い子供の声ではなく、若い男のものだった。

大きな耳をピンと立て、声のする方向を探っていたロディウスは、更に声の場所を断定するべく、声の主に問い掛けた。

「人間の子供は無事か？」

『……うん、平気』

その声は沼の方から聞こえた。

沼に近寄って行くと、途中に段差があり、軟らかい土が崩れたようになっている。

どうやら、声の主はこの下にいるようだ。

すぐに掘り出そうとしたのだが、軟らかい土は脆く、掘ったそばから崩れていく。

「どうすんだよ。こんな軟らかくちゃ、オレたちだけじゃ穴掘るの

は無理だぜ？」

雨でぬかるむ地面に辟易しながら、ナナエは濡れた額を手で拭う。雨が降り続ける中では、いつまた土砂崩れが起きるか分からない。このまま放っておくことはできないが、かといって力任せに掘り進めることも危険だ。

更にこういうときに限って、畳み掛けるように事態を悪化させる要因が重なる。

人の気配を嗅ぎつけたのか、モンスターが寄ってきたのだ。まずその気配に気付いたのはロディウスで、彼はすぐさまナナエに警告を発した。

「ナナエ、モンスターだ。近付いてきてる」

「マジかよ！　　ったく、こんなときに！」

ナナエは苛立ちを隠そうともせず、雨に濡れて顔に張りつく髪を払いながら舌打ちする。

元から目が見えないロディウスには、夜間の戦闘も苦ではないが、視覚に頼るナナエには、モンスターの影を捉えることは難しい。しかし、このときばかりはナナエに分があった。

「オレがやるよ。伊達にモンスター狩り専門のハンターを名乗ってるわけじゃないぜ！」

「ほお、それじゃ、ここはナナエに任せようかな」

面白そうに言うロディウスから一歩前に出て、ナナエは目を閉じた。

水の流れを感じるのだ。

ナナエの血が、魂が、力の扱い方を教えてくれる。

降り来る雨が、空中でぴたりと静止した。

真珠のような雨粒は、ナナエたちの周囲を囲むように漂い始める。

ようやくナナエの耳にも、近寄ってくるモンスターの吐息が聞こえた。

現れたのは、頭だけを大きくした、狼のような姿をしたモンスターだ。

害獣駆除協会の指定危険獣ランクはC。

強くもなく弱くもなく、といったところだが、一般人には充分脅威である。

その数三頭。

空中に漂う雨粒に、モンスターの鼻先が触れた瞬間、ナナエは大きく右手を振り上げた。

不規則に漂う雨粒の動きがぴたりと停まる。

モンスターが飛び掛かるのと、ナナエが手を振り下ろしたのは同時だった。

ナナエの意思に従い、雨粒が銃弾のようにモンスターに襲い掛かる。

たかが水と侮るなかれ。

高速高压で飛来する水滴は、時に分厚い岩盤にさえ穴を開けるのだ。

まさしく弾丸と化した水滴は、次々とモンスターの身体に撃ち込まれる。

弾切れなどということは、決してない。

何しろ原料は雨粒なのだ。

雨が降り止むかナナエが止めるまで、弾丸シャワーは続く。

果たしてモンスターは、その発達した牙の威力を振るうことなく、断末魔の余韻を残して崩れ落ちた。

その間わずか数十秒。

戦闘は、まさしくあつという間に幕を下ろした。

ヒュウ、とロディウスが口笛を吹く。

「流石。こりゃもう、ナナエをからかったりできないな」

怖い怖いとおどけたように言うロディウスに、ナナエは得意げに笑った。

「あつたりまえ。ナナエ様はロディウスが思ってるよりずっと強いんだぜ！」

ナナエの支配が解けた雨は、何事もなかったかのように降り続ける。

モンスターの血を洗い流すには、雨の量が足りない。

濡れた土と緑の匂いで紛れているが、やはり血の匂いが鼻につく。その匂いにつられて他のモンスターが現れる前に、生き埋めになっている子供たちを助けられないといけない。

「さて、ナナエにばかり働かせる訳にはいかないな。ちよつと退がってろ」

ロディウスはナナエに離れるように合図を送ると、例の鳥のよう

な声で叫んだ。

するとその声に応えるかのように、山の木々がざわりと揺らめく。

草を掻き分けて現れたのは、小さな穴鼠だった。

ポト山周辺に住む鼠で、地面に穴を掘って巣を作る習性を持つ。

それが一匹や二匹ではない。

山中の穴鼠が集まったのではないかという程、大量の鼠が押し寄せてきたのだ。

地面が見えない程の数の鼠を見て、ナナエがうっと息を呑む。

その大量の鼠はナナエには目もくれず、崩れた土の上に群がって一斉に穴を掘り始めた。

しかも穴鼠たちは、土を掻き出す役、掘った土を捨てる役など、知能を与えられたように役割分担をして効率良く地面を掘り返している。

ロディウスが鼠たちに指示を与えているからだ。

獣人は動物と会話するだけでなく、ある程度自在に操ることができるのだ。

人の手では何時間もかかったかもしれない作業を、鼠たちは一時間足らずで見事に終わらせた。

元々洞穴があったと思しきその場所に、ぽっかりと大穴が開いたのだ。

鼠たちは作業を終えると、我先に自分の巣穴へと帰っていった。鼠が開けた穴から中を覗き込むが、中は暗くて何も見えない。

しかし穴に向かって声を掛けると、すぐに奥から返事が聞こえた。

「おーい、大丈夫かー？」

「平気。今、行く」

くらい洞穴の奥で、二つの金色が見えた。

それが目だと気付いたときには、声の主は洞穴の出口まで歩いてきていた。

「外、出た！」

「助かったの？」

「うわーん！」

声の主と一緒に出てきた三人の子供は、ずっと張り詰めていた緊張の糸が切れてしまったのだろう。

ナナエとロディウスの姿を見つけると、大声で泣きだした。

そして、もう一人。

「わあああん、にーっ！」

見知らぬ男が、大泣きしながらロディウスに飛び付いた。

その姿に呆気にとられたのは、ナナエだけではなかったらしい。

泣きじゃくっていた子供たちまで、その光景を目を丸くして見つめていた。

抱きつかれた当のロディウスは、苦笑いしながらその青年の背中を叩く。

「こら、離せ」

「怖かったあああ！」

ロディウスに抱きついて離れないその男を見て、子供たちは可笑しそうに笑った。

「やーい、泣き虫！」

「ヴォルフはお兄ちゃんなのに、泣き虫！」

「泣き虫ヴォルフだね！」

子供たち全員から泣き虫との評価をもらったヴォルフは、まさしく泣き虫らしく、なかなか泣き止まない。

ナナエは思ったよりも子供たちが元気そうで安心したが、ひとまず怪我がないかを調べた。

「えっと、ミーシャとレナとエリック、だっけ？」

皆、怪我してないか？ 痛いところは？」

「だいじょぶだよ」

「あのね、ヴォルフが助けてくれたんだよ」

「でも泣き虫なの」

ねー？ と三人は顔を見合せて笑った。

どうやらあのヴォルフという泣き虫な青年が、子供たちを守ってくれていたようだ。

そのヴォルフはようやく泣き止んだらしく、ぐずぐずと鼻をすすっている。

ロディウスは呆れたように笑いながら、自分より高い位置にあるヴォルフの頭を撫でていた。

どうもお互いに初対面ではないようだ。

昔馴染みの友人なのかとも思ったが、それもなんとなく違うよう

に感じられた。

「ロディウス、そいつ何？ 知り合い？」

ナナエが訊ねると、ロディウスはヴォルフから手を離し、言い辛そうに頭を掻いて一言こう言った。

「弟だ」

獣の兄弟——種族の違い——

あの後、ナナエは子供たちを連れてポトの街に戻った。

ロディウスたちの姿はない。

彼は、弟と一緒に山に残ると言った。

ヴォルフとロディウスが子供たちを背負い、ナナエと共に山を下りたのだが、街に入る手前でヴォルフが嫌がったのだ。

この街は耳が痛いから嫌い、なのだそうだ。

泣いて駄々をこねる幼子よろしく訴えられては、一緒に街に来いとは言えなかった。

しかも、一人で帰るのも寂しいから嫌だと泣き出す始末。

仕方なく、ロディウスがヴォルフと一緒に山に残ることで、その場を収めたのだが……

（なんであんなにガキっぽいんだか）

聞けば、十八歳だと言う。

ナナエが驚いたのは、自分よりも年上だったということではなく、その年齢に不釣り合いなあまりにも幼い言動である。

ロディウスとは四つ歳が離れているそうだが、精神年齢に差がありすぎると思う。

そんなことを考えながら歩いているうちに、いつの間にか宿屋の前まで戻ってきていた。

宿屋の主人が角灯を持って、宿の軒下に立っている。ずっと待っていたのだろう。

ナナエに連れられた三人の子供たちの姿を見つけると、主人は大声で中にいる若女将を呼んだ。

「ミーシャ！」

「お父さん！ お母さん！」

若女将は泥で汚れた我が子を両手でしっかりと抱き締めた。

他の子の両親も宿屋に集まっていたらしく、次々に歓声が上がる。

「あのね、ヴォルフが助けてくれたんだよ」

「お姉ちゃんとお兄ちゃんが来てくれたの」

子供たちは興奮したように事の顛末を話すのだが、その言葉だけで何があつたのかを理解することは難しいだろう。

大人たちは、ナナエに深々と頭を下げた。

「本当に、ありがとうございます。何とお礼を言ったらいいのか……」

「あー、いいよそんなの」

ナナエは照れたように頬を掻いた。

真正面から感謝されるのは、どうも苦手だ。

「あら、もう一人は……？」

ロディウスの姿が見えないことに気付いた人が、きよろきよると辺りを見回した。

ロディウスの身に何かあったのかと、心配そうにナナエに訊ねる。

「何か、あったんですか？」

「いやっ、その……」

まさか正直に言う訳にはいかない。

獣人がすぐ裏の山に住んでいると分かったら、街の人々がどんな行動に出るか解らない。

ナナエは考えた末に、山に住んでいた知人の家に行ったと伝えた。

とにかく、彼らが獣人であると街の人に知らなければいいのだ。

「あの山に、人が？」

しかし大人たちは訝しげに眉をひそめた。

早速ばれそうになっている。

「そ、そう！ な？ 山に住んでる人に助けてもらったんだよね？」

ナナエは、誤魔化すように子供たちに話をふった。

「うん！」

子供たちは素直に頷く。

一応、嘘ではないのだから、返答に迷いはない。

三人が同じように頷いたので、周りの大人たちも納得するしかなかった。

その後、ぜひお礼をと迫ってくる人々から逃げるように、ナナエは部屋に閉じこもった。

「きよ、今日は疲れたから休みます！」

そう言って部屋のドアを閉めたところで、ようやく一息ついた。
とにかく風呂に入って汚れと疲れを落とし、明日からのことは明日考えよう。

そう結論付けて、ナナエは疲れた溜め息を吐き出した。

翌朝になっても、ロディウスは戻ってこなかった。
まだ朝霧が立ちこめる中、ナナエはこっそり山の入り口へと向かった。

早朝で誰もいない関所を抜ける。

山道の手前に、二人の人影が見えた。

まるでナナエが来ることが解っていたかのように、ロディウスとヴォルフが立っている。

いつからここにいたのか、彼らの服も髪も、朝霧を含んで湿っぽくなっていた。

「よう、早いなナナエ」

ナナエが声を掛ける前に、彼女の足音に気付いたのだろう。

ロディウスが手を振りながらナナエに顔を向けた。

「よう、じゃねーよ。街の人誤魔化すの、大変だったんだぞ」

ナナエが怒ったように眉を吊り上げると、それを見たヴォルフは慌ててロディウスの背後に隠れた。

「ナナエ、怒りんぼ。怖いな？」

「怖くねえ!」

思わず声を荒げると、ヴォルフは大きさに驚いてロディウスにしがみ付く。

いちいち構っていたら無駄に時間が過ぎていくだけだ。
とりあえずヴォルフには構わずに話を進めることにした。

「んで? これからどーすんだよ」

「王都に行くのは変わらないが……ヴォルフがどうしても一緒に行くと言ってな」

ロディウスは両手を腰に当てて困ったように溜め息を吐き、ナナエはあからさまに嫌そうな顔をした。

「まーじーでー? こんなのがついてきたら足手まといじゃん」

兄であるロディウスを前にしながら、随分と無遠慮な物言いである。

ひょっとしたら、二人が兄弟だということを忘れていたのかもしれない。

しかしそれも事実だけに否定できず、ロディウスは苦笑いを浮かべた。

ヴォルフはロディウスの背後に隠れたままで、犬のように耳を立てて話を聴いている。

自分が悪し様に言われていることに気付いているのかいないのか、兄の背中にひっしとしがみ付き、離そうとしない。

こうして見ると、ヴォルフの方がロディウスよりも頭半分程背が高い。

泣き虫のくせに身長だけはでかいでやんの、とナナエはそこだけは感心した。

「とにかく、宿から荷物取ってくるからさ。ついでに飯も買ってこようか？」

「すまん、頼むわ」

「ヴォルフ、肉が、いい！」

飯という単語に反応したのか、それまでじっとしていたヴォルフが手を挙げて主張した。

「あー、分かった分かった。そこで待ってろ」

ナナエは、いかにも面倒といった表情を隠さずに返事をして、朝日が差し込む街へと戻っていった。

少ない荷物をまとめて宿を出るときにも、ナナエは若女将たちに捕まった。

ぜひお礼を！ いやいいから！ と、しばらく押し問答を繰り広げたのだが、最終的には料理をいくつか包んでもらって、それを受け取ることによってナナエはようやく解放された。

朝食を買う手間が省けたのはいいが、押し問答をしている間に大

分時間を浪費してしまったようだ。

近くの店で適当に買い物した方が、よほど早かったのではないかと思われた。

急いで街の外に出ると、同じ場所で二人が待っていた。

ヴォルフの方は待ちきれなかったようで、どこからか採ってきた木の実を食べている。

「随分と遅かったな」

「宿屋のおばちゃんに捕まっちゃってさ。どうしてもって言うから、朝飯作ってもらってきたんだよ」

荷物を渡しながらナナエが弁当の包みを開くと、ヴォルフが興味深そうに覗き込む。

箱の中にはナイフとフォークがなくても食べられるように、ホットドッグや骨付きチキンが入っていた。

昨夜の雨で地面は濡れているため、どこか座れる場所を探してから食べるしかない。

王都側へ抜ける関所に広場があるので、そこに移動することになった。

新街道の関所だけあって、モンスター避けの機械音がうるさいだろうが、そこは我慢してもらう。

ヴォルフは山道を行こうとしたのだが、山側はぬかるんでいて歩き辛いので、一度街の中に入って新街道を通ることにした。

ヴォルフは最初は嫌がったが、食べ物に釣られたようで、渋々ながらついてきた。

初めて入る人間の街を、目をいっぱいに見開いて見渡すヴォルフ

は、目に映るものすべてが珍しいのだろう。

あれはなんだこれはなんだと、一人で勝手に出歩きそうになる度に、ロディウスに首根っこを引っ掴まれて連れ戻される。

道行く街の人々は、そんなヴォルフを見て何事かと足を止めた。

だが物珍しそうにあちこちを見回す様子を目にすると、田舎から出てきた若者が街の風景にはしゃいでいるとでも思ったのか、すぐに興味を失って自分の仕事に戻るのだった。

やっと関所前広場に着いて、濡れていない屋根付きベンチに陣取って弁当を広げた。

それまで街の風景に興味津々だったヴォルフは、興味の対象が食べ物に移ったようで、ホットドッグを受け取ると美味しそうに食べ始めた。

「うまい！ にい、これ、んま！」

「良かったな。でもなヴォルフ、食うときは静かに食え」

食べるときでも騒がしいヴォルフは、ここでも通り過ぎる人にくすぐすと笑われている。

しかし本人はそんなこと気にしていない——寧ろ自分が笑われていることなど気付いていないのだろう。

片手にチキンを持って、今度はライスボールを頬張っている。

ナナエとロディウスは、ヴォルフの両脇をがちりガードするように座っている。

ヴォルフが急に飛び出しても対応できるように、との布陣だった。

「ひっかす、おあへらいへれーあ？」

「ナナエは飲み込んでから喋れ」

ヴォルフに全部食われる前に、と無理矢理口に詰め込んだナナエがもごもご喋る。

ロディウスからは冷静なツツコミが入った。

ロディウスは余程燃費が良いのか、ホットドッグを一つ食べたところで、既に食後のお茶に口をつけている。

この水筒も、宿屋の若女将からもらったものだ。

ナナエは口の中のを飲み込んでから、もう一度同じことを言った。

「……しかし、お前ら似てねーよなあ。ほんとに兄弟なのか？」

「そんなに似てないか？」

「おう。見た目も、中身も」

そんなにか……と首を傾げながら呟くロディウスだが、中身はともかく互いの見た目を確かめる術を、彼は持っていない。

褐色の肌に尖った耳という、獣人特有の外見的特徴は二人とも一致しているが、髪の色はロディウスが銀色なのに対して、ヴォルフは深い紫紺色に朝日を反射する黒だ。

ヴォルフの金色の目が、獣人特有なのかヴォルフの個性なのかも判らない。

何しろ、他に比較するものがないのだから。

獣人という括りで見ると、同様の外見であると言えるだろうが、兄弟という括りで見ると、身体的特徴はあまり一致しているよ

うに見えない。

精神面は育った環境にもよると思うが、ヴォルフは年齢に対してあまりに幼すぎる。

ナナエに言われるまでは、そんなことを考えたこともなかったのだろう。

ロディウスはしばらく考え込んでから、小さく頷いた。

「んー、まあ、あんまり似てないかもな。母親が違うから」

「え、そうなの？」

初めて聞く話で、ナナエは思わず訊き返した。

普通、人間社会では異母兄弟というと、再婚だとか隠し子だとか浮気だとかいう理由が一般的なのだが、獣人の社会にも当てはまるのだろうか？

ナナエの疑問が解決する前に、突然ヴォルフが立ち上がった。広場を横切った野良犬と睨み合っている。

「わん！ わんわんわん！」

いきなり犬のように吠えだしたヴォルフが人々の好奇の目に晒される前に、ロディウスは思い切り弟の後ろ頭をどついて沈黙させたのだった。

「痛い……」

「あのなヴォルフ。ここは山の中じゃないんだ。人間の街なんだぞ？ 動物と話すのは禁止だ」

殴られた頭と、倒れたときにぶつけた鼻をさすって、ヴォルフは涙目で呟いた。

なるべく人目の少ない場所にヴォルフを引っ張って行って、説教しているロディウスを見ていると、なるほど子守りが上手いはずだと、ナナエは妙に納得してしまった。

月の家で子供たちに囲まれていた姿を思い出す。

「これじゃ、一緒には連れて行けないな」

「ええー！ やだ！ 一緒、行く！」

山に帰れと言うロディウスに、ヴォルフは駄々をこねる子供のように地団駄を踏みながら叫ぶ。

人間に慣れていないから、危険な旅になるかもしれない、街に入ると迫害されるぞ。

色々と言い聞かせて脅して宥めて叱って、それでもヴォルフはついていくの一点張りだ。

一時間近く言い合っていた二人だが、いい加減ロディウスが疲れてきたのか、盛大な溜め息と共に肩を落とした。

「——っこの頑固者め」

「あーもー、連れてってもいいんじゃない？」

二人の言い争いに飽きたナナエは、他人事のように言い放った。

「だがな……」

最後まで渋っていたロディウスだったが、ついには折れ、三人で王都を目指すことになったのだった。

それが苦労の始まりになるとは、ナナエは夢にも思わなかった。

新街道の終点の街で、最初の事件は起こった。

ちょっと目を離れた隙に、ヴォルフが養鶏場の鶏を逃がしてしまったのだ。

本人は外で一緒に遊びたかっただけなのだが、街中から鶏を集めるのに一日を要した。

鶏にもストレスというものはあるらしく、ロディウスの召集命令を無視して逃げた連中がいたのだ。

お陰で街中を走り回って探す羽目になった。

次の日には、魚屋で売っていた鱒をヴォルフが食べてしまい、弁償する羽目になった。

さらに同日、夕食を食べに入った食堂で、絡んできた酔っ払いをヴォルフが投げ飛ばし、軽い乱闘騒ぎになってしまった。

役人が来る前に食堂から抜け出し、宿屋に逃げ帰った頃には、ロディウスもナナエもぐったりと疲れ果てていた。

「なんなんだよ、お前の弟……」

「だから連れてくるの嫌だったんだ……」

愚痴をこぼすナナエの横で、珍しく泣き言を言いながらロディウスが項垂れた。

騒ぎの中心人物であるヴォルフはというと、ベッドの上でお気楽に転げ回っている。

あんまり騒ぐものだから、「静かにしろ！」とロディウスに拳骨をもらった。

「まったく……おいヴォルフ。ヴォルフは、兄の言い付けを守るって条件でついてきたんだよね？」

「うん！」

苛立ちを含んだロディウスの問いに頷くヴォルフには、反省の色は窺えない。

何故ロディウスが怒っているのか、何が悪かったのかも理解していないようだ。

あまりにも自由奔放すぎるその姿勢には、ロディウスも怒りを隠しきれないらしい。

「言い付けを全然守っていないじゃないか！」

街にあるものに勝手に触るな。人間に手を出すな。最初にそう言っただろう！」

ついにロディウスが怒鳴りつけた。

今まで彼がこんなに怒るところなぞ見たこともないナナエは、自分が言われている訳でもないのに驚いて身を硬くした。

それはヴォルフも同じだったようで、まずはびっくりして身を竦ませ、自分が叱られていることを理解すると、身体を縮こまらせて上目遣いにロディウスを見上げた。

心なしか、耳まで力なく垂れ下がっている。

「え？ え？ だって、ヴォルフ……」

「そんなに兄の言うことが聞けないなら、一人で山に帰れ！」

ロディウスの怒声の余韻が消える。

小さく肩を震わせるヴォルフの目に、みるみる涙が溜まっていく。そして、

「うああああああん！」

大声で泣きながら、ヴォルフは開け放たれた窓から飛び出していた。

ロディウスは一つ息を吐いて、先程までヴォルフが寝転がっていたベッドに腰掛ける。

「……いいのかよ」

ナナエが、静かに話し掛けた。

ロディウスは両肘を膝に乗せて、やや猫背になって俯く。

「ああ……ヴォルフは山に帰った方がいい」

このまま人間の街で騒ぎを起こし続ければ、やがて獣人はまた、人間たちの手によって世界から排除されることになるだろう。そうなる前に、人間が寄り付かない山に帰った方が良い。

項垂れるロディウスの前に立ち、ナナエは静かに首を振った。
そしてヴォルフが出ていった窓の外、宵闇に吞まれつつある街並
みを指差して。

「そうじゃなくて。ヴォルフを一人で街に出していいのかって言っ
てんだよ」

.....

「しまったああ！」

己の失態に気付いたロディウスは、頭を抱えて大声で叫んだ。

ヴォルフは一人、民家の屋根の上を歩いていた。

未だ止まらぬ涙を拭ってしゃくり上げつつ、山に帰るでもなく宿
に戻るでもなく、うろうろと歩き続ける。

こんなとき、人間なら反省して謝りに行くか、叱られた相手の悪
口を言ったり、愚痴を呟いたりするのだろうか。

しかし、ヴォルフはただ無言で赤くなった目をこする。

反省している訳ではない。

ロディウスに腹を立てている訳でもない。

ただ、叱られた理由が解っていないのだ。

同じ年頃の、それどころか十も年下の子供と比べても、今のヴォ

ルフの知能は低い。

兄の言葉を半分も理解していないどころか、世の中の常識すら理解できるか怪しいくらいだ。

もし医者に診せたなら、知能障害だと診断されるかもしれない。

幼児と同程度の知能しか持たないヴォルフを、街で一人にさせたらどうなるか。

親と共に街で育った人間の子供ならば、最低限のルールくらいは弁えていようが、街で暮らしていないヴォルフには、それすら知らない。

ヴォルフは腹が減ったら、自ら獲物を捕まえて食べる。

獣人は財産を持たないからだ。

完全自給自足のその日暮らし。

金で物を買う発想すらない。

家族という群れの中で暮らしているなら、物々交換くらいはするだろう。

だが、既に成人して群れを離れたヴォルフは、自分の餌は自分で狩るのが普通だ。

他人が持っている獲物には手を出さない。

それは他人が自身の力で勝ち取った、命の糧だからだ。

他人の獲物を横取りする行為は、時に生きるために必要なことだが、どうしても命を賭けた決闘になってしまうので、好んでやろうとは思わない。

しかし人間の街の、ミセという場所には、大量の獲物が放置されている。

手も付けずにそこに置いてあるということは、誰かが捨てたもの

なのだろう。

捨てたものを拾っても、ましてそれを食べても、誰にも文句は言われない。

そう考えてしまうのだ。

ヴォルフの思考は、人間よりもずっと獣のそれに近い。

ヴォルフは、昼間盗んだ魚がその店の所有物だなどと、知らなかった。

そんな発想もできないくらい、山での生活が常識になっている。

実を言うと、ロディウスも四年前まではそれが普通だと思っていたのだが、人間と獣人とで生活のルールが違うこと、人間の街で暮らすなら、その掟に従わなければならないことを知っていたから、さしたるトラブルもなく人間の街に馴染んでいるのだ。

ヴォルフは、それすら理解できていない。

人間たちの掟を知らないし、そもそも掟が違うということさえ知らなければ、いつも通りに振る舞って良いものだと思ってしまう。

不勉強などとは言えない。

人間も身の回りの物事でしか、常識を計れないのだから。

知識が足りないヴォルフがトラブルメーカーになるのは、必然だったと言えよう。

まったく違う環境で生きてきた者が、互いの文化を理解するには、時間が必要なのだ。

先程までぐずっていたヴォルフだったが、ようやく涙は止まったようだ。

しかしこれからどうすれば良いのか解らず、民家の屋根の上に座り込んでしまう。

宵の闇に包まれつつある街は、未だ日中の騒がしさを残しながらも、徐々に夜の静寂へと移り変わろうとしていた。

ヴォルフは空を見上げた。

俯いていると、また涙が出そうになる。

頭上には大きな雲が漂っていたが、雲のない東の空から満月が昇ってくる場所だった。

「……わー、月だ」

ヴォルフが独り言を呟く。

本人に自覚はないのだが、彼は脳内の言葉がそのまま声に出てしまうタイプなのだ。

「……昔、言ってたな。月にも、いるんだって」

例えその場に誰かがいて、その言葉を聞いていたとしても、その意味を正しく理解できた者はいなかっただろう。

ヴォルフが呟いたのは、獣人に伝わるお伽噺なのだから。

ヴォルフは昇ってきたばかりの満月をじっと眺めていた。

月がいつもより大きく見えるのは、地平線に近いところにあるからだろうか。

泣き疲れて眠くなってきたヴォルフは、屋根の上に座ったままですとうとうし始めた。

しかし、そんな微睡みはすぐに掻き消される。

「も、モンスターだあああっ！」

街に住まう人間たちの悲鳴だ。

ヴォルフは瞬時に目を覚まし、すぐに対応できるように腰を浮かして周囲の気配を探った。

獣人は夜目が利く。

きよろきよろと辺りを見回しながら、獣のように耳を立て、どんな小さな音も聞き逃すまいとしている。

「か、影が……！」

「ぎゃあああっ」

逃げ惑う人の声は、通り一つ向こうの、宿屋の近くから聞こえた。ヴォルフは立ち上がり、大きく跳躍する。

獣人の筋力は人間とは比べ物にならない。

ヴォルフは易々と通りを飛び越え、宿屋から二軒離れた民家の屋根に降り立った。

満月の灯りに照らされた影から生まれたモンスターは、猫の形を模した、歪な猛獣だ。

この街にも街灯は多く、道に月明かりは届いていない。

あれは屋根の上を行く猫の陰から生まれたものだ。

だがヴォルフはそんなことは知らない。

ただ、自分たちが今夜眠るはずだった場所で、余所者が暴れている。

それはつまり、縄張りを荒らす侵入者だ。

ヴォルフは異形の影を見据え、夜空の月に吠えた。

オオオオオオオオ……

狼の遠吠えにも似たその声は、ヴォルフを捜して街に出たロディウスたちにも聞こえた。

二人はあの後すぐに、ヴォルフを追いかけて宿を出たのだ。

手分けしてヴォルフを捜しているうちに、随分と離れたところまで来てしまったらしい。

聞こえてきた狼の声は、遠い。

しかも、今し方自分たちが来た方向から聞こえたではないか。

「行き違いかよ！」

ナナエは吐き捨てるように呟き、急いで方向転換する。

別の通りを搜索していたロディウスも、当然戻ってくるだろう。

自分たちが行くまで、ヴォルフが騒ぎを起こしませんように……

二人の願いは、叶いそうになかった。

屋根から飛び降りたヴォルフは、影の獣に対峙する。

両者の睨み合いは短かった。

人々に襲い掛かっていた影たちは、皆一斉に標的をヴォルフに変えて唸り声を上げる。

影が然程大きくなかったことが幸いしたか、怪我をした人の命に

別状はない。

怪我人の呻きが入り交じる中、先に飛び掛かったのは影の方だった。

鋭い爪を振りかざす影を、ヴォルフは腕力で無理矢理叩き伏せた。肩に引っ掛けたベージュの外衣が翻る。

叩きつけられた影は、最早ぴくりとも動かない。

圧倒的な力を見せ付けられ、しかし影は怯むことなく向かってくる。

ヴォルフはそのことごとくを、一撃で切り裂いた。

どれ程の数のモンスターが生まれたのか、歪な影の猫は、次々と屋根の上から飛び降りてくる。

しかしどれだけ数が増えようとも、ヴォルフの攻撃は衰えることはなかった。

両手両足の爪で影を切り裂き、獣の力で叩き潰す。

足の爪さえ武器にする獣人は、靴を履かない。

布くらは巻く者もいるが。

この辺では見ない変わった服装と、鬼神のような戦いぶりは、周囲の人間に助けられた感謝よりも畏怖の念を植え付ける。

しかも、舞うように戦うロディウスとは違い、ヴォルフは力任せに敵を叩き伏せる戦闘スタイルなのだ。

その姿が、余計に人々の恐怖を煽ったのだろう。

そしてヴォルフは、影を切り裂くその瞬間に、笑ったのである。愉しそうに、牙をむき出しにして。

獣人の本能に刷り込まれた野生の一面。

戦闘の高揚感が、命を賭けた闘いの中に身を置くヴォルフを愉し

ませるのだ。 獣人の社会では、強い雄にのみすべてを得る権利がある。

究極の実力主義。この非常に獣じみた習性が、獣人は野蛮であると評価される原因になっていることは、想像するに難しくない。

「……なんだよ……これ」

ロディウスよりも一足早く戻ってきたナナエは、笑いながらモンスターを殴り倒すヴォルフの姿を見て、呆然と立ち尽くした。

これがあの泣き虫なヴォルフなのか。
まるで別人ではないか。

ヴォルフが最後の影を切り裂いたときも、訪れたのは人々の歓声ではなく、動揺のざわめきだった。

そこに含まれる感情には、紛れもなく恐怖が混じっているだろう。

ナナエでさえ、足が竦んで動けなかった。

誰もが立ち尽くす中、悠然とヴォルフに歩み寄ったのはロディウスだった。

どうやら、ナナエとは違う道から来たらしい。

「……あ、にい！」

ロディウスの姿に気付いたヴォルフは、先程までとは打って変わって無邪気な笑みを浮かべる。

「何があったんだ？」

ロディウスのその問い掛けは、ヴォルフに言うよりも、周囲の人間に対して言ったように聞こえた。

しかし人々は何も答えず、代わりにヴォルフが誇らしそうに胸を張った。

「あんな、黒いの、いっぱい敵、来た。ヴォルフ、やつつけた！
一人で！ えらい？」

「そうか。よくやったな」

兄に叱られたことなど、とうに忘れてしまったのだろう。
舌足らずな拙い言葉で報告する弟の頭を撫でてやると、ヴォルフは嬉しそうに笑って飛び跳ねた。

「何なんだ……あんたらは……」

野次馬の一人が、やっとのことで声を絞り出した。
先程までの姿とはあまりにも違うヴォルフの言動に、途惑いを隠せないようだ。

「ヴォルフは、ヴォルフだ！」

「黙ってろ」

手を挙げて答えるヴォルフを退がらせて、ロディウスが前に出る。
二人の姿を見ていた野次馬の一人が、小さな声で呟いた。

「あいつら……獣人じゃないのか？」

その瞬間、周囲のざわめきが大きくなった。
あちこちから、ひそひそと話し声が聞こえる。

二人を指差し顔をしかめる人がいる。
そそくさとその場を離れる人がいる。

人々の不安の声は、益々大きくなってゆく。

「なんで獣人がこの街にいるんだ？」
「嫌だわ、さっさと出ていってくれないかしら」

ナナエは周囲のざわめきが大きくなるのを、焦った様子で聞いていた。

獣人って人間を食べるんですって？
こないだの事件も奴らが……
俺たちを食いに來たのか？

根も葉もない噂話から根拠のない不安まで、様々な憶測が囁かれる。

そのどれもが悪い話ばかりで、ナナエは耳を塞ぎたくなった。

（なんで、そんなことばかり言えるんだよ……ロディウスも、何黙ってんだよ）

人々の不安が増していくのが解る。

このままでは暴動になるのではないかと、ナナエはそちらの方が心配になった。

「あんた方、悪いことは言わない。この街から出ていってくれんかね」

野次馬たちの中から声をかけてきたのは、初老の男だった。

その理不尽な申し出に、ついにナナエは耐えきれなくなって飛び出した。

「何言ってるんだよ！ ヴォルフは、あんたらのこと助けたんじゃないか！ それが恩人に対する態度なのかよっ！」

突然乱入してきたナナエに皆驚いたようだが、初老の男は構わず言葉を続けた。

「それは承知しとるがな、獣人がこの街にいると思うと、安心できるんだよ」

獣人は蜚族である。

その概念は、人々の中に深く根付いている。
先程のヴォルフを見た後では、尚更獣人は凶暴であると思い込んでしまうだろう。

その男の言葉に後押しされたのか、野次馬たちから次々に声が上がった。

「そ、そうだ、出ていけ！」

「獣の血を引くなんて、汚らわしい」

「獣人は災いと呼ぶんだろう？」

「嫌だ気持ち悪い、さっさと出てお行き！」

野次馬たちは、今や大声で罵声を投げ付けてくる。

こうなると、もうナナエの話など誰も聞こうとはしない。

そのうちに、興奮した野次馬の一人が、空の酒瓶を投げ付けてきた。
それはロディウスの足元に落ち、耳障りな音と破片を撒き散らす。

それがきつかけになったか、人々は落ちている石やゴミを投げ付け始めた。

しかしどれも当てる気はないらしく、足元に落ちて転がるだけだ。

「な、何すんだよ！ 危ないだろ！」

抗議するナナエと、すっかり怯えてしまったヴォルフを背後に庇い、ロディウスはその場から動かなかった。

今は下手に動いたら危険だ。これ以上街の人たちを刺激すると、何が起るか解らない。

しかしそのとき、野次馬の投げたゴミがロディウスの額に当たった。

固いものがぶつかる音と、ゴミが地面に落ちて割れ砕ける音が、続け様に響く。

飛んできたゴミは、口が割れた瓶だったようだ。

偶然、鋭利な部分がロディウスに当たり、彼の額から血が一筋流れ落ちてくる。

「にー！ 血！」

「ロディウス！ だっ誰だよ今投げた奴！」

ナナエが叫んで野次馬を睨み付けると、彼らは一様にびくりと肩を震わせ目を逸らした。

怒った獣人に殺されるのではないかと、恐怖に顔を引きつらせる。

「……助けられたのに礼もせず、これが人間の流儀なのか？」

急に静まり返った通りに、ロディウスの淡々とした声が紡がれる。

「人間は理性ある生物だと思っていたんだが、これじゃどっちが野蛮か判らないな」

些か笑いを含んだロディウスの声に、野次馬たちが気色ばんだ。獣人に見下されたと思ったのだ。

ロディウスは、流れる血を拭いもせずと言う。

「言われなくても出ていくさ。理性の働かない連中に、寝首をかかれちゃたまらない」

殺気立った野次馬が見守る中で、ロディウスはヴォルフの手を引いて歩いていった。

ヴォルフだけを連れて。

ロディウスが歩いていくと、野次馬たちの人垣がさっと割れる。人々の憎悪の視線に見送られながら、ロディウスとヴォルフは街を出た。

ロディウスは、ナナエには手を差し出さなかった。

ナナエは立ち尽くしたまま、ロディウスの背を見送る。

その胸の裡には様々な思いが交錯していたが、今最も強く感じるこの気持ちは……

やがて野次馬の数は減り、辺りに奇妙な静寂が訪れた頃、ナナエは両手をきつく握り締めて足を踏み出した。

街から出てすぐのところにある、森とも呼べないような小さな森

の中。

赤い炎の内で、くべられた枝が小さく爆ぜた。

赤い光の中、ロディウスの陰が炎に合わせて揺れる。

ナナエを置いてきたことを、後悔はしていない。

サイマスとの約束を反古にしてしまうが、元々気乗りしなかったことなのだ。

それに、依頼を達成できなかったとしても、彼は怒ったりしないだろう。

大切なのは、本人の意思なのだから。

ガレットから預かった荷物も宿屋に置いてきてしまったが、本当に必要なものは肌身離さず持っている。

王都へは、自分一人で行くつもりだ。

ヴォルフのことも、人間の街から離れた森か山にでも、置いてこようと思っていた。

こんなことがあった後ならば、ヴォルフも無理についていくとは言わないだろう。

再び小枝を投げ込もうとしたロディウスは、誰かの足音を聞いて動きを止めた。

ヴォルフは焚き火から少し離れたところで、炎に背を向けて眠っている。

街を出てからも散々泣いたのだろう。

閉じられた目許は赤い。

足音がヴォルフのものではないとすると、街の人間が追ってきたのだろうか。

それが聞こえたのは風下の方からで、匂いを嗅ぎ取することもできない。

いったい誰が来たのかと身構え、

「こっの、馬鹿——っ！」

ばぼすっ

聞き覚えのある声と共に投げられた何かが顔に当たり、ロディウスはなす術なく仰向けに倒れた。

「な……ナナエ？　なんでここに？」

ロディウスが身を起すと、いつも自分が持っていた麻の袋が、顔からぼろりと落ちた。

それを投げ付けた人物——ナナエに向かって、呆けたような顔で問い掛ける。　ナナエは両手を腰に当てて立っていた。

「なんで、じゃない！」

怒ったように言い放ち、ずかずかとロディウスの前に歩いてくる。

「なんでオレを置いてったんだよっ」

逆に問われて、ロディウスは驚いたように唇を震わせた。

「そりゃ……っ、獣人と一緒に旅してるなんて知られたら、ナナエが疎外されるだろうと……」

珍しく歯切れの悪いロディウスの言葉を聞いて、ナナエは益々眉を吊り上げた。

「オレはそんなの気にしてねえんだよ！」

獣人とか人間とか、そんな括りでしか見てねえ奴らに何言われようが、痛くも痒くもねえよ！

んなことよりっ……そんなことより……」

一気にまくし立てるナナエの声が、徐々に遅く小さくなって消えてゆく。

両手を握り締めて俯くナナエの肩が、小刻みに震えていた。

ロディウスには、ナナエの表情を窺い知ることはいできない。

彼はゆっくりと手を伸ばし、手探りでナナエの手を取った。

ナナエははっと顔を上げ、ロディウスは真剣な表情でナナエの手を握る。

「一緒にいたら……後悔するかもしれんぞ」

小さな声でそう言うロディウスの顔には、相変わらず布が巻いてあって表情が読めない。

しかしその姿が、なんだか親の庇護を求める頼りない幼子のように見えて。

ナナエは思わず膝立ちで屈み、ロディウスの頭を抱え込むように抱き締めた。

「馬鹿。オレが自分で選んだことなんだから、後悔するわけねーだろ。ちゃんと王都まで付き合ってやるよ」

「ナナエ……」

ロディウスは突然のことに多少驚いたようだったがすぐに表情を和らげてナナエの背に腕を回した。

こんな風に抱き締められたのは、ひよっとしたら初めてかもしれない。

少し照れ臭いけれど、とても暖かくて、ロディウスは静かに微笑んだ。

「意外と優しいんだな」

「だから意外は余計だろ」

二人は少しの間そうしていたが、ヴォルフが寝言を呟きながら寝返りを打つを見て、慌てて離れて座った。

幸い、ヴォルフが目を覚ました様子はない。

ヴォルフを起こさないように、声を殺して笑った。

その顔が赤いのは、焚き火のせいだけではないだろう。

その後しばらく他愛ない話をしてから、ナナエが先に眠りについた。

ロディウスは一人で起きて見張り番をしていたが、焚き火が消える頃になると、見張り交代のためにヴォルフを起こしにいった。

東の空は、もう明るくなり始めていた。

獣の兄弟——水流る王都——

朝になりナナエとロディウスが目を覚ますと、ヴォルフは膝を抱えて眠っていた。

ロディウスと交代で見張り番をしていたはずだが、途中で寝てしまったようだ。

太陽は大分高い位置まで昇っている。

仕方なく二人でヴォルフを起こし、次の街を目指して歩き始めた。

「にいとつ、ナナエっ、一緒っ、うれしっ、たのしっ」

「大体、オレが荷物持ってきてやんなかったらどうしてたんだよ？ あんだけスパッと出ていった後に、荷物取りに戻るのって無様すぎじゃね？」

二人の周りをぐるぐる回りながら歌い続けるヴォルフと、昨夜のことに対して文句を言い連ねるナナエと。

ぎゃいぎゃい騒ぐ二人を相手にしながら、ロディウスは楽しげに笑う。

実はナナエが来てくれて一番喜んでるのは、ロディウスなのかもしれない。

三人は順調に旅を続けた。

ヴォルフも先日のことと学習したのか、必要以上に街のものに触らなくなったし、何よりロディウスの言い付けを守るようになった。そのお陰で、その後は特に何もなくて——夜中に影が襲ってきたこ

とが一度だけあったが、概ね順調と言えた。

ヴェヌスの街を出てから徒歩で五日、三人はようやく王都に入っただった。

「ここが王都かぁ。結構賑やかな街だな」

城壁で囲まれた街に入った途端に人々のざわめきが聞こえてきて、ロディウスは周囲に耳を傾けた。

行き交う人々の声の中に、「姫様」と「聖誕祭」の言葉が頻繁に出てくる。

どうやら、水の国の姫君が三日後に誕生日を迎えるらしく、今はその祭りの準備で特に賑わっているようだ。

ヴォルフが食べ物の匂いにつられて走りださないように、しっかりと外衣の裾を握り締めてから、ロディウスはふと気付いた。

先程からナナエが喋っていない。

「ナナエ？ どうした？」

振り返って声を掛けると、ナナエはぼんやりと街並みを眺めていたようで、驚いたように視線をロディウスに向けた。

「へっ？ あ、何？」

「何じゃなくて。大丈夫か？ ぼーっとしてたみたいだが」

熱でもあるのかと心配するロディウスに、ナナエは慌てて首を振った。

「へ、平気だよ。ぜんぜんへーき。ちょっと、考え事してただけだ
って」

「そうか？　なら、いいんだが……」

ロディウスはあまり納得していないようだったが、これ以上深く
追及するつもりはないようだ。

三人は王の住まう城へと足を向けた。

しかしやはり、ナナエの足取りは軽くない。

ロディウスの言葉につられてここまで来たが、いざ王都に入り王
に謁見できると思うと、色々なことが頭を過ぎるのだ。

本当に王族だったらどうなるのだろう。

ヴェヌスに戻るのか。

それとも城に住むことになるのか。

王族とはまったく関係ない赤の他人だとしたら、王族を語る詐欺
師として打ち首……なんてことはないだろうが。

もちろんない……と思いたい。

でも、本当にいきなり連行されたりしたらどうしよう。

いや、いきなりはないかもしれないけど、素性を調べられて窃盗
していたことがばれたりしたら、やはりそれなりの処罰はあるだろ
うし……

さてよ、王族が罪を犯したなんて事実が外に漏れるのを防ぐため、
なんて言ってやっぱり暗殺されたりとか？

「うっわ、ありそう……」

「ん？　何か言ったか？」

「いやべつに……」

思わず呟いたナナエの声を耳聴く聞き付けたロディウスが訊ねるが、ナナエは適当にあしらって強引に話を終わらせた。

あれだけ威勢よく家を出たのに、ここに来て躊躇していることを知られるのは、なんとなく恥ずかしかったのだ。

城はもう目の前だ。

今更引き返すことはできないし、それに、

「わあ、でかいな。でかいなー、にい。ナナエ、あれ、何だ？」

一人能天気なヴォルフを見ると、うじうじ悩んでいる自分が馬鹿らしくなってくる。

（ああもうっ、行くなって自分で言ったんだから、悩むのはやめだ！
女は度胸！）

気合一発、自分の頬を両手でばしっと叩く。

ロディウスとヴォルフがぎょっとして足を止めるが、ナナエは気にせず歩いていった。

城の前で暇そうにしている初老の門番に、三人は近付いていった。突然近寄ってきた怪しげな三人組を目にして、門番はようやく自分の仕事に取り掛かる。

「何だお前たちは？」

いかにも胡散臭そうに半眼で睨み付け、しわがれた声で尋ねてくる。

実際はそんなに歳をとっている訳ではないのだろうが、その声と覇気のない顔のせいで老兵に見えるのだ。

ロディウスは荷物の中から筒に入った書類を取り出し、門兵に差し出した。

「ヴェヌス領主、サイマスからの紹介状だ。水王ダナンにお目通り願う」

門兵が受け取った書類には、ヴェヌス領主直筆のサインと紋章があり、偽物ではないことが判る。

文書に添えられた紹介状には、信頼できる使いを雇ったので、王に直接謁見させてほしいといった内容が書かれていた。

門兵は改めて三人を見やる。

乱暴そうな剣士に顔を隠した男に、どうにも落ち着きのないやら子供っぽい男。

信頼できる？　これが？

そんな感情がありありと顔に刻まれているのだが、領主直筆の紹介状があるからには、門前払いにする訳にもいかない。

門兵は取り次ぎをするために、三人をその場に残して門の脇に設置してある伝声管の蓋を開けた。

しばらくして、城の中から使用人と思しき男が出てきた。

彼は書状を預かると、また城の中に戻っていく。

これから上の役職の人間に話を通して、色々面倒な手続きをして、王に謁見できるのはそれからになるだろう。

急な訪問ではそれも仕方ないだろうが、ロディウスたち三人は、目的地を前にして暇を持て余すことになった。

結局その日は時間がとれないということで、明日の朝改めて謁見することになった。

かなり緊張して覚悟を決めて行ったのに、これでは拍子抜けだ。

（こんなことなら、もっと観光とかしとけば良かった）

あの後結構待たされて、返事を貰う頃には日が傾き始めていた。宿を取るのもかなり苦勞した。

何しろお姫様のお誕生パーティー——こう言うともものすごく安っぽく聞こえるが——に集まった観光客やら記者やらが、王宮付近の宿をほとんど占領していて、ナナエたちは町外れの方まで空いている宿を探し歩いたのだ。

すっかり日も暮れてしまい、王都の見物などできやしない。

宿探しとヴォルフのお守りをロディウスに任せて、自分一人だけ観光に行くというのも気が引けた。

一応、道案内役なのだし。

ナナエはベッドの上で寝返りを打った。

衝立を挟んで向こう側には、ロディウスとヴォルフが眠っている。

実はここ、二人部屋なのだ。

やっと空いている宿を見付けたのは良いのだが、生憎二人部屋が

一つしかないと言われてしまったため、仕方なく同じ部屋で眠ることになったのである。

ロディウスは当然のようにベッドをナナエに譲り、ヴォルフと一緒に床の上だ。

そう、この部屋にベッドは一つしかない。

よりによってシングル二つではなく、ダブルベッドの部屋だったのだ。

流石にナナエも遠慮したのだが、ロディウス曰く、

「元々山の中に住んでたんだぜ？　ベッドより硬い床の上の方が落ち着くつもんだ」

だそうだ。

その証拠に、衝立の向こうに消えてから、ものの五分と経たずに寝息が聞こえてきた。

かくてナナエは広いベッドを一人で占領した訳だが……

（落ち着かねー……）

こんな広いベッドで眠ったことなどなかったため、中々寝付けな
いでいた。

寝るときは、狭いベッドで縮こまって寝るのが普通だったので、
両手を広げられるスペースがあると、なんだか心許ない。

眠れないままに何度か寝返りを打っている間に、東の空が白ん
できた。

結局、ナナエが眠れたのは、明け方の二時間程度だった。

「ふわああああ……」

盛大な欠伸をしつつ、ナナエは再び城に向かっていった。
その後ろを歩くロディウスとヴォルフは、そっくりな仕草で首を
傾げる。

「何だ？　よく眠れなかったのか？」

「ナナエ、眠いか？　起きたのに」

涙の浮かんだ赤い目をこすりながら、ナナエはかくんと頷いた。

「んあー……なんか落ち着かなくて眠れなかったんだよ……」

ナナエのその言葉を聞いて、何やら思うことでもあったらしく、
ロディウスはにやにや笑いながらナナエの肩に腕を回した。
急に肩を組んできたロディウスに驚き、ナナエは眠そうな目で彼
を見上げる。

「そうだな、いくらナナエが男っぽくても女の子だもんな。男二人
と相部屋なんて、気が気じゃなかったんだろ？」

「……は？」

突拍子もない台詞に、ナナエの目は点になる。

ロディウスの顔は、口の端が意地悪そうに吊り上がっていた。

「大丈夫だって。ナナエは夜這いされる程女らしくないから」

ぶちっと。ナナエの中で何かが切れる音がした。

「てめーはいっぺん死んでこいっ！」

ナナエの怒りの一撃は、華麗にロディウスの鳩尾にめり込んだ。ロディウスは殴られた腹を押さえて蹲ったが、すぐに立ち上がり何事もなかったかのようにナナエの後ろを歩きだす。

びっくりしたヴォルフがおろおろしながらロディウスの周りを歩き回るが、軽く頭を撫でられると安心したように横に並んだ。

ナナエは内心驚いていた。

渾身の力を込めて殴ったのに、奴はまったく堪えていないようだ。獣人と人間の筋力差を思い知らされた気分だ。なんだか腹が立つ。つまるところ奴は、ナナエなど怒らせても痛くも痒くもないから、安心してからかってきやがるのだ。

（うっわぁ、ムカつく——！）

いつか絶対ぎゃふんと言わせてやる。

ナナエはそう心に誓って拳を握り締めた。

最初に来たときは随分待たされた門も、今回はあっさり通された。城の中など入ったことのないナナエとヴォルフは、物珍しそうに周囲に目を向ける。

ロディウスだけは堂々と前を向いているが、これは彼が、物を見ろという行為ができないからである。

三人が案内された部屋は謁見室ではなく、来賓用の客間だった。ここに来るまでも何人かすれ違ったが、二日後の姫君の聖誕祭

に、国内からだけでなく各国からも祝辞を述べに客が来ているようだ。

水の国ではあまり見かけない服を着た、いかにも貴族風の男とすれ違ったときに、そのことに気付いた。

部屋で待つこと数十分。ようやく扉がノックされた。

国王も執務で忙しいのは解るが、この待ち時間の長さはどうにかならないものか。

待ち時間が長いから、客室に通されたのかと思うくらいだ。

「はあい、今行きますよー」

ナナエが答えてドアを開けようとしたときだ。

向こうからドアを開けて中に入ってきた。

だがそれは、ナナエたちを呼びに来た使用人ではなかった。

ドアを開けたのは使用人だが、中に入ってきたのは良質な絹の礼服を纏った、いかにも身分の高そうな壮年の男性だ。

ナナエと同じ明るい茶の髪と口髭。

目の色は青かったが、かすかに漂う水の精霊の気配を感じ、瞬時に彼が何者なのか理解できた。

「こ……国王陛下……」

ナナエの呟きを耳にして、暇を持て余したヴォルフの遊び相手をしていたロディウスも席を立つ。

客室に通されたことも変だと思ったが、国王が直々に客の部屋を訪問するなど、更に異例だ。

どうということかと狼狽えている間に、王は身を屈めてナナエの顔

を覗き込んだ。

そのままたっぷり数十秒の時間が流れる。

流石にナナエが耐えきれなくなった頃、王はやおら大きく頷いてナナエから視線を外した。

「ああ、間違いない。私の娘だ。ロディウス、ご苦労だったな」

「いや、これも仕事だからな」

ナナエは弾かれたように振り向く。

ロディウスと国王が知り合いらしいことも驚いたが、何よりロディウスの言葉が信じられなかった。

今、何て言った？ 仕事？ 何が？

「ロディウス……仕事って、領主からの預かり物を運ぶんだよね。え……お前、王様と知り合いだったのか……？」

狼狽してうまく言葉が出てこない。

ナナエは困惑して、何度もロディウスと国王を見た。

ロディウスと国王が知り合いなのだとしたら、ロディウスは王都の場所も城の場所も知っていたはずではないのか？

ならば何故、ナナエに道案内など頼んだのだ？

そんなこと、考えるまでもない。

ナナエを、ここに連れてきたかったからだ。

「騙したのか!？」

ロディウスの真意に気付いたナナエの顔は、怒っているようにも見える。

しかしロディウスにはその表情は見えないし、ナナエ自身も、この気持ちが怒りなのかもっと他の感情なのか、解らなかった。

「騙した？ 王都に行くと言ったのは、ナナエだろう？」

ロディウスの方は、口許にだけわずかに笑みを浮かべていた。

いったい何を思っているのか解らないくらいに抑揚のない声で、ナナエの言葉に応答している。

ナナエは、それが許せなかった。

一人で悩んでいたときに道を指し示してくれたのは、ナナエを王都まで連れてくるための演技だったとでも言うのか。

「嘘ついてたのは変わらないだろ！ 何だよ……なんで……っ」

言葉が上手く出てこなくなって、ナナエは唇を噛み締めた。

国王は使用人に、ナナエを奥の部屋に連れていくように命じる。

黙り込んだナナエは、抵抗することもなく、女中に連れられて部屋を出ていった。

「いいのか？ にい、寂しくないか？」

兄の背後にくっついて事態を傍観していたヴォルフは、声を潜めて囁く。

あまり賢くはないはずの弟の、いやに核心をついた問いに、兄はただ静かに頷いた。

「いいんだよ。これ以上、ナナエを巻き込みたくないからな」

「うーん……」

ナナエは一人で豪華な部屋の中にいた。
王がナナエのために用意させた部屋だ。

ここまで案内してきた女中からは、何も説明がなかったため、ナナエには想像することしかできない。

ロディウスは恐らく、ナナエが領主の屋敷を出た後に、サイマスから頼まれたのだろう。

無理矢理連れていくのではなく、ナナエの意思で王都に行くように仕向けたのは、その方が任務を遂行しやすかったから。

いくら何でも、嫌がる人間を無理矢理連れていくのは骨が折れる。
途中で逃げ出すかもしれないので、常に見張っていなければなら
ないからだ。

道案内を頼むなどと言ってナナエと行動を共にしたのは、途中で
気が変わって逃げ出さないようにするため。

大方そんなところだろう。

国王には、早馬か何かで先に知らせが届いていたのかもしれない。
だからいきなり、客室にいるナナエを訪ねてきたのだ。

ナナエの想像は大体辻褄が合うのだが、一つだけ納得できないこ
とがある。

（あの街で、オレが追い掛けてこなかったら、どうするつもりだったんだろう）

ヴォルフが騒ぎを起こした、あの街のことだ。

あのときロディウスは、王都に連れていかなければならないはずの、ナナエの手を取らなかった。

結局、ナナエの方からロディウスにくっついてくる形になったのだが、あのときナナエが、ロディウスと共に行くことを諦めて引き返していたら、目的は達成されないことになる。

そこだけが腑に落ちなくて、ナナエは部屋の隅に蹲って唸っていたのだ。

広い部屋では落ち着かない。

これ以上考えても答えが解る訳でもなし、これからどうなるのかも解らない。

考え込んでいても仕方がないと、ナナエが立ち上がったそのとき、部屋の扉を叩く音がした。

ナナエが返事をするのも待ちきれなかったのか、勝手に扉を開けて中に入ってきた女性がいた。

その女性はナナエを見た途端に、目に涙を浮かべて駆け寄ってくる。

「ああ、アイリス！ 本当にアイリスなのね！」

ナナエとは似ても似つかない黄金の髪に白い肌、しかし瞳だけはナナエと同じ琥珀の色で。

この貴婦人が誰なのか、ナナエにはすぐに解った。頭では解ったのだが、心が解ろうとしていない。

(……母さんなんて呼べないよ……オレの母さんは、マリー先生だけだ)

水の国の王妃メリルは、ナナエの髪を撫で、顔を見つめ、抱き締めてくる。

温もりを感じるはずの彼女の暖かさが、どこか遠く感じられた。

「あ……あのっ」

ナナエはなんとか王妃の身体を引き剥がした。

メリルはやっと再会できた我が子を、もっと抱き締めたいのだろう。

その手はしっかりとナナエの肩を掴んで離さなかった。

「どうしたのアイリス？ どこか具合でも悪いの？」

メリルが心配そうに訊いてくるが、別に体調の問題ではない。

「あの、オレ、ずっとナナエって呼ばれて……その、アイリスって呼ばれると、なんか聞き慣れないって言うか……」

途惑いから齒切れが悪くなるナナエの言葉を聞いて、メリルは少し困ったように眉尻を下げて笑った。

「まあ、そうだったの？ ごめんなさいね、気付いてあげられなくて。」

ナナエ、その名前も可愛いわ。でも忘れないで頂戴。貴女が何と

呼ばれようと、私の娘であることに変わりないのよ」

メリルの言葉に、ナナエは曖昧に笑みを浮かべて頷いた。肯定していいのか否定していいのか、解らなくなってしまった。

正直、今更本当の親など出てこれても、どう反応していいのかまったく解らない。

ナナエの家はずっと月の家だけだし、家族も月の家の皆だけだと思っっている。

それはこれからも変わらない。けれど。

（先生と、同じように笑うんだな）

メリルの笑顔は、マリーのそれに似ていた。

母が子に見せる顔というのは、身分に関係なく皆同じなのかもしれない。

それだけはナナエを安心させた。

王妃は執務の合間にナナエに会いに来たらしく、すぐに使いの者が呼びに来た。

王妃は名残惜しそうにしていたが、まさか仕事を残したままにする訳にもいかない。

一国の主の妻ともなれば、その両肩には沢山の責任が乗っているのだから。

「残念だわ、もっと話していたいのに。また昼食の後に会いましょう？」

家族なのだから、これからはいつでも話ができる。

王妃はそう言ってナナエから手を離れた。

それは暗に、ナナエをこの城に住ませるつもりでいると言っているのだが、このときのナナエはまだ若干混乱していて、それに気付かなかった。

王妃が出ていったのと入れ替わりに、女中が二人、何やら荷物を抱えて入ってくる。

「お目にかかり光栄です。私は使用人として働かせていただいております、サニアと申します」

「同じくタチアナと申します」

「え？　はあ……？」

ナナエが訳も解らず首を傾げていると、女中二人は持ってきた荷物を広げ始めた。

中に入っていたのは、色とりどりのドレスだ。

「僭越ながら姫様のお世話を任されることになりました。お召し物を用意いたしましたので、こちらにお着替えください」

「へっ？　えええええ？」

ナナエは驚愕に目を見開いた。

今朝城に来てから二時間弱で、ナナエの体型に合わせた服まで用意するとは。

正確に寸法を測った訳ではないので、なるべく近いサイズのことを呉服屋から仕入れてきたのだろうが。

きらびやかな衣装を前にして、ナナエの顔が引きつった。

「や、やだよこんなヒラヒラしたの！」

「まあ姫様！ そんなこと仰らずに袖を通してくださいませ」

「どれも一流デザイナーが仕立てた一級品でございますよ？」

「服なんて一流だろうが三流だろうが、着られればそれでいいじゃない！」

ナナエと女中の攻防はしばらく続いたが、結局折れたのはナナエだった。

スカートだけは脚がすーすーするから履きたくない！ と頑なに拒んだので、そこだけは女中も妥協したようだ。

青を基調にしたツーピースのセミアフタヌードドレスだが、ボトムスは白のミニスカートにタイツとブーツを組み合わせることで、どうにか見栄えは良くなった。

昼食まではまだ一時間程あるので、それまでは部屋で自由に過ごせる。

城の中を見て回ることもできたが、来賓が多く城に滞在している今、すれ違う度にいちいち挨拶するのが面倒で、こうして部屋に閉じこもり本を読んでいるのだ。

精霊にまつわる伝奇を捲って文字を眺める。

内容はさっぱり頭に入ってこなかった。

だからだと本を眺めていると、不意に小さく控え目なノックの音がした。

「どうぞおー、開いてますよお」

なげやりに返事をする、わずかに軋んだ音を立てて扉が開いた。中途半端に隙間を開けて、小さな影が部屋を覗き込んでいる。

一瞬驚いて身を竦ませたナナエだったが、影の正体が小さな女の子だと解ると、安心したように笑みを浮かべた。

「どした？ オレに何か用？」

ナナエに声を掛けられて、少女は怖ず怖ずと扉を開いて中に入ってくる。

金に近い茶色の髪を結い上げた、大きな青い瞳が可愛い少女は、なんとなく誰かに似ているような気がした。

「お嬢ちゃん、どっかで会ったっけ？」

ナナエは首を傾げて少女に近付き、屈んで視線を合わせる。

少女はしばらく恥ずかしそうにもじもじしていたが、やがて意を決したように顔を上げ、小さな唇を開いた。

「あのっ、お姉さんが、私のお姉様って、本当ですか？」

少女の言葉に、ナナエは絶句して固まった。

目の前にいる少女は、二日後に八歳の誕生日を迎える、アリシア姫だったのだ。

「母様は、ときどきお姉様のこと、話してくれました」

ナナエはアリシアと一緒にソファに座り、アリシアの話を聴いていた。

行方不明だった姉が戻ってきたと聞いて、こっそり部屋から抜け出してきたらしい。

ナナエは慌てて通りすがりの女中を捕まえ、アリシアが来ていることを伝えた。

城内で姫君が失踪したなどと騒がれては面倒だ。

小さな姫君は、初めて見る姉に途惑っているのか、遠慮がちにナエの顔を覗き込んで、目が合った途端に目を逸らす。

最初こそこのように恥ずかしがっていたのだが、徐々に慣れてきたのか、今はナナエの隣に座り、楽しそうにお喋りを続けている。

「お姉様は、何で男の人みたいな言葉なんですか？」

「んー、ちっちゃい頃は親父と二人暮しだったからなあ……あの糞親父の言葉遣いがうつったんだろうなあ」

身の回りにこんな喋り方をする者がいないアリシアは、姉の言葉遣いが面白いようで、ナナエが何か言う度に楽しそうに笑った。

やがて昼食の準備ができたらしく、女中がアリシアを呼びに来た。来賓の貴族たちと会食があるので、ナナエだけこの部屋に残された。

行方不明だった第一王女が帰還したことを、まだ正式に発表していないためである。

今のところ王位継承権はアリシアにあるものとされており、急に現れたナナエを次代の王にするには、何かと面倒な手続きがある。

そのため、ナナエの処遇はとりあえず、客人扱いといったところなのだ。

「あーあ、帰りてえなあ……」

広い部屋に一人で食事をしながら、ナナエはぼつりと呟いた。

昼食をとってしばらくした後、王の使いがナナエを呼びに来た。大事な話があると言われて連れてこられた部屋には、王と王妃、数人の客人と思しき人たちと、ロディウスとヴォルフの姿があった。

彼らに気付いたナナエは、何か言いたそうにしていたが、人前でいきなり喧嘩を始める訳にもいかない。

ぐっと押し黙って席に着いた。

この部屋は議会議室のようになっており、部屋の中央に置かれた円卓を囲んで椅子が並べられている。

そこに座っているのは王たちと客人、ナナエだけで、ロディウスとヴォルフは部屋の隅に立っていた。

「遠路はるばるご足労いただき、ありがたく思っている」

皆を見渡して水王ダナンが口を開いた。

その姿はまさしく一国の主に対応しい、威厳に満ちたものである。そこに威圧感さえ感じ、ナナエは人知れず息を呑んだ。

「今回集まってもらったのは他でもない。昨今急増している『影』のことだ」

あらかじめ説明を聞いていないナナエは、訳が解らず、ただ王の話を聞いていた。

ここに集まった者たちは、既に会議の内容を承知しているらしく、誰も泰然と構え微動だにしない。

今この場で事態を理解していないのは、ナナエと、あとはヴォルフくらいだろう。

「その前に紹介しようか。急なことで私も驚いたのだが……先日まで行方不明になっていた、我が娘が発見された。

水の力を受け継ぐ者として、ここに列席させようと思う」

急に自分の話をされて、ナナエは王の顔を見上げた。

集まった客人の間にも、驚いたようにざわめきが起こる。

「ナナエ、こちらに来なさい」

王に呼ばれ、ナナエは席を立て王の隣に立った。

「彼らは各国の代表だ。皆精霊に愛されし者で、それぞれ国を支える立場にある。

あちらから順に、土の国の巫女アルテミシア殿。風の国の民ダル殿。火の国の戦士カーラ殿だ」

土の巫女はウェーブのかかった金の髪を揺らし、ナナエに微笑んだ。

風の民はどこか斜に構えた雰囲気、黒髪で目付きの悪い男だった。

火の戦士は、燃えるような赤い髪が特徴の少女だ。ナナエと同

じくらしいの年頃だろう。

だが順に紹介されても、ナナエにはまだ状況が把握できていない。

「この者は私の娘、ナナエという。此度の事件に関わった参考人と思っただきたい」

王はナナエのことをそう紹介すると、ナナエに席に戻るよう告げた。

ナナエは言われるがままに席に着く。

どうやら、あの影の事件に関係があるらしいが、とにかく今は話を聞いて情報を整理するしかない。

ナナエは黙って王の話に耳を傾けた。

「皆、存じておるように、最近になり影のようなモンスターが現れるようになった。過去にこのような記録はなく、新種のモンスターであると推測される。

生態については未だ正式な発表はされていないが、聖王国の精霊学者により、既に調査が進められているとのことだ」

これから続く長い話は、こうして始められた。

最初に影が現れたのは、地水火風の四大国の頂点に立つ、聖王国だった。

偶然その影を見付けたのが、聖王国に住む若き天才精霊学者、ヨハネストⅡダークである。

ダークは影の捕獲に成功し、たった一日にして影の性質を理解した。

ダークが捕らえたのは、小さな影の鼠だった。

影は月が沈むと消滅してしまった。

しかし影を瓶に閉じ込め、月の光を宿すと言われる月光石の側に置いたところ、影は月が沈み夜が明けた後も存在し続けたという。

ダークは、この新たなモンスターの研究を続けた。

月夜になるとモンスターを探して捕獲し、研究室に持ち帰っては実験に明け暮れる。

影を存続させる方法と消滅させる方法、影が生まれる条件はすぐに解明できた。

しかし、影が生まれた理由だけが理解できなかったのだ。

生命には、各々の役割がある。

大地に生える植物を草食動物が食べ、草食動物を肉食獣が食らい、肉食獣の死体を微生物が分解し、それを養分として植物が生える。

それは精霊が作り出した循環のシステム。
ここに当て嵌まらない生命はいないのだ。

しかし、この影は違った。

無作為に他の生命を襲い、破壊し、滅ぼす。
循環のシステムを断ち切り、命を消滅せしめんとする。

この世界を創った精霊は、何を思いこのようなものを生み出したのか？

ダークには、それだけが理解できなかった。

影は徐々に大きさ、狂暴さを増していつているようだった。

最初は鼠以下だった影も、今では人間と同じ大きさのもののさえ現れるようになっていく。

影を捕獲することも困難になってきたが、研究を止める訳にはいかない。

もしかしたらこの影は、世界に住まうすべての生命を滅ぼすために創られた、我々とはまったく別の存在なのかもしれないからだ。そんなものを、野放しにしておく訳にはいかない。

そんなある日、ダークは捕獲していた影が、硬質化していることに気付いた。

影の表面はぼろぼろと崩れ、中から親指程の大きさの、黒い宝石が現れたのだ。

調べた結果、それは月光石と同じ物質であることが判った。

しかし、月明かりのように仄かに光る月光石とは違い、その宝石光を宿さず、逆に光を飲み込んでいくようだった。

月光石の光を浴び続けた結果、影がこの宝石に変質したのか、元々影の中に入っていた核のようなものなのかは解らない。

ダークはモンスターの研究の傍ら、その宝石の研究も進めた。

しかし、ある日突然、その研究は中断させられることになる。

聖王からの使者が、ダークを捕らえたのだ。

ダークが何やら新種のモンスターを作り出し、それで聖王の命を狙っていると、何者かが密告したらしい。

もちろん、そんなことは虚偽である。

しかし、原因不明の病で床に臥した聖王は、その報告を信じ込んだ。

その謎のモンスターの呪いによって、病に冒されているのだらうと。

ダークは捕らえられ、その消息は途絶えた。
恐らく、既に殺されているのだらう。

しかし、ダークが研究していた影の宝石は、彼の助手によって持ち去られていた。

助手は精霊信仰が盛んな地の国に逃げ込み、その教会に助けを求めた。

精霊神祖教は各地に浸透しており、彼らは教会を通じてこの水の国に逃亡してきたのだ。

水王の取り計らいにより、ダークの助手はこの国で密かに研究を続けた。

その研究結果が、今日、ヴェヌスの領主から届けられたのだ。

今日、ヴェヌスから、王都に。

その言葉に反応して、ナナエはぴくりと片眉を跳ね上げた。

それはロディウスが持っていた、運び荷のことではないだろうか。

ナナエは気取られないように、ロディウスを注視した。

彼にはなんら変わったところは見受けられない。

ただ、隣に立つヴォルフが、妙におとなしいのが気になった。

「ここに研究結果をまとめた資料がある」

王がそう言って取り出したのは、数枚のレポートと、黒い宝石の入ったケースだ。

その宝石が、話に上がった影の宝石だろう。

「このレポートによると、初めて影が確認されたのは、二年も前のことらしい」

王のその言葉に、部屋にいた人々の息を呑む気配が伝わってきた。まさか、二年も前から影が生まれていたなど、思いもしなかったのだ。

ここに列席している者は、各国の代表とも言える人物である。その彼らが知らなかったということは、とりもなおさず、影の情報が隠蔽されていたということを示す。

聖王国で確認された影の存在を、外部に漏れないようにしていた。つまり、裏で手を回していたのは、聖王ということになる。

何かの考えがあつてのことなのか、それとも影の発生に聖王が関係しているのか。

当然ながらレポートには、聖王の真意までは書かれていなかった。

「聖王が二年前から病に罹り、その半年後に代替りしたのは、諸君らも知つてのことだろう。

聖王の病と同時に起きた影の発生。代替りの時期に前後して起きた、ダークの襲撃。

これらの出来事が関係している証拠はないが、無関係であるとも言切れん」

水王は難しい顔をして、一度言葉を切った。

皆、王の次の言葉を待っている。

「そこで今回、極秘に聖王の近辺を調査しようと思う。この召集に聖王国の使者を呼ばなかったのは、そのためだ」

ざわりっ、と室内にざわめきが起こる。

それもそうだろう、四大国の頂点に立つ、聖王国を疑っているのだから。

しかし、この時点で水王の話には疑わしい点はない。

それよりも、何故聖王国が影の発生のことを隠していたのか、こちらのほうが理解し難い。

水王は、各国から非難されることを覚悟の上で、このことを打ち明けた。

秘密裏にことを進めては、水の国に疑いがかけられる可能性もあるからだ。

水王は列席者を見渡し、口を開いた。

「何か、意見のある者はいるかね？ 私が知りえない情報を持っている者がいたら、この場で教えていただきたい」

皆は互いに顔を見合わせ、どう答えてよいものか悩んでいるようだ。

そんな中で、風の民ダルが手を挙げた。

「水王、聖王が代替わりしたのは一年半前だが、それに前後して、王宮で占術士を一人召し抱えたのはご存知かい？」

水王は眉をひそめて押し黙った。

しばらく黙考するが、該当する記憶はない。

「……いや、それは初耳だ」

風の民の情報網は広い。

風が届く範囲ならば、どんな音も風の精霊のものとなる。

しかも、風の精霊に愛されし者は、風の国に生まれた者全員なのだ。

力の差はあれど、誰もが風の力を持つ。

そのため、諸外国から密偵の真似事を依頼されることも多い。

その風の民ですら、聖王国で起こった影の発生を知らなかったというのだ。

やはり聖王国が何らかの目的で、故意に事実を隠蔽していたという可能性が高い。

そして、聖王の代替わりに前後して現れたという占術士。

その者が、事件の発端となっている可能性もあるということだ。

「現聖王は、その占術士をいたく気に入っているそうだ。

しかし、宮廷の中までは風も侵入できなかった。その占術士が黒幕なのかどうかは、確かめないといけないだろうな」

ダルはそう言って締め括った。

しかしその口調は、占術士が黒幕であると確信しているかのようだ。

「ですが、聖王国が事件を引き起こしているとしたら、いったい何のために？ 戦争を起こすにしては、事件の規模が小さすぎます」

口を開いたのは、地の巫女だった。

彼女の言うことはもつともで、影が街中で暴れたといっても、被害は然程大きくない。

それこそ、街の警備兵だけでも対処できるくらいだ。

第一、本当に影を生み出しているのが聖王国だとしたら、各国の街を襲う意味が理解できない。

聖王国は豊かな国だ。

戦争を起こす理由がない。

「黒幕なんて、本当にいるのか？　ただの偶然が重なっただけかもしれないじゃないか」

次に意見したのは、火の戦士だった。

彼女はあくまで、影は自然発生したもので、聖王の代替わりも占術士を召し抱えたことも、偶然時期が重なっただけだと言う。

彼らの言葉すべてに確信はなく、ただ可能性の話をしているにすぎない。

皆、国を背負って立つ者である。
軽はずみな行動はできないのだ。

「だが、確認は必要だ」

最後にまとめたのは、やはり水王だった。

「黒幕がいるにしろいないにしろ、聖王国が影の事件を秘匿していたのは違いない。

聖王が事件に無関係であるかどうかだけでも、調べた方がよいのではないか？」

水王の言葉に同意したのは、意外な人物だった。

今まで黙って話を聞いていたロディウスが、自ら一步前に出てきたのだ。

「ダナンの意見には賛成しよう。影の元を掴んでいるのが何なのか、充分に見極めた方が良い」

突然話に割って入ったロディウスに、皆驚いたように彼を見上げた。

ロディウスが獣人であることは、ここにいる列席者にはあらかじめ告げてあったのだが、まさか獣人が人間の国の出来事に興味を持つとは思わなかったのだろう。

よく見れば、ロディウスの手足には枷がはめられている。

まるで囚人のようなその姿に、ナナエは思わず立ち上がった。

「ロディウス！？ 何だよその枷……！」

ぢゃらん、と枷を繋ぐ鎖の音を響かせて、ロディウスはナナエに小さく手を振った。

「気にするな。獣人が人間の国で暴れないようにするための措置だ」

平然と言ったのけるロディウスに、ナナエはかっとなって叫ぶ。

「そ、そんなの、気にしない訳ないだろ！ だって、そんなの、人間の勝手で……！」

「黙りなさい、ナナエ」

ナナエを押し止めたのは、水王の重い声だった。
ナナエは渋々席に座り、膝の上で手を握り締める。

（獣人だってだけであの扱いかよ！ 冗談じゃねえ！）

やけにヴォルフがおとなしくしているのも、そのせいだったのだ。
彼は今、繋がれた枷を外そうとして、鎖を爪で引っ掻いている。
無論、その程度で外れる程、弱い鎖ではない。

「話は戻るが、聖王の調査、このロディウスⅡレザフォードに任せ
てもらいたい」

ロディウスはそう言うのと右手を胸に当て、腰を折って一礼する。
それはまるで紳士のような所作で、獣人は野蠻であると思い込んでいた皆を驚かせた。

「ロディウス、それは願ってもない話だ。だが、何故きみは協力してくれるのだね？ 何か見返りを期待しているのか？」

水王はロディウスが、任務を引き受ける代わりに、何か要求してくるのではないかと思っているようだ。

（ロディウスが、モノで動くような奴だと思ってるのかよ！）

ナナエは王に対する苛立ちを、胸の奥に封じ込めた。
今そんなことを討論しても、意味がない。

しかし、ロディウスは水王の言葉に気を悪くした様子もなく、いつも通り口許に笑みを浮かべて言った。

「そうだな、事件がすべて解決したあかつきには、獣人に対する意

識を改めてもらいたい。それくらい要求しても、バチは当たらないだろう？」

ロディウスの要求は、酷く困難なものだ。

獣人に対する差別の撤廃は、もう数年前から実施している。

にも拘らず、人々は未だ獣人を恐れ、見下し、遠ざけている。

それはロディウスにも解っているだろう。

それでもなお、望まずにはいられないのだ。

人間と獣人が、同じ社会で暮らせるその日を。

「……解った。それについては尽力しよう」

水王が静かに頷いたその瞬間、ロディウスは正式に水王配下の密偵として雇われたのだった。

闇の聖王——聖なる国へ——

その後の会議は影の対策について、あーでもないこーでもないと言われ延々話し合いが続く、退屈なものだった。

実際に影と剣を交えたナナエは、意見を求められたりもしたが、ほとんど答えられなかった。

影の出現を防ぐには、国全体を巨大な屋根で覆うか、夜の間ずっと皓皓と灯りを点しておくしかない。

それだけでは影の発生を防ぐのは不可能であり、今のところは市中警備の数を増やすくらいしか、有効な対策はとれないだろう。

結局は使用人が夕食の準備ができたと呼びに来たので、仕方なくお開きとなったのだが。

今回はナナエも、王と王妃、妹姫と共に食事をとった。

お世辞にも良いとは言えないテーブルマナーを披露しつつ、ナナエはようやく食後のお茶を流し込む。

こんなにも緊張した食事は初めてだ。

ナナエは夕食を食べながら、これまでの経緯を話して聞かせた。

王妃に求められたからである。

盗みを働いていたことはうまく誤魔化して、月の家でのことを沢山話した。

「そう、素敵な先生なのね。良かったわ、あなたを育ててくれたのがその方で」

王妃は始終穏やかに微笑み、ナナエの話を聞いていた。

ようやく再会できた娘の話を、一つも聞き逃したくないのだろう。

じつと耳を傾けている。

「是非お礼がしたいわ。ねえあなた、どうかしら？」

「そうだな、後で使いの者を送ろうか」

王妃も王も、月の家に好印象を持ってくれたようだ。

これで孤児院の経営も助かると、ナナエはほっと安堵の溜め息を吐いた。

（マジでロディウスの言った通りの展開じゃん）

こうも思惑通りになってくれると、王都に來た甲斐があったというものだ。

ここまで来るように仕向けられたことも、少しは許してやろうか。

しかし問題はこれからだ。

ナナエは城に住む気はないのだが、王妃の様子を見るに、ナナエを手元に置いておくつもりのようなのだ。

それは困るが、ここまで喜ばれると言い出し辛い。

ナナエは少し迷った後に、思い切ってその話を切り出してみた。

「あ、あの、それで、今後のことなんですけど……」

「今日の予定はもうないわよ。もっと話を聞かせてほしいわ」

王妃はナナエに優しい笑みを向ける。

……そんな顔をされると、益々言い辛いのだが。

「じゃなくて、オレ……いや私、今後はここで暮らすことになるんですか？」

遠慮がちに上目遣いで訊ねるナナエに、王妃はわずかに首を傾げた。

「何を言っているの？ 家族なのだから当然でしょう？ もう二度とあなたを離さないわ」

王妃はそっとナナエの手を取る。

彼女は我が子がいなくなったとき、酷く取り乱し、食事も喉を通らずに、目も当てられぬ程衰弱してしまったらしい。

ヴェヌスの領主館で見た記事を思い出し、ナナエは罪悪感に囚われた。

城に住みたくないというのは、ナナエの我が儘だ。

ただの我が儘で、また王妃を心配させるのは、間違っているのではないか？

ここで暮らすのが、本来のあり方だったのだから。

そう考えると、これ以上何も言えなくなってしまう。

ナナエは愛想笑いを浮かべて、王妃と妹姫にねだられるままに、昔話を語って聞かせた。

結局この日は、ナナエの気持ちを伝えることはできなかった。

夜も更けて、ナナエはようやく宛てがわれた部屋に戻れた。

あの会議以降、ロディウスたちの姿が見えないことが気になり、部屋まで案内してくれた女中に訊ねてみる。

「あの、サニア？ ロディウスとヴォルフって客人、いるよな？
どこにいるか、知らない？」

「名前を覚えていただけて光栄ですわ。
お二人ならば離れの客室です。姫様が気になさることはありません
わんわん」

女中はそう言って退室した。
ナナエは窓から外を見る。

この部屋の窓からは庭が見えるのだが、よく目を凝らすと、庭の
ずっと奥の方に古びた建物がある。

あれが『離れ』なのだろう。

なぜわざわざ離れの客室に通されたのか？
それはすなわち、体の良い隔離だ。

二人が獣人だから、なのだろう。隔離も、あの枷も。
途端に怒りが湧き上がる。

（国のトップがこんな扱いをするから、獣人に対する差別がなくな
らないんじゃないか！）

ナナエはバルコニーに続くガラス戸を開けて、そこから庭に飛び
降りた。

部屋は二階にあったのだが、ナナエは身軽に着地する。

この辺の身体能力は、泥棒稼業で鍛えたものだ。

誰にもみつからないように庭を駆け抜けるのも、ナナエにとって

はお手の物である。

すぐに庭の端にある離れにたどり着いた。

その中に、灯りが点っている窓がある。

ナナエは迷わずその窓に近付き、部屋の中にだけ判る程度に、窓を叩いた。

ガラスを叩く硬い音がしてすぐに、わずかに窓が開かれる。

「誰だ？ ……ナナエか？」

窓を開けたのはロディウスだった。

目が見えないはずなのに、何故ナナエだと解ったのかは、もうどうでもいい。

ナナエは窓越しにロディウスの胸ぐらを引っ掴み、トーンを押さえた低い声で言った。

「てめーこのロディウスっ！」

しかしここにきて、言いたいことを忘れてしまったのだった。なので、

「……この馬鹿っ！」

と、一応、小声で怒鳴りつけてみた。

「何でいきなり罵られてるのか解らんのだが……」

ロディウスの言うことはもっともだ。

しかし、何を言いたいのか忘れてしまったのだから仕方ない。

そもそもナナエが腹を立てたのは、ロディウスたちが酷い扱いを受けているからであって、その怒りの矛先がロディウスに向かうのは、少々おかしい話だ。

ナナエもようやくそのことに気付いたのだが、何故か足が勝手に

ここに向かってしまったのだから、仕方がないではないか。

「うっさい！ 何言いに来たのか忘れちまったじゃねえか！」

これまた理不尽な怒りをぶつけてから、ナナエはロディウスから手を離れた。

その手でロディウスを押し退け、窓から中に侵入する。

部屋の中は、少し埃っぽかった。

恐らく、昔は使用人が寝泊まりするのに使っていたのだろう。

客室と言うには、あまりに狭く質素だ。

「あれ、ナナエ？ 何しに、来た？」

ベッドの上で丸くなっていたヴォルフが目を覚まし、寝呆け眼をこすりながら首を傾げる。

その手足には、未だ枷が付けられていた。

見ればロディウスも同様、鎖で繋がれた手枷足枷をはめている。

動く度に、鎖が耳障りな音を立てた。

その音がなんだか、二人とナナエの間に距離を作っているようで、この城に来てから、理不尽なことばかりだ。

ナナエはぐっと手を握り締めた。

「その、枷。そんなの付けられて、悔しくねーのかよ？」

ナナエは怒ったような表情で、ロディウスの手枷を睨んだ。

突然訊かれたロディウスは、徐に枷に繋がれた鎖を引っ張ってみる。

「まあ、ちよつと邪魔だなあとは」

「そんなんじゃないって！」

こんな、隔離されて、鎖で繋がれて、まるでモンスター扱いじゃねえか！」

思わず声が大きくなって、ナナエは慌てて口を手で押さえた。

ヴォルフは突然大声を出したナナエに驚いたのか、完全に目を覚まして二人の許に駆け寄ってくる。

ナナエには、鎖の金属音響く度、自分と二人との距離が広がっていくような気がした。

だが、そんなことはただの杞憂に過ぎなかった。

ロディウスもヴォルフも、ナナエに向ける笑顔は今までと変わらない。

「……ナナエ、優しいな。ヴォルフ、ナナエ好きだ。にいつも、そうだな？」

「ああ、ヴォルフの言う通りだな」

ヴォルフは兄と手を繋いで、ナナエを見つめる。

ロディウスもナナエに優しく微笑んだ。

「なっ……何で、そんなの……馬っ鹿じゃねーの？」

ナナエは顔を赤くして、上ずった声で呟く。

どうして彼らは、こんな扱いを受けてもまだ、笑っていられるのだろうか。

ナナエだったら、憤慨して王様を殴り倒していたかもしれない。

しかし、よくよく考えればヴォルフはともかく、ロディウスがそんな短絡的な行動をする訳がないのだ。

そんなことをしたら、益々獣人の評判が悪くなってしまうだろう。それならば、多少の理不尽は我慢せねば。

そこまで己の感情を押さえ込んで、その上まだナナエに笑顔を向ける余裕があるなんて。

自分の幼稚さに腹が立つ。が、ここまで大人な態度ができるロディウスにも腹が立つ。

何故そう思うのか、自分の心理状態もよく理解できないままに、ナナエはロディウスとヴォルフ、二人の手を取った。

「オレ、こんな扱いやめるように、王様に頼んでくる」

「ほんとか？」

「やめろ馬鹿！」

期待に満ちたヴォルフと、驚いたように言うロディウスは、まったく対照的だった。

ヴォルフは枷を外してもらえるかもしれないと、単純に喜んでいただけだ。

しかしロディウスは、そう簡単に喜べない。

余計なことを言って、王の怒りを買うのは避けたいし、何よりナエに迷惑がかかる。

仮にも王族が獣人と懇意にしていると知れたら、国民からどう思われるか。

進言したナナエに処罰が下ることも、ないとはいい切れないのだ。

しかしそれでは、ナナエは納得できない。
どう考えても、この扱いは理不尽だ。

「なんだよ、人が親切で言ってるのにさ」

「こういう問題は、そんな簡単に解決するもんじゃないんだよ。人の意識を塗り替えるには、それなりの時間が必要なのさ」

すべてを悟りきったようなロディウスの言葉が、今のナナエには苛立たしい。

（一人だけ大人ぶって、やせ我慢すんじゃないよ！）

大人ぶるも何も、ロディウスは実際に大人なのだが、頭に血が昇ったナナエはそんなことも考えられない。

とにかく、理不尽を耐える姿勢でいるロディウスが苛立たしい。もっと素直になればいいのにと、ナナエはそう思うのだ。

「わあるかったな。どうせオレは短絡思考のお子ちゃまですよ。酷いよな、ヴォルフ。オレはお前らのことと思って言ったのにさ」

ナナエは手で顔を覆って泣き真似をしてみせる。

途端にヴォルフがナナエに抱きついてきて、キッとロディウスを睨み付けた。

「にい、ナナエ、泣かしちゃ、だめだ！」

「オレの味方はヴォルフだけだよー」

二人がかりで攻め立てられて、ロディウスは困ったように頭を掻

いた。

まさかナナエが、ヴォルフを味方につけるとは。放っておけば益々エスカレートしそうで、ロディウスは両手を上げて降参のポーズをとる。

「わかったわかった、悪かった。

……正直なところ、ナナエのその気持ちには感謝してるよ。ありがとう」

急に真剣な口調で言われて、ナナエは顔に血が昇ってくるのを感じた。

こうして改まって礼を言われると、なんだかものすごく恥ずかしい。

「お、おう。解ってくればいいんだよ」

ナナエは真っ赤になって、ロディウスから目を逸らした。

抱きついたままだったヴォルフを引き剥がし、ナナエは今し方入ってきた窓に向かう。

勝手に部屋を抜け出したことがばれるとまずい。そろそろ戻らなくてはいけません。

「じゃ、じゃあ、戻るよ。また明日な」

窓から外に出るナナエに、ヴォルフが手を振る。

ロディウスは苦笑いして肩をすくめた。

「何しに来たんだか。てっきり、『よくも騙したなコノヤロウ』とか、怒りに来たもんだと思ったんだがなあ」

「……あ」

その呟きを聞いて、ナナエはようやく思い出した。

そのことについては、一度きちんと文句を言ってやろうと思っていたのだが、今更怒り直すのもおかしいので、とりあえず気になったことだけでも訊いてみることにした。

閉めかけた窓を開けて振り返る。

「あのさ、あのときオレが戻らなかったら、どうするつもりだったんだ？」

「あのとき？」

「ほら、街を追い出されたあのとき」

顎に手を当て軽く首を傾げたロディウスは、ようやく思い至って頷いた。

「もし来なかったら、ヴォルフと二人だけで王都に行くつもりだったさ。元々、ナナエを騙して連れていくのには、反対だったんだ」

ロディウスの口から意外な言葉を聞き、ナナエは思わず目を瞬いた。

ロディウスはナナエの頭を優しく撫でる。

「サイマスは、本当の家族と一緒にいた方が幸せだろうって言ってたけどな、幸せは人それぞれだろ。」

だから、ナナエが本気で嫌がったら、ちゃんと事情を話して、サイマスには断りに行くつもりだった」

結果的にはナナエを騙すような形になってしまったが、ロディウスはナナエにきつかけを与えただけだったのだ。

王都に行かないという選択肢も、ナナエにはあった。

だが、最終的に王都に行くとしたのは、ナナエ自身ではないか。

ナナエはロディウスから目を逸らし、靴の先で軽く壁を蹴った。
自分の思慮の浅さを思い知らされた気分だ。

自分で選んだ結果を、他人のせいにするなんて。

そんなナナエに、今度はロディウスが問い掛けた。

「逆に訊きたいんだが、なんであのとき一緒に来ようと思ったんだ？」

あのとき、ナナエには一人でヴェヌスに帰ることもできたのだ。
それなのにロディウスを追い掛けて街を出たのは、単純に、あのまま二人と別れたくなかったからだ。

「……別に、深い理由なんかねえよ。ただ、もう少しくらい、一緒にいてもいいかなって思ってた……」

少しばかり恥ずかしそうに小声で喋るナナエに、ロディウスは静かに顔を近づけ、額に唇を落とした。

「ありがとな。なんだよ、可愛いところあるじゃねーか」

「んなっ……!」

額にとはいえ、いきなりキスされてナナエは茹で蛸のように真っ赤になる。

それを見ていたヴォルフが走り寄ってきて、ロディウスの横から顔を出した。

「ヴォルフも、やる！ ナナエ、顔出せ」

「やらんでいいっ！」

両手を広げて唇を尖らせるヴォルフにチョップをお見舞いしつつ、ナナエは逃げるようにその場から走り去った。

取り残された兄弟はしばし無言で佇んでいたが、ややあってヴォルフがロディウスの顔を覗き込んで言った。

「……じゃあ、にい、やって」

「へいへい」

可笑しそうに肩をすくめたロディウスが、ヴォルフにオヤスミのキスをする。

ヴォルフは満足そうに笑みを浮かべて、いそいそとベッドに戻っていった。

ナナエはというと、未だ赤みの引かない顔を冷まそうとして、部屋に戻った瞬間に頭から水を被っていた。

その後も中々寝付けず、結局眠れたのは明け方のわずかな時間だけだった。

そして翌朝。この日は、アリシア姫の聖誕祭前日ということで、城の中は忙しかった。

ナナエの部屋にも女中二人が押し掛けて、明日の衣装を選んでい
る。

「だーかーらー、オレは嫌だって言ってるの。そんな服絶対やだ！」

女中が選ぶドレスをことごとく拒否して、ナナエは椅子の上であ
ぐらをかく。

女中たちはほとほと困ったように、顔を見合わせた。

「ですが姫様、明日は大切な御祭ですので、きちんとした格好をし
ていただかないと」

どうしてもナナエにフォーマルドレスを着せたい女中は食い下が
るが、ナナエもはや意固地になってしまって、袖を通そうともし
ない。

とうとう女中が諦めて、一時退散することになってしまった。

一人でぼんやり庭を眺めていると、不意に部屋の扉がノックされ
た。

女中たちが戻ってきたのだろうか。

そう思って扉を開けると、そこに立っていたのは女中ではなく水
王だった。

「うへあっ！」

驚き奇妙な叫びを上げて後ろに飛び退るナナエを目で追いながら、
王は悠々と部屋に入ってくる。

チクられたのか？

ナナエの頭に咄嗟に浮かんだのは、その言葉だった。
しかし女中が王にそんな話するはずがないし、何より王もナナエを叱りに来た雰囲気ではない。

「ナナエ、話がある」

「は、はい！」

いくら父とはいえ、王と話をすると思うと、緊張して仕方ない。
ナナエは裏返った声で、直立不動のまま返事をした。

「私はきみに、娘としてここで暮らしてほしいと思っている。メルもそう望んでいる。」

しかしナナエ、きみの気持ちを確認しておこうと思ってね」

ナナエは王に椅子を勧めるのも忘れて、立ったまま話を聞いていた。

まさか、王の方からそんなことを言ってくるとは、思いもしなかったのだ。

「えっ、あ、オレっ……じゃなかった、わ、私は……私、は……」

今言わなければ、きっと城から出られなくなる。

そう思っただけでも、王妃の嬉しそうな笑顔を思い出すと、中々思った言葉が出てこない。

ナナエは口を閉ざして俯いてしまった。

王はそんなナナエを見つめてしばし黙考した後、そっとナナエの肩に手を置いた。

「突然連れてこられて、途惑う気持ちも解る。だからナナエ、私はなるべく早いうちに、きみの意思を知っておきたいのだよ」

会議の席で見せた威圧感を微塵も感じさせない、とても暖かく、優しい声だった。

ナナエは顔を上げて父を見る。

胸の中につかえていた思いを、すべて言ってしまう。そう思った。

「あのっ、すごく失礼なことだと思います。オレはとんでもない親不孝者だって、思います。

でもっ、オレの居場所はここじゃない！ 月の家の皆や、先生や、友達がいるあの街が、オレの居場所なんだ！」

話しているうちに、感情が抑えられなくなって、つい大きな声を出してしまう。

それでも、ナナエは止められなかった。

「家族として迎えてくれるのは嬉しいけど、でもオレはここに相應しくないから！

今は喜んでもらえてるけど、いつか呆れられて、嫌われたらって……

だったら、オレはここにいない方がいいって……そう、思っ……」

優しい父の顔を見たからだろうか。今まで誰にも言わなかった不安が、ナナエの口から言葉となって滑り落ちた。

月の家の子供たちやマリィ、友人のエナは、ありのままのナナエを受けとめてくれる。

しかし王族である父母は、王族としてのナナエを求めるのではないか。

そうすれば、教養のないナナエは、いずれ見放されてしまうのではないか。

仲間たちと別れるのが怖かった。

本当の家族に、見放されるのも怖かった。

それならば、いつそ家族に会わずに、今まで通り生活していた方が幸せなのではないか。

そんな思いが、ロディウスたちの枷を付けられた姿を見て、より一層膨れ上がった。

王は……父は体裁のために、彼らを他の人間と対等に扱わなかった。

ならば実の娘であれ、素養も教養もない自分は、いつか父母に限られる日がくる。

そんな風に思ってしまったのだ。

ナナエは溢れそうになる涙を無理矢理手でこすり、王に自分の気持ちをすべて伝えた。

王は黙ってナナエの話を聴き、何度も深く頷いた。

我が子の言葉を噛み締めるように、何度も、何度も。

「……そうか。ナナエの気持ちはよく解った。

私は、父親失格だな。きみの不安に、まったく気付かなかった」

そう言うと王は、自嘲気味に笑みを浮かべ、ナナエの頭を優しく撫でる。

「メルルとも相談しよう。これからのことは、その後でゆっくり決めればよい。それまでは、ナナエの好きなように生きなさい」

王の意外な言葉に、ナナエは驚いて目を瞬かせた。

「え……それって……」

ナナエが皆まで言い終わるよりも早く、水王ダナンは大きく頷いた。

今ナナエの目の前にいるのは王ではなく、我が子のことを第一に考える、優しい父親だ。

父はナナエに微笑みを向ける。

「ああ、ナナエの思うままに生きなさい。だが、アリシアの誕生日は、一緒に祝ってもらっていいかな？」

父のその言葉に、ナナエは笑顔で頷き返した。

笑みを浮かべたナナエの顔は、どこことなく父親に似ているようだった。

翌日の聖誕祭は、街を挙げての盛大な御祭となった。

ナナエはというと、ドレスも着ないで普段着のまま、城下町の露店で桃のシャーベットを買っていた。

女中の目を盗んで、部屋から抜け出してきたのだ。

妹姫の誕生を祝う祭といっても、ただのバースデーパーティーではない。

重要なのは、水精霊から祝福の言葉を貰う儀式だけなのだ。
アリシアは今、城の中にある祭壇に向かって祈りを捧げている。
水精霊からの祝福があれば、街中の水が白く輝くのだそうだ。
水路も噴水も、すべての水が。

街の人々は、単にお祭り気分を味わっているだけに過ぎない。
ナナエもアリシアに祝辞を述べに行くはずだったが、主役の
アリシアが祭壇から戻るまでは、まだしばらく時間がある。
それまでは、こうして街の中に紛れ込み、お祭り気分を満喫する
つもりなのだ。

ナナエが桃のシャーベットを舐めつつ城の近くを歩いていると、
不意にすぐ傍を流れていた水路が光った。

そこだけではない。街中の水が、輝きを帯びている。

途端に人々が歓声を上げた。
タイミングを見計らったように、城の庭の噴水が噴き上がる。
光の塔が立ち上ったようだった。

その幻想的な光景に目を奪われたナナエは、城の屋根に二つの人
影を捉えた。

ロディウスとヴォルフだ。

はしゃいで走り回るヴォルフを、ロディウスが必死に押さえてい
る。

目を凝らしてよく見ると、彼らの手足からは枷が外されていた。
ナナエは何だか嬉しくなって、自然と笑みが零れるのを感じた。

御祭の興奮も冷め遣らぬ夜、ロディウスはヴォルフを連れて城を
出た。

動物たちを通じて聖王の周囲を調べていたのだが、どうも聖王が抱え込んだ占術士とやら、人間の匂いがしないというのだ。

それ以上のことは動物たちでは解らず、直接聖王国に潜入することにした。

少ない荷物をまとめて城壁の門をくぐろうとした、そのときだ。

「ちょっと待てよ！」

頭上から聞き慣れた声が降ってきて、二人は驚いたように城門を振り仰いだ。

門の上の見張り塔から、ナナエが顔を出していた。

「にい、ナナエ！」

いち早くナナエの姿を見付けたヴォルフが、ロディウスの服を引っ張り嬉しそうに笑う。

「な……どうして……？」

ロディウスは驚きの方が先に来たらしい。

呆然と立ち尽くしている。

「二人だけで行くなんてずりーよ！ オレも交ぜろ！」

一方的に言い放ち、かなり高い位置にも拘らず、ナナエは一息に飛び降りた。

ナナエが落下してくる音を聞いて、ロディウスは咄嗟に受けとめようと手を伸ばす。

狙い違わず、ロディウスはナナエを抱きとめた。

「危ないだろ！ 何考えてんだ！」

「えへへへ」

叱られたのに笑うナナエを見て、ヴォルフは首を傾げた。

「ナナエ、にいに怒られたの、楽しい？」

地面に降りて、ナナエは「まさか」と首を振る。
べつに叱られるのが楽しい訳ではない。

「まったく、オヒメサマがこんなところについていいのか？ 早く
帰れ」

呆れたようなロディウスの言葉を遮り、ナナエははっきりと言っ
た。

「約束、守ってもらうから」

「は？」

ロディウスは訳が解らずに首を傾げる。
いったいいつ、どんな約束をしたというのだ。

ロディウスの心の中を読んだかのように、いつかロディウスが言
ったことを、今度はナナエが言葉にする。

「何処へだって連れ出してやるよって、言ってただろ？ 運び屋さ
ん？」

「あ……」

それを聴いて、ロディウスはようやく思い出した。

悪戯が成功した子供のよう、にんまりと笑ったナナエは二人の手を取る。

「ぐずぐずしてないで、しゅっぱーっ」

「わーい、ナナエ、一緒！」

「ちよっと待て！」

嬉しそうに笑うヴォルフと、困惑したように叫ぶロディウスと。実に対照的な二人を引き連れて、ナナエは聖王国目指して歩き始めた。

闇の聖王——潜入調査も楽じゃない——

聖王国までの旅は、概ね順調なものだった。

途中で野盗に襲われたり影に襲われたりモンスターに襲われたりしたが……まあ、そんなことは既に日常茶飯事なのである。

ロディウスは、道すがらナナエとヴォルフに事の顛末を説明して歩いた。

最初に影を発見した精霊学者、ヨハネストゥ・ダーク。

まだ年若い彼をサポートしていたのが、助手のガレット・ブランだった。

ロディウスは四年前にガレットに出会い、それ以来彼の家に転がり込んで、気が向いたときに手伝いなどをしていたのだ。

影の研究を始めて一年ばかりが経過したある日、ダークは聖王の使いの者に捕らえられ、ロディウスとガレットは、寸でのところで研究所から逃げ出した。

あまりに急な出来事だったため、研究資料を一部しか持ってこれなかったのは、不運としか言えない。

ダークは研究途中のものを秘密裏に処理することが多かった。

そのため、助手であるガレットでさえ、彼の研究のすべてを把握していた訳ではないのだ。

水の国中の街を転々としながらの研究は、難航を極めた。

何しろいつ追っ手が来るか解らないため、ひとつ所に腰を落ち着

けて研究に専念できなかったのだから、無理もない。

所々ページの抜け落ちたダークの研究書を復元するだけで、半年以上かかってしまった。

その間にも影は徐々に力と知恵をつけていき、今では集団で人々を襲うようになっていく。

同時に数カ所で影が目撃された例はないが、今後は各地で同時発生するかもしれない。

影の討伐を、害獣駆除協会に依頼もした。

しかし、公的機関で未確認であること、大きな被害が出ておらず危険度が低いことなどの理由で、討伐隊を動かすことはできなかったのだ。

ガレットが独自に研究を進めていたが、影を知れば知る程解らないことが多くなる。

まず、何故月光でできた陰からしか生まれないのか。

何故生物の陰からしか生まれないのか。

何故影自身に繁殖能力がないのか。

何故同時刻に複数箇所が発生しないのか。

解っていることは、生物が月光を浴び、それによりできた陰から影が生まれること。

そして、月光を遮るか、より大きな無生物の陰に入れば、影は消滅すること。

最後に、月光を浴びせ続ければ、かなり長期間活動できるということ。

それだけしか、現時点では解明されていないのだ。

影を生み出したのは聖王なのか、それともただの自然現象なのか。それを確かめるためにも、ロディウスたちは聖王国に向かっていく。

「……とまあ、そういうことだ。解ったか？」

ロディウスは簡単に説明を終え、ナナエとヴォルフに問い掛けた。

「なんとなくなら……」

ナナエは欠伸を噛み殺して曖昧に頷く。

話の途中で少し眠ってしまったなんて、言える訳がない。

ヴォルフはというと、理解しているのかいないのか、話を聞いている間ずっとにこにこしていた。

物語でも読んでもらった気分なのだろうか。

しかし頭の中が春爛漫なヴォルフは、ロディウスの話が終わると、一つ大きく頷いた。

「影な、月の精霊が、作ったんだぞ」

得意げに言って、笑みを浮かべる。

「月の精霊く？ 馬鹿、それはお伽噺だろ」

ヴォルフの言葉を否定したのは、眠そうなナナエの声だった。

月の精霊とは、文字通り月に住まう精霊のことである。

精霊神祖教の聖書にも少しだけ出てくるのだが、この世界を創った始まりの精霊の一つで、遙か上空に光の珠を創り、世界を厄災から守っているという話だ。

しかしそれは伝説の粹を出ないもので、月の精霊がいることも確認されていない上、月の精霊の力を宿した人間も、歴史上誰一人としていない。

そのため、月の精霊はお伽噺や伝説にのみ、姿を現す存在となったのだ。

「月の精霊は、この世界を守る存在なんだ。それがモンスターを作り出す理由が解らないな」

ロディウスもそう言って笑う。

月の精霊の話は獣人の間にも伝わっており、二人も幼い頃に親から聴かされたのだ。

ただ、人間に伝わる話と違うのは、月の精霊は実在しているということだった。

月が夜空を照らすのは、月の精霊が輝いて、世界を暗闇から守っているからだ。

ロディウスとヴォルフはそう聴いていた。

「まあ、月の精霊が本当にいるのかいないのかは別として、月の光に何か力が宿ってるってことじゃねえの？」

それで、その力が何か変な風に働いて、影ができたよ」

たぶんそうだ、と自信満々に言うのはナナエだ。

話しているうちに目が覚めたのだろう。
椅子の上に胡坐をかいて座り、おやつに買ったビスケットを頬張る。

「違う。月の精霊、怒ってるから、影できるんだ」

ヴォルフの反論を軽くないし、ナナエはビスケットの袋を持って立ち上がる。

自分の部屋に戻って寝るつもりなのだろう。

ここは水の国と聖王国の境にある村の、小さな宿屋だ。

客はナナエたちしかない。

街を歩き、馬車で野を越え、渡し舟で川を下り、ようやく聖王国の入り口にたどり着いたところか。

ここまで来るのにも三日はかかったが、ここから聖王国の首都ヘリグまでは、かなりの距離がある。

だが、聖王国は広大な国土を有しているが、どんな小さな村でも道が整備されて馬車が走っているため、時間は然程かからないだろう。

問題は、どうやって王宮内を探るかである。

王宮勤めの者から情報を聞き出すか。

しかし余所者に、そう簡単に口を割るとは思えない。

王宮に潜入するか。

だが見付かる恐れがある。なるべくリスクは避けたい。

有効な手段も思いつかないまま、ナナエたちはついに、聖王国首都ヘリグにたどり着いてしまった。

「ざっと見てきたけど、警備は嚴重だわ夜でもがんがん松明点けるわで、忍び込む隙なんかねえぜ？」

偵察から帰ってきたナナエが報告する。

盗人のスキルを身に付けていたことが、こんなところで役に立つとは思わなかった。

大きな建物程、侵入経路は多くなる。

窓や扉の数にしても普通の民家より多い上に、屋敷の広さに警備兵の数が追い付かなくなるからだ。

侵入者は大抵、見回りの合間の無人空間を狙う。

しかし流石は聖王の居城といったところか。

入り口という入り口には警備兵を常に配置しており、巡回の兵士の数も並ではない。

窓など当然鍵が掛けられているだろうし、城門から敷地内すべてに松明を点しているため、闇に乗じて潜入するなど不可能だ。

たった一つの死角といえば屋根くらいだろうが、そもそも空を飛ばない限り屋根にたどり着くこともできない。

そうになると、必然的に潜入できる人員は限られてくる。

翼を持つ獣人ロディウスならば、上空から屋根に降り立ち、窓から中に入れるだろう。

ここで問題なのは、ロディウスには窓の鍵を外す技能がないということだ。

ナナエならば簡単な鍵を外すことはできるだろうが、そうするとヴォルフを一人で街に残すことになってしまう。

実を言うと、それが何より不安だった。

以前よりは人間社会を理解してきているといっても、まだまだ幼児レベル。

とても一人で留守を任せられない。

そうになると潜入方法は二つしかない。

ロディウスがナナエを屋根に運び、ナナエに中の様子を探ってもらうか、三人一緒に潜入するか。

ロディウスは考えた末に、この方法をとった。

正門が、わずかに軋んだ音を立てて開かれる。

足音を呑み込む程に分厚い絨毯の上を歩き、ナナエとロディウス、そしてヴォルフは、王宮の中に立っていた。

忍び込んだ訳ではない。

その証拠に、使用人たちが彼らを出迎えている。

ロディウスは客人として、正面から王宮に入り込む方法をとった。鳩を使って水王に手紙を送り、紹介状を書いてもらったのだ。

お陰で王宮には苦もなく潜入できた。

しかし、客として滞在できる期間は、そう長くない。

その間に、聖王と占術士について調べなければならなかった。それでも危険を冒して侵入するよりは、余程堅実な手段であろう。ホールに着いた彼らを、大臣が出迎えに来た。

「お初にお目にかかります。私は主に外交を任されており、カ

ズールと申します。遠路遙々、ようこそおいでくださいました」

壮年の男は丁寧な頭を下げた。

ロディウスが一步前に出て、こちらでも深々と礼をする。

「突然の訪問で申し訳ない。生を司る者の代表を務めるロディウス
||レザフォードという。聖王の慈悲深き配慮に、深く感謝の念を申
し上げる」

そう言つてにこやかに握手などしている。

獣人の代表が、和平交渉に訪れた。

そういうシナリオになっているのだ。

見栄えの良い服を新調し、いかにも種族の長といった格好をして
いる。

ナナエとヴォルフは、彼の付き人という設定だ。

演技とはいえロディウスの堂々とした態度に、ナナエは感心する
ばかりだ。

実はナナエを水の国王位継承者として、代表に担ぎ上げようかと
いう意見もあったのだが、ナナエがあまりにも大根役者だったため、
こちらのシナリオを選んだのだった。

姫らしく、しとやかになんて、自分には無理だ。すぐにばれるだ
ろう。

彼女が演技テスト前に言っていた言葉通り、無理なものは無理だ
った。

王宮へ紹介状を持っていったところ、聖王は快く彼らを迎え入れ

てくれた。

しかし公務が忙しいらしく、正式に会えるのは四日後になるという。

それまでは王宮に滞在しても構わないとのことなので、このチャンスに逃す訳にはいくまい。

「ところでカズール大臣、滞在している間に、ぜひ王宮の中を見学させていただきたいのだが」

「はあ、見学ですか？」

大臣は、ロディウスの目を覆う黒い布を見ているようだ。

盲目のロディウスが王宮内の見学をしたいと言うのは、少し無理がある話だろう。

しかし、それに対する言い訳も考えてある。

「ええ。こちらは弟のヴォルフ。近い将来、代表の座を譲ろうかと思っている。ほら、目がこんなでは、色々と支障があるのでね。

それで、見聞を広めるためにも同行させた訳だ。王宮の見学というのも、弟に人間のことを知ってもらいたいからなのさ」

あらかじめ考えておいた文章を、つらつらと並べ立てる。

一応、辻褄は合うようにしてある。

大臣は疑うことなく納得してくれたようだ。

「そうでしたか。そういうことでしたら、後程案内でも付けさせましょう。

それにしても……」

大臣がちらりとヴォルフを見る。

一瞬緊張が走るが、それは杞憂だった。

「弟君に跡を継がせるとは、お世継ぎはいらっしゃらないのですか？」

「……ああ、生憎と。しかしいたとしても、世襲制ではないのでね。人間社会と違って、完全実力主義なもので」

ほがらかに談笑しつつ、大臣は彼らを客室に案内する。

多少冷や汗が出たが、ひとまずは何事もなく王宮の潜入に成功したと言えるだろう。

本番は、ここからだ。

「っあー、疲れる」

客室に入った途端、ナナエは椅子に座って伸びをした。

水の国の城でも緊張したが、こちらはもっと緊張する。

何しろスパイの真似事をしている訳だから、ばれたら首が飛ぶ可能性もあるのだ。

与えられた部屋の中でしか、リラックスできない。

「あんまり大声出すなよ。外に聞こえたらどうすんだ」

そう言ってたしなめたのは、ナナエの向い側に座っているロディウスだ。

べつにロディウスがナナエの部屋を訪ねてきた訳ではない。

任務の都合上、三人一緒に部屋を用意してもらったのだ。

しかも、普通の客室では狭かったので、三人に用意されたのはスイートルームだ。

この部屋にある調度品一つで、家が一軒買えるくらいの値段はするだろう。

ヴォルフには、絶対に部屋の物に触るなど、釘を刺すのも忘れない。

「でもさ、よく一緒に部屋にしてもらえたよな。オレ、付き人つっても女なのに」

行儀悪くテーブルの上に足を乗せながら、ナナエは幾分声を抑えて呟いた。

「ああ、全員家族って設定にしたから」

じゃれてくるヴォルフをあしらいつつ、ロディウスはあっけらかんと言う。

ナナエはそんなロディウスを見ながら、椅子の背もたれに体重を掛けて傾けた。

「家族う？ 何、オレ、ロディウスの妹ってことになってんの？ 無理すぎんだろ」

確かに、ナナエを妹と偽ることは不可能だ。
しかし、今回は三兄妹という設定ではない。

「だから、ナナエは獣人の長のハートを射抜いた麗しの女剣士って設定な」

「は……っ!？」

ロディウスの説明を聞いたナナエは、危うく椅子ごとひっくり返りそうになった。

まさか、そんな裏設定がなされていたとは。

王宮に来る前に聞いた説明では、そんなこと一言も言っていなかったのに。

「だって、最初に言ったら断るだろ」

「そーだけど、何で……っ!」

「ナナエ、にいの、嫁?」

「違うっ!」

確かに、最初に聞かされていたら断ったかもしれないが、いくらなんでもその設定はないだろう。

未だかつて人間の男性とも付き合ったことがないのに、いきなり獣人の男の恋人役だなんて。

いや、これは差別的発言という訳ではなく、ただちょっと心の準備が……って、ちょっと待て。

家族設定ということは、恋人役ではなく妻役ということか?

いやいやいや、そんなの無理だって……

「ナナエ、顔、赤い。病気?」

「ぬぁんでもないっ!」

真っ赤になった顔を隠すように両手で頬を押さえ、ナナエはヤケクソ気味に怒鳴った。

一応、外に漏れないように声を抑えていたのは、褒められるべきことだろう。

ともあれ、前途多難ではあるが、潜入調査はこうして開始されたのだった。

「……とは言っても、そう簡単に証拠が見付かるはずねーよなあ」

疲れたような顔でナナエは呟いた。

ロディウスが王宮内の見学をしたいと言ったため、翌日から執事が一人、案内役として部屋にやってきた。

そこまでは良かったのだが、ロディウスは代表として演技していなければならぬため、案内役の側を離れる訳にはいかない。

自由に動けるのはナナエとヴォルフの二人だが、ヴォルフには何が怪しくて何が怪しくないのかが理解できない。

実質、調査はナナエが一人で担当することになったのだ。

迷った、はぐれたなど、適当に理由をつけて誤魔化してはいるが、それも三日が限界だ。

今日も目ぼしい情報は手に入らず、部屋の前まで送ってくれた女中と別れて、ナナエは軽く溜め息を吐いた。

明日は聖王との会見の日だ。

こうなったら、聖王本人に直接探りを入れるしかない。

それはロディウスに任せよう。

ナナエは心の中でそう結論付けて、部屋の扉を開いた。

「ただいまー。今日もダメだ……た……」

ナナエの声は途中で途切れた。

部屋の中に、歌が聞こえる。

窓から入る緩やかな風に合わせ、穏やかなメロディーの子守歌が。

そっと歌の聞こえる方に足を向ける。

寝室でベッドの脇に座り、小さな声で歌っていたのはロディウスだった。

しばらくその歌に聞き入っていたのだが、彼はナナエの気配に気付いたらしく、途中で歌うことを止めて振り返る。

「ナナエ、戻ってたのか。声かけてくれれば良かったのに」

歌を聞かれたのが恥ずかしいのか、少し照れ臭そうに笑う。

「いや、邪魔しちゃ悪いかなって。

……歌、上手いじゃん。誰に習ったんだ？」

気持ち良さそうに眠るヴォルフを起こさないように、ロディウスは静かに立ち上がった。

寝室を出てから、ナナエに答える。

「昔、ヴォルフの母が歌ってたのを聞いたただけだ。習った訳じゃないさ」

そう言って、懐かしそうに口許を綻ばせる。
その顔を見て、ナナエは不思議と胸の奥に、小さな棘が刺さった
ような違和感を感じた。

ロディウスが自分たちのことを語る機会は少ない。
自分からは話そうとしないし、訊かれても何かと理由をつけては
ぐらかす。

ヴォルフにも訊いたことはあるが、昔のことはあまり覚えていな
いそうだ。

山火事のショックで、記憶が曖昧らしい。

ナナエは、この獣人の兄弟のことを、ほとんど知らないのだとい
うことを、改めて認識した。

「……なあ、もっと教えろよ、ロディウスの昔のこと」

「何だ？　また突然……」

急にナナエにねだられて、ロディウスは困惑したように身を引い
た。

いつもこうなのだ。

過去を訊ねる素振りを見せると、ロディウスは話すのを拒む。

ナナエも、あまり昔のことは語りたくない。

誰だって、秘密にしておきたいことがあるのも解る。

それでも、知りたいと思っただのだ。

「いいじゃん。オレたち夫婦って設定だろ？　もし訊かれて、答え
られなかったら怪しいじゃん」

もっともらしい理由で迫られては、ロディウスも断る訳にはいかなかった。

少し躊躇った後に、彼は少しずつ語りだした。

獣人は、一つ処に留まって一生を終えることはない。

数年毎に住む場所を移動し、家族単位の群れで生活する。

ポトの山に住み着いたのは、ヴォルフが生まれてすぐのことだった。

その四年後、ポト山の半分が火事で焼け、家族の半分はそこで命を落とした。

ロディウスは両の目を失い、ヴォルフは母を失った。

ヴォルフに至っては、助け出されてからもしばらくは意識が戻らず、目が覚めたときにはほとんどの記憶を失い、赤子同然だった。

遺された者もひどい火傷を負っており、住み家を移動するような長い旅はできなかったのだ。

ひとまずはまだ焼けていなかった、山の反対側に避難した。

結局そこで十年以上暮らすことになったのだが、その間に群れのリーダーが交代した。

父から、兄へ。

新しく家族をまとめる兄は、実力主義である獣人社会を体現するような男だった。

盲目というハンデを背負ったロディウスは、群れに居られなくなり、一人で山を下りた。

子供のうちは庇護されるが、大人になればそうはいかない。
獣人は十八歳で成人する。

ロディウスも、十八歳になったと同時に、山を追い出されたのだ。
その後ガレットに拾われ、人間社会の様々な知識を覚えてもらった。

人間に交じって生きていく。

ロディウスはそう決めたのだ。

あれから群れがどうなったのか、ロディウスは知らない。
しかし、ヴォルフが一人でポト山に残されていたことから考えて、
群れは既に別の土地に移動したと思われる。

きっとどこか、遠い国に旅立ったのだろう。

彼らに会うことは、二度とない。

「どこかで元気にやってるなら、それでいいさ。ま、あの兄たちが
くたばることなんて、ないだろうしな」

小さく笑って、ロディウスは話を終えた。

いつの間にか夜もすっかり更けて、蠟燭も大分短くなっている。
窓から入ってくる風が、肌に冷たい。

夜着からむき出しの二の腕をさすり、ナナエはじっとロディウス
の顔を見つめていた。

ロディウスは笑っているけれど、その本心はナナエには読み取れ
ない。

奴は今までだって、ああやって笑いながら本当の心を隠してきたのだから。

ヴォルフならば解るのだろうか。

ロディウスが今、何を考えているのか、その心に何を思っているのかを。

（悔しいな……）

もっと前に出会っていたならば、己にも理解できたかもしれないのに。

ナナエはテーブルの上に置かれたロディウスの手に、自分のそれを重ねた。

蝋燭の方に顔を向けたままだったロディウスが、わずかにナナエへと顔を向ける。

「話してくれてありがと。ごめんな、なんか無理に話させちゃったみたいで……」

愛想笑いを浮かべようとして、失敗した。

笑っているのか怒っているのか悲しんでいるのか、判らないような顔になってしまったが、ナナエがそんな表情をしていることに気付く者は、ここにはいない。

案の定、ロディウスはいつも通り笑いながら首を振った。

「いや、気にすんな。それより、大分風が冷たくなったな。もう遅い時間だろ、早く寝ようぜ」

ロディウスは立ち上がり、慣れた手つきで窓を閉める。

蝋燭を消して、ナナエは隣の寝室に入った。

ヴォルフは起きる気配もなく、ベッドの端で背中を丸めて眠っている。

ナナエと同じく、狭い処で眠る癖でもついているのだろうか。

「あ、なあなあ、さっきヴォルフに歌ってた子守歌、聞かせろよ」

自分のベッドに潜り込み、ナナエは隣のベッドに腰掛けるロディウスに言った。

ロディウスは苦笑いして断ろうとするのだが、ナナエはどうしても譲らない。

「こんなの聞いて、変な夢見ても知らんぞ」

「いいから、早く歌えほら」

最終的には、押しに弱いロディウスが負けるのだ。

彼は小さく溜め息を吐き、徐に口ずさむ。

不思議な音律の歌だ。

風に揺れる篝火のように。清らかな水の流れのように。大地に芽

吹く草花のように。

どこか懐かしい、生命の、歌。

いつの間にか眠ってしまったナナエに、布団を掛け直してやる。そのとき指先がわずかにナナエの頬に触れて、ロディウスはびくりと手を引っ込めた。

先程ナナエに話した過去は、ロディウスのすべてではない。
まだ話していないこともあるし、虚偽で秘したこともある。
言える訳がない。自分のちっぽけな矜持を守るためには。

それでも、ナナエにはいずれすべてを話すときが来るだろうと、
ロディウスは予感していた。

彼女ならば、本当の自分の姿を知っても、受け入れてくれるよう
な気がしたから。

或いはそれは、そうあってほしいと思う、都合の良い己の願望な
のかもしれない。

ナナエと出会ったとき、最初は手のかかる妹が増えたようで、共
にるのが楽しかった。

だが今は、現在感じているこの気持ちは……

「共に居たいと願うのは……やっぱそういうこと、なのかねえ」

誰にともなく呟いて、ロディウスはそっとナナエの額に口付ける。
途端にナナエが寝返りを打った。

ロディウスは慌てて、しかし彼女を起こさないように静かに離れ、
いそいそとベッドに潜り込んだ。

闇の聖王——占術士の正体——

翌朝は、三人そろって目が覚めた。

「おはよー」

「おう。あー、なんか……」

「夢でも見たのか？」

まだ眠そうに目をこするヴォルフとナナエを余所に、ロディウスはさっさと身支度を整える。

一番寝起きが良いのはロディウスだ。

ほぼ同時に起きたはずなのに、ナナエがようやくまともに覚醒する頃には、既に顔を洗って着替えている。

この差は何なのだろうか？と疑問に思いつつ、ナナエもベッドから降りて行動を開始した。

ちなみに、ヴォルフはまだ寝ぼけた顔でぼんやりしている。

朝はとことん弱いらしい。

今日は聖王と約束していた会見の日なのだ。

この城を調査する最後のチャンスである。

聖王から聞き出すか、もしかしたら直接占術士本人に会えるかもしれない。

まあ、その辺の交渉はロディウスが上手くやってくれるだろう。

つつがなく朝食を終え、三人は会見のために用意された部屋へと乗り込んだ。

その部屋は、やや奥まったところに設けられていた。外からの襲撃に備えてのことなのか、或いはロディウスたちの目的を知っていて、外に逃がさないためなのか。

部屋に通され待つことしばし。

供の者に連れられて、聖王が扉をくぐり現れた。

初めて聖王の姿を見たナナエは、目を疑った。

そこに現れたのは、どう見ても二十代前半か、まだ十代と言っても通じそうなくらい若い男だったのだ。

黒い髪に黒い瞳、着ている礼服も暗色のものばかりで、病的に白い肌がとても目立つ。

この貧弱そうな男が、各国の頂点に立つ聖王などと、言われなければ解らないだろう。

「やあ、お待たせしてすまないね。僕が三十二代目聖王、クリストフⅡエルⅡドⅡルーナーです」

聖王は丁寧に腰を折って挨拶し、席に着いた。

物腰は柔らかで、穏やかな声が周囲に安らぎを与えるような人物だ。

だが、彼の声を聞いたロディウスは、一瞬だけ驚いたように息を呑んだ。

ナナエとヴォルフはロディウスの様子に気付き、ちらりと彼を盗み見る。

彼らの正面にいた聖王も、ロディウスの表情の変化に気付いたのだろう。

不思議そうに首を傾げる。

「僕は何か、気に障るようなことを言ったかな？」

その言葉に、ロディウスは慌てて首を振った。

「いや、すまない。知り合いの声に、とてもよく似ていたものだから……」

咄嗟に誤魔化すことはできたが、ロディウスにはどうしても、引っ掛かることがあった。

聖王の声に、聞き覚えがある。

だがその声は、大分前に消息が途絶えた、あの人物の声なのだ。

同じ人物であるはずがない。ただ、声が似ているだけだ。

ロディウスは無理矢理そう思うことにして、聖王に挨拶を返した。

「この度は、わざわざ時間をとっていただき感謝している。

生を司る者の代表、ロディウスⅡレザフォードという。貴公らが獣人と呼んでいる者だ」

右手を胸に当てて頭を下げる。

そのロディウスを見て、聖王は上品に微笑んだ。

「レザフォード……獣人でも最も強い群れの名だね。先代の名は確か、グレイズⅡレザフォードだったかな」

その聖王の言葉に、今度こそロディウスの表情が固まった。隣でそれを見ていたナナエにも、知らず緊張が走る。

あのロディウスがこんなに緊張している姿を見るのは、初めてだ。だから自分もつられて緊張してしまっているのだろうか。だが、この不安は何だ。聖王の言葉に、言い知れぬ不安を感じるのは……

そう感じていたのは、ナナエだけではないようだ。ロディウスは勿論、鈍いヴォルフさえ、表情を固くしている。

ナナエは必死に考え、そして気付いた。

（なんで、聖王が獣人の先王の名前を知ってるんだ？）

「随分、詳しいようで……誰から聞いた？」

かすれた声でロディウスが訊ねる。

聖王は、笑みを崩さずに一層目を細めた。

「僕は、何でも識ってるんだよ。優秀な占術士がいるからね」

そう言った直後に、奥の部屋に続く扉が小さく開いた。

ゆつくりと、音もなく開くその扉の向こうから、フードを被った一人の男が姿を現す。

あれが、噂に聞いていた占術士なのだろうか。

顔はフードに隠れてよく見えないが、かなりの大男である。

ナナエがその男の姿を確認したと同時に、ロディウスが勢い良く席を立った。

はずみで椅子が後ろに倒れる。

見ればヴォルフも、驚いたような顔で腰を浮かせていた。

「どうしたの？ 知り合いだった？」

そんな二人の様子にも変わらぬ笑みを浮かべたままで、聖王は朗らかに尋ねる。

ナナエにもようやく、この聖王が普通ではないことに気付いた。

聖王は、明らかにロディウスたちの態度を愉しんでいる。

ナナエは思わず腰に手を伸ばし、そして部屋に剣を置いてきてしまったことを思い出した。

和平交渉のための会談ということだったため、そもそも剣など持つて入れなかっただろう。

今更過ぎたことを悔やんでも仕方ない。

もしここで騒ぎになったら、素手で切り抜けなければ。

ナナエはすぐに立ち上がれるように、足に体重をかけて、わずかに上半身を沈めた。

その間にも、ロディウスとヴォルフの緊張は高まっていく。

「なんで、こんなところに……」

「に……」

二人の呟きが聞こえる。

その声に滲んでいるのは動揺と、恐怖。

聖王の顔が、歪んだ笑みを形作った。

「先程の質問の答えだけど、彼から聞いたんだ。レイオンⅡレザフ
オードにね」

聖王の言葉が終わらないうちに、ロディウスは迷わず踵を返した。ナナエとヴォルフの腕を掴み、強引に立たせる。

「ヴォルフ、開けろ！」

ロディウスは弟を前に押し出し、ヴォルフはその勢いを利用して、通路側の扉を、扉の前に立っていた警備の人間共々蹴り開けた。

占術士がフードを脱ぎ捨てたのは、丁度その瞬間だった。

ロディウスに引きずられるようにしていたナナエは、その一瞬で占術士の顔を見る。

黄金の髪、褐色の肌、尖った耳に、黄金の目。

間違いない。

獣人だ。

レイオンⅡレザフォードと呼ばれた占術士が足を踏み出す前に、ロディウスに手を引かれながらナナエは部屋の外に出た。

そのまま通路を疾走する。

ヴォルフも、ロディウスも、後ろを振り返らずに走っていく。

何も理解できなかったが、これだけははっきりと解った。

彼らは、逃げているのだ。あの獣人から。

「ヴォルフ、外へ！ 窓を壊せ！」

ロディウスの声に従い、ヴォルフは通路の突き当たりにある窓を蹴り割った。

その勢いのまま外に出る。

しかしそこは地上から遙か上、王宮の六階の窓だった。
当然ヴォルフは下に落ちていく。

その後を追って、ロディウスがナナエの手を引いたまま、窓から飛び出した。

「ちょ……っ！」

ナナエが制止させる間もなく、二人の身体は宙に踊る。
落ちる！ と思った瞬間、ロディウスの姿が変化した。

人の姿から、鳥の姿へ。

反射的に、ナナエはその背にしがみ付く。

ロディウスは鉤爪の付いた足を使い、ヴォルフを空中で捕まえた。

二人を抱えてなお、風の如きスピードで、一羽の隼は宙を駆ける。
王宮は見る見る遠ざかり、街のざわめきも聞こえなくなった。

ロディウスは、馬車で三日はかかる道のりを、半日もしないうちに駆け抜けた。

しかし流石に二人を抱えて飛び続けるのは疲れたのか、彼は人気のない森の中に降り立った。

「に、大丈夫？」

ヴォルフが心配そうに訊ねる中、ロディウスは人の姿に戻り息を整える。

「ああ……それより、早くここから離れるぞ。ナナエ、ここから一番近い国はどこだ？」

「えっ、ここからだ……水の国だけど」

「そうか。行くぞ」

ロディウスは短く言って歩きだした。
ヴォルフも後に続く。

事態を飲み込めていないナナエは、少し遅れて二人の後を追いつけた。

ロディウスはまっすぐ東に歩いていく。

動物の中には、目を閉じていても方角が判るものがあるというが、獣人にもその能力はあるらしい。

やや急ぎ足の二人に引き離されないように、ナナエは必死に足を動かした。

「な、なあ、いったい、何がどうなってんだよ？ あいつ、何だったんだ？」

事情を知らないままでは今後の行動に支障が出る。

そう判断したナナエは、歩きながらもロディウスに説明を求めた。

歩く速さは緩めぬままで、ロディウスは口を開く。

「あの占術士は、レイオンⅡレザフォード。父に代わって群れの長になった、一番上の兄だ」

そう言ったロディウスの顔は、心なしか青ざめて見えた。

何故、レイオンが聖王の許にいるのかは解らない。

しかし、聖王の口振りからすると、あの二人が協力関係にあるのは間違いない。

だとすれば、一連の事件の犯人は、占術士ではないことは確かだ。

いくら謎の多い獣人とはいえ、影を生み出すような技術は伝わっていないからだ。

それはロディウスが保証する。

そしてもう一つ、解ったことがある。

あのとき聞いた聖王の声。

ロディウスにはあの声に聞き覚えがあった。

あれは、精霊学者ヨハネストⅡダークのものだ。

「ダークって……捕まったんじゃないのか？　それがなんで、聖王になってんだ？」

ロディウス話を聞いていたナナエが、驚いたように声を上げた。
ロディウスにもその理由が理解できないらしく、「わからない」と言って首を振る。

「くそ……ガレットがいれば、顔が判別できたのによ……」

珍しく乱暴な声で呟く。

ダークも黒髪黒目だが、それは然程珍しい色ではない。

聖王国にも、少し南の方に行けば、同じような髪や目の色をした人間が沢山いる。

元より盲目のロディウスは、ダーク本人の顔も見ることがない。
ダークの人相は聞いたことがあるものの、ナナエから聞いた話だけでは、聖王とダークが同一人物かどうかは解らなかった。

しかし、水王に報告だけはせねばなるまい。
三人は水の国の王都を目指し、先を急いだ。

黙々と水の国の王都に向かい、歩み続ける。
ロディウスは体力が回復すると、二人を抱えて空を駆けた。
地を歩くより、休憩しながらでも空を飛んだ方が早い。

日が沈みかける頃には、水の国の国境にたどり着くことができた。
追っ手がないことを確認し、ロディウスは半獣化を解いて地に降りた。

「ここまで来れば、一安心かな……」

疲れの滲んだ声で呟き、大きく息を吐く。
そのとき、近くの茂みががさりと揺れた。
三人はぎくりと身を竦ませて振り向く。
しかし、そこから出てきたのは追っ手ではなく、見覚えのある顔だった。

「や、やっと思付けた……」

「あんた……」

ナナエは彼の顔を見て、あっと口を開いた。
彼は水の国の城で会った、風の国の民だったのだ。名前は……

「ダムだっけ？」

「ダルでス」

その目つきの悪い男は、がっくりと項垂れた。

「風に呼ばれたんだ。聖王国からお宅らが帰ってくるから、迎えに行けってさ」

ダルはあれからずっと、水の国に身を置いていたらしい。
ガレットの護衛役であるロディウスが国を離れてしまうため、その代わりに残ったのだそうだ。

三人は今、ダルと共にある街を目指している。
そこにガレットがいるので、ひとまず彼に会い、聖王の正体がダイクなのかどうか確認しに行くことにしたのだ。

しかし自然が豊かな水の国だけあって、街に近付くまでしばらくは森の風景が続く。

追っ手が来るのではないかと背後を気にしながら、彼らは足早に森の中を歩いた。

できればさっさと飛んで行きたいところだが、無理な飛行でロディウスの腕も限界に近い。

彼の体力が回復するまでは、地道に歩くしかないのだ。

風の民であるダルも、風の力を使い空に行くことは可能だが、飛ばせるのは精々一人が限界である。

「何だ何だ？ そんなに後ろばっか気にして」

ダルは先頭を歩きながら背後を振り向いた。

先程からロディウスとヴォルフは背後に注意を向けていて、歩みが遅れがちになっている。

それでも人間に比べたら充分速いが。

「敵さん、そんなに厄介なのかい？」

獣人の戦闘能力の高さには、一目置いているダルである。

その獣人である彼らがこれ程神経質になっているということは、敵はそれだけ強いということなのだろう。

だが、ロディウスは口をつぐんだ。

敵側に兄がいたなどと言えば、また獣人の評判が下がると思ったのだ。

しかし、ここで黙っていても、いずれ知られてしまう。意を決して話そうとしたとき。その、瞬間。

ぞわりと背筋に悪寒を感じ、背後を振り返った。

それはロディウスだけではない。

ヴォルフもナナエもダルも、その気配を察知していた。

それは、言葉では言い表わせなくらいに、禍々しい殺気を放っている。

「にい……」

ヴォルフが、怯えたようにロディウスにしがみ付く。

「まさか……もう追い付いたのか!？」

ロディウスが、焦ったように呟いて唇を噛む。

「これって……あいつが来たのか!？」

ナナエも、冷や汗を拭うことすら忘れて呟く。

「な、何だい？ このほかでかい殺気は？」

一人事情が飲み込めないダルが訊ねる。

ロディウスはヴォルフの手を引きながら答えた。

「逃げろ！ 例の占術士だ！」

レイオンⅡレザフォードの気配は、もうすぐそこまで迫っていた。走りだしたロディウスを追い掛けるように、ナナエとダルも走ります。

「占術士!？　じゃあ、あいつが黒幕なのかい!？」

走りながらダルが問う。

今度はロディウスもすぐに答えた。

「いや違う！　占術士は……」

しかしその言葉が終わるよりも早く、背後から獣の咆哮が聞こえ

た。

その声で、ダルも察することができた。

「っ、獣人かい!？」

「ああ、兄だった……!」

ロディウスの報告に、ダルは息を呑む。

まさか、彼らの身内が敵だったとは、思わなかったのだ。

しかし、ここは割り切らなければやられるのはこちらだろう。

ダルは思わず眉間に皺を寄せ、元々きつい目つきが更にきつくなる。

そのとき、背後から黒い影が近付いてきた。

一瞬、例の影のモンスターかと思ったが、違う。

それは大量の蝙蝠だ。

先程のレイオンの一声で集まった、この森の住人。

空を埋め尽くす程の蝙蝠が、一斉に押し寄せてくる。

「うわっ!」

「このっ、こいつら……!」

蝙蝠の羽ばたきと鳴き声の合間に、皆の声が聞こえる。

とにかく蝙蝠を追い払わないことには、逃げることもすらままならない。

ロディウスは襲い来る蝙蝠を手で打ち払い、高らかに吠え叫んだ。

甲高い鳥の鳴き声が、森中に響き渡る。

半数程はロディウスの呼び掛けに応じて退散したが、それでもまだかなりの数が残っていた。

レイオンに従う蝙蝠たちだ。

同時に二人から命令を下され、蝙蝠も混乱しているのだろう。すべてを追い払うのに、予想以上に時間がかかってしまった。

「くそっ……皆無事か!？」

「嬢ちゃんとガキンちよがないぜ!？」

ロディウスの声に答えたのはダルだけだ。

ナナエとヴォルフは、蝙蝠に阻まれて離れたところに行ってしまったらしい。

歯噛みするロディウスの耳に、草を踏み分ける足音が聞こえた。

それは、一番聞きたくなかった足音だ。

ダルが息を呑む気配が伝わってくる。

ロディウスも牙を剥き出しにして、ゆっくりと振り向いた。

「久しいな、ロディウス」

「レイオン……!」

酷薄な笑みを浮かべた大柄な獣人が、そこに立っていた。

「あれかい？ お宅の兄さんってのは」

ダルの声には緊張が滲んでいた。

目の前の相手が、相当な強敵だと悟ったのだろう。

しかも、相手の足元に二人の人影が倒れているのが見えた。

日も沈みかけて暗くなってきた森の中では、はっきりとは見えな
いが、あれは間違いなくナナエとヴォルフだろう。

二人の存在に気付いているからこそ、ロディウスも退却せずにそ
の場に残っているのだ。

「くそ、最悪だ……」

ロディウスの弦きが聞こえてくる。

無傷のまま二人を救出するのは、果てしなく難しいことのように
思えた。

「くく………どうした？ せっかくの兄弟の再会だというのに、何故
逃げる？」

レイオンが一步近付いてくる。

ロディウスは無意識に一步後退った。

レイオンの強さは身に染みて解っている。

群れを離れてから四年間、己も強くなったつもりでいたが、それ
でもまだ勝てる気がしない。

完全に気圧されているロディウスとは違い、ダルは臨戦態勢に入

っている。

その足元に風が渦巻いていた。

「何びびってんだい!? お宅が行かないなら俺が行くぜ!」

ロディウスが制止の言葉をかける前に、ダルは風に乗って飛び出した。

風を操り風と一体となったダルは、常人では捕らえられない程の速度でレイオンに襲い掛かった。

鎌鼬を飛ばして牽制しながら、ナナエとヴォルフを奪い返そうとする。

「いい度胸だ。少し相手をしてやろう」

レイオンは自分に向かってくる無謀な人間に、にたりと凶悪な笑みを向ける。

吊り上げられた唇を見て、ダルに一瞬悪寒が走った。

しかしそれは恐怖などではないと自身を叱咤し、間合いを計り鎌鼬を飛ばす。

レイオンはその場を動かない。

そのままでは不可視の刃に胸を真っ二つにされる、はずだった。だがそのとき、黙って立っていたレイオンが動いた。

鎌鼬が届く前に、思い切り拳を振り抜く。

拳圧により突如生み出された突風が、風の刃を受け止めた。

鎌鼬は完全に相殺されて、消え去ってしまう。

「っ、まだだ!」

吠えながら、ダルは再び鎌鼬を放つ。

今度は様々な角度から打ち込んだ。

乱立している木々を利用して乱気流を作り、鎌鼬の方向を読ませないようにしている。

これならば当たる直前に迎撃する、先程のような手段では防げない。

しかしレイオンは、それでも不敵な笑みを崩そうとはしない。

「少しは知恵があるようだな」

逆に愉しそうに笑い、その巨体からは信じられない程軽い身のこなしで地を蹴った。

不可視の刃がまるで見えているかのように、寸前で躲し、または打ち落とし、そのことごとくを沈黙させた。

後に残るのは、疾風の余韻で流れる微風のみ。

砂埃が舞うほんの一瞬の攻防の間に鎌鼬が切り裂いたのは、レイオンの袖のない服の裾だけだった。

「バカな……！ あの数々の鎌鼬を……！？」

ダルが驚愕の呟きを零す。

しかし、闘いの中においては、その一瞬が命取りになるのだ。

「ダル、避ける！」

ロディウスの声にはっと我に返ったときには、既にレイオンが間近に迫っていた。

慌てて身体を反転して避けようとするのだが、風を纏ったダルでも、獣人の筋力が生み出す瞬間的な超速には対応できなかった。

レイオンの拳が腹にめり込む。

肋骨が折れる嫌な音が、ダルの耳に届いた。

痛みを感じるよりも前に、背中から木々に突っ込んだ。

細い木をへし折って、それでも勢いは止まらず、その後ろの大きな木に叩きつけられ、ようやくダルの身体は地に落ちた。

口の中に苦い錆の味が広がり、ここにきてようやく全身を激しい痛みが襲う。

痛みに呻くことすらできず、ダルは身体を折り曲げてこみ上げてくる吐き気を堪えた。

今吐いたら、内臓ごと全身の血を吐き出してしまいそうだった。

レイオンはそんなダルを見下ろし、冷やかな笑みを浮かべる。

その目が、未だ立ち竦むロディウスの姿を捉えた。

「どうした？ 来ぬのか？」

重低音の声でロディウスに問い掛ける。

ロディウスは無意識に逃げようとする脚を無理矢理押し止め、戦鬪の構えをとった。

ここで逃げるという選択肢は、もう選べない。

四年前に群れから逃げ出した自分だからこそ、ここで逃げる訳にはいかないのだ。

「一つだけ……訊かせてくれ。聖王はこれから、何をするつもりな

んだ？」

緊張から震えそうになる声で、ロディウスは兄に問い掛けた。それだけは、訊いておかねばならない。

レイオンは意地の悪い笑みで答える。

「世界の浄化だ」

それだけ言うと、ロディウスに向かって地を蹴った。その一歩で一気に距離を詰める。

岩をも切り裂くと言われる鋭い爪を振り上げ、この身を切り裂こうと迫り来るレイオンの一撃を、ロディウスは辛うじて身を捻り躲す。

目の前を通り過ぎた爪が、なびく髪の一房を切り飛ばした。銀の糸が風に舞う。

ロディウスは背後に飛び退り間合いをとった。そのとき、目を覆っていた布がはらりと落ちる。どうやら先程の一撃が、わずかに掠っていたようだ。

普段は隠していた顔が、露になる。

久しぶりに弟の顔を見たレイオンは、嘲るように鼻を鳴らした。

「はっ。相変わらず、醜い面だな」

その言葉に、ロディウスはぎりと音がする程歯を食い縛った。

「っ、黙れ！」

一声吠えて、ロディウスは半獣化する。
全身に羽毛が生え、体格が一回り大きくなる。
銀色の風切羽根を持つ隼となり、彼は力強く羽ばたいた。
障害物の多い森の中では、大きく翼を広げられない。
鳥型であるロディウスには不利な状況と言えた。

しかし、力で劣る自分に勝機があるとしたら、相手の手が届かない上空から攻撃するこの戦法しかない。

レイオンの半獣態は獅子だ。

空高く飛び上がれば、こちらに攻撃が届くことはない。

ロディウスは木々の間を突き抜けて、遙か上空に身を踊らせた。
注意深く森の中に神経を集中させる。

目が見えないロディウスは、敵の気配を捉える能力に長けている。
音、匂い、風の流れ、そのすべてで相手の気配を捉え、まるで見えているかのように正確な攻撃を与えることができるのだ。

すぐに地上からレイオンの咆哮が聞こえた。

恐らく半獣化したのだろう。

獣人は半獣化することによって、通常よりも筋力が増す。

しかし半獣化したレイオンの脚力でも、この高さには届かない。
そのはずだった。

地上にあったはずのレイオンの気配が、近付いてくる。

一瞬、跳躍したのかと思ったが違う。

いかに跳躍力があるうと、この高度まで昇ることは不可能だ。
それにこの動きは寧ろ、鳥型のそれに近い。

「空に行くは、お前だけではないぞ」

目の前から、レイオンの声が聞こえた。

ロディウスは咄嗟に翼を翻して距離をとる。

獅子型であるはずのレイオンが、何故空を飛べるのか？

ロディウスにはその理由が解らない。

一つだけ解るのは、己に残されたわずかな勝機がなくなったということだけだ。

「くそ……どうなってやがる！」

小さく呟き、ロディウスは羽ばたいた。

どうやってレイオンが空を飛んでいるのかは知らないが、この天空のフィールドで自分より速く駆ける者などいない。

ロディウスが宿しているのは、この世で最も速く空に行く隼の力だ。

弧を描きながら更に高く上昇し、翼を畳んで飛び降りるようにレイオンに接近する。

すり抜け様に、鋭い鉤爪でレイオンを切り裂く。

さしものレイオンも、このスピードを捉えるのは難しかったらしく、身を翻して避けるのが精一杯だ。

躲しきれなかった左腕に、浅く赤い痕がつく。

血液の匂いが、わずかに風に混じった。

ロディウスは羽を広げて再び上昇し、旋回する。

そのまま二度三度と攻撃を仕掛けるが、かすり傷程度のダメージしか与えられない。

じりじりと焦りが募る。

昼間の無茶な飛行で疲労の蓄積した身では、レイオンより先に体力が尽きるかもしれない。

だがそれはあの距離を単身追ってきた相手も同じだと思い直し、再び上空から急襲する。

レイオンに肉迫し、しかし今度は様子が違った。

レイオンが避ける素振りを見せないのだ。

ロディウスの鉤爪の一撃が、レイオンの胸から腹にかけてを切り裂く。

そしてもう一度距離をとる、その前に。

レイオンの腕が伸びてきて、ロディウスの身体をがっちり挟み込んだ。

その丸太のような腕に捕まったら、逃げることは不可能だ。慌てて振りほどこうとするが、びくともしない。

「わざと攻撃を受けたのか！」

「ああ。スピードでは敵わぬ。ならばこうするしかあるまい」

負傷を覚悟の上での強攻だ。

ロディウスの身体を捕らえたその腕で、左の翼を掴み捻り上げる。

翼の中程で、堅く太い枝を折ったような音がした。

「ぐ……っああああ！」

ロディウスの苦痛の声が響く。

鳥型の獣人が翼を負傷することは、実質、無力化されたのと同じことだ。

レイオンが、ロディウスの身体を叩きつけるように投げ捨てる。抵抗もできず、体勢を立て直すこともできずに、ロディウスは地面へと落下する。

それを追うように、レイオンも地面に降り立ち、半獣化を解く。何とか起き上がろうと藻掻くロディウスの背を、レイオンは片足で踏み付けた。

「あっぐ……！」

痛みに呻くロディウスを見下ろし、レイオンは静かに囁いた。

「残念だったな。その目が見えていたならば、間違いなくお前は群れの中で最強の座を手に入れただろうに……」

目が見えている者と見えない者とは、戦闘に必要なとする集中力の桁が違う。

高度な集中力を長時間維持したままの戦闘は、想像以上に激しく体力を消耗するのだ。

もしロディウスに盲目というハンデがなかったら、或いはこの闘いにも勝利していたかもしれない。

ほんの少しの哀れみを含んだ言葉を囁きながらも、レイオンの手はロディウスの折れた翼に伸びた。

――起きて。

誰かに呼ばれたような気がして、ナナエはゆっくりと目を開いた。

「起きたか、嬢ちゃん」

そう言って苦しそうに笑ったのは、風の民ダルだった。

ロディウスとレイオンが闘っている間に、倒れた二人のところまで這ってきたのだ。

「あれ、あんた……」

未だぼんやりする頭で、何があったのか思い出す。

蝙蝠の集団に囲まれロディウスたちから分断されてしまい、そのとき、一番近くにいたヴォルフが、ロディウスの手を振り解いて助けに来てくれたのだ。

しかし背後からレイオンに殴られ、二人とも意識を失ってしまった。

思い出した途端に、首の裏がずきずきと痛んだ。

しかし先程自分を目覚めさせたあの声は、ダルの声ではなかったような気がするのだが。

夢現で聞き間違えたのだろうか。

「動けるか？」

「たぶん……ヴォルフと、ロディウスは？」

何とか上体を起こし辺りを見回すと、自分のすぐ隣にヴォルフが倒れていた。

目を覚ます様子はないが、その胸が静かに上下するのを見てほとと息が漏れる。

「このガキンちよは大丈夫だ。あの兄ちゃんは……」

ダルが空を見上げようとした瞬間に、ロディウスが叩きつけられるように降ってきた。

重い音をたてて地に落ちたロディウスに続いて、人型に戻ったレイオンが降りてくる。

少し離れていて見え辛いのが、ロディウスは明らかに負傷していた。そんな彼の翼を、レイオンが掴む。

これ以上何をするつもりなのか。

すぐにでも駆け寄って助けに行きたいが、まだ脚に力が入らず上手く立てない。

ナナエとダルが立ち上がるより早く、レイオンがロディウスの翼を引き千切った。

折られた翼を無理な角度で捻り上げられ、ロディウスは喉の奥で苦痛の呻きを呑み込んだ。

レイオンは容赦なくロディウスの翼に爪をたてる。

「お前の翼は厄介だ。二度と飛べなくしてやろう」

背後から、レイオンの声が聞こえた。

ぞっとしてロディウスが藻掻くが、簡単に押さえ込まれてしまう。

「やっ……よせ……！ やめろっ！」

ロディウスの制止の声にも耳を貸さず、レイオンは思い切りロディウスを踏みつけたまま、その翼を引き千切った。

苦痛の叫びが、森の中に木霊する。

離れたところから見ていたナナエたちも、驚きのあまり硬直していた。

ロディウスの肩から鮮血が噴き出し、レイオンの手の中には、千切れた翼がある。

身を切るような悲鳴が迸る。

その声が自分の口から出ているのだとナナエが理解するまでに、少し時間がかかった。

闇の聖王——その戦士の誇り——

頭の中が真っ白になっていく。

ただ彼を助けたい一心で、ナナエは立ち上がった。

「嬢ちゃん……!？」

ダルの途惑いの声が、かすかに聞こえる。

しかしそれもすぐに聞こえなくなり、周りの景色も見えなくなつた。

ナナエの目に映っているのは、地に伏したロディウスと、彼に致命的な傷を与えた敵の姿だけだった。

その異様な気配を感じ取り、レイオンが振り向く。

ナナエが怒りに染まった目で見ている。

レイオンはそれを目にして、面白そうに笑った。

ナナエの闘気が大きくなっていくのが解る。

その気迫に当てられたかのように、全身が総毛立った。

人間がこれだけの気を発することができるとは、レイオンには正直驚きだった。

もう少し挑発してやろう。

面白半分、怖いもの見たさでそう思い、レイオンは手に持ったままだった弟の翼を、口に運ぶ。

断面がむき出しの傷口に牙を立て、その肉を食い千切った。

それを見たダルは、気分悪そうに口許を押さえる。
しかしナナエを逆上させるには充分だった。

「ああああああっ！」

渾身の叫びが迸る。

その声に応えるように、周囲に水の匂いが充満した。
水の精霊の力を発揮したことは解るが、この大量の水気はどこから集まってきたのか？

レイオンの足下にあった草が、かさりと乾いた音をたてた。
はっとして周囲を見渡せば、森の木々から、草花から、大量の蒸気が発せられていることに気付いた。

植物の中に蓄えられている水分を利用しているのだ。
この広大な森全体が、貯水庫の役割を果たしている。

そして掻き集められた水は、岩盤さえも撃ち抜く弾丸となる。
噴き出した水蒸気が集められ、水の弾がレイオンに向けて放たれた。
た。

鎌鼬よりも数段破壊力は上だ。
拳圧で相殺することは難しい。

レイオンは仕方なく、ロディウスから足を除けて攻撃を回避した。
レイオンが離れた隙をみて、ダルは急いでロディウスに駆け寄った。
た。

ロディウスの怪我が一番酷い。

早急に処置が必要だった。

ロディウスの半獣化は解かれ、力なく横たわっている。
人型時の腕が、半獣化したときの翼になるのだろう。

ロディウスは、左の肩から先を失っていた。

レイオンは軽々とナナエの攻撃を躲していたが、徐々に水の弾の数が増えてくると、流石に捌ききれなくなってくる。

高速で飛び交う水の弾は、時にその形を変え、刃のようにレイオンを切り裂こうとする。

それを見極め、最小限の動きで身を翻す。

直接叩いて蹴散らしても、水はすぐに集合して刃となるのだ。

元から絶たないという意味がない。

レイオンの目が、ナナエの姿を捉えた。

飛び来る水の合間を縫って、レイオンはナナエに向かい地を蹴った。

横でそれを見ていたダルは、咄嗟に鎌鼬を飛ばしてナナエを援護する。

レイオンの爪がナナエに届く直前、その目の前を風の刃が通り過ぎ、レイオンは仕方なく一瞬だけ足を止めた。

その一瞬で、ナナエは周囲の水分をレイオンの足元に掻き集める。
そして一気に噴き上げた。

圧倒的な水量に押し上げられ、堪らずレイオンの足が地を離れた。
その隙を逃がさず、水の刃が追撃する。

空中で一瞬身動きのとれなくなったレイオンを掠め、水の刃が脇腹を切り裂いた。

「ほう？」

予想以上のナナエの攻撃に、レイオンが愉しそうに笑う。
しかし傷は浅くない。

これ以上戦闘を続ければ、負けることはないにしても、あまり面白くない結果を招くことになりそうだった。

その瞬間に、レイオンは撤退することを決めた。

引き際も見極めずに闘い続ける程、レイオンは愚かではない。

背後に跳びナナエから距離を取って、大きく一声吠えた。

すぐに先程の蝙蝠の群れが、再び飛んでくる。

黒い塊にまとわりつかれ、ナナエの視界が奪われた。

その間に、レイオンの足音が遠ざかっていくのが聞こえる。

「ちくしょう！ 待て！」

襲い掛かる蝙蝠を、水を使い振り払う。

しかし、そのときにはもう、レイオンの姿はなかった。

「逃げるのか！？ 出てこい！ ぶっ殺してやる！」

そのままレイオンを追い掛けて行ってしまうようなナナエを引き止めたのは、ダルだった。

「待て！ 深追いするな。今はこの兄ちゃんの手当てが先だ」

ナナエはその言葉を聞くまで、ロディウスのことを失念していた。頭に血が昇りすぎて、レイオンを倒すことしか考えられなかったのだ。

ナナエはレイオンの追撃を諦め、急いでロディウスの許に走った。

彼の傷口にはダルの上着を巻き付けているが、あまり止血の役には立っていない。

早くも血が染みだして、上着はドス黒く染まってきている。

激しい出血にロディウスの顔は血の気を失っていたが、まだ息はあった。

ロディウスを抱き起こそうとしたナナエだが、突然目の前の景色がぐらりと揺れ、強烈な目眩に襲われた。その上体が傾ぐ。

「嬢ちゃん？」

ダルが訝しがって肩を叩くと、ナナエはその場に倒れこんでしまった。

限界を超えて水の力を引き出したせいで、急激に衰弱したのだ。

「おい！ 嬢ちゃん！」

ダルの呼び掛けにも、目を覚ます気配はない。

ダル自身も、肋骨を三本も折っているのだ。

二人を抱えて歩ける体力はない。

どうするかと悩んだダルは、はっと気が付いた。そういえば、ヴォルフもいるのだった。

ヴォルフが目を覚ませば、彼に運んでもらえる。

ダルはその姿を捜して辺りを見回すが、近くに倒れていたはずのヴォルフの姿は、何故かどこにも見えない。

仲間を置いて、一人で逃げるような少年には見えなかった。

敵に攫われた可能性もある。

捜しに行きたいが、ロディウスの怪我は深刻だ。一刻を争う。

仕方なくヴォルフの搜索は諦め、ダルは力を振り絞って二人を運び始めた。

ナナエが目覚めたのは、翌朝のことだった。

過度の疲労で身体は怠かったが、意識だけははっきりしている。

そこは見覚えのない部屋だった。

ナナエ以外誰もいない。

あれからどうなったのだろう。

ロディウスは、ヴォルフは、どうなったのだろう。

二人の姿を確認したくて、ナナエはベッドから起き上がった。

どうやら着の身着のままここに寝かされていたらしい。

服に付着していた土が、ベッドに落ちている。

じっとしていらなくて、ナナエはベッドから飛び降りた。

二人の姿を確認したい。

そう思い部屋から出ようとしてドアを開けると、目の前にガレットが立っていた。

「うおう！　びっくりした……」

「おっさん！　なんであんたがここに？」

「ここ、俺の隠れ家なんだよ」

そう言ってガレットは、肩越しに親指で壁を指した。

なんでも、昨夜のうちに、ダルがここまでナナエたちを運んできたのだそうだ。

ダルは今、リビングのソファで眠っている。

「後で礼言っとけよ。自分の怪我也酷いのに、お前ら二人を運んできたんだ」

一瞬、安堵の息を吐きかけてから、ナナエは眉をひそめた。

「二人……？　それ、どういう……？」

ガレットはわずかに顔を引きつらせ、決まり悪そうに頭を掻く。

しかし、黙っている訳にもいかない。
いずれ知られることなのだから。

「……お前さんとロディウスだよ。ヴォルフとかいうのは、姿が見えなかったんだと」

「ヴォルフ、が……？」

ナナエの顔が青ざめる。

「まさか、死んで……！？」

ナナエの震える声を聞いて、ガレットは慌てて首を振った。

「いや、気付いたら姿を消していたそうだ。

まだ森の中にいるのか、敵に攫われた可能性もある」

ガレットの話を聞いても、絶望的な気持ちは変わらない。

あの男に捕まっているのだとしたら、最悪な可能性として、もう殺されているかもしれないのだ。

ナナエは首を振って挫けそうになる気持ちを振り払った。

「ロ、ロディウスは？ あいつは、無事なのか？」

今にも泣きそうな顔で、ガレットの白衣を掴む。

ロディウスも酷い怪我を負っていたのだ。

それを思い出すだけで、嫌な想像が広がる。

「ロディウスは……なんとか、一命を取り留めた。今は隣の部屋で眠っているが……」

ガレットの言葉を全部聞き終わる前に、ナナエはガレットを押し退けて部屋を出た。

すぐさま隣の部屋のドアを開ける。

「ロディウス！」

部屋に入りかけて、その足が止まる。

ロディウスの手足や胴は、ロープでベッドに固定してある。

その胸から上は包帯に包まれており、そして左腕は、肩から先が無かった。

震える脚で、転びそうになりながらロディウスのベッドに駆け寄る。

静かに眠っているロディウスの顔を見て、ナナエはひっと息を呑んだ。

普段顔を覆っている布が外れていて、彼の素顔が露になっている。

その顔は、額から目の下辺りまでが、酷く焼け爛れて皮膚が引き攣れていた。

目は潰れたのか挟られたのか、閉ざされたまま焼かれていて開くこともできない。

赤黒くなった額は、ケロイド状になった皮膚のせいで、いびつに隆起している。

大分古い火傷の痕だ。

彼がいつも布を巻いていたのは、これを隠すためだったのだ。

「あ……あ、何で、これ……」

ナナエは力なくその場に膝をついた。

ガレットが背後から近付いてくる。

「今は、鎮静剤打って眠ってる。目が覚めると暴れるんだ」

ロープで縛り付けてある理由がそれだった。
無意識のまま獣人に暴れられると、人間の力では取り押さえることも難しい。

ガレットはナナエの腕を掴んで立ち上がらせる。
ナナエは力が抜けたように中々立てなかったが、ようやく立ち上がり、ガレットに連れられ部屋を出た。

隣の部屋に移動して、ガレットはナナエをベッドに座らせた。
ナナエはゆるゆると顔を上げガレットを見上げる。

「ロディウスは……」

「出血が酷くてな。だが、獣人ならばすぐに回復する。心配な……」

「違う！ あの、顔の火傷！ オレ、あんななってたなんて、聞いてない！」

ナナエはぶんぶん首を振って叫んだ。

今まで一緒に旅をしていて、ロディウスからそんな話は聞いたことがなかった。

隠し事をされていたというのが、少なからずショックではあった。
自分は信用されていないから、話してくれなかったのだと。

そして、それも当然だとも思った。

彼の容態を心配する前に、そんなことを気にしている自分など。

精神的に不安定になっているのだろう。

ナナエは急に黙り込んで俯いてしまった。

「お前さんにも、もう少し休息が必要だな。もう一回寝とけ。安定剤でも打とうか？」

溜め息混じりでガレットに言われ、ナナエは小さく首を振った。疲れてはいたが、目が冴えてしまつて眠れそうにない。

しかし、ガレットに力ずくでベッドに押し込まれてしまった。

「いいから寝てろ。それと、ロディウスの火傷の痕は、後で本人に訊いてみな」

ガレットはそれだけ言つて、部屋を出ていった。

ナナエは横向きに背を丸めて、膝を抱えるように身体を縮める。毛布の端をぎゅっと握つて、手が震えるのを鎮めようとした。

だがそれだけでは鎮まりそうにない。

目を瞑ってみる。

そうすると浮かぶのは、ロディウスのことばかりだった。

あのまま死んでしまつたらどうしよう。

目覚めたとき、何と言えばいいのだろう。

自分がレイオンに捕まったりしなければ、ロディウスが怪我をすることもなかったのに。

嫌われたらどうしよう。
罵られたらどうしよう。

（嫌だ、ロディウス……ロディウス……！）

とても恐くなって、全身が震えているような錯覚を覚える。
きつく閉じた目から涙が溢れ、頬を濡らした。

夕方になって、ようやくナナエが起きだしてくると、リビングのソファにダルが座っていた。

「あ……あの……」

遠慮がちにナナエが声をかけると、ダルはゆっくり振り向いた。

「なんだ、嬢ちゃんか。もう具合はいいのかい？」

ナナエは一つ頷いて、ダルの正面に回った。
低めのテーブルを挟んで、向かいのソファに座る。

「あの、ありがとう。迷惑かけて、ごめん」

ナナエは静かに言って、頭を下げた。
ダルは笑いながら顔の前で手を横に振る。

「いって、困ったときは、お互い様だろ」

それきり、二人とも黙り込んでしまう。

夕陽が差し込む部屋の中、しばらくの間は何も喋らなかった。

夕焼けの赤い太陽が山に沈みかけた頃、ようやくダルが口を開いた。

「あのガキンちょは、役所に頼んで捜してもらってる。だが、まだ発見の報告は来てないようだ」

「……うん」

ナナエはぼんやりと頷いた。

ロディウスの姿を見てからというものの、ヴォルフのことをすっかり忘れてしまっていた。

ダルの話でそのことに気付き、軽く自己嫌悪に陥る。

心配していない訳ではない。

ただ、ロディウスのことを思うと、他のことを考えられなくなるのだ。

自分はいったい、どうしたというのだろう。解らない。

静かに目を閉じて考えてみるが、その思考は強制的に中断させられた。

ロディウスが寝ている部屋の方から、物音が聞こえたのだ。

壁を叩くような音と、激しく叫ぶ声も聞こえてくる。

ロディウスの声だ。

時折苦痛に呻く声も聞こえる。

ナナエは思わず立ち上がり、不安そうな表情を隠すことも忘れて、胸の前で手を握り締めた。

やがてガレットの声も交じり、その後は急に静かになった。

「ここに連れてきたときも、あんな感じだったぜ。奴さん、腕を斬られたのが相当堪えたようだ」

独り言でも呟くように、ダルは小さな声で言った。

それでも近くにいたナナエには、しっかり聞こえている。

夕陽も既に沈み、部屋の中は薄暗かったが、ナナエの顔が青ざめているのは解る。

それが疲労のせいではないことも。

「行ってやんな。ガレットの旦那も、一日中兄ちゃんの世話してたんじゃない、まいっちまうだろうさ」

ダルの言葉で後押しされて、ナナエはロディウスの部屋へと走った。

ナナエがロディウスの部屋に入ると、ロディウスはベッドの上で静かに眠っていた。

その隣には、疲れた様子のガレットが椅子に座っている。

「おっさん、ロディウスは……」

ナナエに声をかけられて、ガレットはようやくナナエの存在に気付いたようだった。

俯けていた顔を上げ、背後のナナエを見上げる。

その顔には爪で引っ掻いたような傷があった。

「お前さんか……傷自体の治りは早いだろう。だが、問題は精神的な方だな」

ガレットはそう言いながら、ロディウスを固定しているロープを結び直す。

先程少し暴れただけで、ロープが千切れていた。

ガレットの傷も、そのときロディウスの手が当たったのだろう。

ベッドの柵に手足を括り付けられ、血の滲んだ包帯を巻き付けたその姿は、酷く痛々しい。

黙って見ているだけでも苦しくなってきた、ナナエは遠慮がちに口を開いた。

「おっさん、オレ……ロディウスの側にいてもいいかな？」

自分の服の裾を握り締めて言うナナエの足は、前に踏み出すのを躊躇っているようだったが。

再びロディウスを固定し終えたガレットは、よろけながら立ち上がる。

「また暴れたら危ないから断りたいとこだけど、正直、代わってくれると有難い」

「大丈夫だよ。オレがちゃんと看てるから」

ガレットは軽く頭を掻き、ポケットから煙草を取り出し一本くわえた。

疲労を滲ませた足取りでナナエに近寄り、肩に手を置く。

「じゃあ、ちよいと付いててやってくれ。少し休んでくる。何かあったらすぐに呼べよ」

ナナエが頷くのを確認してから、ガレットは部屋を出ていった。

ナナエはしばらくその場で立ち尽くしていたが、やがて恐る恐るロディウスが眠るベッドに近付き、先程ガレットが座っていた椅子に腰掛ける。

死んだように眠るロディウスの顔を見つめっていると、再び涙が零れてきた。

手で拭ったそれは、とても冷たかった。

「ロディウス、ごめん……オレは……」

もう一度、その手で触れてほしい。

もう一度、その声で名を呼んでほしい。

もう一度、二人で話をしたい。

もう一度、手を繋いで歩きたい。

もう一度、一緒に旅をしたい。

もう一度……

（そうだ。だってオレは……）

「いつの間にか、好きになってたんだ……」

ロディウスの失われた腕に触れるように、ナナエはそっとベッドに手を置いた。

ようやく理解できた自分の想いが、痛みを伴い胸の中で疼く。
そんなナナエの心を拒絶するかのように、ロディウスが目覚める

気配はなかった。

暗い闇の中で漂っていた意識が、ゆっくりと浮上するのを、ロデ
イウスは感じた。

夢と現の狭間にある意識に、真っ先に訪れたのは、先程までと変
わらぬ闇だった。

自分はまだ眠っているのか、それとも目覚めたのか。

解らなくなって、右手を動かしてみた。

何かに縛り付けられているようで、思うように動かない。

それは両足もだった。

自由に動くはずの左手でそれを外そうとするが、上手くない。肩から先の腕の感覚が、ないのだ。

何故？ どうして？

考えて、ようやく思い出す。

兄に捻じ切られた、左腕の痛み。

「あ……っ、がつ、うあ……っ！」

思い出すと、途端に傷口が疼いた。

そして痛みと共に鮮やかに蘇る、恐怖と絶望。

「あああ、ぐあ、ああああっ！」

堪らず悲鳴を上げる。

いつもならここで、ガレットが鎮静剤を打ってくれるのだが、今回は別のものがロディウスの意識を現実に戻した。

「ロディウス！ ロディウス落ち着け！」

聞き慣れた、少し低めの少女の声。

ああ、ナナエだ。ナナエが傍にいる。

荒い呼吸をしながら、唇を噛む。

力任せに暴れて、ナナエを傷付けてはいけない。

ロディウスは半分眠ったような状態だったが、ナナエの声を聞くと意識が回復するようで、すぐに暴れるのを止めた。

何度かナナエが呼び掛けているうちに、ロディウスは血が滲み始めた唇を開いた。

「は……っあ、ナナエ……？」

ロディウスの声が、小さくナナエを呼ぶ。

それを聞いた瞬間に、ナナエは泣きだした。

実に三日ぶりに、ロディウスがナナエの名を呼んだのだ。

あれからずっと、ナナエはロディウスの傍に付いていた。

そして今日、ロディウスはようやく意識を取り戻したのだ。

「何で……泣いてんだ……？」

ナナエの啜り泣く声を聞いて、ロディウスはナナエの方に顔を向ける。

ナナエの顔が見える訳ではないが、ナナエの声は正面から聞きたかった。

「泣いてないっ！ ロディウスが、目え覚めたから、嬉しいんだっ。だから泣いてない！」

思い切り目許を拭い、鼻声でしゃくり上げながら言われても、すぐに嘘だとばれてしまうだろうに、どうしてこうも意地っ張りなのだろうか。

ロディウスは頭の隅でそんなことを考えながら、「そうか」と呟き手を動かした。

「何で……縛られてんだ？」

それはなんとなく、自分が暴れていたからだということは、認識できているのだが。

ロディウスはナナエにロープを解いてくれと催促する。

テーブルに果物ナイフがあったので、ナナエはそれでロープを切った。

ようやく自由になった右手で、左腕があったはずの場所に触れる。眠りの中では目を背け続けていた現実が、急に形を成して襲ってきたような気がした。

自分は、すべてを失くしたのだ。

そう思うと、自嘲の暗い笑い声が、ロディウスの口から零れた。

「く……はは……ははは、情けねえな……」

呟いて、包帯に包まれた肩を押さえる。

鋭い痛みが走りぬけ、それはやがて鈍い疼きに変わった。

「やめろロディウス、傷が開いちまうだろ」

ナナエがロディウスの手を外そうとするが、ロディウスはナナエの手を振り払った。

ナナエは手を弾かれ、驚いたようにロディウスを見下ろす。

「……触るな。出ていってくれ」

ロディウスは一瞬だけ後悔したように口をつぐみ、ナナエから顔を背けた。

ナナエには、一番傍にいてほしかった。

だが、こんな無様な姿は見られたくなかった。

肩の傷よりも胸が痛くなってきたように思えて、呼吸するだけでも苦しい。

ナナエはそんなロディウスを励まそうと、笑みを浮かべる。
努力して作った笑顔は、とてもぎこちなかった。

「ロディウス、あのさ……オレ、ロディウスが生きててくれて、良

かった。辛いかもしれないけど、元気出そうぜ」

出てきたのは拙い言葉。

こんなときに、何を言えば良いのか解らない。

ナナエは、ロディウスを少しでも励ましたかったのだ。

しかし、その言葉だけではロディウスの心を癒すことはできない。寧ろ、不安や苛立ちを煽ってしまったようだった。

「何言ってるんだ？　こんな、片腕失くして、もう飛ぶこともできないんだぞ。それなのに、元気出せだって？」

ロディウスは暗い声で、吐き捨てるように言いながら起き上がる。右腕一本で支える身体は重く、貧血で頭がくらくらした。

片手で頭を覆い呻くロディウスを、ベッドから落ちないようにナナエが慌てて支える。

だがロディウスは、右手でナナエの肩を掴み、引き離そうとした。それでもナナエは、ロディウスの傍を離れようとしなかった。

「動くなよ！　じっとしてなきゃだめだ！」

「黙れよ！　何故助けた？　こんな傷を負って……死んだ方がマシだ！」

血を吐くように言ったロディウスの言葉を聞いて、ナナエは俯いて眉根を寄せた。

自分を離そうとしてくるロディウスの腕に、必死でしがみ付く。

「本気、なのかよ？」

ナナエは恐々訊ねてみた。

それがロディウスの本心だと、認めたくなかった。
それがロディウスの本心だと、認めたくなかった。
しかしロディウスはなおも言い募る。

「そうだ！ 光を失って、皆に蔑まれて、群れにいた頃は爪弾きにされてた。

でも！ 空では兄弟にも引けを取らなかった。誰より速く空を駆けることができるのが、唯一の誇りだった！

それなのに、それも全部奪われた！ これでどうやって生きろと言うんだ！」

まるで心のすべてを吐き出すように、ロディウスが叫ぶ。

その声を聞き付けて、ガレットが部屋に向かってくる足音が聞こえた。

しかし二人とも、そんなことには気付いていない。

ナナエは激しく首を振って、ロディウスの手を握り締めた。

「それでも、ロディウスに生きてほしいんだ！

ロディウスが死ぬなんて、嫌なんだ……」

「何故そんなこと！ ナナエはっ……」

「好きなんだ！ オレと一緒に、生きてほしいんだよ……！」

ナナエの心からの声を聞いて、ロディウスは次の言葉を吞み込んだ。

部屋に入ってきたガレットも、入り口で呆然と二人を見ている。

ナナエの目から再び涙が溢れ出して、頬を伝い零れ落ちる。

握り締められたロディウスの手には、暖かい雫が落ちていった。

小さく肩を震わせて泣き続けるナナエの肩を、ガレットが叩く。

「泣くなよ。このバカ、目え覚めたばかりで頭が働いてないだけだ」

そう言ってナナエを椅子に座らせる。

ナナエはおとなしく従って、ロディウスの手を離して椅子に腰掛けた。

ガレットは咎めるようにロディウスを見下ろし、その首筋に手の甲を当てる。

「レディを泣かせちゃダメだろうよ……あー、ちっと熱があるな」

「触るな」

ロディウスは嫌そうに身を振る。

ガレットはすぐに手を離れたが、その目は未だ怒ったようにロディウスを見ている。

「まったく、お前が寝ぼけて暴れるから、傷が治らなくて化膿しちゃったんだぞ。解熱剤飲んどけ」

ガレットは棚から薬の箱を取り出す。

水差しが置いてあるテーブルの上に箱を置き、その中から紙に包まれた粉末を選んだ。

「ほれ。飲めるか？」

「いらん」

ガレットが薬を投げ渡すが、ロディウスは受け取る気もないらしく、包み紙は虚しくベッドの上に落ちた。

「ああ？ 医者の言うことは聞いとけ。それとも、口移しじゃないと飲めませんかあ？」

笑い声を含んだガレットの言葉に反応したのは、ナナエの方だった。

ぱっと手を挙げて立ち上がる。

「だめっ……いや、オレが看てるから、おっさんはまだ寝てろよ！ さっき交代したばかりだから！」

慌てて言い直すナナエに、ガレットは横を向いてこっそり笑った。にやけた顔をなんとか戻して、真面目な表情を作り、ナナエに向き直る。

「そんならお前さんに任せるよ。こいつは一回悩むと後引きずるから、しっかり励ましてやってくれや」

「おいガレット！」

非難するようなロディウスを無視して、ガレットはさっさと部屋の外に出てしまう。

残されたナナエとロディウスは、何から喋って良いものか迷い、

少しの間気まずい沈黙が部屋を支配した。

「あ、あの、さ……」

最初に口を開いたのはナナエだった。

ロディウスはナナエの方を向こうとはせず、黙って俯いていた。

「薬、飲めよ。熱があるって……」

ベッドに落ちた包みを拾い、水差しに手を伸ばす。

だがロディウスは何もせず、薬を差し出されても受け取ろうともしない。

「ロディウス、ほら、ちゃんと飲まないとだめだろ？」

「なんで……」

顔は俯いたそのままに、ロディウスがぽつりと呟いた。

「何故、ナナエはそんなに強いんだろうな」

突然そう言われて、ナナエは目を瞬いた。

ロディウスは下を向いたまま、小さな声で囁くように言う。

「ずっと、ナナエに助けられていたんだ……」

この旅の間中、ロディウスは何度もナナエに救われた。

獣人であっても、変わらずに接してくれたこと。

目のことで、悲しんでくれたこと。

人間に街を追いつけられたとき、追いつけてきてくれたこと。

獣人の扱いが不当だと、代わりに怒ってくれたこと。

ナナエとは水王の城で別れるつもりだったのに、一緒に来てくれたこと。

それがどんなに嬉しかったか、どんなに救われたか。

今だってそうだ。

酷いことを言ったのに、こうして手を差し伸べてくれる。

どうしたらそんな風に強くなれるのだろう。

「オレは……そんな強くないよ。ただ、ロディウスと一緒に居たくて……一緒に、生きたいから……だから」

水差しと薬をテーブルに置いて、ナナエはロディウスのベッドに身を乗り出した。

ロディウスの身体に縋りつくように抱き締める。

「ごめん……全部オレの我儘なんだ。ただ、ロディウスの傍に居たかったんだ……」

黙ってナナエの言葉を聞いていたロディウスが、片腕でナナエの背を抱き締め返す。

ナナエがぐっと背を伸ばし、顔をロディウスに近付ける。

唇が触れ合った。

今度は拒絶することなく、ロディウスはナナエを受け入れた。

月の精霊——誇り高き戦士に愛を——

部屋の中を照らしていた蠟燭が、短くなり消えた。

ロディウスは気付いていなかったが、今はもう大分遅い時間だ。夜の闇は静寂と共に室内を支配する。

カーテンの隙間から差し込むかな星明かりが、ナナエの瞳に映り込んでいた。

「っ……」

ぎしりとベッドが軋み、ロディウスが小さく呻く。

静かな部屋の中では、そんな音さえ大きく響くような気がする。

「あ……痛み止め、飲む？」

「嫌だ。あれ飲むと感覚が鈍る。ナナエをちゃんと感じられなくなっちゃうだろ」

「恥ずかしいこと言うな、馬鹿」

少しだけ顔を赤くしたナナエが、ロディウスの上で呟いた。

傷のせいで熱が上がっているロディウスの身体は、熱い。

もっとも、今やその熱は傷のせいだけではないが。

ナナエの指先が、ロディウスの頬に触れる。

そのまま顔の上半分に残る火傷の痕を、そつとなぞった。

かつて両の瞳があったはずの場所は、ただ歪に引きつれている。

「ロディウスのこと、全部教えてよ。ちゃんと、本当のこと」

「……ああ」

ロディウスは、ナナエの背を撫でていた手で彼女を抱き寄せ、己の胸上に招いた。

まだ生々しい肩の傷に触れないように、ナナエは起き上がろうとする。

だがそれより早く、ロディウスは更にナナエを抱き寄せ、彼女の耳を甘噛みした。

「うあつ、何……っ？」

ナナエが驚きで顔を真っ赤にして声を上げる。

ロディウスはナナエの反応を楽しんでいるかのように、小さく笑った。

「知らないのか？ 獣人はな、耳を噛んで親愛の情を伝えるんだよ」

「へ、へえ……普段からそんなことすんだ？」

「馬鹿。こういうときしかしない」

ナナエは益々顔を赤くした。

もうロディウスの身体より、自分の顔の方が熱くなっている気がする。

重ねた肌は熱すぎて、もう何も考えられなかった。

ロディウスのいた群れは、父を長とする家族で構成されていた。

獣人は一夫多妻であることが多く、ロディウスには母が七人おり、兄弟は全部で十一人いた。

ヴォルフの母だけは獣人ではなく、人間だった。

線が細く、太陽の光そのもののような美しい金の髪と、まるで子供のように小さな身体。

一見、儂い花卉のようにも見える彼女だが、家族の誰よりも芯は強かった。

獣人に惚れた変わり者だと、自分から豪語していたのを聞いたことがある。

ロディウスは物心ついた頃から、その人間の母を慕っていた。思えば、それが初恋だったのだろう。

ロディウスは常に彼女の傍にいるようになり、生まれたばかりのヴォルフとも、すぐに仲良くなった。

だがある日、彼女は突然の病で倒れてしまう。

不慣れな山での暮らしが、原因の一つであることは間違いなかった。

獣人は実力主義である。

弱い者にも甘くはない。

彼女が群れにとって足手まといにしかないと判断されたなら、彼女は見捨てられてしまうだろう。

ロディウスはどうしても、彼女を助けたかった。

「人間の街にはね、イシヤっていうのがいて、どんな病気も治せるクスリを持ってるんだって」

誰に聞いたのか、今となっては思い出せない。

だが、その言葉がロディウスにある決心をさせた。
彼女のために一人で人間の街に行き、薬を手に入れようとしたのだ。

人間の街では、何かを手に入れるには『金』というものが
必要なのだということは知っていた。

しかし獣人の子供が薬を買う金など持っているはずもなく、
療院から盗むしかなかったのだ。

ロディウスは薬を奪って逃げる途中で見付かり、人間たちに捕
まってしまった。

なんとか逃げ出したが、人間たちも必死だ。

何しろ、子供とはいえ相手は凶暴で野蛮な獣人なのだから。

ついには山狩りまで始め、そのうちに興奮した人間たちは山に火
を放った。

彼らの誰もが、その行為を正義だと思っていただろう。

自分たちは蛮族である獣人を退治するため戦ったのだと。

当時は乾燥していた季節だったため、火の回りは非常に早かった。
追っ手をやり過ぎそうと隠れていたところ、たちまち周囲を火に
囲まれてしまった。

群れにこのことを伝えなければ。

そう思って必死に山を登った。

燃え盛る炎で肌が焼け、髪を焦がし、足から血を流しながらも、
ロディウスは走り続けた。

どれ程の時間を走っただろう。
とてつもなく長い時間に感じられたが、実際は数分程度だったの

かもしれない。

群れに戻る途中で、兄がこちらに向かってくるのが見えた。炎を反射して、赤く揺れる金髪。

すぐにレイオンだと解った。

自分を捜しに来てくれたのだと思ったが、それは間違いだった。

レイオンは、この火事の原因を既に知っていた。

兄は、弟を罰するために来たのだ。

何故人間の街へ行ったのか。

人間に関わらなければ、こんなことにはならなかったのに。

そう叫ぶ兄の言葉は、正しいことのように思えた。

一人で街へ行かず、父に相談すれば良かったのか？

盗みを働いたりせず、人間に事情を説明すれば良かったのか？

それとも、彼女を見捨ててしまえば良かったのか？

ロディウスには解らなかった。

胸ぐらを掴まれて、レイオンに何度も殴られながら、ロディウスはただ謝ることしかできなかったのだ。

泣きながら、ひたすらに許しを請うロディウスを、レイオンは許さなかった。

燃える木に顔を押しつけられ、ロディウスはそのときに、両の目を失った。

狭いベッドで、ロディウスとナナエは身体を密着させるように抱き合っている。

すぐ傍にいるナナエに、ロディウスは自身のすべてを話して聞かせた。

話しだす前まで、喉の奥を締め付けられるように苦しかったのだが、言い終えてみればどうと言うこともなく、客観的に自分を見つめ直すことができたような気がした。

だがナナエの顔は悲しみに歪められた。

「何で、ロディウスが罰せられなきゃなんないのさ。火い点けた人間が悪いんじゃないか」

ナナエはそう言うが、ロディウスはそれを否定する。

元はと言えば、一人で勝手に人間の街に行き、菓を盗んだ自分が悪いのだと。

ああ、やっぱりレイオンの言うことが正しかったのだと、ロディウスは口には出さずにそう思った。

「最初に悪いことしたんだから、報いを受けるのは当然だろう？」

「でも、ロディウスはヴォルフの母さんのために……」

「罪に理由は関係ない。結果がすべてなんだよ。誰かを助けたいからといって、罪を許して良いなんてことは、絶対にないんだ」

ロディウスは自分に言い聞かせるように言う。

その言葉は、今まで盗みを働いていたナナエに、重く押し掛かった。

「オレも、報いを受けて当然、かな。どうしたらいいんだろ……」

目を伏せて擦り寄ってくるナナエの背を、ロディウスはそつと撫でさすった。

その手の温もりが伝わってきて、ナナエは彼を見上げる。

目の前にある唇が、静かに開かれた。

「償えばいいのさ。今まで盗んだ分、ちゃんと働いて返せばいい。罪に与えるべきなのは、罰じゃなくて、償いだと思う」

ロディウスの優しい声に励まされるように、ナナエはしっかりと頷いた。

その後も二人でずっと喋っていたが、いつしかナナエは眠ってしまい、隣からかすかな寝息が聞こえ始めた。

ロディウスはしばらくの間、ナナエを抱き締めたままぼんやりとしていたが、やがて東の空が白み始めた頃、静かに起き上がった。窓枠に、かすかな気配を感じたのだ。

そこにいたのは、小さな鼠が一匹。

しかし、明確な意思を持ってロディウスを見ている。

その鼠の鳴き声を聞いて、ロディウスはナナエを起こさないようにベッドから抜け出した。

片腕だけでなるべく手早く衣服を身に付け、音を立てぬように窓を開ける。

冷たい朝の空気が、部屋の中に流れ込んでくる。

ロディウスは振り返ることなく、窓の外に身を踊らせた。

明け方、寒さを感じてナナエは目を覚ました。

眠気の抜けない頭で、何故自分がこの部屋のベッドで寝ているの

か考える。

そして唐突に昨夜のことを思い出し、恥ずかしさで完全に目が覚めた。

「ロディウス……？」

隣に目を向けると、そこに寝ているはずの青年がいない。

起き上がれるようになったから、顔でも洗いに行ったのかとも思った。

だが、わずかに開いた窓で揺れるカーテンを見ると、胸の裡に不安が膨らむ。

嫌な予感がして、ナナエはベッドから降りた。

服を着て部屋のドアを開ける。

廊下にもロディウスの姿はない。

ナナエは急いで他の部屋を見て回った。

「おっさん！」

ガレットが寝ていた部屋のドアを開けて、勢い良く中に飛び込む。その部屋にも、ロディウスはいなかった。

「な、何だ？　どうかしたのか？」

驚いて飛び起きたガレットが、寝呆け眼でナナエを見ている。

「ロディウスが……どこにもいないんだ！」

ナナエの言葉を聞いて、ガレットはそれがただ事ではないとすぐに理解した。

家の中ならいざ知らず、あの怪我で外を歩くなど。

ガレットも家中を見て回ったが、やはりロディウスの姿は見えない。

何事かと起きてきたダルも、ロディウスの姿は見ていないようだった。

「あの兄ちゃんがいなくなったあ？　いったい何時？」

「さ、さっき起きたらもういなくなつてて……お、オレがちゃんと起きて見張ってなかったから……！」

狼狽して今にも泣きそうなナナエの肩を叩き、ガレットは首を振った。

「お前さんのせいじゃないさ。とにかく、外を捜してみよう」

「そうだぜ。ひよつとしたら、あのガキンちょを捜しに行ったのかもしれないし」

ナナエが頷いたのを見て、二人は家を飛び出した。

ナナエもすぐにそれに続く。

三人はそれぞればらの方向を捜しに走った。

ナナエは町外れの森へと向かった。

レイオンと闘った、あの森だ。

何故かは解らないが、ロディウスはそこにいると、そう思ったのだ。

ナナエたちが起きだす少し前、ロディウスは先日の森の中に足を運んだ。

窓枠に佇んでいた鼠は、レイオンからの使者だったのだ。弟を返してやるから、森に来いと。

ロディウスはふらつく足取りで森に向かった。

痛みと熱でまっすぐ歩けず、街の外に出るだけでも苦勞した。

それでも、ロディウスは立ち止まることなく森を進む。

木々の間をすり抜け、藪を掻き分け、枯れ草を踏んで奥へと急いだ。

群れを追い出されたあの日、ロディウスは同じ境遇のヴォルフを置いて山を降りた。

煙に巻かれて知能に障害を持ったヴォルフも、群れの中では孤立していた。

そんな弟を庇って牙を剥くでもなく、弟の手を引いて保護するでもなく、ロディウスは群れに背を向けた。

逃げ出したのだ。

だから今度こそ、立ち向かわなくてはならない。

それが、ヴォルフを見捨てた自分にできる、唯一の償いだと思ったから。

決意を秘めて踏み出したロディウスの足下で、枯れ枝がぱきりと折れた。

「……来たな」

ロディウスの前方から、重低音の声が聞こえる。

大きな木に寄りかかって、レイオンが待っていた。

その足元にはヴォルフが倒れている。

わずかに血の匂いがして、ロディウスは足を止めた。

それがどちらのものか解らなかったが、少なくともヴォルフは殺されている訳ではない。

レイオンは約束だけは守る男だ。

ヴォルフを返すと言ったからには、ヴォルフを殺してしまうことなど有り得ない。

ロディウスは知らなかったが、レイオンはナナエに付けられた傷がまだ治りきっていないのだ。

ロディウスが嗅ぎ取った血の匂いは、レイオンのものである。

ヴォルフが生きていることは解るが、しかし起き上がってくる様子はない。

「ヴォルフは無事なのか？」

レイオンから距離を置いたまま、ロディウスが声を上げる。

レイオンは爪先でヴォルフを軽く蹴飛ばした。

ヴォルフはごろんと仰向けに転がり、小さく呻く。

どうやら眠っているだけらしい。

「何もしてはいない。ヴォルフは無事に返してやろう。その代わり、貴様の命を差し出せ」

そう言って、レイオンはロディウスにある提案を持ちかけた。

それは、一連の騒動を鎮めるための、取引だ。

その話を聞いたロディウスは少なからず衝撃を受けた。

ある程度予想はしていたが、まさかそんなことになっていたとは、夢にも思わなかったのだ。

レイオンの言う通りなら、この騒動を解決するためには、そうするしかないと思われた。だが。

「正直、信じ難い。その話は真実なのか？」

レイオンの話は突拍子もなさすぎて、出来の悪い物語でも聞いているような気分だった。

だが、ロディウスを殺すためだけに、こんな作り話をする必要性はどこにもない。

レイオンが本気になれば、今のロディウスなど簡単に捻り潰せるのだから。

しかし次の一言で、レイオンが嘘など言っていないと確信した。

「レイオン＝レザフォードの名にかけて言う。これは真実だ」

獣人が名を掲げるのは、命を賭けているのと同義なのだ。名を賭けて言う言葉には、一片の嘘さえ雑じっていない。

ロディウスはようやく、レイオンの言っていることが真実なのだと理解した。

「そういうことだ。さあ、お前の命を差し出せ。苦しまずに殺してやろう」

レイオンが近付いてくる。

真相を知った今、ロディウスが抗うことはない。

レイオンの鋭い爪が、ロディウスの心臓を貫いた。

「……………」

ロディウスの耳元で、レイオンが囁く。
ただ一言、すまないと。

ロディウス身体が、ゆっくりと崩れ落ちていく。
レイオンは手に付いた血を舐め取り、死に往く弟に背を向けた。

次第に遠退いていく意識の中、ロディウスは誰かの声を聞いたような気がした。

誰かが、どこかで、自分を呼んでいる。

あれはきつと、ナナエの声だ。
ナナエが、名を呼んでいる。

それは幻聴かもしれなかった。
しかしロディウスには、必死に自分呼び続けるナナエの姿が視えるような気がしたのだ。

ロディウスの意識が、一瞬だけ強く蘇る。

まだ、死ねない！

これで影の事件が解決するならば、世界が救われるならば、死んでもいいと思った。

たった一つの誇りさえ失った自分でも、この世界の役に立てるなら、それでもいいと思えた。

だが、違う。

自分が誇るべきだったのは、翼などではなかった。

種族という垣根を越えて、信頼できる仲間ができたこと。
愛すべき人ができたこと。

それこそが、ロディウスⅡレザフォードの誇りなのだ。

ああ、世界を守護する精霊たち。

どうかこの、愚かな男の願いを聞いてくれ。

最期にもう一度、あの少女の声を聞かせてくれ。

ロディウスⅡレザフォードは今、こんなにも

「生、き……たい——」

ロディウスの声が、風に掻き消された。

彼の、最期の声を聞いた者は……

「ロディウスっ！」

悲鳴にも似た少女の声が響く。

それは、彼が最期まで求め続けた声だ。

だが彼はもう、少女の声を聞くことはできない。

少女が——ナナエが駆け付けたのは、ロディウスの命の火が燃え
尽きた後だった。

森の中、ナナエが目的の人物を捜し当てたとき、彼は地に伏していた。

この距離でもはつきり解る、血の匂い。

ナナエは走る速度を上げた。

倒れた彼から少し離れたところに、見知った男がいた。

男は彼に背を向け、森の奥へと歩いていく。

あの男は敵だ。

急いで彼を助けなくては。

ナナエは大声で彼の名を呼んだ。

「ロディウスっ！」

しかし彼は動かない。

彼の兄であるその男は、完全に森の中へと姿を消した。
今はあの男に構っている暇などない。

ナナエは彼に駆け寄り、何度もその名を叫んだ。

「ロディウス！ ロディウスっ！」

ナナエは彼を抱き起こした。

夥しい量の血が、地面を、草花を、紅く染めている。

彼の銀の髪にも、紅い染みは広がっていた。

それはナナエの服にも染み込んでくる。

どう見ても重傷で、ナナエは止血だけでもしようと傷口を押さえた。

「ロディウス、しっかりしろ！　今、おっさん呼んできてやるから！　だから……」

ロディウス……？」

ナナエはある異変に気付いて、彼の口許に手をかざした。

息をしていない。

そんなはずはないと何度も確かめてみたが、呼吸はおろか、心臓の鼓動さえ伝わってこないのだ。

「う、嘘……そんな、ある訳ない！」

目の前で冷たくなっていく現実を信じられずに、ナナエは何度も彼の名を呼んだ。

だが、叩いても揺り動かしても、彼は二度とナナエの名を呼ぶことはなかった。

「嘘だ！　嘘だ嘘だ嘘だ！　こんなの、オレは絶対信じない！」

悲痛な声で叫び、激しく首を振って彼を抱き締める。

何時の間に目を覚ましたのか、ヴォルフが起き上がり這ってきた。ヴォルフは泣き叫ぶナナエと、動かない兄を見つめて、呆然と呟く。

「にい……どうした？　ナナエ、なんで、泣いてる……？」

ただならぬナナエの様子に、ヴォルフも事態を理解した。

だがどうすれば良いのか解らず、その場に座り込むしかなかった。

ガレットたちが来たのは、この直後だった。

ダルも風を使って捜そうとしたのだが、何故か風が何も伝えてこなかったのだ。

風の声が聞こえなくなった訳ではない。

風はすべてを知っていて、敢えて何も言わなかったように感じた。

しかし、今はそんなことをあれこれ考えているときではない。

ロディウスを抱きかかえ泣き叫ぶナナエを、どうにかガレットの家に連れ帰り、ロディウスの遺体は森の中に埋葬した。

獣人の葬儀など、行ってくれるところはない。

自分たちだけで、静かにロディウスに別れを告げた。

怪我をしているダルに代わり、ヴォルフがよく働いてくれた。

自分もショックを受けているだろうに、率先して力仕事を引き受けていた。

夕方頃にはようやくナナエも落ち着いてきたようで、ヴォルフと共にロディウスに花を添えに行った。

森の一角に立てられた杭が、ロディウスの墓標だ。

そこには、数本の白い花が添えられている。

ナナエとヴォルフは、その前に座ってぼんやりと花を眺めていた。

ナナエの目は、泣き腫らして真っ赤だ。

隣に座ったヴォルフは、いつになく真剣な表情で兄の墓標を見つめている。

その目に、涙の跡は見られない。

膝を抱えて座っていたナナエの目から、涙が一粒零れ落ちる。まるで枯れることを知らないのか、いくら泣いても次々と溢れてくるのだ。

ナナエは涙を止めようとして、強く目をこすった。

「ナナエ……」

前を向いたままで、ヴォルフが呟く。

ナナエは目をこすって顔を上げた。

「涙、隠さなくていい。泣きたいとき、泣く、悪いこと違う」

今まで聞いたことがないくらい、優しい声だった。

まさか、ヴォルフがそんなことを言うなどと思っていたなかったナナエは、驚いたように瞬きする。

「……ナナエ、どうした？」

「らしくないこと言うからだ。馬鹿ヴォルフ」

膝を抱え顔を埋めて、ナナエは鼻声で言う。

自分だけこんなに大泣きしているのが恥ずかしくて、ナナエはぎゅっと目を閉じた。

悲しいのはヴォルフだって同じなのに、ヴォルフは涙を見せようともしない。

「ヴォルフだって、泣けばいいじゃん」

顔を膝に埋めたままと言うと、ヴォルフは静かに首を振った。

「ヴォルフ、泣かない」

「悲しくないのかよ？」

「悲しく、ない」

またしても予想外の言葉に、ナナエは顔を上げた。
急激に頭に血が昇り、思わずヴォルフの胸倉を掴む。

「悲しくないって、どういうことだよ！」

ヴォルフは静かにナナエを見つめ、そっとナナエの手を外した。

「ロディウスは、精霊になるんだ。

大地に、雨に、風になって、世界を巡り、祈りの炎に、癒しの光に、混沌の闇の中にも、ロディウスはいる。

世界を支える精霊になって、ヴォルフたちを、見守ってくれるんだ。

いつだって、傍にいる。だから、ヴォルフ、悲しくない」

ヴォルフの目には涙は見えないが、その声は所々震えていて、握り締めた両手には、わずかに血が滲んでいた。

歯を食い縛っているのは、嗚咽が漏れるのを堪えているのだろう。

いつもはとんだ泣き虫なのに、こんなときだけ強がるのは、ずるいではないか。

ナナエはそっと手を伸ばして、ヴォルフの髪をぐしゃぐしゃと掻き回す。

「この意地っ張り。ヴォルフだって悲しいんじゃないか」

「ヴォルフ、悲しく、ない。にいと、約束、した。泣かない」

ヴォルフはムキになっているようだが、兄と約束したと言うだけあって、その目から涙が零れることはなかった。

日も暮れかけて、ナナエとヴォルフは立ち上がる。

そろそろ戻らないと、ガレットたちが心配するだろう。

歩きだしたナナエを追う足を一度止めて、ヴォルフは振り向いた。

「ロディウス……ごめん。今度は、ちゃんと償う、から」

小さく呟き、急いでナナエの後を追う。

一陣の風が通り過ぎ、墓前の白い花を舞い上げた。

白銀の花弁は、風に舞って高く高く翔ぶ。

やがて花弁は、夕闇の空に融けて消えた。

月の精霊——月の伝承——

まるで夢の中を漂っているような感覚だった。

果てしなく続く夢。

終わりのない夢。

醒めることのない、夢。

その中で、何かに追い掛けられるような焦燥感と、何かに押し潰されるような圧迫感だけが、ひりひりと肌から伝わってくるような気がした。

——泣いているの？ 悲しんでいるの？ 心が、怖がっているの？

どこからともなく響いてきた声は、何もないこの空間に灯った小さな灯り。

その声のする方へと進んで行けば、この夢は終わるかもしれない。そう思って、足を踏み出した。

二人が家に戻ったときには、すっかり日も暮れていた。

赤い夕焼けの残り香だけが、西の空と山の合間に揺らめいている。月はまだ出ていないが、あと数刻もしないうちに顔を覗かせるだろう。

小さな家の扉を開けると、ガレットが真剣な面持ちで二人を待っていた。

帰りが遅いから、心配していたのだろう。その表情は、怒っているようにも見えた。

「ナナエ、お前さんは王都に戻った方がいい」

ナナエとヴォルフを家の中に招き入れて、しっかり扉に施錠してから、ガレットはそう言った。

突然そう言われて納得できるようなナナエではない。

ナナエはガレットに食って掛かった。

「でもまだ、事件は解決してないじゃ……」

「これ以上親御さんに心配かけてどうする。戻りなさい」

「……………」

ガレットに言葉を遮ってまで強く言われ、ナナエは何も言えずに押し黙った。

危なくなったから、一人だけ逃げるなど、後のことは皆に任せて、自分だけ舞台から降りるなど、冗談ではない。

だが、王都の父や母、幼い妹のこと、月の家の皆やエナのことを考えると、どうしても断れなかった。

ガレットはヴォルフに目を向ける。

ナナエは王都で保護してもらえば良いが、ヴォルフには守ってもらえる場所がない。

どうしたものかと思案して、ガレットは乱暴に頭を掻いた。

「ガレット、次の満月、いつ？」

突然、ヴォルフが口を開いた。

いきなり関係ない話をされて、ガレットは思考を中断した。

「は？ 満月って……」

「うん、満月」

ガレットは少し考え、くわえていた煙草の煙を吐き出した。

「……確か、四日後だな」

ヴォルフはその答えを聞くと、一つ大きく頷いた。

「解った。ヴォルフ、もう一度、聖王のそこ、行く」

確かな決意を秘めた声に、その場にいた誰もが息を吞んだ。

「正気かよ！ 何考えてんだ！」

ナナエがヴォルフに詰め寄った。

何故わざわざ危険を冒すような真似をするのかと、ヴォルフを見上げて問い詰める。

ロディウスを亡くしたばかりで、今度はヴォルフまでと考えると、気が気ではなかった。

だが、ヴォルフは本気のようにだ。

普段のへらへらした笑みが、まったく見られない。

「ヴォルフ、行く。満月の日、聖王、正体現す。もう、時間、ない」

その言葉に怪訝そうな顔をしたのはガレットだ。

ヴォルフは明らかに、皆が知らないことを知っている。

最初から知っていたのか、後から得た知識なのかは知らないが、ヴォルフの話を聞く必要があるそうだ。

「ヴォルフ、お前さん、何を知っている？」

ガレットを見下ろし、ヴォルフは静かに語り始めた。

これは、レイオンに捕まっている間に聞いたことだという。

「聖王は、月の精霊が、乗り移ったもの。月は、世界を浄化する、もの」

いきなり出てきた『月の精霊』という単語に、ガレットたちは眉をひそめた。

月の精霊とは、伝説の中のみの存在で、実際に確認されたことはない。

存在自体も定かではなく、お伽噺や聖書、伝承となり語り継がれてきたものである。

「それは、昔話かい？」

いつの間にかダルも部屋に入ってきて、ヴォルフの話を聞いていた。

情報通の風の民であるダルも、月の精霊が実在したという話は聞いたことがない。

しかし、ヴォルフは首を横に振った。

「本当の、話。月が、何で光ってるか、知ってるか？」

ヴォルフの問いに答えられる者は、ここにはいなかった。

月を発光させている構成成分が何なのか、知る者は誰もいない。
月に手が届かないからだ。

調べることはできなければ、知ることもできない。

だが、ヴォルフは……獣人は知っていると言う。

「月は、月の精霊の巢。月の精霊、あそこから、世界守ってる。月は、月の精霊いるから、光るんだ」

その話はお伽噺にしか聞こえない。
にわかには信じられない話だった。

誰もが訝しげな顔をしてヴォルフを見ている。

「……そりゃあ、本当に本当の話なのか？」

短くなった煙草を灰皿に押し付け、二本目を取り出しながらガレツトが問う。

ヴォルフは順に皆の顔を眺めて、頷いた。

「ヴォルフ、嘘言う必要、あるか？」

逆に問われてしまい、口籠もる。

ヴォルフの話が嘘だったとして、ヴォルフが得することなど何もないのだ。

だが、敵に騙されて嘘の情報を教えられた、という可能性もある。

ヴォルフが勘違いしているということも、あり得る話だ。

未だ悩んでいる彼らを見て、ヴォルフは哀しげに眉根を寄せた。

「人間は、精霊、信じないか？　精霊の声、聞こえないか？」

「精霊の声……？」

そんなものは聞いたことがない、とでも言うように、ガレットとナナエは首を傾げた。

だがダルだけは心当たりがあるようで、半信半疑ながらも小さく頷く。

「風の声を、聞くことはある。あれは、風の民同士でしか聞こえない信号のようなものだ、言われているが……」

以前読んだ学術書に書いてあった内容を、記憶の中から引っ張り出す。

そのダルの言葉に、ヴォルフは首を振った。

「それ、風の精霊の声。風の精霊、一番たくさんいる。声、聞こえるのも、一番多い」

風の精霊の声。

ヴォルフの言葉を反芻するように呟き、ダルはようやく納得したように頷いた。

今まで風の民は、風の音を信号化して捉えていると言われてきたのだが、ダルにはいまいち納得できなかった。

風の民は遊牧民であり、精霊研究に携わる者がほとんどいない。そのため、風の民の能力に関する研究は、常に他国が行っていたのだ。

実際に風の力を受け継ぐ者と、それ以外の者とは、捉え方にずれがある。

風の囁き、かすかな感情の変化。その違いを、研究員は正確に捉えることができない。

風に感情があるものかと、彼らは風の民の言葉を一蹴した。

風の声が、時々やたらフレンドリーに感じるのは、風の精霊が自分たちに好感を持ってくれていたからなのだろう。

ダルがずつと感じていた違和感は、ヴォルフの単純な言葉のお陰で解消された。

「なーるほどねえ……こりゃ、ガキンちよの言うことが一番正しいかもしれないぜ、旦那」

ダルに肯定されると、ガレットたちもすべて嘘だと決め付ける訳にはいかない。

知能に障害があるとはいえ、ヴォルフは事態を正確に把握しているようだった。

話を聞く価値はあるように思える。

「じゃあ、ヴォルフ。お前さんは、何でそんなに精霊に詳しいんだ？俺でも知らないことを知っているようだが」

だがガレットの本職は精霊研究である。

そのガレットよりも、ヴォルフの方が精霊に関する知識を持っているというのは、些か納得できないことだった。

天才と呼ばれたダークと共に、精霊の研究をしてきたのだ。
どの国の研究施設より成果をあげていると思っている。

だが、次のヴォルフの言葉で、ガレットはそれがただの思い込み
だったのだと知った。

「ヴォルフ、獣人だから。獣人、精霊の子。精霊の話、いっぱい聞
いてきた」

その言葉に、ガレットは目を丸くした。
以前、ロディウスからも同じことを言われたことがあるのだ。

当時は作り話だと思って相手にしていなかったのだが、今にして
思えば、ロディウスが来てから精霊研究はぐっと捗った。

行き詰まると、必ずロディウスが助言してくれていたように思う。

ロディウスが立てた仮説は、どんな突飛なものであれ、最終的に
はダークの実験によって実証されてきた。

何故そんな考えが浮かぶのかと訊ねたところ、ロディウスは一度
だけ、苦笑いしながらこう言った。

『獣人は精霊の子なんですね。と言っても、ガレットたちは信じちゃ
くれないんだろ?』

今回の影の騒動にしてもそうだ。

ダークが影の研究を始めたとき、ロディウスは月の精霊が関係し
ているかもしれないと言った。

ガレットもダークも、お伽噺だと笑い、真剣に話を聞いていなか
った。

もしもあのとき、彼の言葉を信じていたら、事態は違っていたかもしれない。

後悔の念が押し寄せてきて、ガレットは煙草を噛み潰した。

「くそ……そういうことか。神話や伝承は、昔の人間の作り話じゃないんだな？　すべて、事実を伝えている。そうだろう？」

ガレットは乱暴に頭を掻き、ヴォルフに視線を向ける。

ヴォルフは彼の視線を受け止め、はっきりと頷いた。

隣に座っているナナエは、一人事態についていけない。

だが、これだけは解った。

いつか、ヴォルフが言っていたこと。

『影な、月の精霊が、作ったんだぞ』

あれが、正しかったのだ。

「じゃあ、何？　今回の黒幕は聖王……じゃなくて、聖王に取り憑いた月の精霊の仕業ってこと？」

ナナエは皆の顔を見回して確認する。

誰もが一樣に頷いた。

ガレットは点けたばかりの煙草を揉み消して、席を立った。

ばたばたと慌ただしく部屋を出ていったかと思うと、すぐに分厚い羊皮紙の束と羽ペンを持って戻ってきた。

「ヴォルフ、お前さんの知ってることを、全部教えてくれ。」

俺たちは、月の精霊のことをほとんど知らない。お前さんの知識だけが頼りだ」

ガレットは真剣そのものといった表情で、ヴォルフの正面の席に腰掛ける。

テーブルの上に広げた羊皮紙には、影に関することが書かれていた。

ナナエは初めて、ガレットの研究者としての顔を見た。

普段おちゃらけているおっさんは、これ以上ないくらい真剣な表情でペンを走らせ、ヴォルフから聞いたことを書きまとめている。それに応えるように、ヴォルフも知りうる限り、父に聞かされた月の精霊の話を語った。

普段の幼児のようなヴォルフを知っている者が見たら、何事かと驚くだろう。

実際、ナナエは呆気にとられたようにヴォルフを見つめている。

ヴォルフは獣人に伝わる伝説を、頭の中で反芻した。

子供の頃は毎日聞いていたのだ。

幼少の記憶が曖昧でも、それだけは忘れていなかった。

地の精霊が大地を支え、火の精霊が人間に文明を授けたように、月の精霊にも役割がある。

それは、邪悪なものから世界を守るというものだ。

月の世界はこの世界全土を庇護する、始祖の精霊なのだ。

この世界を生み出した精霊の王と共に、この世界の理を作り上げた。

その後は世界を見下ろす遥か天空にその身を浮かべ、常にこの世界を見守っている。

月の精霊は、世界を脅かす邪悪な思念を吸い取り、世界を浄化していると伝えられてきた。

その邪悪な思念が何なのか、それは知られていない。

ただ、月の浄化作用により、この世界は均衡を保っているという。

そこまで聞いて、ガレットは一度ペンを止めて考え込んだ。

「……てことは、恐らく月の浄化作用に、何らかの障害が発生しているんだな。それで、急に影のようなモンスターが出てきたって訳か」

そう呟いて、ガレットはヴォルフが語った伝承を羊皮紙にまとめる。

ダークの研究成果のレポートに、知り得た情報を新たに書き加えた。

しかしヴォルフは小さく首を振る。

「ヴォルフ、違う思う。月が壊れたからじゃ、ない。月が、怒っているから。だから、影作ってる」

ヴォルフはスピアの羽根ペンを指先で転がし、ガレットが綴る文字を眺めた。

字が読めないヴォルフは、そこに何が書いてあるのかは理解していない。

だが、ガレットが呟いた言葉は理解できる。

ガレットの解釈は間違っていると、ヴォルフは言っているのだ。

ガレットは眉間に皺を寄せてヴォルフを見る。

ヴォルフの言い方ではまるで、月の精霊が世界を滅ぼそうとして
いるようではないか。

世界を守るはずの精霊が、そんなことをするだろうか。

だが、月の精霊について解っていることなどほとんどなく、どの
解釈が正しいとは一概に言えないのが現状だ。

ヴォルフの意見も、頭から否定はできない。

ガレットはふむと頷いてから、止まりかけたペンを再び走らせた。

その間、ナナエはダルと一緒に、キッチンで簡単な夕食を作って
いた。

乾いたパンに、切った野菜と干し肉を挟むだけの、なげやりサン
ドイッチ。

今日は買い物に行く暇もなかったのだから、有り合わせのもので
我慢するしかない。

ダルからは休んでいてもいいと言われたのだが、じっとしている
とロディウスのことを思い出してしまう。

何かしていないと、挫けてしまいそうだった。

「嬢ちゃん、あんま無理すんなよ」

ダルに言われて、ナナエは苦笑いした。

気を遣われると、余計に落ち込みそうになる。

リビングにサンドイッチを持っていくと、ガレットとヴォルフはまだ話し合っていた。

ナナエは二人の側にも皿を置き、ヴォルフの隣に座る。

ガレットの手元を覗き込んでみると、羊皮紙は難しい単語で埋め尽くされていた。

眺めていてもさっぱり解らない。

ナナエはサンドイッチを口に運びつつ、ヴォルフとガレットの話に耳を傾けた。

「で、次の満月に、月の精霊がどうするって？」

ほとんど殴り書きのように、単語の羅列や不可解な図形を書きながらガレットが問う。

「満月、月の精霊が、一番強くなる日。いっぱい、たくさん影来る。今までより、もっと。そのとき、月の精霊、姿現す」

ガレットのペンが止まった。

大量の影が押し寄せるとなると、各国に知らせを出して嚴重な警戒態勢をとってもらわなければ。

「ダル、各国に伝令を頼む。満月の日に大量の影が出現する可能性があるってな」

「あいよ」

「それにしても、月の精霊が姿を現すってのは、どういうことだ？」

聖王に取り憑いてるのが、実体を持って現れるってことか？」

サンドイッチに手を伸ばし、ガレットがヴォルフに訊ねる。

ヴォルフもナナエからサンドイッチを受け取り、ぱさぱさのパンを齧った。

「聖王、人間。月の精霊が、身体、乗っ取った。聖王倒す、月の精霊、次の身体探して、出てくる」

精霊は普段、この世界とは少し次元のずれた世界にいるのだ。

精霊が姿を現すには、それなりの力が必要なのだという。

満月の日ならば、媒体となる人間の身体を使わなくとも、月の精霊はこの世界に出てくることが出来る。

月の精霊と直接接触できる、唯一のチャンスなのだ。

「月の精霊、人間の世界操ろうと、した。だから聖王、なりたかった。今の聖王、本物かも、解らない」

ヴォルフの言葉に、ナナエは納得したように頷いた。

「ああ、そういえば言ってたっけ。聖王の声が、ダークの声に似てるって……ロディウスが」

自分で言っ、ロディウスのことを思い出し、ダメージを受ける。わずかに俯いて、もそもそとパンを齧った。

「何だっ？ 聖王の顔、覚えてるか？」

ガレットはサンドイッチに齧り付こうとしていたのを中止して、ナナエとヴォルフを交互に見やる。

ナナエは聖王の姿を思い浮かべ、あの日の記憶を探った。

「えっと……黒髪黒目の、ひよろつとした若い男だった。なんか病人みたいに、なまっ白い顔の……」

ガレットの目が驚愕で見開かれる。

その容貌は、ガレットが知っているダークの姿に一致するのだ。

「なんてこった……間違いなくダークだ。捕まって殺されたもんだと思ってたが……」

ガレットは片手にサンドイッチを持ったまま、がりがりと頭を掻く。

信じられないようなことばかり聞かされて、頭がおかしくなりそうだった。

「月の精霊は俺たちの敵なのかい……異変を知って人の姿を借り、この地に降りた救世主って訳じゃないんだな……」

重い溜め息と共に吐き捨てたダルという言葉に、その場にいた誰もが口をつぐむ。

未だ甘い期待が、彼らの中にはあったのだ。

精霊は人間を庇護する存在であると、人々はそう信じてきたのだから。

だから、月の精霊が人類の敵に回るということが、信じられなかった。

しかし、現実はそうではない。

月は、この世界に最後の審判を下そうとしている。

そしてそれは、四日後に迫っているのだ。

だが、それが解っていても、事前に防ぐ術は、まだ見付かっていない。

ダークに取り憑いた月の精霊を退治すればいいのか、月そのものを破壊しなければならないのか。

ガレットたちが悩む中で、サンドイッチを食べ終えたヴォルフが軽くテーブルを叩いた。

「だから、ヴォルフ、聖王のそこ、行く」

こつこつとテーブルを指先で叩きながら言うヴォルフは、何かを決意したように真剣な表情をしていた。

その意志があまりに強く滲み出ている、ナナエたちはわずかに息を呑む。

あの泣き虫ヴォルフは、どこかに消えてしまったのだろうか。

「お前さん、本気かい？」

あつちにゃ、あのデカブツだっているんだ。むざむざ殺されに行くようなもんじゃないか」

ダルという言葉にも、ヴォルフは決意を変えなかった。

テーブルを叩く手を止めて、静かに首を振る。

「にいと、約束、したんだ。ヴォルフが、やんなきゃ、いけないんだ」

いったい何を約束したのか、と訊く前に。

ヴォルフとナナエとダル、三人は急に険しい表情で窓の外に目を

向けた。

ガレットは一人、何が起きたのか解らずに、三人の顔を見回している。

「ど、どうしたんだ皆？」

「声が……」

最初に答えたのはナナエだった。

何かの声を聞いて、反射的に外を見たのだ。それにダルが補足する。

「風の声だ……影が街を襲ってる！」

ダルは言うなり立ち上がって、家の外に飛び出した。

ナナエとヴォルフも、すぐに後を追う。

一歩遅れて、ガレットも走ってきた。

無数の黒い影が、街の中を練り歩いている。

影たちは街灯を壊し、自らの行動範囲を広げているようだ。

影に襲われた人たちが、あちこちに倒れている。

「ど、どうなってんだ!？」

「月が、怒ってる……」

皆が慌てる中、ヴォルフは一人、空を見上げて呟いた。

上空に浮かぶ月は、ぼんやりと赤く輝き、いつにも増して大きく見えた。

「とにかく、影をどうかしなないと。旦那は家の中に隠れてなよ」
言うが早いか、ダルは騒ぎになっている街の中心へ駆け出した。
ナナエとヴォルフも、それを追って走りだす。

ガレットの制止の声は、夜の闇に虚しく消えた。
一人取り残され、ガレットは壁を殴りつける。
闘う力のない自分は、彼らについていっても足手まといになるだけだ。

「くそっ……！」

血が滲む手を握り締め、ガレットは短く呟いた。

街の中心部はひどく混乱していた。
影に襲われる人々の悲鳴と、駆け付けた警備兵の号令が飛び交っている。

切っても切っても、影は新たに生まれてくるのだ。
植物の陰、動物の陰、人間の陰から、次々と。

明らかに今までとは違う。
いつもは数体の影が現れるだけで、それ以上増えたりはしなかった。

しかし今、目の前には大量の影が蠢いている。
理由は解らないが、とにかく街の人を助けるのが先だ。

「ちっ、くそ……何なんだこいつら！」

ぼやきながら、ダルが鎌鼬を飛ばす。

影はそれであっさり両断され、虚空へと消え去るのだが、新たに生まれてくる影のせいで、ちっとも数が減らない。

ナナエとヴォルフも、手近な影から切り捨てていく。

剣を持っていないナナエは、ダルを真似て水を飛ばし、影を屠る。影の対処にも慣れてきたものの、こんなに多くの影が現れたのは初めてで、表情には焦りの色が浮かんでいる。

それは周囲に散開している警備兵たちも同じことだ。

いくら斬っても、敵が新たに増えるのではきりが無い。

影の素となっているものをどうにかしないと、朝まで延々戦い続ける羽目になるだろう。

空には雲が出ているが、月の周りは晴れている。

雲が月光を遮ってくれるまで、少なくとも一時間はかかるだろう。

住人全員が家の中に避難したとて、残った影に家を壊されれば、そこから月光が侵入する。

そうなれば、逃げられる場所などない。

やはり、雲で月を覆い隠すしかないさそうだ。

「ダル！ あの雲動かせない？」

ナナエが空を指差し、ダルも一瞬空を見上げる。

「できねえこともないが、ちと時間がかかるぞ。この場を任せて大丈夫かい？」

「大丈夫！」

ナナエが頷いたのを見て取ると、ダルは風に集中するために、影の手が届かない高さまで飛んだ。

風に支えられて空に留まり、更に遙か上空の雲を運ぶよう、風の精霊に語り掛ける。

ダルの意思に応えるように、上空では突風が巻き起こった。ゆっくりだが確実に、大きな雲が月に近付いていく。

「まだかよ！」

地上では、ナナエやヴォルフ、警備兵たちが影を食い止めている。焦れたように叫びながら、ナナエは水の刃で影を切り裂いた。雲はまだ、遠い。

遠巻きに眺めていた街の人々も、ダルとナナエに気付いたようだ。水や風を自在に操れる精霊に愛されし者は、一人でも騎士団一部隊以上の力を有すると聞く。

そんな者が二人もいるのだ。

きつと助かると、期待に満ちた目で二人を見守り、物陰で息を潜めている。

それは、間近で二人を見た警備兵たちも同じようだ。今年入った新兵なのだろう。

まだ年若い少年兵は、ナナエの操る水の刃に目を奪われた。

だが、そのわずかな隙に、影の接近を許してしまう。少年が気付いたときには、目の前に黒いシルエットが迫っていた。

間近に迫る死の影に、思わず目を閉じる。

刃物で肉を切り裂いたような音がした。

しかしそれは、自分の腹が切り裂かれた音ではなかった。

恐る恐る目を開けると、目の前にいたはずの影は胴から上がなくなっており、その向こう側に腕を振り抜いた格好のヴォルフが立っていた。

ヴォルフは、この中で最も成果を挙げている。

すべて一撃で影を葬り、新たな影が動きだそうとする前に潰しに行く。

ヴォルフの周囲だけ、他よりも影の密度が薄くなっている程だ。今程切り裂いた影も、崩れ落ちて虚空に消える。

敵を前にしたヴォルフの鋭い眼光に、少年は驚いて尻餅をついてしまった。

本で読んだ知識で、ヴォルフが獣人であるということは解る。

ひょっとして自分は殺されるんじゃないかと、水の精霊に祈りを捧げた。

しかし、少年の想像を裏切るように、ヴォルフは人懐っこい笑みを浮かべ、少年に手を差し出した。

「平気か？ 立てるか？」

「え……え？」

事態を理解できず、面食らった様子の少年の腕を掴み、ヴォルフは彼を強引に立たせる。

「怪我、ないな。良かった」

それだけ言って、ヴォルフは別の影を倒しに走って行ってしまふ。残された少年は、多少驚愕の余韻を残しながらも、再び剣を握り締めて市民の救助に向かった。

影は少しずつ減ってきてはいるが、減った分だけ数を増している。戦い通しだった警備兵には、疲労の色が濃い。

「なあ、まだかよ！」

「慌てるなよ……！ もう、届く！」

ナナエの焦りの声を聞きながら、ダルは風を使って雲を呼び寄せ
る。

空を覆うカーテンのような雲は、月の間近に迫り、徐々に月の光を遮っていく。

やがて辺りが薄暗くなり、雲は完全に月を覆い隠した。

月の光も星の光も届かない。

夜闇を照らすのは、人々が持つ松明や角灯の灯りのみとなった。

月光が遮られてすぐに影が消え去る訳ではないが、これで新たに影が増殖することはないとなった。

ナナエたちは、暗闇の中で残った影に刃を振るう。

影は、確実に数を減らしていった。

街中の影を片付けるのにはかなり時間がかかったが、それでも今、ナナエが斬った影が、最後の一体だったようだ。

街中の警備兵たちから、影消滅を報告する声が聞こえる。

街の中に、ようやく安心が戻ってきた。

幸い死者は出なかったが、それでも酷い傷を負っている者はいる。兵たちは詰め所からありったけの医薬品を持ってきて、怪我人の応急処置をしていた。

ナナエたちも手伝いたところだが、疲労感が強く、街の一角に座り込んでしまった。

「あー、もうだめ。俺もう動けない……」

「オレも……」

長時間連続で精霊の力を行使したため、ダルとナナエは立つことすらままならない。

ヴォルフだけは一人元気で、あれだけ動き回った後だというのに、街と森とを往復している。

「はい、これ、痛いのが消える。噛め」

ヴォルフがダルに差し出したのは、森に生えている薬草だった。街の人や兵士の怪我の治療で薬が足りないので、ヴォルフが森から薬草を摘んできているのだ。

「ありがとよ、ガキンちよ……うえ苦っ！」

鎮痛効果のあるという草を食み、ダルは思い切り顔をしかめた。ヴォルフは余った草を、近くにいた少年兵に渡す。

先程ヴォルフが助けた少年だ。

「これ、痛いのが消えるのと、傷、早く治るの。いっぱいあるから、使え」

「はい、あのっ、ありがとうございます！」

少年は両手にいっぱい葉草を抱えて、怪我人を集めた大通りに走っていった。

そこでは、ヴォルフに呼び出されたガレットも、怪我人の手当てを手伝っている。

その光景を見ながら、ヴォルフはナナエとダルに真剣な表情で言った。

「たぶん、これから毎日、同じくらい影、来る。月の精霊、倒さなきゃ、だめだ」

これから毎夜こんな襲撃が続いたのでは、とても対処しきれない。しかも、月の精霊は満月の日に最も強い力を発揮するという。

恐らく、満月当日は今日の比ではない数の影が、人々を襲うだろう。

今日のように大きな雲が出ていれば良いが、そう都合良くはいかない。

精霊の力を引き出しても、世界中の国を覆い隠せるような雲は、作れないのだ。

だからこそ、元から絶たねばならない。

「ヴォルフ、行く。ばいばいだ」

あっさりと、まるで家に帰る子供のようにあっさりと言い切り、ヴォルフは走りだした。

座り込んでいたナナエもダルも、突然走りだしたヴォルフを引き止めることはできなかった。

「ちょ……なっ!？」

「待て! ヴォルフ!」

慌てて制止の言葉を口にして立ち上がったときには、ヴォルフの姿は夜闇の向こうに消えていた。

「あの……馬鹿!」

咄嗟に走って追い掛けたのは、ナナエだけだった。

ダルも足を踏み出したのだが、強烈な眩暈を覚えてしゃがみ込んでしまう。

先日のナナエと同じように、過度な力を使ったため、抗えない程の疲労感が押し寄せてくる。

意識を失いこそしなかったものの、とてもすぐには立ち上がれそうにない。

「つく……これだから、最近の若者は……」

口でぼやきながらも、胸の裡では二人の無事を願う。

そうすることしか、今のダルにできることはなかった。

月の精霊——再戦——

声は何もない空間から聞こえてきた。

元より目の見えない彼には、そこに何があるのか、誰がいるのかなど、解るはずもない。

しかしなぜか、彼にはそこに、白く小さな少女が佇んでいる姿が視えたのだ。

——誰だ？

彼は問う。

——識っているでしょう？

少女は答えた。

白く輝く少女は、彼にすべてを包み込む優しい笑顔を向ける。
しかしその微笑みは、すぐに憂いの表情に変わる。

——ごめんなさい。本当なら、私が最後まで責を負わなければいけないのに、私にはもう、支え続けられる力がない……

白い少女の嘆きに呼応するように、世界が揺れた。

少女の身体が、黒い何かに蝕まれてゆく。

痛みの色に蝕まれる少女を前に、彼は選択を迫られる。

ナナエは必死に走っていた。

ヴォルフの背を追っているはずなのだが、大分距離を空けられてしまい、その姿は森の奥に消えている。

始めのうちは足音を頼りに進んでいたのだが、いつしかそれも聞こえなくなってしまった。

獣人であるヴォルフの脚に、人間が追い付けるはずもない。

しかも、ここは夜の森の中である。

月明かりも星明かりもなく、慌てて追ってきたため角灯も持っていないかった。

目の前すら闇に染まっていて、ナナエは張り出していた枝に気付かず、枝の先で頬を切る。

じんと痺れるような痛みが走り、少し鉄臭い水が頬を伝った。

それでも足を止めずに走り続けたのだが、今度は木の根に足を取られ、前のめりに倒れてしまった。

咄嗟に受け身はとったが、強く地面に擦れた腕や膝を擦り剥いてしまう。

「い……って」

小さく呻き、ナナエはふらつきながら立ち上がった。

軽く土を払い、流れ落ちる汗を乱暴に拭う。

影の襲撃で疲労したナナエの脚は、最早限界に近い。

再び走りだそうとしても、震えてしまって上手く歩けなかった。

まるで獣の息遣いのようにだと、どこか他人事のように思いながら、肩を上下させて荒い呼吸を繰り返す。

それでも、ナナエはヴォルフを追いかける必要がなかった。

追い付いて、連れ戻さなければ。

このままヴォルフを行かせたら、彼もまた、ロディウスのように殺されてしまうかもしれない。

それだけは、絶対に嫌だった。

ロディウスがいなくなって、ヴォルフまで……そう考えるだけで、全身が震える程に恐い。

思わず、目に涙が滲む。

「やだよ……そんなの……」

嫌な考えを振り払いたくて、ぎゅっと目を瞑り首を振る。

（誰か、助けて。ヴォルフを一人で、行かせないでください。お願い、誰か……ロディウス、先生、精霊様……！）

ナナエは初めて、心の底から祈った。

いつもの形式だけの祈りとは違う、思いのすべてを捧げる祈りだ。

そのとき、心の中で、小さな水の泡が弾けたような音を聞いた。

——大丈夫だよ。こっちにおいで。

まるでそう言っているように聞こえて、ナナエはゆっくりと顔を上げる。

どこからもそんな声はしていないのに、何故かどの方角から聞こえたのか、はっきりと解る。

ナナエはその声なき声を頼りに、鉛のように重くなった脚を前に進めた。

それからいくら歩いただろうか。
疲労も限界を迎えていたナナエは、自分の足に躓いて転びそうになる。

だが、ナナエが地面に倒れる前に、誰かがナナエの身体を支えた。

（ロディウス？）

一瞬そう思ったが、違う。

「ナナエ、なんで、来た！」

怒ったようにそう言ったのは、ナナエを抱き留めたヴォルフだった。

「ナナエ、帰れ。危ないんだぞ。来たら、だめだ」

途中でナナエが追ってくることに気付いて、迷った末に引き返してきたらしい。

ヴォルフは眉根を寄せてナナエを見下ろし、その口調は怒っているようでもあり、どこか嬉しそうでもあった。

「だって……危ないなら、尚更だろ。ヴォルフ一人で、行かせられる訳、ないじゃん」

途切れ途切れになりながらも、ナナエは言葉を紡ぎ出す。
立っていることも困難で、ほとんどヴォルフに身を預けているよ

うな状態だ。

ヴォルフはナナエが倒れないように、その身体を支えている。お互いに抱き合っているような格好になってしまった。

「ヴォルフは、ナナエ連れてく、できない。ヴォルフ、ナナエ好きだ。ナナエ、守りたい」

思わぬところで急に聞かされたヴォルフの本心に、ナナエは少し恥ずかしそうに頬を染め、至近距離からヴォルフを見上げる。

「オレも、ヴォルフ好きだよ。友達だもん。でも、オレだけ守られてるなんて嫌だ。ヴォルフが帰らないなら、オレも一緒に行く」

ヴォルフは困ったように唸っていたが、やがて諦めたのか、息を吐き出しながら頷いた。

「ナナエ、我儘。ヴォルフが、言ったって、全然聞かない」

「うん。ごめんな」

可笑しそうに笑って、ヴォルフの顔を見上げる。

暗闇の中で、ヴォルフの黄金の瞳だけが光って見えた。

やがて全身の疲労から、ナナエはヴォルフに身体を預けたままうとうとし始めた。

もう目を開けてもらえない。

ヴォルフはそんなナナエを抱き締め、小さな声で囁くように言う。

「ほんと、嬉しい。来てくれたの、ありがと……ナナエ、大好き」

だ」

それが聞こえたのか聞こえなかったのか、ナナエは静かに眠っていた。

ナナエとヴォルフは、聖王国を目指して歩き続けた。

その途中、ダルが風を使って状況を報告してくれた。

まずは思い切り怒られ、必ず無事に帰ってくるようにと、一方的に約束させられた。

水の国では、影の襲撃に備えて、水王が騎士団を各街に派遣させたそうだ。

風の国は、ほぼ全員が戦闘に長けているということで、他国の護衛のために、皆故郷を離れたという。

火の国には火の戦士団がいるし、他に類を見ない文明大国である。聞けば一般人でさえ、火薬を使った武器を持ち歩いているそうで、戦う力は充分にあるだろう。

平和主義の地の国には、影を迎え撃てるだけの軍事力はない。昨夜はどうやら水の国だけでなく、各国にまで影の襲撃があったらしく、地の国はかなり被害を受けているそうだ。

風の民の多くは、地の国で救助活動をしている。
ダルも遅れ馳せながら、地の国に向かっているとのことだ。

だが、最も被害を受けているのは、地の国ではなかった。

水の国と聖王国の国境を越えて、ナナエたちは小さな村を訪れていた。

水や保存食の他、色々が必要なものを入手するためだ。

何も待たずに飛び出してきてしまったため、森で採った果実や獣肉を売って、金を稼ごうと思っていたのだが……

その村には、むせる程の血臭が漂っていた。

役所も置いていないような小さな村だ。

聖王国内とはいえ、こんな小さな村には、兵を派遣すらしなかったのだろう。

無惨に倒れている遺体には、どれも切り裂かれたような傷痕がある。

中には必死に戦おうとしたのだろう、鍬や斧を握り締めたまま倒れている者もいた。

余りにも悲惨な光景に、ナナエは思わず口元を押さえた。

吐き気がこみ上げてくる。

「ひでえ……」

村の真ん中に立ち、ナナエは小さく呟いた。

生存者がいないかと、村中を捜して回ったのだが、淡い期待はすぐに打ち碎かれた。

ヴォルフも顔をしかめて押し黙っている。

本来ならばきちんと埋葬してあげるべきなのだが、生憎そんな時間はない。

あと三日のうちに、首都ヘリグまで行かなければならないのだ。

心は痛んだが、そのままにして村を出た。

彼らの魂に、精霊様からの慈悲があるようにと祈りを捧げ、ナナエとヴォルフは先を急いだ。

やがて見えてきた次の街も、酷い有様だった。

街の入り口付近に、影に襲われたと思われる死体が積み上がっている。

これから火葬するのだと、疲れた顔の役人が教えてくれた。

この街にはまだ生存者がいたが、皆どこかしら怪我をしているようだった。

ヴォルフが持っていた薬草をすべて渡し、代わりに旅に必要な荷袋や防寒布、水筒などを用意してもらう。

その間に、街の人に話を聞いたところ、驚くべき情報が出てきた。世界一の強さを誇る聖騎士団が、一人も助けに来てくれていないと言うのだ。

「騎士団が来ないって……何で？」

「そりゃこっちが聞きたいよ。騎士団さえ来てくれれば、こんなに被害が出ることもなかっただろうに……！」

手足に包帯を巻いた恰幅の良い女性は、憤慨してテーブルを叩いた。

宿屋の女将である彼女は、部屋を怪我人に貸しているのだそうだ。施療院だけでは入りきらず、余った部屋を急遽、仮の収容所になっているのだ。

彼女は比較的軽傷だったため、怪我人のために食事の用意をしてやっている。

「まったく、こんなときのための騎士団だろうに、聖王様はいったい何を考えてるんだろうね！」

怒りの冷めやらぬ女将に、今夜は灯りを消して部屋から出ないようにと忠告してから、ナナエたちは首都を目指した。

次の街も、その次の街も、同じように影の被害に遭っていた。被害者の数は、日を追う毎に増えている。

ナナエやヴォルフも、泊まった街で影の襲撃に遭い、撃退するのを手伝ったのだが、本当に聖騎士団が応援に駆け付けることはなかった。

月は赤く、丸くなっていく。

本来の大きさは、親指と人差し指で輪を作ると、その輪にすっぽり収まる程度の大きさだったのだが、今では一回り近く大きく見える。

まるで本当に、月が怒っているようだ。

満月の日まで、あと一日。

この日も、影の襲撃は容赦なく続いた。

首都ヘリグに程近いこの街にも、騎士団の姿はない。

連日の襲撃に、こちらの体力も限界だった。

「ナナエ、無理、だめだ。ここに、いろ」

「何、言っただよ！ 街の人を、見殺しにできないだろ！」

暗い宿屋の一室で、ヴォルフがナナエを押さえつけている。

宿の外では、数体の影が暴れていた。

生き残った住民は皆、家の中に隠れている。

生き物の陰がなければ、影は生まれない。

しかし街の外にいる野生動物や、辺りに生えている植物は沢山あるのだ。

影は次々と、街の外から現れる。

この通りもじきに、影に埋め尽くされてしまうだろう。

知恵をつけた影は、家の壁を打ち壊し、中の人間を外に引きずり出している。

既に数人が影の犠牲となり、通りに打ち捨てられていた。

ナナエが咄嗟に飛び出そうと窓を開けると、階下の少年と目が合った。

見ただけで解る。

彼もまた、ナナエと同じく精霊に愛された人間だと。

数多の精霊のうち、彼の背後に佇むのは小さき雷。

恐怖に引きつった顔でナナエを見上げる少年の唇が、かすかに動いた。

たすけて

そう刻んだ唇は、しかし声を発する前に、影の刃で切り裂かれた。赤い飛沫が宙に踊る。

ナナエは思わず飛び降りようとしたのだが、ヴォルフがそれを止めたのだ。

聖王国に入ってからというもの、毎晩このような襲撃があり、ナナエとヴォルフはその都度影と戦ってきた。

獣人であるヴォルフはともかく、人間の少女であるナナエには、戦うだけの体力は残されていない。

明日の満月の日まで、体力は温存しておかなければならないのだ。ここでナナエを行かせる訳にはいかない。

「離せよ！ 放せ！」

「だめ。できない。ナナエ、ごめん」

ナナエを押さえつけるヴォルフの力は強く、とても振り払うことができない。

ナナエは唇を噛みしめ、聞こえてくる幾多の悲鳴から目を背けた。

翌朝、ナナエとヴォルフは静かに宿を出た。

聖王の住まう王宮は、次の街、首都ヘリグにある。

今夜、月の精霊をどうにかしなければ、影の襲撃は止まらない。
二人は今朝からほとんど喋らずに、首都ヘリグに足を踏み入れた。
最初に来たときは賑わっていた首都は、今や廃墟と化していた。
最後に見たときからたった一週間で、こんなにも変わってしまう
など、誰が思っただろう。

賑やかだった大通りに人の気配はなく、あちこちに放置された死
体から血の匂いが漂っている。

中には、腐臭が混じっているものもあった。

二人はこみ上げてくる吐き気を堪えて、王宮を目指した。

以前は沢山の警備兵がいた王宮の前には、誰もいなかった。
不気味な程に、静まり返っている。

ナナエとヴォルフは顔を見合わせ、王宮の正門を開けて中に入っ
た。

「……………！」

真っ先に飛び込んできたのは、一面の赤。

庭も壁も門も柱も、処構わず赤一色に染められている。

そして庭中に散乱している、騎士たちの肢体。

土の上に、石畳の上に、芝生の上に、所狭しと打ち棄てられてい
た。

ナナエもヴォルフも、言葉もなく立ち尽くしていた。

騎士団が街に派遣されなかった理由が、やっと解った。

皆既に、ここで息絶えていたからだ。

太陽が、西に傾き始めている。

この時季の日暮れは早い。

あと数刻もしないうちに、夜になるだろう。

王宮の中には灯りもなく、不気味な静けさだけが漂っていた。使用人も、警備兵も誰もいない。

否。ほんの数日前までは、確かにここにいたのだ。

今はもう、生きて動いている人間は一人もいない。

影に襲われたのは、騎士団だけではなかった。

王宮の中にも血と死体が散らばっている。

死臭を紛らわすためだろうか。

香木を焚いたような匂いが充満していて、異様な空気が荒れた王宮内を包み込んでいた。

思えば、以前訪れたときも、同じような香りが漂っていた。

今回程強い匂いではなかったが、この匂いのせいでレイオンがいたことにも気付かなかったのだろう。

血に染まった白亜の王宮の中を、二人は進んでいく。

聖王が城のどこにいるのかは知らないが、なんとなく、そこにいるような気がした。

ナナエとヴォルフは互いに目を見つめて頷き合い、謁見の間の扉をゆっくりと押し開けた。

赤い絨毯が敷かれた広い部屋の奥、大きな玉座に小さな影が座っていた。

黒い髪、黒い瞳、それとは対照的に青白い肌。

聖王クリストフ……否、ダークの身体に取り憑いた月の精霊は、優雅に脚を組んで座り、軽く頬杖について微笑みを浮かべている。

ナナエは知らず流れ落ちた汗を拭う。

掌も湿っぽくなっていて、自分の服へ雑にこすり付けた。

ちらりと隣を見れば、ヴォルフは眉間に皺を寄せ、牙をむき出しにして聖王を睨んでいる。

一段高いところに設置されている玉座の上で、聖王は静かに微笑んだまま、二人を見下ろしていた。

「やあ、よく来たね。生を司る者獣人の血を引く子と、水の精霊の加護を受けた子だね。

そんなところにいないで、こちらにおいでよ。歓迎するよ」

まるで遠方から参拝した年若い信者を労うような口振り。

本来ならば喜んで傳く場面なのだろうが、ナナエとヴォルフは陰しい表情でその場を動かなかった。

聖王は肩をすくめてくすりと笑う。

「そんなに緊張しなくてもいいだろう？

月が昇るまで、もうしばらく時間はある。それまでは、一緒に遊ぼうじゃないか」

組んでいた脚を崩し、聖王が立ち上がる。

そして玉座の背後からは、レイオンが姿を現した。

レイオンは口許にかすかな笑みを浮かべ、聖王の隣に並ぶ。言い様のないプレッシャーが、ナナエとヴォルフに襲い掛かった。

だが、今度は覚悟をしてきた分、まだ口を開く余裕があった。ナナエは気力を振り絞って声を張り上げる。

「どうして、影を使って街の人を襲わせるんだ！」

ナナエの叫びを聞いても、聖王は笑みを崩さない。

「やだなあ、そんなに大声出さなくても聞こえるよ。世界を浄化するために決まってるじゃないか」

くすくすと笑いながら言う聖王は、ナナエをからかっているようでもあり、嘲っているようでもあった。

ナナエは怒りに任せて聖王を殴り倒したくなったが、なんとかその衝動を堪えた。

闇雲に飛び出していったら、横にいるレイオンに殺されるだろう。ナナエはぐっとその場に留まり、再び聖王に問い掛けた。

「世界の浄化って何なんだ！？ 何で人間を襲う必要があるんだよ！」

聖王は未だ、微笑みを崩さない。

「何も知らないんだね。一緒にいた獣人の男に教えてもらわなかったのかな？」

聖王は視線を隣にいるレイオンに向け、軽く小首を傾げる。

「獣人の中にも、正確には伝わっていなかったのかな？」

「……ああ」

「そっか。なら仕方ないね」

口許に手を当て、くすくすと可笑しそうに笑う聖王の姿を見て、ナナエは両手を握り締めた。

「何笑ってんだ！」

「ふふ、ごめんよ。きみたちが余りにも無知だったのが可笑しくて」

聖王はひとしきり笑った後、目に浮かんだ笑い涙を拭った。

小さく息を吐いてようやく笑いが治まった聖王は、ナナエとヴォルフを見下ろし、すっと一步前に入る。

「知らなくてもいいことだよ。どうせ人間は皆、今夜この世界からいなくなるのだから」

聖王のその言葉が、長い夜の始まりだった。

聖王の言葉が終わると同時に、レイオンとヴォルフが床を蹴った。二人は部屋の中央で互いに右の拳を打ち出し、左手でそれを受けとめる。

思い岩盤を巨大な槌で叩くような音がした。

鳥型のロディウスよりも、ヴォルフの方が力は強い。

しかし、それでもレイオンには劣る。
じりじりとレイオンの力に押されながら、ヴォルフは右足を振り上げた。

ほぼ同時にレイオンも蹴りを放つ。

二人は互いの脇腹を蹴り合って、左右に吹っ飛ばされた。
すぐさま身を捻って受け身を取り、起き上がり様に床を蹴る。

再び中央でぶつかり、鋭い爪を振り回す。

互いの攻撃を受け、流し、反撃に転じる。

息もつけぬ程の凄まじい攻防が応酬されるのを横目に、ナナエは聖王に向かって走りだした。

腰から提げていた水筒の口を外し、水をぶち撒ける。

水はナナエの意思に従って、その手の中に収束した。

それはまるで一振りの剣のように、壁に灯された蝋燭の炎を反射している。

水の剣を手にしたナナエは、大上段から剣を振り下ろす。

聖王は半歩身を引いて、その一撃を躲した。

「何なんだよてめえ！ 月の精霊は、人間たちを守るのが役目じゃないのかよ！」

叫びながらナナエは剣を翻した。

素早く突き、薙ぎ払い、振り下ろす。

そのことごとくを、聖王はわずかな動きで避けている。

その顔からは、先程までの微笑みは消えていた。

代わりに、ナナエを小馬鹿にしたような表情を張り付け、すいと

目を細めてナナエを見やる。

「月の精霊が人間を守る？」

それは面白いね。誰がそんなことを言ったのさ」

聖王は玉座を盾にしてナナエの剣を躲す。

水の剣は、玉座の一部を切り飛ばした。

「何言ってやがる！ 神話とか、伝承とか、ずっと伝わってきたことだろうが！」

切り落とされた玉座の端が、ごとりと重い音をたてて床に落ちる。磨けば映り込めそうな断面が、剣の切れ味を物語っていた。

その切り口にちらりと目を向け、聖王はさも愉快そうに笑う。

わずかに首を傾け、細く開いた目でナナエを見据える。

「ふふ……人間たちは本当に面白い解釈をするね。その伝承のどこに、月が人間を守るものだなんて書いてあるんだい？」

聖王の言っていることの意味が解らず、ナナエはきつく剣を握り締めた。

聖王の虚言だと決め付けて、再び聖王に斬りかかる。

「訳解んねえこと言ってんじゃねえ！」

ナナエの剣の切っ先が、聖王をかすめる。だがわずかに届かない。聖王は軽々と身を翻し、ナナエの攻撃を紙一重ですべて避けている。

否。ナナエが、すべての攻撃を寸前で止めているのだ。

月に身体を乗っ取られただけで、ダーク自身はまだ生きている。その事実が、ナナエの剣を鈍らせていた。できることならば、救いたい。

しかし手加減しては、月の精霊を追い詰めるだけの一撃は与えられない。

ナナエが次第に焦れてくるのが解る。

聖王はナナエの目を見て、凶悪な微笑みを浮かべた。

すべてを吸い込むような闇の瞳が、ナナエの姿を捕らえる。

その闇に囚われそうになり、ナナエはまとわりつく闇を振り払うように、声を張り上げた。

「月の精霊！ さっさとダークって奴を解放しろ！」

「やだね。この身体は気に入っているんだ。容姿もまあまあだし、何より頭がいい」

玉座を挟んでナナエの正面に立ち、聖王は両手を広げる。

事実、ダークの知識と知恵の深さは、月にとって驚異でもあった。あのままダークが研究を進めていたら、遠からず真実に辿り着いていただろう。

更にロディウスという獣人の協力者がいることも、月には面白くなかった。

人間だけならば解けないことも、獣人の持つ知識があれば解けてしまうかもしれない。

そうすれば、月が充分な力を蓄える前に、ダークたちによって月は消されていたかもしれない。

そこで月は当時の聖王を操り、嘘の情報に踊らされたふりをしてまで、ダークを捕らえたのだ。

「身体は誰のものでもよかったんだよ。いちいち殺して新しい媒体を探すのが面倒だったから、この身体を使ってるだけさ」

先代の聖王は病を患っており、長くは生きられなかった。

月は先代の遺言という形で、ダークを新たな聖王に仕立て上げた。

完全に力を蓄えるまで、影の存在を人間に気付かせたくなかったのだ。

そのための隠蔽工作をするには、大国の頂点にいた方が都合が良
い。

「ダークの身体を返せよ！ もうお前には必要ねえだろ！」

ナナエの剣が振るわれ、聖王の眼前に突き付けられる。

それでも聖王は微動だにしなかった。

ナナエにダークを攻撃する意思がないことを解っているからだ。

「その剣で、切り裂けばいいじゃない？」

そうすればこの人間は死ぬけど、僕も傷を負うよ」

「てめえ……っ！」

ナナエがぎりど歯を食い縛る音が聞こえる。

聖王はナナエを嘲笑うように、眼前にある水の剣の切っ先を指で
摘む。

「がっかりだなあ……もう少し敵意むき出して斬り掛かってきてく

れると思ったのに。こんな風にさ」

そう言った聖王の眼が、ナナエの瞳の中で妖しく光る。

その光を見た瞬間、突然ナナエの目の前にレイオンが迫ってきた。高らかに咆哮し、鋭い爪を振るう。

「なっ!？」

余りに突然の出来事で、ナナエは反射的に剣を引き、レイオン目がけて突き刺した。

手応えはあった。

ナナエの剣は、確かにレイオンを貫いたはずだった。

しかし、ナナエの目に映ったのはレイオンでも聖王でもなく。

水の剣に貫かれた、ロディウスの姿だった。

「……え？」

目を見開き、呆然と呟く。

ナナエの目の前で、ロディウスは血を吐き出し、その身体がぐらりと傾ぐ。

「いつ、嫌あああっ!」

思わず剣から手を離し、ナナエは頭を抱えて狂ったように叫んだ。水の剣はナナエの支払を解かれ、ただの水となり床に飛び散る。

ゆつくりとロディウスの身体が倒れ、床に真つ赤な血が広がっていく。

ロディウスの背後に立った聖王の目が、金色に輝いていた。

窓の外では、大きな赤い月が浮かび上がってるところだった。

ヴォルフの身体が、白い壁に叩きつけられた。
衝撃で息が詰まり、ヴォルフは苦しげに呻く。

レイオンは酷薄な笑みを浮かべ、ヴォルフを見下ろす。
自分よりも一回りは大きな兄を見上げ、ヴォルフは口の中の血を
吐き出した。

「どうした、ヴォルフ。そんなことでは、このレイオン＝レザフォ
ードを殺すことはできぬぞ」

兄の声に応えるように、ヴォルフは起き上がり口許の血を拭う。

レイオンは異形の姿となっていた。

半獣化しているのだが、その姿はヴォルフが知っているものとは
大分違っていた。

レイオンは獅子型だったはずなのだが、今のレイオンには獅子の
面の他に、山羊の角が付いている。

その背には蝙蝠の翼と猛禽類の翼が一つずつ生え、尾はまるで蛇
のようだった。

よく見れば、手足もそれぞれ少しずつ違っている。
初めてその姿を見たヴォルフは、驚きのあまり足を止めてしまい、
レイオンの一撃で壁に叩きつけられてしまったのだ。

「どうしたヴォルフ。真の力はそんなものではないだろう」

レイオンがゆっくりと近付いてくる。

ヴォルフは人型のまま戦っていた。

母親が人間であるヴォルフは、半獣化するには、獣人の血が薄すぎるのだ。

もし無理に半獣化すれば、獣人の血が暴走し、破壊衝動を抑えきれずにすべてを壊すまで暴れ回るか、身体が負担に耐えきれずに崩壊してしまうだろう。

ヴォルフもそれを解っているから、半獣化できないのだ。

「レイオン……どうしても、だめか？　ヴォルフ、こんなの、やだ」

荒く息を吐き、ヴォルフはゆるゆると首を振る。

だが、レイオンは弟の言葉にも耳を貸さず、鋭い爪を振り上げた。

「甘えるな、愚弟め」

重く冷たい声と共に、太い腕が振り下ろされる。

ヴォルフは咄嗟に両手で受け止めるが、その瞬間、がら空きになった脇腹をレイオンが蹴り飛ばした。

ヴォルフはごろごろと床を転がって立ち上がる。

鈍い痛みが身体中を襲った。

無理矢理苦痛の声を呑み込んで、ヴォルフは拳を構える。

レイオン相手では、一瞬の間でも命取りとなる。

全身に細かな傷を作り、必死の形相でレイオンを迎え撃つヴォルフに対し、レイオンは余裕そのものといった表情だ。

迫り来るレイオンに応戦しようと一步を踏み出したそのとき、ナ

ナエの悲鳴が聞こえた。

「ナナエ!？」

その声に、一瞬ヴォルフの意識がレイオンから離れる。

剣を手放して震えるナナエと、その向こうで血を流しながら狂気の笑みを携えた聖王。

ヴォルフが二人の姿を確認したその瞬間、レイオンは一気に距離を縮めた。

「戦っている最中に余所見をするな、愚か者」

レイオンの大きな拳が、ヴォルフの腹を抉った。

骨の折れる嫌な音が、ヴォルフの耳に届く。

せり上がってきた血の塊を吐き、ヴォルフはまたしても壁に叩きつけられた。

ずるずると崩れ落ち、腹を押さえて蹲るヴォルフを見下ろしていたレイオンが、ふと窓の外に目を向ける。

真っ赤な月が、夜空を仄赤く染めていた。

「月が光り始めたか。今頃、世界中に影が溢れ出していることだろう」

レイオンは静かに呟いた。

まるでヴォルフに聞かせるように。

ヴォルフがゆっくりと、顔を上げる。

歯を食い縛って自分を見上げる弟を、レイオンは冷ややかに見下ろした。

「ヴォルフ。お前の名はただの飾りか？」

「ち……がう！」

両手で身体を支え、ヴォルフは荒い息を吐きながら起き上がる。
赤い絨毯が敷き詰められた床を両足でしっかりと踏みしめ、戦闘の構えをとった。

「ロディウスはその名の通り、切り裂く風の如く挑んできた。
お前はそのまま、約束も守らずに死ぬのか？」

「違うっ！」

獣の咆哮の如く、ヴォルフは叫んで頭を振った。
獅子の面をしたレイオンの口が、耳の方まで吊り上がり笑みを形作る。

「ならば名を懸けて挑むがよい。
我が名はレイオンⅡレザフォード。名が冠するは、誰よりも強き
絶対の王なり！」

獣の咆哮を上げたレイオンの闘気が、より一層高まった。
空気を震わせる程の力を、その身から感じる。

未だ人型のヴォルフには、ほとんど勝ち目はない。
ヴォルフが大きく息を吸い込んだ。心臓が一際大きく鼓動を刻む。

「ヴォルフは、約束、守るんだ！」

ヴォルフの全身が、力強く脈打った。

手足の爪が、牙が鋭く伸び、全身を獣毛が覆う。

その身体が一回り大きくなった。

レイオンが面白そうに見守る中、ヴォルフは徐々にその姿を変貌させる。

「我が名、ヴォルフ・レザフォード！ 冠するは、真の勇氣！」

もう一頭の獣が、レイオンを睨み付ける。

黒い毛並みの狼が、ヴォルフの声で叫んだ。

今、二頭の獣が、地を蹴った。

ナナエの悲鳴が、奇妙な反響を残して消える。

目の前に倒れたロディウスから、目を逸らすことができなかった。

「う、嘘……嘘だ……こんなの、ある訳ない。だって、ロディウスは……」

「きみが殺したの？」

ナナエの耳元で、聖王の声がした。

いつの間に接近を許したのか。

ナナエの背後に立つ聖王は、金色の瞳でナナエをねめつけるように見下ろす。

その腹からは、ボタボタと血が流れ落ちていた。

ナナエはまるで聖王の接近に気付いていない様子で、ゆるゆると首を振り後退りするばかりだ。

倒れ臥す青年の姿。彼を刺した手応え。そして血の匂い。そのすべてが、ナナエの混乱に拍車をかけている。

「違う……ちが……オレじゃない。だって、ロディウスはあのとき……」

震える声で、力なく否定する。

そんなナナエに追い討ちをかけるように、聖王は再び耳元で囁いた。

「ああ、きみは彼を見捨てたんだったね。あのとき、きみが彼を行かせなかったら、彼が死ぬこともなかったのに」

「あ、あ……オレは……っ」

聖王は徐々にナナエの心を追い詰めていく。

聖王の言葉が、ナナエの心に影を落とす。

混乱しているナナエは、聖王の言葉の魔力から、逃れることができなかった。

聖王の言葉に、瞳に、ナナエの心は喰われていく。

「そう、彼が翼を失ったのも、きみを助けるためだったね。

すべてはきみが招いた事態なのさ。きみさえいなければ、彼もこんな惨い死に方はしなかっただろうにねえ」

「あ……う……」

ナナエには、既に反論する気力もなかった。

聖王の言葉が心を蝕んでいくのに抵抗すらできない。

ナナエの目から、堪らず涙が零れ落ちた。

聖王が、ナナエの目を覗き込む。

ナナエの中から何かが抜け出して、聖王の許へと集約しているようだった。

まるで、ナナエの生命力そのものが、聖王の中に流れ込んでいくかのよう。

何かを食らったように、聖王が真っ赤な舌で唇を舐め上げた。

「きみの負の心、確かに頂いたよ。ごちそうさま」

聖王の言葉が終わる前に、ナナエの身体が大きく傾ぐ。

涙に濡れた目を見開いたまま、ナナエはゆっくりと仰向けに倒れた。

その瞳に月の光を宿した聖王は、昇りゆく月を見上げて口の端を吊り上げる。

「後は、僕が貴女の跡を継げば、この世界は救われる……」

月の精霊——精霊に愛されし者——

頭の中に、この世界の情景が流れ込んでくる。

精霊が創り上げた世界。

徐々に生まれ出でる生命たち。

そして、知恵をつけた人間たちによる、争いの日々。

人々は恨み、憎み、嘆き、絶望する。

人々の心の叫びが、彼女を蝕んでいくことも知らず。

人々の心の叫びが、彼を狂わせていったことも知らず。

——私は、生まれるべくして生まれたあの子たちを、怨んでいない。

少女は痛みに蝕まれながらも、穏やかに言う。

その言葉は、少女の前に立つ彼にも向けられた。

——あなたはすべてを許すことができる？　すべてを愛することができる？

——……解らない。

彼は静かに首を振る。

だが彼は、彼には兄と交わした約束があった。

それだけは遵守すると、この名に誓ったのだ。

——幾千の棘にその身を絞められ、幾億の刃に切り裂かれるような痛みを伴うことよ。それでもあなたは……

少女の問いにも、彼は揺るがない。
その瞳は真っ直ぐに少女を、世界を、その中にいる彼女たちを見つめていた。

心の中が、酷くごちゃごちゃしていた。
何かとても悲しいことがあって、それから目を逸らしたかった。
だからナナエは現実に関目を背け、こうして横たわっている。

大切な人も、大好きな人も、ようやく知った自分の思いもすべて
呑み込んで、この世界は終わりを迎えようとしている。

（だから何だって言うんだ。オレはもう、何も見たくない。だから、
このままでもいいんだ）

ナナエの心で、悲痛な声が鳴り響いた。
それが自分の声だということに気付いたナナエは、それすら聞き
たなくて耳を塞いだ。

大切な人たちが待っている。
でも、大好きな人はもういない。
ならば、この世界で生きる意味なんて、あるのだろうか？

——だめだよ、そんなんじゃない。

ナナエの心の中に、別の声が響いた。
聞き覚えはあるが、誰の声なのか解らない。
どこかで聞いたことのある、とても懐かしい声。

——きみが必要なんだよ。だから、起きて。

先程からその声が、ナナエの中で扉を叩いている。
ナナエの眠りを妨げるように、何度も、何度も。

（うるさい。もうあんな思いしたくないんだ。放っておいてくれよ）

ナナエはその声から逃げるように身を縮めた。

それでもその声は、ナナエにしつこく語り掛けてくる。
あまりしつこいものだから、ナナエは堪らず目を開いた。

（しつこいなあ！ お前ら誰だよ！）

真っ暗な空間に、一筋の光が差し込む。

淡い水の色をした光だ。

ひどく懐かしいその光から、その声は聞こえた。

——酷いよ。ずっと一緒にいたのに、私たちのこと忘れちゃったの？

透明な光の中で、水の泡が弾けた。

小さな水紋が徐々に広がり、ナナエのいる場所を揺らし濡らす。

温かな水の波動を感じ取り、ナナエはゆっくりと瞬きした。

（水の、精霊？）

——そうだよ。はじめまして。

ナナエが再び目を開いたとき、その光は人の姿になっていた。
ややきつめの大きな瞳、背中まで伸ばした長い髪、男顔負けの勝

ち気な笑みを携えた口許。

そのすべてが透き通っていたが、その姿は間違いなくナナエ自身だった。

（オレと同じ……）

——そうだよ。精霊界での姿は人間には見えないから、きみの心を借りたんだ。

初めて見る水の精霊は、ナナエとよく似た姿と声でお辞儀する。
ナナエはその光景を、ただ呆然と眺めていた。

——お願い、月の精霊を止めて。彼は、この世界の人間を滅ぼして、精霊の王になろうとしている。

（どういうことだ？）

訝しげに眉をひそめるナナエは、水の精霊からすべてを聴いた。
そしてようやく、この事件の本当の意味を知ったのだ。

月の精霊は、この世界のあらゆる負の感情を取り込み、浄化する存在だった。

それがいつしか、人間が垂れ流す大量の負を抱えきれなくなってしまうのだ。

月の浄化さえ間に合わない程、人間は日々争いを繰り返し、その度に大量の負の感情を撒き散らしている。

負が世界に溢れれば、この世界そのものが死滅しかねない。

精霊たちが創ったこの世界が、後から生まれた人間によって壊されてしまう。

最も身近に負を感じていた月の精霊は、この世界を守るために、人間を根絶やしにすることを決意した。

少しずつ力を蓄え、己の力を分け与えた影を生み出し、人間たちを襲わせる。

必要以上に負を撒き散らす人間さえいなくなれば、この世界が安定すると思い込んで。

或いは、月の精霊は既に狂ってしまったのかもしれない。

生物の最も陰湿な感情をその身に取り込み続け、次第に己の存在自体が負となったか。

何がきっかけになったのかは定かではないが、月はすべての人間を憎むようになった。

己のしていることが、更なる負を生み出す原因となることすら、解らない程に。

——でも違うんだ。人間だってこの世界を構成する魂の一種。人間がまったくいなくなってしまうたら、それこそ世界が滅んでしまうかもしれない。

月はそれに気付いていないんだ。私たちが言っても、まるで聴いてくれない。もう力づくでも止めなきゃいけないのに、精霊は精霊に直接危害を加えることはできないんだ。

（だから、オレたち人間が、月の精霊と戦うしかないってことか）

ナナエの呟きに、水の精霊は眉根を寄せて苦々しく頷いた。

——ごめんね。きみたちに押しつけてしまつて……

（仕方ない、だろ。元々、世界を脅かしていたのは人間なんだから）

ナナエは小さく首を振り、遠い目をして虚空を見つめた。

人間が争いを重ね、負の感情を撒き散らしたことを罪として、月の精霊はその罪に対し罰を下そうとしているのだ。

罪を犯したならば、相応の報いを受けて当然だ。

しかし彼は……ナナエの大好きな人は、こう言った。

罪に与えるべきは罰ではなく、償いだと。

知らなかったこととはいえ、この世界を滅びに向かわせたのが人間ならば、人間が責任を持って世界を再生させなければならぬ。

（お前なら、そう言うはずだよな、ロディウス……）

その呟きと共に、一面暗闇だった景色が一変する。

仄かに明るくなり、足元にはナナエを支えるように温かな水がたゆたう。

水の精霊に愛された少女は、しっかりと前を向いて立っていた。

——ありがとう。ナナエ、大好きよ。

水泡が弾けるような、独特の余韻を残して水の精霊は姿を消した。だが、透明で暖かな光が自身の中に宿るのを、ナナエは感じる。

精霊はとても近くにいて、ナナエを、人間たちを、この世界を見

守ってくれているのだ。

その思いに応えるべく、ナナエは前へ足を踏み出した。

気が付けば、窓の外には大きな赤い月が浮かんでいた。

天地が逆さまに映っていることから、自分が仰向けに倒れていることが解る。

頬が濡れていることに気付いた。

どうやら泣いていたらしい。

覚醒直後で高ぶる心を抑えると、直前までの記憶が一気に押し寄せてきた。

目の前で倒れたロディウスに驚くあまり、不覚をとったのだ。

そのときの光景を思い出し、心の奥が激しく痛む。

（落ち着けて。あれはきつと幻だ。ロディウスはもう、死んだんだから）

少なくとも、自分が刺し殺した訳ではない。

ナナエは冷えた空気を思い切り吸い込む。

ようやく、頭も冷えてきた。

自分はこうして倒れているが、聖王から昏倒するくらい強烈な攻撃を受けた覚えはない。

しかし身体全体が鉛のように重く、手足を動かすのでさえ容易ではなかった。

まるで、生気をすべて吸い取られてしまったかのようだ。

ナナエは目だけを動かして周囲の状況を確認した。

少し離れた場所から、黒い狼がこちらに向かって吠えている。
あれが誰なのか解らないが、何を叫んでいるのかは解る。
狼は、ヴォルフの声でこう言っているのだ。

「ナナエ、立て！」

その声に鼓舞されるように、ナナエは手足に力を入れた。

ヴォルフは謁見室の中央で、レイオンとぶつかり合った。
半獣化した今、二匹の獣は今までの数倍の力で互いを殴り合う。

それぞれの拳を反対側の手で受け止め、互いに片足を上げて腹を蹴り合い、間合いをとる。

一撃の重さが、先程までとはまったく違う。

二人が地を蹴るだけで、絨毯に埋もれた大理石の床には亀裂が入り、二人が拳を打ち合うだけで、空気が震えて窓にはめ込まれたガラスが振動した。

二人の力は互角か、否、ややレイオンが上回るか。

倒れたナナエを目にしたことで、ヴォルフの中に生じた焦りが、その差を生んでいた。

何度目かになる殴打が互いの顔を打ち据え、二人の身体が床に転がった。

「何を遊んでいるの、レイオン。せっかく強化してやったのに、使えない子だね」

レイオンの背後から、二人の闘いを傍観していた聖王の声が割っ

て入った。

レイオンは聖王には顔を向けず、苦々しく舌打ちする。
聖王の言葉に動揺したのは、ヴォルフの方だった。

「強化……？　　どういう、こと？」

ヴォルフの問いに答えたのは聖王だ。

ナナエにも見せた意地の悪い笑みを浮かべて、ヴォルフの目を見据えている。

「レイオンはね、僕が拾ってあげたんだよ。強くなりたいって言う
てたから、強くしてあげたんだ」

ほら。と、そう言ってレイオンの頭に生えた山羊の角を指差した。

「これは弟の角」

続いて右の背中に生えた蝙蝠の翼を指差す。

「これは妹の羽」

「……やめろ」

レイオンが小声で抗議するが、聖王は構わずレイオンの蛇のような尾を指差した。

「これは母親の尾」

続いて少し毛色が違う左腕を指差す。

「これは弟の腕」

「よせ」

レイオンが、先程よりも大きな声で言う。
しかし聖王は耳を貸すつもりはないらしい。

「これは母親の脚」

聖王は言いながらレイオンの右脚を指差した。
ヴォルフが声もなく凝視する中で、聖王は左の背中に生えた猛禽類の翼を指差した。

「これは弟の翼。一番新しいパーツだよ」

「黙れ！」

レイオンの叱責が飛ぶが、聖王は素知らぬ顔でヴォルフの反応を見ている。

見ていると言うよりは寧ろ、観察していると言った方が正しいだろうか。

ヴォルフが目を見開いて鳥の翼を見つめる様を、まるで実験動物を見るような目で眺めているのだ。

「それ、まさか……」

ヴォルフの声がかすれている。

血塗れでナナエに抱かれていた兄の姿が、脳裏を過ぎった。

失われていた左腕。そしてレイオンの背に生える、左の翼。

聖王は笑顔でもって、その考えを肯定した。

「タギウス、マヤ、メイラ、アリキス、タルラ、ロディウス……皆、きみの家族だったね」

「ダーク！」

レイオンの怒りが込められた声が、聖王の言葉を遮る。鋭い瞳が、聖王を捉えていた。

「余計なことを言うな。これは決闘だ」

喉の奥から低い唸り声を発し、聖王を威嚇する。

聖王はひょいと肩をすくめ、レイオンを見上げた。

「ダークじゃなくて、聖王って呼んでよ。」

それに僕は手伝ってあげようとしたんじゃないか。心を壊してしまえば、生き物なんてただの呼吸する肉の塊になるのに。その方が、楽に殺せるだろう？」

レイオンはわざと大きく舌打ちして、聖王から顔を背けた。

蛇の鱗に覆われた尾が、忌々しげに床を叩く。

「そのような卑怯な勝ち方は望んでおらん。全力で闘うことこそ、獣人の喜びよ」

レイオンの言葉を聞いて、聖王は満足そうに頷いた。

「流石。腐っても獣人だね。生みの親として鼻が高いよ」

くすくす笑いながら、聖王はレイオンから数歩離れた。

どうやら観客役に徹するつもりらしい。

余計な邪魔が入らないのは良いが、既に散々茶々を入れてくれたお陰で、先程までの高揚感は失せてしまっている。

それはヴォルフも同じようで、動揺を隠すこともできずにレイオンを見つめていた。

「そんな……何で、にい……?」

ヴォルフの眩きを遮り、レイオンは大きく一步踏み出した。

それだけで容易にヴォルフに接近する。

ヴォルフが驚愕の表情を刻む前に、レイオンの拳がヴォルフの腹を打ち据えた。

重い音と共に、ヴォルフの身体が吹き飛ばされる。

したたか背中を打ち付けて、息が詰まった。

無理矢理に息を吐いて立ち上がると、口の中に血の味が広がる。

ヴォルフの顔に苦悶の色が浮かんた。

痛む腹を押さえ、呻き声を呑み込み、レイオンと聖王を睨む。

「油断するなと言ったはずだ」

レイオンは静かな重低音の声で言い、ゆっくりとヴォルフに近寄ってくる。

ヴォルフは反射的に身構えて、迎撃の姿勢をとった。

「レイオン、なんで、皆は……何故だ!」

ヴォルフの悲痛な叫びが、辺りの空気を震わせた。
レイオンの静かな声が、その振動を掻き消す。

「ヴォルフが勝ったら、教えてやろう」

その言葉が終わると共に、ヴォルフとレイオンは同時に床を蹴った。

それは瞬きする間の攻防。

ヴォルフの爪が、一瞬速くレイオンの胸を抉り、それよりも一瞬疾くレイオンの左翼がヴォルフの視界を遮った。羽に遮られながらも振るった爪は、レイオンの胸に鋭い裂傷を作る。

だがレイオンはそれを予測していた。

敢えて自らの身体を囹に使い、一步深く踏み込んだのだ。

レイオンの爪が、ヴォルフの腕を切り裂く。

レイオンの爪は骨まで届き、腱や神経さえも切断され、ヴォルフの右腕は鮮血を噴き出し肩からぶら下がった。

こうなってしまうと、自由に動かすこともままならない。

ヴォルフは瞬時に己の不利を悟り、左足を軸に身体を捻り右足で蹴りを放つ。

しかしレイオンの首に届く直前でガードされた。

その足をレイオンが捕まえる。

レイオンの狙いを理解して咄嗟に足を引こうとするが、遅かった。今度は足の腱を切断される。

再び鮮血が舞った。

右手右足が自由に動かせなくなった今、倒れたら起き上がることはさへ容易ではない。

ヴォルフは残った左足で思い切り床を蹴り、レイオンに掴まれた右足を支点に飛び上がる。

それを許すレイオンではなかったが、半獣化したことで生えたヴォルフの尾が、レイオンの視界を奪った。

レイオンの爪はわずかにヴォルフの左脚を掠める。

ヴォルフはそれに構わずに、レイオンの肩を踏み抜くように蹴り下ろした。

鈍い音と共に、レイオンの右肩が下にずれる。

その瞬間に、レイオンがヴォルフの左脚に噛み付いた。

鋭い牙が肉に食い込み、骨にまで到達する。

強い顎の力だけで、脛骨と腓骨がみしりと悲鳴を上げた。

脚が完全に折れる前に、ヴォルフの左手がレイオンの顔を切り裂く。

右目を潰されて、レイオンも思わずヴォルフから口を離れた。

ヴォルフの身体が床に落下する。

レイオンの顔とヴォルフの手足から鮮血が飛び散るが、それは真っ赤な絨毯に吸い取られて消える。

ヴォルフはまだ動く左腕一本で身体を支え起き上がろうとするが、それよりも速くレイオンがヴォルフの頭を踏み付けた。

まさに獣のような悲鳴を上げて、ヴォルフはそれきり動かなくな

る。

踏み付けられた頭部から血が流れ、絨毯に染みを作っていく。倒れた弟を見下ろし、レイオンは薄く笑った。

「レイオンⅡレザフォードの勝ちだ。これで文句はないだろう」

レイオンは傷を押さえることもなく、残った左目で聖王を見据えた。

聖王はまるで心のこもっていない拍手をレイオンに贈る。

「凄い凄い。流石最強の獣人は伊達じゃないね。これなら、約束通り僕の跡を任せられるよ」

聖王は高らかに哄笑する。

その姿を、レイオンは忌々しげに見ていた。

聖王は己の腹から流れる血を掬い取り、その手を舐める。ナナエに刺された傷だ。

この身体ももうすぐ、動かなくなってしまうだろう。

「あの小娘にやられたのか」

レイオンの呟きが耳に入り、聖王は血で汚れた口許に笑みを浮かべる。

「現実味を持たせないとね。いくら幻を視せたって、他の感覚器官に刺激がなければ、心を支配するのは難しいんだよ」

そうして幻を現実だと思い込ませ、ナナエの心に多大な負荷をかけたのだ。

聖王の狙い通り、ナナエはありもしない幻を現実だと思い込み、

聖王に生気を奪われて動けなくなっている。

レイオンは片目で聖王睨み付け、ふんと鼻を鳴らした。

「面倒なことをするものだな。理解できん。

それより、さっさと継承の儀を始めてくれ」

「僕の継承の儀は他と違ってキツイよ？　耐えられるかな？」

「吐かせ」

己を睨むように見下ろすレイオンに、だが聖王は怒りもしないで笑った。

聖王が軽く手を振ると、室内に闇が現れる。

精霊界とこの世界を繋ぐゲートだ。

精霊は普段、この世界から薄紙一枚隔てた空間に存在している。

他の生物たちとの共存ではなく、この世界を支える役目を選んだ、精霊という種族の世界。

異世界と言っても過言ではないが、そこは確かにこの世界と繋がっている。

そこを自由に行き来できるのは、精霊だけだ。

聖王はレイオンを引き連れて、その闇の空間へと足を踏み出した。

「さあ、いよいよだ。母なる精霊王、貴女に代わり、この僕が世界を支える柱になる」

聖王とレイオンの身体が、闇に吞まれて消えた。

二人を包んだ闇も、やがて虚空に融けていく。

後に残されたのは、倒れたナナエとヴォルフのみ。

闇が完全に消えた頃、ヴォルフの身体がわずかに震えた。

ヴォルフは薄く目を開く。

しかし、頭から大量に流れる血が目に入り、周囲の景色がよく見えない。

「や、約束……守る……！」

再び遠くなりかけた意識を呼び戻そうと、ヴォルフは必死に声を絞り出す。

兄と交わした約束を守る。

その決意だけが、ヴォルフの身体を動かした。

必死に起き上がろうとする。

しかし右手と両足が思うように動かせず、立ち上がることもできない。

ヴォルフは左手の爪で床を引っ掻きながら、少しずつ這っていった。

先程、闇が消えたその場所へと。

闇の中、レイオンは奇妙な感覚に襲われた。

決して生ける者が入ることはできないという精霊界に、生身で侵入したためだ。

獣人の身体だからこそ耐えられるが、人間がここに迷い込んだら、凄まじい圧力で潰されてしまうだろう。

獣人の血は人間のそれよりも、ずっと精霊に近い。

獣人は死してなお精霊へと転化し、この世界を巡ると伝えられてきた。

何故、獣人だけが精霊に転化できるのか。

今まで、疑問に思ったことなど一度もなかった。

己の識っていることだけが真実だと、疑いもしなかった。

——さあレイオン、きみの魂を精霊に返すときが来たよ。

闇の中で聖王の……いや、月の精霊の声が聞こえる。

精霊には、基本的に特定の姿はない。

核と呼ばれる本体はあるが、それも精霊界に隠してあるため、人の目に触れることもない。

しかしここは精霊の住まう場所。

普段は決して見ることでできない精霊の姿も、レイオンは捉えることができた。

レイオンの前に、黒光りする宝石が現れる。

虚空から突然出現したそれは、かつてダークが影の残骸から発見した鉱物に似ていた。

それこそ、月の精霊の核だったのだ。

大きな黒い宝石から、月の声が聞こえる。

器としていたダークの身体は、この世界に入ったときに潰れて消えてしまっていた。

今、月の精霊はダークではなく、この核の中に宿っている。

月の精霊から、凄まじい圧力が放たれ、レイオンの身体を襲った。

「ぐ……っ」

——きみが僕の代わりに月の精霊になりたいって言ったときは驚いたけどね。

さあ、儀式を始めようか。

月の精霊の言葉と共に、レイオンを押さえ付ける力は益々強くなっていく。

通常ならば死した獣人の魂が、自然と精霊になるのだが、月の場合が違う。

月になれるのはこの世界にたったひとり。

月の精霊が世代交代するには、次代の月となるべき者の魂を、生きたまま精霊に転化させなければならぬのだ。

それは生きながらに全身を磨り潰される苦痛。

常人ならば転化を果たす前に死滅してしまうだろう。

だが、レイオンはここで倒れる訳にはいかなかった。

レイオンが精霊界に足を踏み入れたのは、精霊になるためではない。

それとは別に目的があったからだ。

レイオンの身体は徐々に実体を失っていく。

精霊への転化は、少しずつ始まっていた。

身体が消滅し、魂がすべて精霊と化してしまえば、レイオンの立てた計画は上手くいかなくなる。

すべてはこのときのため。

そのために、弟すらも手にかけて。

失敗は許されない。

レイオンの身体が半分以上転化したとき、その声は届いた。

——待たせたな。だが、約束は守ったぞ。

その声が聞こえた瞬間、月の精霊の核がぬらりと黒い輝きを放った。

——な……バカな！ 何故お前が！？

月の精霊の声には、動揺の色が窺える。

それとは対照的に、レイオンは不敵に唇を吊り上げて笑った。

「上出来だ」

レイオンは見えない声の主に向かって呟いた。

闇ばかりが広がる精霊界。

しかしそこに、彼が存在しているのが視える。

月の精霊は狂ったように声を張り上げた。

——何故だ！ 何故貴様がここにいる！？ 何故！

月の精霊は、核の中から彼を見上げた。

未だ精霊になりきれていないレイオンには見えずとも、月の精霊には彼の纏う輝きがはっきりと見えている。

精霊たちの中で一際強い輝きを放つ者。それは……

——何故！ 貴様が精霊王の光を纏っているんだ！ ロディウス
|| レザフォード！

月の精霊に答えるように、精霊王へと転化したロディウスが笑っ

た。

ロディウスが精霊の王の座を継いだのは、ほんの数瞬前のことだった。

ロディウスの前に立つ純白の少女の問いに、ロディウスは力強く頷く。

あのと、兄と対峙したあのとに、もう決めていたのだ。

——そう……あなたなら……最期の時までこの世界で生きたいと願ったあなたなら、任せられる。

——……守りたい人がいるんだ。だから、あいつが……あいつの血筋が生きていくこの世界を守りたい。

ロディウスの言葉を聞いた少女は、嬉しそうに微笑んだ。
その姿は、少しずつ常闇の中へと崩壊していく。
滅びゆく少女は最期まで、笑みを絶やさなかった。

——私が創った世界、愛してくれた？

——勿論だ。

ロディウスの言葉に満足そうに微笑み、小さな純白の少女は……
精霊の王は、完全にこの世界から消え去った。
その眩い輝きを、ロディウスに託して。

――月の精霊。お前が核を空けて人間界で遊んでいる間に、精霊の王は消滅した。その跡を継いだのが、ロディウスⅡレザフォードだった。それだけのことだ。

――……！

月の精霊は言葉もなく、新たな精霊の王を見上げている。
その背後でレイオンが低い笑い声を零した。

月の精霊ははっとしたように振り向く。

月は、ようやくレイオンが精霊になりたいと言い出した本当の理由に気付いたのだ。

月の精霊が人間界で活動を始める直前、レイオンたちはヴォルフを含む数人の弟たちをポト山に残し、新たな住み家となる地を探しに旅立った。

ところが聖王国に入ったとき、レイオンたちは聖騎士団から奇襲を受け、レイオン以外皆死んでしまったのだ。

獣人が街を襲いに来たのではないかという、人間たちの疑心暗鬼が、この奇襲の原因だった。

レイオンはたった一人で騎士団を殲滅したのだが、自身も手足を失う重傷を負った。

死の間際だったレイオンが放ったのは、この世界を、人間を、己の無力を呪う強烈な呪咀だった。

その強い負の感情が、月の精霊に最後の楔を外すきっかけを与え

ただ。

折しも満月の日、月はレイオンの前に姿を現した。

月の精霊は、強い肉体をレイオンに与える代わりに、己の手足と
なつて働くように命じた。

人間への復讐心からその条件を飲んだレイオンだったが、与えら
れた肉体を見てから後悔した。

こんな形で望んだ訳ではない、と。

人間への復讐心と、月の精霊への恨みと、自分自身への嫌悪。

それらに苛まれながら、月の精霊に仕えていた二年半という時の
中で、レイオンは様々なことを知った。

月の精霊の意志、他の精霊たちの嘆き、人間の醜さと、この世界
の在り方。

そして、獣人の存在理由。

遙か昔、この世界に人間が生まれて間もない頃、一体の精霊が人
間の男性との間に身籠った子。

それが獣人の始祖だった。

生を司る精霊である生命の精霊。

死を司る生物である人間。

決して交わることのない二人から生まれた禁種、獣人。

その身に流れる精霊の血が、獣人を精霊へと転化させている。

それを知ったレイオンは、己のとるべき道を選んだのだ。

レイオンは表面上従順な態度を見せながら、密かにこのときを狙
っていた。

己の肉体を保ったまま精霊界に足を踏み入れ、月の精霊の核を破

壊できる瞬間を。

月の精霊が負の力を溜め込む程、精霊王はその負に蝕まれ弱っていく。

精霊王が消滅したときには、レイオン自ら命を断ち、精霊に転化するつもりだった。

しかし、精霊は精霊を直接滅ぼすことができないということを知り、協力者を捜すことにした。

そこで白羽の矢を立てたのが、ポト山に置いてきた弟たちだ。

動物を使って密かにポトの様子を探らせたのだが、既にヴォルフ以外の弟たちはポト山から姿を消していて、いくら捜しても見つからなかった。

別の国に移り住んでいたのか、人間たちに狩り殺されてしまったのか。

そうなるヴォルフしか所在の判る者がいないのだが、知能に若干障害があるヴォルフでは不安だった。

どうしようかと思案していた矢先、とうの昔に群れから追い出したロディウスが、ヴォルフと水の民を連れて来たのだ。

もう、ロディウスにすべてを賭けるしかなかった。

月の精霊を欺くため、レイオンはロディウスと戦い深手を負わせた。

自らも故意にナナエの攻撃を受け、ヴォルフを人質にロディウスを誘き寄せるような演技までしてみせた。

そしてあの日、ロディウスにすべてを話したのだ。

月の精霊に悟られないように、何事も慎重に。

ヴォルフと本気で闘ったのも、月の精霊を油断させるためだ。

すべては、このとき、この瞬間のための布石。

月の核が怒りに震える。

そのままレイオンを押し潰そうとするが、一瞬速くレイオンが月の核を掴み取った。

黒い宝石が、みしりと軋む。

——おのれ、レザフォード！

月の核から怒りの声が飴する。

——何故だ！ 貴様も人間を憎んでいたはず！ 僕はその人間を滅ぼしてやろうとしているんだぞ！ 何故邪魔をする！

月の叫びに、レイオンの手がぴくりと震える。

月の精霊は一瞬笑みを浮かべたが、それも次のレイオンの言葉で掻き消された。

「人間が滅ぶのは構わぬ。が、貴様のやり方ではこの世界そのものが死滅する恐れがあるのだろう。我が一族を、獣人を危機に追いやるような真似は許さぬ」

レイオンは月の核を握り締めた。

黒い宝石の表面に、細かな罅が走る。

「精霊が精霊を殺せないなら、他の誰かが壊せば良い。

安心しろ。貴様が消滅したあかつきには、約束通りレイオン＝レザフォードが月の精霊になってやる」

——やめろおおお！

レイオンがその手に力を込める。
ぱきん……とやけに軽い音を立てて、黒い宝石が砕けた。

——おおおおおお……

月の精霊の絶叫が迸る。

核の破片が、レイオンの手の中からすり抜けていく。

レイオンは完全に肉体を失い、精霊界の闇の中へと融け、消えた。

「兄にできるのはここまでよ。後は、任せた……」

レイオンの最後の言葉が、闇の中で波紋となり広がった。

その声は、ヴォルフへと届いただろうか。

レイオンは最期まで、不敵な笑みを崩すことはなかった。

レイオンが消え去った空間に、黒い宝石の破片が舞い落ちる。

月の欠片たちは、怨嗟の声を上げながら、ある一点へと集まってい
いく。

精霊は、決して精霊を滅ぼすことはできない。

月の欠片がこれから取る行動を予測しつつも、精霊王はただ、そ
れを見守ることしかできなかった。

砕けた月の欠片が、精霊界から人間界へと逃げていく。

恨みを晴らすため、月の欠片が向かった先は……

先程闇が消えた場所から少し離れたところ、玉座の前に禍々しい

闇が現れた。

床の上に這い蹲ったヴォルフが見つめる中、それは人間の形を歪に模倣する。

それは苦しそうに呻きながら、憎しみに染まった目で、近くに倒れているナナエを見下ろした。

はっとしてヴォルフが叫ぶ。

「ナナエ、立て！」

その声と同時に、歪な人型を模した月の欠片の成れの果てが、奇妙に大きな拳をナナエへと振り下ろす。

必死に起き上がろうとするナナエが、その闇を視認した。

月の手がナナエに届く直前、飛び散った水が再び集まり、ナナエを守るように取り囲む。

——ナナエ、立って。

ナナエによく似た水の精霊の声が、ナナエの頭の中に響いた。

一撃を弾かれ、歪な闇はバランスを崩して大きく揺らぐ。

その間に、ナナエはようやく立ち上がった。

全身が鉛のように重い。

しかし、今動けるのは、ナナエしかないのだ。

ナナエは、自らを守る水の膜を解き、手の中に収束させる。

そこに一振りの水の剣が生まれた。

「……どうなってんだよ、まったく」

ナナエは怠そうに闇を見上げる。

状況は把握できていないが、何となくなら理解できる。

あの歪な闇こそが、月の精霊なのだろうと。

あれを倒しさえすれば、この戦いは終わるのだろうと。

そしてナナエは、ゆっくり水の剣を構えた。

——お、おおおお、人間は、この世界にとって、毒にしかならない！ 僕は、この世界を、人間を滅ぼして、守るんだあ！

闇の中心から、月の精霊の声が呟る。

ノイズが混じり、最早声にさえなっていなかったが、その言葉はナナエとヴォルフの、世界中の生ける者の頭の中に響いていた。

歪な闇は、ナナエを押し潰そうと腕を振り上げる。

頭上から振り下ろされた腕を、ナナエは水の剣で受け止めた。

「く……っ」

一撃が重い。

全身に力が入らない今、あまり持ち堪えられそうになかった。

水の剣を通して、ナナエの中に月の思いが流れ込んでくる。

この世界を思うあまり、道を違えてしまった月の精霊。

その思いは強く、ナナエ一人では支えられそうになかった。

——どうした。そんなもんか？

そのとき、暖かく懐かしい声が、ナナエの中に届いた。
はっとして辺りを見回すが、その姿は見えない。

「……ロディウス？」

ナナエは、その声の主の名を呼んだ。

あれは確かに、ロディウスの声だ。

腑甲斐ない自分を、叱りに来たのだろうか。

一瞬そう思ったが、違う。

ロディウスが他の精霊たちと共に、ナナエの背中を支えてくれているのが解る。

——見せてくれよ。お前たちの力を。

背後で、ロディウスが微笑んでいるような気がした。

「……ああ、任せとけ」

ナナエは、力強く頷き返した。

床の上を這っていたヴォルフは、血で霞む視界の中で、必死に立ち上がろうとしていた。

月の精霊が再びここに現れたということは、レイオンが止めを刺せなかったということだ。

レイオンに捕まっていたあのとき、ヴォルフは彼と約束したのだ。もし、自分が月を消すことなく死んでしまったら、後を頼むと。

そしてもう一つ。

幼い頃、ロディウスを焚き付けて人里へ向かわせた罪。

あの日自分がイシャの話をしなければ、あの山火事は起こらなかった。

その約束と、償いを果たしたい一心で、ヴォルフはここまで来たのだ。

なのに、手足に力が入らず、立つことさえできないでいる。何もできない自分が悔しくて、涙が溢れそうになってくる。

そのとき、ロディウスの声が聞こえた。

幼い頃から何度も聞いた、己を叱咤し励ましてくれた、兄の声。

——見せてくれよ。お前たちの力を。

ヴォルフは獣の咆哮を轟かせ、力強く床を踏みしめた。

ナナエの剣が闇を押し返し、ヴォルフが渾身の力で床を蹴る。

「終わりだっ！」

「終わらせる！」

同時に叫んだ二人は、闇を突き抜けて交差する。

ナナエの剣とヴォルフの爪が、闇の中にあつた月の欠片を粉々に打ち砕いた。

——うああああおおおお……

世界を震わせるような月の叫びが、かすかに余韻を残して消える。上空に浮かんでいた赤い月は、光を失って虚空に霧散した。

それと同時に、世界中で暴れ回っていた影のモンスターも、次々

と世界に融けて消える。

沢山の屍を積み上げながらも、この世界を、ヒトを、護りきった瞬間だった。

ナナエとヴォルフはバランスを崩し、同時に倒れる。

荒い息を吐き、全身にとてつもない疲労を感じながら、それでも二人は笑顔だった。

エピローグ

ナナエは窓の外に浮かぶ月を見上げた。

あの赤い月が消えてからしばらくの後、新しい月が昇るようになったのだ。

新たな月の精霊が、誕生したということだろう。

あの戦いの後、ナナエとヴォルフは救援に駆け付けたダルたちに助けられた。

ほとんど無傷だったナナエだが、月の精霊に生気を食われたことにより、救助されてから一週間程はねたきりの状態が続いた。

ヴォルフの方は怪我が酷く、すぐに施療院に運び込まれた。

だが、どこの施療院も怪我人で溢れており、獣人のヴォルフは中々治療してもらえなかったらしい。

そこでナナエ共々ガレットが引き取り、水の国に連れて帰ってきたのだ。

各国とも、酷い有様だったという。

特に聖王国は壊滅状態で、世界の人口も激減してしまった。

それでも生き残った者たちは、こうして家を建て、街を造り、国を建て直している。

数年が経った今、ようやく国家として機能し始めたのだ。

ナナエは一度、本当の家族の許へ戻ったのだが、王位継承権を放棄して世界中を旅している。

ナナエが今抱いている新しい家族は、人間と共に、まして王族と共に暮らすことは難しいからだ。

それでも時々人間に立ち寄り、彼らの存在を受け入れてもらえるように努力している。

今日泊まった宿の主人も、最初は驚いていたが理解を示してくれた。

少しずつだが、世界は……否、ヒトは良い方向へと歩きだしている。

いずれは彼らだけでなく、精霊たちとも理解し合えるだろう。

精霊に愛されし者だけでなく、普通の人々でも精霊の声が聞こえるようになったという話を、ここ最近になってよく耳にする。

不意に部屋の扉が開き、ヴォルフが入ってきた。

杖で身体を支え、ゆっくりとナナエに近寄ってくる。

無理に半獣化した副作用か、切られた腱が壊死してしまっていたのだ。

少しずつ回復してはいるが、治りが遅く、未だに杖がないと歩けない。

それでもヴォルフは、ナナエと共に旅をする道を選んだ。

ようやくナナエの横に並んだヴォルフは、ナナエに倣って夜空を見上げる。

「ははっ、レイオン、今日も頑張ってる」

金色に光る月を見て、ヴォルフが笑った。

「騒ぐなよ。起きちまうだろ」

咎めるようにナナエが言うが、少し遅かったらしい。

ナナエの腕の中で、小さな子供が身動きする。

眠そうな目をこすり、ナナエを見上げた。

「ううゝ……」

「ああほら、起きちゃったじゃんか」

「う、ごめん」

ナナエが抱いていた子供の、大きく尖った耳がぴくりと動く。
褐色の肌に月の光を受けて、その子供は眠気を払うように首を振った。

白銀の髪が、それに併せて大きく揺れる。

「もう朝？」

金色の瞳を瞬きさせて、子供はナナエの顔を覗き込む。

「まだ夜。明日は父さんの墓参りに行くんだから、早く寝な」

「……寝てたのに」

その子供はぷうと頬を膨らませて不機嫌そうに呟くが、ナナエに抱かれたまま軽く揺すられるうちに、再び眠りについた。

父親に良く似た面影の子供を抱き締め、ナナエは月を見上げる。
月は相変わらず、美しく輝いていた。

明日もきつと、精霊に祝福されたような良い天気になるだろう。
何しろ精霊の王は、晴れ渡った空を舞うのが好きだから。

遠くて近い場所にいる子供の父に思いを馳せながら、ナナエは静

かに目を閉じた。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4755j/>

TRUE DAWN

2010年10月10日05時01分発行